

The Ages Of Man
人生の諸相
George Rylands
ジョージ・ライランズ

日本語版
YASUMOTO KITAN
<https://vestapol.sakura.ne.jp/>

日本語版序文

シェイクスピアをしらない、読んだことがないという方こそは、実は幸運ではないかと思う。シェイクスピア作品は戯曲である。読むものではなく舞台で観るものである。ハムレットを、オセロを、ぜひ先入観なしで舞台で観ることをすすめる。それは著名な文人たちもうらやむこの上ない芸術体験である。

舞台で見られないならば、アンソロジーである本書よりもそれぞれの作品を先に読むことをすすめる。シェイクスピア作品は全体で読むべきものであって、抜き出した部分を読むことはシェイクスピア評論でたびたび引き合いに出されるヒエロクレスの「自宅の見本にとレンガを一つ持参した学者」と同じなのである。

また、その詩の本来の魅力を知るために、翻訳ではなく英語で読むことをすすめる。本書はその一助となることを意図したものである。さいわいにして、日本の英語教育は読解に重きがある。英語に覚えのある方は、辞書を片手に取り組めば、本来の魅力を味わうことができるのではないか。英語を学ぶことに目的があるとして、それはシェイクスピア作品を読むためである、と言ったとしても、それほど誇張だとは言われまい。コミュニケーションのためだけに英語を学ぶ必要などない。

わたくしは、日本の文学史には詩人とよぶべき作家はいないと思う。改行ばかりで余白の多い散文の書物が見受けられるのみである。詩人をもって自称されている方は詩とはなにかを知るために、モームが「詩の精髓」と評するシェイクスピア作品を読むべきである。

最後に、訳者の方々には引用の承諾をお願いしたい。

序文

”亡くなったシェリダン氏は、「シェイクスピアの美」をご覧になった際に、丁寧に尋ねられた。「ところで、他のⅡ編はどこですか？」”

(ウィリアム・ヘイズリット『シェイクスピア劇の登場人物』)

シェイクスピア作品のアンソロジーを初めて編したのはウィリアム・ドッド博士である。彼は国王付きのチャプレン(司祭)であった。処刑されたのは1777年、彼の「シェイクスピアの美」というアンソロジーの出版から25年後である。これは、彼の生徒であったことのある第5代チェスターフィールド伯爵の名をかたって4200ポンドの証券を偽造した罪によるものであった。同年、ウィリアム・ヘンリー・アイアランドが生まれている。後に彼は、シェイクスピア直筆原稿と二つのシェイクスピア戯曲を贋作した。ドッド博士以後、アンソロジー編者とともに、贋作者が後を絶たない。加えて、シェイクスピア研究はいつも犯罪よりも狂気を伴ってきた。

サミュエル・ジョンソンはモラリストの重鎮で、彼に比肩するものは一人としていない。この彼は、ドッド博士の弁護に奔走した。「出来る限りのことをしよう」といい、大声で悪態をつきながら、部屋の中を落ち着きなく歩き回った。中央刑事裁判所でのドッドの演説、ニューゲート教会でのドッドの講話、国王へ恩赦を願うドッドの手紙、これらはジョンソンのペンによるものであった。死刑執行の前夜、ジョンソンはこの死刑囚に、神への祈りをよろしく、という手紙を書いた。ボズウェルの伝記にあるこれらの記録には、心を動かされる。サミュエル・ジョンソンが、一つの見方として、最も偉大なシェイクスピア評論家だとされるその理由も、この伝記が教えてくれる。サヴェージ、ポープ、グレイ達の伝記作家でもある彼は、ファルスタッフ、キャリバン、ジェイクイーズを創造した劇作家と同様に、「私は人間である。人間に関することで、自分に無縁なものは、何もないと思う。」を銘としていた。この二人にとって、寛容は最高の美德であり、忘恩は最低の罪悪であった。

英国人らしさ、英国人氣質という点で本質的に似ているこの二人に、なんと大きな違いがあるのか！まるでお互いを補完し合っているかのようだ。シェイクスピアは言葉を創造し、ジョンソンはそれを確立した。ジョンソンは様々な分野への博学をもって知られ、シェイクスピアはラテン語はおろかギリシア語もほとんど解さなかった。シェイクスピアは直感の詩人であり、ジョンソンは熟考された散文と論理的な哲学で知られた。一人はある種女性的な感性により、おだやかで控えめであり、もう一人は肉体的で自己主張が強い。だがしかし、シェイクスピアの猥雑な言葉遣いと、ジョンソンの、魅力的とはいいいがたい妻ティティへの愛情のことを、見過ごすようなことがあってはならない。一人は一時代を精神を体現し、もう一人は時代を超えた創造力そのものである。ジョンソンに関してわたくしたちは、彼の趣味、テーブルマナー、政治思想、偏見、口調、交友、信仰など、すべてを知っている。シェイクスピアに関しては、わたくしたちに分かるのは、ほぼ何も分からないということのみである。不確かな情報がノートの紙に書き込まれ、神話と推測が書庫に山積みになっている。分かっていることといえば、彼の洗礼日、死亡日、父親がストラットフォードの議員だったこと、双子の息子がⅡ才で亡くなったこと、貧乏役者だったこと、宮内大臣一座の一員として認められ、肩書きを手にし、ひとかどの人物になったこと、学生なら誰しも「二番目に良いベッド」の話を聞いたことがある。そしてわたくしたちは、フォリオ版を読みながら、本当のシェイクスピアとは別の人物像を思い浮かべているのだろう。宮廷人でもない、カトリックでもない、知識人でも学者でもない、風刺家でもない、帝国主義者でもない、むしろ、フランシス・ベーコンでもない。タッカー・ブルックの言葉を借りるならば、エリザベス女王時代に流行に敏感だった人たちから、政治、宗教、地政学、時事問題について議論する人間と呼ばれる類いの、ロンドンで最後の生き残りだったはずである。芸術のための芸術、も加えておこう。シェイクスピアは確かに二つの側面をもっていた。ロンドンの通りを闊歩する男、そして、ウォーリックシャーのいなか道をいく男、である。

これに対して、ひどく逆説的なことだが、真のシェイクスピア鑑賞においては、わたくし

たちは、ジョンソンにこそ着目すべきである。この二人にとって、文学と人生は同義であった。（文学興隆の第三世代においては、チャールズ・ディケンズが彼らに相当する）サミュエル・ジョンソンの知性と知識は、「シェイクスピアの美」とともに、ベッドの書棚に並んでいた。二人はともに、読者に共感される作品を書いた。ジョンソンはこういつている。

「詩人の業績について、何かいおうとする場合は常に、一般読者の一般的な感性によって、広く判断されるべきである」と。シェイクスピア研究において、コールリッジはその創作過程を探究し、ブラッドリーはその正確な性格描写を追及し、グランヴィル・バーカーはその演劇の伝統的手法と演劇の技術を明らかにした。しかし、ジョンソンにとってのシェイクスピアは、人間存在の代弁者、通りを闊歩する男である。これは彼の時代の風潮でもあった。

18世紀は、詩情あふれる発声法や、大げさな表現への関心が薄れ、自然の真理や実社会での生活に関心がもたれた。アレクサンダー・ポープはこういつている。「シェイクスピアは自然界の事物を模倣したのではない。彼の作品での登場人物は自然そのものである。自然を模写したなどの外的外れなことをいうのは、ある種の侮辱だといえる。」ジョンソンはポープに続き、次のようにいった。シェイクスピア戯曲は、悲劇、喜劇と呼ぶようなものではなく「それは、人間の真実の姿を示すという1つの独特な性格を持つ作品群である。そこには善と悪、喜びと悲しみが変幻自在の組み合わせをもって描き出されている。」（『シェイクスピア序説』中川誠訳）博士が、演劇的手法の性質や、舞台演出がもたらす感動に、無関心だったわけではない、という点だけは付け加えよう。ビクトリア王朝派の彼の後継者たちよりも、むしろ彼自身の方が、これらの効果をより意識していた。彼は、物語の展開と会話の進行に読者の注意を向けさせ、つながりをもって発展する構成に重きを置き、生き活きとした舞台演出を良しとした。しかし、そのような彼がシェイクスピアの価値、意義について下した最終的な結論は、ポープによる評論の教義から引き出された。「まず自然に従え。人間が研究すべきものは人間自身である。」この結論が引用された背景として、18世紀後半から19世紀前半の時代の要請のもとで、高慢かつ高圧的な世論からの圧力を感じた現代文学評論が、やむなく取り組んだ批判活動を、先の引用が正当化していることがあげられる。いふなればそれは、故人となった偉大な先人が作り上げた美、定型句、警句、美文体の解体である。

「シェイクスピアは少なくともギリシャ・ローマ以後のあらゆる作家の中で誰よりもよく人間性を描いた詩人であり、人間の習俗と生活の忠実な鏡を読者に向かって掲げている。彼の作品に登場する人物は、・・・世界中のどこにでも見受けられる、ごくありふれた人間たちである。彼等の言動はすべての人間がそれによって心動かされたり、生活の全体が維持されて行くという普遍的な欲望と原理から生み出されている。他の作家たちの場合は登場人物がしばしばあまりにも個性的すぎるが、シェイクスピアの場合はほとんどの登場人物がそれぞれの人間タイプを象徴している。・・・すなわち、彼の作品は人生を写す鏡であり、他の作家たちが提供する様々な幻によって想像力をかき乱された読者は、シェイクスピアの中にはじめて人間の感情が人間の言葉で表現されているのを見て、他の作家たちが自分に与えた錯乱の興奮状態から目ざめることができる。また、世を捨てた人たちにとってもシェイクスピアは世の動きを知らせてくれる詩人である。そして人の懺悔話を聞く聴罪師たちは人間の生の情念がいかなるものであるかをシェイクスピアによって教えられる。」（『シェイクスピア序説』中川誠訳）

興味深いことに、ロマン派の巨匠ワーズワースは、自著リリカル・バラッズの序文で自問している。詩とはなんだろうか？と。その答えは、新古典派の評論家サミュエル・ジョンソンによるシェイクスピア序説の内容への共感を感じさせる。「詩人は人びとに語りかける存在である。・・・詩こそあらゆる著作物のうち最も哲学的だ、・・・詩の目的は個別的な一面的な真理でなしに、全体的な、効力のある真理なのである。外的な証拠の上に立っているのではなく、強い感情によって生きたまま心に送りこまれる真理である。・・・詩は人間と自然との生き写しである。」（『抒情歌謡集』宮下忠二訳）ビクトリア王朝時代文化の福音伝道師マシュー・アーノルドを取り上げるならば、ワーズワースに関してのエッセイにある有名な一文が目がとまる。「詩作とは人生に対する批評である。内なる思想を力強くかつ美しい形で実人生の中に示して見せるところに、詩人というものの偉大さがある。いわば、い

かに生きるか、という問いに対する答えである。」 フリート・ストリート、ヘルベリン、オリオル・カレッジ、時代の異なる三人の詩人が同じ結論に至っていることは、注目に値する。

こうしたことから、この選集は、風俗や生活を映し出すシェイクスピアによる鏡である。シェイクスピアが見た人間と自然である。シェイクスピアによる人生に対する批評である。ここにわたくしたちが見出すのは、すべての人間がそれによって心動かされる普遍的な欲望と原理であり、また、情熱によって、心に生氣をもたらし真実であり、また、いかに生きるかという問いに対する力強くかつ美しい思想の提案である。

これに対して熱心なジョンソン信者は、次のような話でさえぎるのではなかろうか。博士は、シェイクスピアで選集を編もうとするすべての者に対して、シェイクスピアの真の魅力は抜粋された一文の輝きからは判らないものである、と警告した。シェイクスピアから一文を引用して薦めようとする者は、自宅を売ろうとするときにその見本にと、レンガを一つポケットに入れていったというヒエロクレスが書いた学者のようなことになる。これに対するわたくしの答えは、シェイクスピアの名作については、舞台、学校、あるいは個人的な読書である程度知っている方、おそらく旅行の際に、ソネットの一冊もポケットに入れて携行する方、しかし、時間も機会もないので、あえて系統立てて読み直そうとまでは思わない方、たとえば、「ペリクリーズ」、「アテネのタイモン」、「終わりよければすべてよし」などの作品までは、あえて読むつもりはない、この選集は、このような方々を想定したものだ。しかし、忘れてはいけないが、アンソロジーは詳細な読書への良いきっかけではあると思うが、シェイクスピア関連書籍でジョンソンは、このような構成を好まず、一行だけ抜き出したならば、コングリーヴの「喪に服する花嫁」の一段落のほうがまだ、と強い口調で警告している。もっといえば、シェイクスピア作品は、その全体が社会と経済に関しての体系を成している、という立場であった。

本書をどのような構成にすべきか考える中で、すでに世にある多くの選集のもつ短所が見えてきた。よくあるのは、フォリオ版にならって、テンペストからオセロという順に並べられ、詩とソネットは一つの章にまとめられている構成だが、引用箇所の良い悪い以前に、書籍の構成が問題である。少し考えられたものとしては、文学者が推定した最新の執筆年にもとづいて並べられた文学史的な選集で、これにより、シェイクスピアの知性、芸術性の発展を明らかにしようというものである。しかし、このような構成に興味をもつのは、学生であって一般読者ではない。そうして近年のアンソロジー選者は、シェイクスピアに対する18世紀の仕訳表に回帰し、引用を次のような点で大きくりに分けている。文の響きが与える感情が同じあるいは似ている、関連する概念あるいは一つのテーマから発展、派生した概念を表現している、日常に共通する問題への様々な態度を要約整理し、誘惑挑発またはその逆にさらされる多様な感情の経験を記録する、また一方で、文体の相互関係を明らかにする、ある箇所の引用が他の箇所の注釈になることもときおり見られる。以上のようなまとまりに分けるという全体方針としては、ジェイクウィズの人間社会全体への幻滅や、舞台上で演じ悩む役者達がまず浮かぶ。結果、本書では、「青春」「成年」「晩年」という大きく三つの章に構成した。第一の章は、明るい太陽に照らされた妖精の住む郊外での暮らし、田舎の伝統やイングランドの風景である。嵐の海でのマリーナの誕生に始まり、幼少、思春期、

(チョーサー、ジェーン・オースティンのヒロインと同じく知られる) シェイクスピア風の少年少女を経て、万の心に宿る情熱と愛のテーマに至る。これらは第一の章の主要な内容を成し、そして、嫉妬、離別、報われない情熱を取り扱う部分が、やがて来るべき暗い影を落としている。これらのページは、愛の吐息を混ぜ合わせたインクを使った他のすべての詩人よりもまさっていて、カトウルスからキーツに至る詩人たちが、背後へ追いやられてしまう。描き出される恋人たちの中に見られるのは、戦士、羊飼、王様と道化、人妻と女主人、少年と老人、過てる者と信頼される者、征服者と愛されざる者。舞台となるのは、果樹園や宿場、墓地や寝室、エジプトやイーストチープ通り、魔法の小島。求愛と結婚、激しい情欲の血、愚行による精神の浪費、二つの心の婚姻、無私と拒絶、お世辞と社交の慣習、誓い、涙、そして才能、不死鳥と雉鳩の互いの炎が象徴する人間から噴き出す情熱、ここでは

すべてが褒め称えられている。

「成年」は、戦争と為政者の品格の章である。大志、戦士の資質、愛国、名誉、痛ましい市民の争い、政府、権力、忠誠、社会の病巣、最終章の「晩年」では、成熟した情熱、過酷な経験、死、どくろ、時の流れ、影、忘恩、自責の念、罪、つまり、「人間が人間をどのようなものにしたか」（『抒情歌謡集』宮下忠二訳）という問いが解かれていく。シェイクスピア自身の晩年と同じように。免罪される中で、白髪の和解と静寂の中で。

シェイクスピア作品からアンソロジーを編することで、わたくしたちが得るものは何か？ また、失うものは何か？ 失うものは、構成、話のすじ、といった全体像。同様に、劇の効果、物語の動き、場面それぞれの状況。これらはジョンソンが、「物語の展開と会話の進行」と呼んだものである。また、見落としがちだが、性格描写がある。これらの見返りとして、個々の引用部から、わたくしたちが得るものには、二つの要素がある。それは、語られた内容と、それがどのように語られたかである。大ざっぱに、使い古されたい方をする、構成ではなく、言葉の内容と言い回しである。「内容」に含まれるものとしては、人々に共通する心情、愛情、情熱、気分、内省、人間は情念をもつ生き物だという考え方。身分の上下に関係なく、平凡なことから日常生活の限られた経験を超えたことがらまで。これらによってわたくしたちの心は学び、理解の範囲を広げ、想像力の拡大を成しとげる。第二のものは、言葉そのものである。わたくしたちの言葉ではなく、シェイクスピアの言葉である。しかしながら、その言葉を、わたくしたちが振り返るたびに、わたくしたちの脳裏に幽霊のようによみがえり、自己満足のいすに座っていたわたくしたちを立ち上がらせるたびに、わたくしたちは、二重の意味での認識に驚き、緩和と緊張を同時に感じ取り、そして、ときには、溺れる者は藁をも掴む、といった、すでに親しんできた言葉に出くわす。曲がっていた思考が矯正され、黙っていた感情が語り始める。

このようにわたくしたちは、物語の原動力となる「動き」を犠牲にし、また、二番目に重要な「性格描写」を犠牲にし、全体としてとらえることを断念し、部分に分けてとらえることになる。劇作家たるシェイクスピアは、自分自身を芸術家だと位置づけつつも、同時に、一人の人間とも位置づけた。繰り返しになるが、わたくしたちは、語られた内容と、それがどのように語られたかに着目する。思想と情熱に、言葉に、慣用句に、リズムに、個々の単語に着目する。しかしながら、その情熱は、まるで自分自身が感じたもののようであり、自分自身が発したもののようである。なぜならシェイクスピアは劇作家であると同時に、本人が意識しなかったにせよ、役者でもあったからである。だからこそ、彼は、演ずる役者の口から発せられるせりふとして書いたのである。彼は自然に向かって鏡をかかげた。動く対象を、ある瞬間に固定してしまう画家とは異なる。チョーサーは、彼のカンタベリー物語序章で、登場する巡礼者の肖像を見事に描いた。わたくしたちは、その明暗、印象的な内容、特徴ある散文をたたえている。しかし、シェイクスピアは動的であって静的ではない。彼の舞台には、額縁があるわけではない。垂れ幕の前に人形を並べているのではない。マルヴォーリオは黄色の靴下をはいて自慢げに歩く、ロメオはバルコニーから飛び降りる、ガートルードは毒杯を飲み干す、イアーゴーは、策略に毒された者達の前へ進み出るムーア人オセロを見る、シナは下手な詩を書く詩人だと暴徒に八つ裂きにされる、独善的なリチャードが権力のつえを投げ出す、イモージェンが夫の胸の中へと飛び込んでいく。詩人ウィリアム・ブレイクは次のように語った。

喜びを己のために従わせようとするならば、
羽ばたく命を失ってしまう。
喜びがあるがままに己のものとするならば、
永遠の太陽の中に生きる。
(ウィリアム・ブレイク『永遠』)

シェイクスピアは決して、場面、人物、情熱を、自らに従わせようとはしなかった。あるがままにとらえていたのである。まさにこれこそが、彼の言葉のもつ秘密である。詩人トマ

ス・グレイは、シェイクスピアについて、次のように語っている。「彼の言葉は絵画的だ。」「絵画的」は、今日ではより発展した概念を含み、グレイの言葉を拡張することができる。すべての表現が、動画的、映画的であると。（散文にせよ、韻文にせよ）シェイクスピア作品のせりふには、役者の動き、抑揚、せりふの間、気持ちが高まり、速くなっていくことが暗示されている。習作の段階では見られないが、範囲、多様さ、柔軟さにおいて、「タイタス・アンドロニカス」から「テンペスト」に至るまで継続して充実していき、ひらめきはより敏感に、観察はより正確に、情熱はより繊細に、文法、比喻、言葉、会話の妙、飛躍も、同様に発展していった。「彼の心と手は同時に働き、考えたことを苦もなく流暢に表現したため、彼の原稿で文字を消した箇所のある原稿は、めったにありませんでした。」（ジョン・ヘミング、ヘンリー・コンデル『第一フォリオへの序』日浅和枝訳）さらにいうならば、彼の心と声は同時に働いた。彼の言葉はわたくしたちの耳に響いてくる。

このようなことから、文体の秘密は物語の秘密であり、いふなればそれは常に動いている。あたかも潮の満ち引きのごとく、前へと後ろへと、リズムと速さを変化させながら。わたくしたちは、たとえるなら、競走馬のつややかな毛並みに隠された筋肉のその脈動を賞賛する。その一方で、猥雑な言葉使いにはしばしば困惑させられ、大げさな表現にはしらけてしまうこともある。言葉遊びやだじゃれにはうんざりさせられる。エリザベス王朝風の言葉にはなじみがうすく、「琥珀織り成す美辞麗句、絹糸まがいの宮廷語」は、中世建築のねじれたえんとつや、宝石で飾られたコルセットのように、古びてしまっている。にもかかわらず、シェイクスピアの登場人物については、「そこに出てくるのは読者が自分もその立場にあったら同じことを言い、行ったであろうと考えたとおりに話し、行動する人物だけである。超自然的な人物、幽霊や魔女などが登場する時でも、それらが話す言葉は現実の我々が話す言葉と変わりはない。」（『シェイクスピア序説』中川誠訳）このように語ったジョンソン博士の言葉に、わたくしたちは賛同する。

すでにシェイクスピア作品に親しまれている方々は、以下のページに続く「並び変わった」引用箇所から、今までに見過ぎていた句に気づいたり、新たな発見をして面白いと感じるのではないだろうか。たとえば、ジャック・ケイドのコモンウェルス、ゴンザーローのユートピアの対比は、たびたび興味を引いてきた。そこまですらなくとも、このアンソロジーは、誰よりもまず、たとえば、「このままでいいのか、いけないのか」「明日、また明日、また明日と」「慈悲は義務によって強制されるものではない」（小田島雄志訳）といった有名な一節ぐらいしか覚えてはいないが、一冊読もうかとかばんに入れているような、ごく一般的な読者の方々にこそ楽しんでいただきたい。

この世界はすべてこれ一つの舞台、
人間は男女を問わずすべてこれ役者にすぎぬ、
それぞれ舞台に登場してはまた退場していく、
そしてそのあいだに一人一人がさまざまな役を演じる、
年齢によって七幕に分かれているのだ。まず第一幕は
赤ん坊、乳母に抱かれて泣いたりもどしたり。
次は泣き虫小学生、カバンぶらさげ、輝く朝日を
顔に受け、歩く姿はカタツムリ、いやいやながらの
学校通い。さてその次は恋する若者、鉄をも溶かす
炉のように溜息ついて、悲しみこめて吐き出すは
恋人の顔立ち称える歌。次に演ずるのは軍人、
あやしげな誓いの文句並べ立て、豹のような髭はやし、
名誉欲に目の色変え、おやみやたらに喧嘩っ早く、
大砲の筒先向けられてもなんのその、求めるのは
あぶくのような功名のみ。それに続くは裁判官、
賄賂の去勢鶏つめこんで腹はみごとな太鼓腹、
目はいかめしい半白眼、髭は型どおりハの字髭、
もっともらしい格言やごく月並みな判例さえ
口に出せばはたせる役。さて第六幕ともなれば、
見る影もなくやせこけてスリッパはいた間抜けじじい、
鼻の上には鼻眼鏡、腰にはしっかり腰巾着、
若いころの長靴下は、大事にとっておいたのに、
しなびた脛には大きすぎ、男らしかった大声も
かん高い子供の声に逆もどり、ピーピーヒューヒュー
鳴るばかり。いよいよ最後の大詰めは、すなわちこの
波乱に富んだ奇々怪々の一代記をしめくくる終幕は、
第二の赤ん坊、闇に閉ざされたまったくの忘却、
歯もなく、目もなく、味もなく、なにもない。

1

恐ろしいお産をさせてしまったな、いとしのおまえ、
あかりもなく、火の気もなく、無慈悲な自然に
すっかり忘れ去られたままで。それにまた、いまは
おごそかに葬儀をおこなう暇もない、柩にさえ入れず
すぐさまおまえを海底の泥に投じなければならぬのだ。
遺骨の上には墓石を建て、その前には消えることなき
あかりを供えるのが定めだが、おまえの遺体の上には
鯨が潮を吹き、波が鼻歌を歌い、そのそばには名もなき
貝殻がうずくまるのみだろう。

2

皆様もようく
ごらん下さい、型は小さいけれど、なにもかも
お父君に生き写しではありませんか、目も、鼻も、唇も、
眉を寄せる癖も、額の形も、それから、顎の凹みも、
頬のかわいらしいえくぼも、それに、どうでしょう、
この笑顔も、
手や爪や指の格好まで、そっくりと言うほかない。

3

あなたはお母上の鏡であり、お母上はあなたの中に
ご自分の美しい春四月の姿を想起される、

4

おまえの一生は平穏であれよ！
おまえほど騒がしい誕生をみた子は二人とあるまい
どうか静かな、平和な生涯を送ってくれ！王の姫として、
この世にこれほど手荒な歓迎を受けて生まれたものは
ほかにいないのだから。これからはしあわせであってくれ！
おまえの生誕を告げる鐘は、このとおり、
火と、風と、水と、土と、天とが、あらんかぎりの
力をふりしぼってわめき立てる大音声だ。

5

あなたの吸った母乳は石に変わり、
乳首をくわえたときからあなたは残忍さを身につけた。

6

一家をきりもりして苦勞のたえない女房が
逃げ出した一羽の鶏をつかまえようと走りだす、
幼子を地べたにおいて、力のかぎりの早さで、
なんとしても引とらえようと追いかけて行く。
一方見すてられた子も母親のあとを追い、
泣き叫んでつかまえようとするけれど、母親は
目の前を逃げて行く鶏を追うのがせいっぱい、
かわいそうな幼子の気持ちを思いやる余裕はない。
君もそうなのだ、君から逃げるものを追っている、
一方私は幼子ではるか遠くから君を追う、
だが望みのものをつかまえたなら、もどってきて
母親役をつとめ、私にキスしてやさしくしてほしい。
君がもどってきて私の泣き声を静めてくれたら、

私も君が「ウィル」を手にするよう祈るだろう。

7

ところがおまえは美しい、そしておまえが生まれたとき、
自然と運命が協力しておまえを高貴なものにしてくれた。
自然の女神の贈り物を、おまえは野の百合、バラの蕾とともに
誇っている。

8

あなたをなにかにたとえたとしたら夏の一日でしょうか？
だがあなたはもっと美しく、もっとおだやかです。
手荒な風が五月の蕾を揺さぶったりして
夏のいのちはあまりにも短くはかないのです。
ときには太陽の眼差しが熱すぎることもある、
ときにはその黄金の顔に雲がかかることもある、
そして偶然、あるいは自然のなりゆきによって、
美しいものはすべてその美しさを奪われていくのです。
だがあなたの永遠の夏は色あせることもなく、
あなたに宿る美しさは失われることもなく、
死神に「死の影を歩む」と言われることもないでしょう。
あなたが永遠の詩の中で「時」と合体しさえすれば。
人々が息をするかぎり、その目が見うるかぎり、
この詩は生きてあなたにいのちを与え続けるでしょう。

9

ハーマイオニ
さあ、
お二人の子供のころのお話を聞かせてください、きっと
かわいらしい王子ぶりだったのでしょうか？
ポリクシニーズ
美しいお妃、
ご主人と私とは将来のことなど考えぬ子供でした、
今日という日が明日もくり返され、二人はそのまま
永遠に少年であると思っていました。
ハーマイオニ
お二人のうち、
主人のほうがいはずらっ子だったのでしょうか？
ポリクシニーズ
私たちは日向を跳びはねてはメエメエ鳴きかわす
双子の子羊のようなものでした。汚れない心と心を
おたがいの胸にとりかわすのみで、汚らわしい罪など
教えられたこともなく、罪を犯すものがこの世にいるとは
夢にも思いませんでした。あのような生活を続けておれば、
そして私たちの弱い精神が強い情熱にあおられて
のぼせあがることがなかったならば、私たちは堂々と
天に向かって「無罪です」と主張しえたでしょう、つまり、
アダムの原罪とは無縁であったはずです。

10

リオンティーズ
おい、マミリアス、おまえはおれの息子か？
マミリアス

はい、お父様。
リオンティーズ
そうか。よく言った。鼻が汚れているぞ。
おれに生き写しだと言われるが、さあ、腕白大将、
鼻をおふき。きれいにしないと叱——られるぞ。
おい、小僧、
空のように青いその目でおれを見てごらん。こいつめ！
かわいいやつ！おれの血肉！

11

リオンティーズ
実はいま、この子の顔を
つくづく眺めているうちに、二十三年昔の自分に
帰ったような気持ちになっていた、大人のズボンもはかず、
緑色のピロードの上着を着て、腰につけた短剣も、
その持ち主を傷つけぬように、というのは飾り物でも
怪我させることが多いので、鯉口を止めてあった、
そのころのおれを思い出していたのだ、きっとこの
青豆のような小紳士にそっくりだったろうとな。
なあ、親友、金だと偽って卵を出されたら受けとるか？
マミリアス
いいえ、お父様、ぼくは決闘します。
リオンティーズ
決闘するか！ よし、しあわせになってくれよ！
大兄にも幼い王子がおられるが、この私のように
かわいがっておられるのか？
ポリクシニーズ
それはもう、国にいれば
息子が私の日課であり、娯楽であり、生きる意味なのだ、
いま心を許しあった親友かと思うと、たちまち仇敵になる、
居候にもなれば、軍人、大臣、なんにでもなる。
あの子といると、七月の長い一日も十二月のように
短くなる、そして子供心の気まぐれで、胸にわだかまる
いやな思いを癒してくれるのだ。

12

おい、ルーシャス！眠りこんでいるな。いいだろう、
蜜のように甘い眠りの露を存分に味わうがいい。
おまえには、心のわずらいが人々の脳裏に描き出す
悪夢も妄想も訪れないのだ、だからそのように
ぐっすり眠ることができるのだ。

13

ヴァレーリア
お子様はお元気ですか？
ヴァージリア
おかげさまで元気にしております、奥様。
ヴォラムニア
なにしろ剣を見たり太鼓を聞いたりするのが学校で先生の顔を見るより好き、という子です
から。
ヴァレーリア
さすがお父様のお子ですわねえ。ほんと、かわいらしい坊っちゃん。そう言えばこの前の水

曜日、半時間ほどごいっしょにすごしましたがけど、そのしっかりしたお顔つきときたら、きれいな一羽の蝶を追いかけていらして、つかまえては放し、放してはつかまえ、何度もそうするうちに、つまずいてお転びになったので、それで腹をお立てになったのか、いきなりその蝶を噛みちぎってしまわれました。ほんとにもう、こなごなになるまで！

ヴォラムニア

父親が癩癧を起こしたときとそっくりですわ。

ヴァレーリア

ほんと、りっぱなお子様で。

ヴァージリア

いたずらで困ります。

14

ぼくは踏ませません、

逃げて、大きくなって、それから戦います。

15

ページ夫人

まあ、ヒュー先生、今日学校はお休みですか？

エヴァンズ

そうです、スレンダーさんが子供たちを遊ばせるよう言われますたのでな。

クイックリー

なんていいお心がけなのでしょう！

ページ夫人

ヒュー先生、うちの主人が申しますには、この子はちっとも教科書を覚えていないそうで。すみませんが、少しラテン文法をきいてみていただけませんか？

エヴァンズ

ここへおいで、ウィリアム。さあ、しゃんと顔をあげて。

ページ夫人

さ、おまえ、しゃんとしなさい。先生の質問に答えるんだよ、びくびくしないで。

エヴァンズ

ウィリアム、名詞の数の種類は？

ウィリアム

単数に複数。

クイックリー

タンスに腹痛？そうそう、タンスに腹痛の薬が入ってるってことね。

エヴァンズ

あなたはおしゃべりを黙っていてください！ウィリアム、「美しい」は？

ウィリアム

「プルケール」

クイックリー

ヒキゲール？ま、ヒキガエルより美しいものはほかにはないってことになったら、引っくりケール騒ぎだわ。

エヴァンズ

ほんとうに愚かの婦人ですな、どうか黙っていてください――

16

ハーマイオニ

ちょっとこの子を見てちょうだい、うるさくてしょうがないので。

侍女Ⅰ

さ、王子様、ここへいらっしゃい、

私がごいっしょに遊んでさしあげますから。

マミリアス

おまえはいやだ。

侍女Ⅰ

まあ、どうしてでしょう？

マミリアス

おまえはきつくキスするし、ぼくをまだ
赤ん坊あつかいするからだ。

17

ハーマイオニ

さ、またお相手をしてあげましょう。ここへすわって
お話をしてちょうだい。

マミリアス

楽しいのがいい、こわいのがいい？

ハーマイオニ

できるだけ楽しいのがいいわ。

マミリアス

冬のお話にはこわいのがいいんだけどな。ぼく、
妖精やお化けの話知ってるよ。

ハーマイオニ

ではそれにしましょう。

さ、おすわりなさい、そしてお化けの話で私を
こわがらせてちょうだい、おまえのお得意の話で。

マミリアス

むかしむかしある男が――

ハーマイオニ

まずすわって、それから。

マミリアス

お墓のそばに住んでいました。小さな声で話すよ、
むこうのおしゃべり雀たちに聞かせたくないから。

18

ああ、

聖なる自然の女神よ、あなたはあの二人の王子のなかに
あなた自身の姿を示されている。あの二人の心根は、
堇の花の下を吹き抜けながらその可憐な頭を揺らさぬ
春の微風のようにやさしい、しかしながらいったん
その気高い血が激すると、峰の上にそびえ立つ
松の木の頭を引っつかみ、谷底におかってねじ曲げる
暴風のように荒々しくなる。不思議なものだ、
目に見えぬ本能の力で、だれにも教えられぬのに
おのずから王子の風格を身につけ、名誉心を胸に抱き、
人に見習わぬのに礼節を知り、野生のままに育った
勇気までが、まるで丹精して育てあげた果樹のように、
りっぱな実をつけたとは。

19

だが、陛下、

もうその王子たちをお返しいたします、私としては
この世でもっともかわいい二人の道づれを失うわけですが。
どうか天上の神々の祝福が、王子たちの頭上に
露と降り注がれますよう、のちには星となられて
天を飾るにふさわしいお二人です。

アーサー

おはよう、ヒューバート。

ヒューバート

おはようございます、小さな公爵。

アーサー

小さな公爵にちがいないな、もっと大きな公爵になる資格があるというのに——なんだか暗い顔をしているね。

ヒューバート

もっと明るい顔をしていたときもありました。

アーサー

ああ！

ぼく以外に暗い悲しい気持をもつ人なんていないはずだ。と言っても、ぼくがフランスにいたとき、若い紳士たちはまるで夜のように悲しそうな顔をしていたものだけど、それもただ、気まぐれな見栄のために。ぼくだってこの牢獄から出してもらい、羊飼いにでもなれたら、一日じゅう明るい気持でいられると思うがなあ。いや、ここにいたってそうなれるよ、叔父上がこれ以上ひどいことをなさる心配さえなかったら。叔父上はぼくをこわがり、ぼくは叔父上をこわがっている。ぼくがジェフリーの息子だってことは、ぼくのせい？ そうじゃないだろう？ おまえの息子だったらよかった、そしたらぼくをかわいがってくれたろうからね、ヒューバート。

ヒューバート

こうやって話していると、あの無邪気な口ぶりで、死んでいたはずのおれの慈悲心が生き返りそうだ。だから、いきなり、一思いにやっつけるにかぎる。

アーサー

気分でも悪いの、ヒューバート？ 顔色がよくないよ。でも、おまえがちょっとした病気にかかったらいいな、そしたら一晩じゅう看病してあげられるもの。ぼくは、おまえがかわいがってくれる以上に、おまえが好きなんだ。

ヒューバート

このことばでおれの胸は押しつぶされそうだ——

これをお読みなさい、坊ちゃん。

ええい、涙のやつ！

無慈悲な拷問者の魂を外へ流し出そうというのか！ 手っとり早くかたづけないと、せっかくの固い決意がやさしい女らしい涙に溶けて、目からこぼれてしまう——読めますか？ きれいな字ではっきり書いてあるでしょう？

アーサー

きれいすぎるよ、ヒューバート、きたないことを言ってるのに。おまえは熱い鉄串でぼくの両目をつぶさなければならぬんだね？

ヒューバート

そうなんです。

アーサー

で、そうするつもり？

ヒューバート

そうするつもりです。

アーサー

おまえには人の心がないの？こないだおまえが
頭痛に襲われたとき、ぼくはハンカチでおまえの頭を
しばってやったろう、あれはあるお姫様が刺繍してくれた
いちばん大事なハンカチだけど、ぼくは返してくれとさえ
言わなかった。そして夜中もずっとおまえの頭を
この手でささえてやり、一分一分が眠りもせずに
時の歩みを告げるように、おまえの苦しい時を
元気づけようと、「なにかほしい？」「どこが痛むの？」
「なにをしてあげようか？」って声をかけ続けたんだ。
あの時刻にはどんな貧乏人の子供だってぐっすり寝込んで、
おまえにやさしいことばなどかけてやらなかったろう、
それなのに、おまえは、王子を看病人にしたんだ。
でも、おまえはぼくの親切があとのことを考えての
たくらんだ親切と思うかもしれないね。そう思いたければ
思ってもいいよ。ぼくをひどいめに会わせるのが天のみ心なら
しかたがない、そうしてもいいよ。ぼくの目をつぶすんだね？
いままでに一度も、これから一度も、おまえの顔を
にらみはしないこの目を？

ヒューバート

そうすると誓ったのです。

真赤に焼いた鉄串で焼きつぶさなければなりません。

アーサー

ああ、そんなことをするのは鉄の時代の現代だけだ！
鉄そのものは、いくら真赤に焼かれていたって、
この目に近づけばぼくの涙を飲むだろうし、
罪のないぼくの目にあふれる水にふれれば
火と燃える怒りをたちまち消してしまうだろう。
それどころか、そのあと、ぼくの目を焼こうとした
火をもっていったおかげで、錆びて腐ってしまうだろう。
おまえの心は、鍛えあげられた鉄よりも固いの？
たとえ天使様がやってきて、ヒューバートが
ぼくの目をつぶすよ、とおっしゃっても、ぼくは
信じなかっただろう——ヒューバートが
自分の舌でそう言わなければ。

ヒューバート

出てこい！

命じたとおりにしろ。

アーサー

ああ、助けて、ヒューバート！ぼくの目は
あの人たちの恐ろしい顔を見ただけでつぶれてしまった。

ヒューバート

おい、鉄串をよこせ、この子を縛りつけるんだ。

アーサー

そんな、そんな乱暴なことをしないで！
ぼくは暴れたりしない、石のようにじっとしている。
だからお願い、ヒューバート、ぼくを縛らないで！
ねえ、ヒューバート、この人たちを外に出して
ぼくは羊のようにおとなしくすわっているから。
ぼくは身動き一つしない、一言もしゃべらない、
怒ったように鉄串をにらみつけもしない。だから
この人たちを追い出して。そしたらぼくは、
おまえがどんなにぼくを苦しめても、許してあげる。

ヒューバート

よし、奥へ行け、この子はおれにまかせろ。

死刑執行人Ⅰ

助かります、こんなことをしないですむとは。

アーサー

ああ、ぼくは味方に出て行けって言ってしまった！

あの男は顔つきはこわいけれど、心はやさしいんだ。

あの男を呼びもどして！そのやさしい心がおまえの心に
やさしさを与えてくれるかもしれない。

ヒューバート

さ、覚悟なさい。

アーサー

ほかにしょうがないの？

ヒューバート

ありません、目をつぶす以外に。

アーサー

ああ、おまえの瞼のなかに、小さなごみでもいい、

砂、埃、ブヨ、髪の毛の先、なんでもいいから

飛びこんで、大事な目を痛がらせてくれたら！

そしたら、小さなものでもどんなにひどく痛むかわかり、
自分のやろうとしていることが恐ろしくなるはずだ。

ヒューバート

さあ、お約束どおり、もうお黙りなさい。

アーサー

だけど、ヒューバート、二つの目を助けるためには

二枚の舌でしゃべらなければならないくらいなもの、

黙らせないで、ヒューバート、ね、お願い！

なんならぼくの舌を切ってもいいよ、ヒューバート、

ぼくの目を残してくれるなら。ね、ぼくの目を助けて、

ただいつまでもおまえを見るだけのためでもいいから。

21

「こうやって」とダイトンは言った、「二人は寝ていた」

「こうやって」とフォレストは言った、「おたがいに

アラバスターのように白い腕をからみあわせていた、

二人の唇は一本の茎に咲く四つの赤いバラの花だ、

それが初夏の光に美しく咲き誇り口づけしあっていた。

自然がものを造りはじめたとき以来の最高の傑作

22

どうかもう一度あの塔をごらんになって。

年古し石よ、悪意によっておまえの壁のなかに

閉じこめられた幼子たちにあわれみをかけておくれ。

まだあどけない子供たちには硬すぎる揺り籠よ、

幼い王子たちには手荒すぎる乳母、陰気すぎる

遊び友だちよ、やさしくしておくれ、わが子たちに。

23

悲しみがいまはいないわが子のかわりとなり、

あの子のベッドに入り、私にどこまでもついて歩き、

あの子のかわいい顔立ちをし、あの子のことばをくり返し、

あの子の清らかな性質を一つ一つ思い出させ、

あの子の残して行った服にあの子の形をとらせるのです、
それなのにどうして悲しみを愛さずにいられましょう？
ではお別れします。あなたが私と同じ悲しいめに会えば、
私はあなたよりもっとよく慰めてさしあげるでしょう。
私の髪をこんなにきちんとしておくことはない、
頭のなかこんなに乱れているというのに。
ああ、神様！私の息子、私のアーサー、私のいとし子！
私のいのち、私の喜び、私の糧、私の全世界！
夫を亡くした私の慰め、私の悲しみを癒すもの！

24

リア

ああ、気が狂いそうだ。
おい、小僧、どうした、小僧？寒いかな？
わしも寒いぞ。その藁床というのはどこだ？
貧乏というやつは不思議な魔力をもつものだ、
卑しいものを貴いものに変えてしまう。さあ、
その小屋へ行こう。なあ、阿呆、わしは心の片隅で
おまえをあわれと思うようになったぞ。

道化

頭に知恵のない人は、
ヘイ、ホウ、風吹き、雨が降る、
運に満足せにゃならぬ、
雨は毎日降るものさ。

リア

そのとおりだ、小僧。さ、小屋に案内してくれ。

25

暗殺者Ⅰ

亭主はどこだ？

マクダフ夫人

おまえたちに見つかるような、そんな
汚らしい場所にはいないはず。

暗殺者Ⅰ

やつは謀反人だぞ。

息子

嘘だい、毛むくじゃらの悪党！

暗殺者Ⅰ

なにを、ヒョッ子！

謀反人の小倅めが！

息子

あ、やられた、もうだめだ、
お母様、逃げて、早く！

26

ここにおまえの兄ジェフリーの面影をとくと見るがいい、
あの目、あの眉は、彼によって形作られたのだ、
この小さな抄本には、ジェフリーとともに死滅した
大きな原本の要旨がことごとく収めてある、やがて
時の手が筆を加え、父に劣らぬ大きな本とすることだろう。

27

ヴォラムニア

そしてここにいる子はかつてのおまへの絵姿、
やがて時がきて大きくなれば、いまのおまえ
そっくりになるでしょう。

コリオレーナス

ああ、軍神マルスよ

至高の神ジュピターの許しを得て、この子に
高潔な心を授けたまえ。そうすれば、おまえはな、
無敵を誇る敵をも恥じ入らせ、戦においては、
舟人たちの標識のようにいかなる嵐にも耐えぬき、
おまえを仰ぎ見るものを守ってやれるのだ。

ヴォラムニア

膝をおつき。

コリオレーナス

それでこそりっぱなわが子だ！

ヴォラムニア

この子も、おまへの妻も、このご婦人も、私も、
おまえに嘆願しにきました。

28

乳母

承知も承知、何歳何か月何時間というところまで。

キャピュレット夫人

娘はやがて十四。

乳母

十四本の歯にかけて、
といっても重重悲しや欠けてしまっに残るは四本——
たしかにお嬢様はやがて十四。ところで収穫祭まで
あと何日ありますでしょうか？

キャピュレット夫人

二週間あまりね。

乳母

あまかろうとからかろうと、一年数ある日のなかで
その収穫祭の夜こそお嬢様が十四になられます。
娘のスーザンとお嬢様は——神様お恵みを——
おない年でした。スーザンも今は神様のみもと、
私にはできすぎた娘でした。それはそうと、
その収穫祭の夜こそお嬢様が十四になられます。
そうですとも、ほんと。よくおぼえておりますよ。
あの地震があったとき、いまから十一年前ですが、
お嬢様は乳ばなれをなさった——忘れもしません、
一年数ある日のなかでそれがまたその日でしたよ。
あの日、私は乳首にニガヨモギをぬりましてね、
鳩小屋の壁のそばでひなたにすわっておりました。
旦那様と奥様はマンチュアにおいでで——
ええ、記憶力はちゃんとしてますよ——それはそうと、
お嬢様はわたしの乳首のニガヨモギをなめ、
にがかったのでしょうか、ほんとにおかしい、
むずかりなさって、私の乳首と喧嘩さわぎ。
そのときですよ、鳩小屋がガタガタときて、それで
言われるまでもなく一目散。
あれからもう十一年になるんですからねえ。

そのころお嬢様はもうひとり歩きも、それどころか
ヨチヨチ駆けることだっておできになりました。
そう、ちょうどその前の日お嬢様はオデコに怪我し、
そのとき主人が——神様、あの人にお恵みを。
愉快的な人でした——その主人が抱きおこしましてね、
申したんですよ、「うつぶせにおころびですかい、
もっとおりこうになったらあおむけにころぶんですよ、
いいですかい、ジュール？」するとどうでしょう、
このかわいいお嬢様ったら、泣きやんで「ウン」ですつて。
それがまあ、ほんと、その冗談どおりになるなんて。
私は何百年生きていたって絶対忘れやしません、
「いいですかい、ジュール」って主人が言うと、
かわいいお嬢様が泣きやんで、「ウン」ですつて。

29

ご婦人がたの舌先のこの切れ味はどうだろう！
とぎすまされた剃刀の刃とでも言うほかないだろう。
あるかなしかの髭さえもののみごとにそり落とす、
目よりも鋭い目をもって見えないものまで見つけ出す。
話の中味は意味深く、知恵の早さは抜群だ、
矢より弾丸より疾風より人の思いより早いのだ。

30

一人まえの男としては幼すぎるし、子供としては大人すぎます。豆になる前のサヤエンド
ウ、色づく前の青リンゴ、子供と大人をへだてる溝、といったところです。顔立ちはいいが
口は悪い、乳離れしたかしないかのヒョッコで。

31

おまえを大の男と言うようなものは、そのしあわせな
若々しさを見そこなっているのだ。そのつややかな
ルビーの赤さの唇は、処女神ダイアナもおよばぬ。
その声は乙女のように高くやさしい。どこをとっても
女役を演じる少年俳優といったところだ。

32

賭けてもいいわ、
二人とも若い男の服を身につければ、おまえより
私のほうがずっと美青年に見えるはずだから。
短剣の吊りかたにしても私のほうが粋だろうし、
しゃべるときは声変わりの少年のような声を出すわ。
それに内股のこきざみな二足を、男の大股の
一足に変えてみせる。若い男が自慢話にするように
喧嘩の話もしてみせる。それからうまい嘘もつくわ、
ぼくは高貴なご婦人がたに恋をうちあけられたがね、
はねつけたもんだからみんな恋思いで死んでしまった、
ぼくにはどうしようもなかったが、それでもやはり
死なせなければよかったといまにして後悔するよ、
といった調子の青臭い嘘ならいくらでもつけるから、
みんな私のことを学校をやめて一年以上にはなる
と思うでしょう。そういう大ぼら吹きが考えつく
くだらないいたずらなら、私、何百って知っている、
それを実行してみたいわ。

33

あの人のことをきくのは惚れたせいじゃないわよ、
あんな口うるさい若僧なんか、そりゃあ口はうまいけど。
でもことばがなによ？そりゃあことばだって
聞くものを喜ばせるならばかにはできないけど。
なかなかハンサムな若者ね、たいしたことないけど。
でも高慢ちきよ、そりゃあ高慢がよく似合うけど。
いまにきつといい男になるわ、いちばんの取り柄は
あの顔立ちだもの、口の悪さに腹を立てようとしても
あの目を見ているとそんな気は失せてしまう。
背はそう高くはない、そりゃあ年の割には高いけど。
脚はまあまああってとこね、そりゃあすてきだけど。
唇には美しい赤味がさしてたわ、頬を染めてる
あの赤味よりももっと濃くて生き生きとしていた、
唇のほうがまじりけなしの紅バラだとすれば、
頬は紅白まじりのダマスクバラといったところ。

34

奥様はまず
女であることをお忘れ願います、従順なご態度を
命令口調ととりかえ、弱気とかはにかみといった
ご婦人がたにつきものの性質、と言うよりはむしろ
ご婦人がたそのものである美質を、粗暴な勇氣に変え、
口も八丁手も八丁、生意気で、無作法で、
イタチのように喧嘩っ早くなっています。それに、
その美しいお顔もお忘れになり、ああ、口にするだけで
胸が痛みますが、やむをえません！そのお顔を、
ところかまわず口づけする太陽にさらさねばなりません。
また、女神ジュノーさえ妬ませた優雅なお召し物も
お忘れになってください。

35

気むずかしい老年と青春は一緒に住めない
青春は楽しみ多く、老年は苦勞が多い
青春は夏の朝のようで、老年は冬の天気のような
青春は夏のように美しく、老年は冬のように枯れる。
青春は戯れ多く、老年はすぐ息がきれる
青春は足が早く、老年はちんばだ
青春は血気にたけ、老年は弱く冷たい
青春は野生で、老年は人馴れている
老年よ、君が嫌いだ、青春よ君が好きだ
おお愛人よ、愛は若いのだ！
老年よ、君はおことわりだ。美しい牧人よ急いで行け
君はあまり長居をするからだ。

36

てめえが堅物だからって、酒も肴も許さんって言うのか？

37

今夜、むさくるしいわが家に、暗い空を明るくする
きらめく星座、きらびやかなご婦人がたがみえる。

びっこをひきひき冬が去り、装いはなやかに
春がくると、胸をはる若者たちがひとしく感じる
あの喜び、それをあなたも、今宵わが家で、
ふっくらした蕾の乙女のなかでゆっくりと
味わえるはず。

38

あれは私の若葉の時代、
分別は青くさく、情熱も湧き立たぬころの話だわ、
そんなことを言ったのは！

39

四十たび冬が襲来してあなたの額を攻め、
その美しい戦場に深い塹壕を掘り刻むとき、
いま人の目を惹く青春の華やかな衣装は
なんの価値もないボロボロ布としか思われないうでしょう。
そのとき、血気さかんな日々の宝であった
あなたのあの美しさはどこに、と問われて、
この深く落ちくぼんだ目に、と答えるなら、
それは恥ずべきひとりよがりのたわごとにはすぎません。
だがもしそのとき、「この美しいわが子こそ
わが人生の総決算、わが老年の慰めです」
と答えるなら、あなたの美しさはりっぱに活用され、
遺産として受け継がれたと認められるでしょう。
これこそあなたの肉が老いて新たによみがえり、
あなたの血が冷えて再び燃える道なのです。

40

さ、おまえのしあわせを祈るぞ。
ところで、二、三、言い聞かせたいことがある。
胸に刻みつけておけ。まず思ったことを口に出すな。
またとっぴな考えを軽々しく行動に移してはならぬ。
人に親しむはよし、だがなれなれしくはするな。
語るにたる友と見きわめをつけたら、たとえ
鉄のたがで縛りつけても離すでない、
だが羽もそろわぬヒヨコのような仲間と
だれかれかまわず握手して手の皮を厚くするな。
喧嘩には巻きこまれぬよう用心せねばならぬが、
いったん巻きこまれたら相手が用心するまでやれ。
人の話には耳を傾け、自分からはめったに話すな。
他人の意見は聞き入れ、自分の判断はひかえるのだ。
財布の許すかぎり着るものには金をかけるがいい、
風変わりなのはいいかんぞ、上等であって派手ではないのだ。
服装はしばしばその人柄をあらわすという、
この点については、フランスの貴族たち、
あるいはえりぬきの人たちは第一人者だ。
金は借りてもいいかんが貸してもいいかん。
貸せば金はもとより友人まで失うことになり、
借りれば儉約する心がにぶるというものだ。
なにより肝心なのは、自己に忠実であれということだ、
そうすれば、夜が昼につづくように間違いなく
他人にたいしても忠実にならざるをえまい。

41

バートラム、おまえに神の祝福があり、その姿と同じく
おこないにおいても、お父様そっくりでありますよう！
生まれながらの気高い血と磨きあげられた美德とが
競いあっておまえを支配しますよう！すべての人を愛し、
少数の人だけ信頼し、だれにたいしても害をなさぬよう。
敵にたいしては力を用いずして威圧し、友人にたいしては
おまえのいのちの鍵をかけて大事にすることです。
口数の少なさを責められるのはいいが、多すぎるといって
非難されぬよう。そのほか、天が授けようと思し召し、
私が与えてほしいと祈るすべての美点がくだされますよう！

42

むこうに花園がある、麝香草が咲きみだれ、
桜草が生い茂り、堇が風に答えて頭をうなだれ、
その上を天蓋のように、甘い香りを放っている
スイカズラ、麝香バラ、野バラがおおっている。
タイテーニアはときどき夜そこに出かけて行く、
そして踊り疲れて花を床に眠りへと落ちていく、
また、そこで蛇はエナメルを脱ぎ捨てる、
それが妖精のからだにピッタリ合う服になる。

43

こわがることはねえぜ。この島はいつも物音や歌声や
音楽でいっぱいだが、楽しいだけで悪いことは
なんにもしねえ。ときには何百何千って楽器が
耳もとでブーンとひびくことがある、かと思うと、
歌声が聞こえてきて、ぐっすり眠ったすぐあとでも
また眠くなることもある。そのまま夢を見ると、
雲が割れてそのあいだから宝物がおれの上に
降ってきそうになる、そこで目が覚めたときなんか、
もう一度夢の続きを見てえと泣いたもんだ。

44

蜜蜂の吸う蜜吸って、
九輪桜の花に寝て、
夜、フクロウの声聞いて、
コウモリの背に飛び乗って、
楽しく、夏のあと追って、
楽しく、時をすごしましょう、
花を仰いで暮らしましょう。

45

とすれば、マブの女王が寝台にはいりこんだな。
彼女は夢を生む妖精たちの産婆役、くるときは
町役人の人さし指につけられる
瑪瑙の小石のように小さな姿だ。
芥子粒ほどの小人の団に車を引かせ、
寝ている人間どもの鼻先をかすめてお通りだ。
車輪の輻は、足長蜘蛛の脛、
車の覆いは、イナゴの羽根、

引き綱は、蜘蛛の細糸、
首輪は、ぬれた月の光、
鞭はコオロギの骨、鞭縄は薄糸、
御者は、灰色服のブヨ、
その大きさは怠け娘の指にわく
丸い小虫の半分たらず、
車体は、からのハシバミの実、
作る大工は、リスと地虫、
太古からの妖精の車作りだ。
かく威儀ととのえてマブの女王は夜ごと見せる、
恋人たちの頭を通ればたちまち恋の夢を、
宮廷人の膝を通ればたちまち敬礼の夢を、
弁護士の手を通ればたちまち謝礼の夢を、
ご婦人の唇を通ればたちまちキスの夢を。
ただし口臭を消す匂い菓子が息にまじると
女王め怒って唇をただれさせたりすることもある。
ときには宮廷人の鼻先を通る、すると
宮位を求める鴨をかき出す夢を見る。
ときには税金がわりにおさめる豚の尻尾で
寝ている牧師先生の鼻をくすぐる、すると
ありがたや寺禄のふえる夢を見る。
ときには軍人の首すじを通る、すると
敵兵の首級をあげる夢、城壁の突破口、
伏兵、スペイン産の銘刀の夢、さらには
底抜けの祝杯の夢を見る。と、たちまち
耳にとどろく軍鼓のひびき、すわと目ざめ、
気も動転して一言二言祈りの文句、
そしてふたたび眠りこむ。これもマブの女王だ、
夜中に馬のたてがみを編んでみたり、
無精娘の髪の毛をもつれさせ
とけたら不幸の前兆になるというもの。
これもあのばあさんだ、あおむけに寝ている娘を
おさえつけ、重い荷物をのっけることを教え
亭主思いの良妻賢母を作りあげるのも。

46

山々を越え、谷を越え、
茨をくぐり、森くぐり、
莊園を越え、垣を越え、
流れをくぐり、火をくぐり、
私は行きます、月よりも
早い翼でどこまでも。
女王様へのお仕事は、
夜露で描く緑の輪。
九輪桜は親衛隊、
金の上着にありがたい
ルビーの飾りがついてます、
そこに香りが生きてます。
さあ、このあたりできれいな露を捜さなければ、
そして九輪桜の耳の一つ一つに真珠をかけなければ。

47

私はこう見えても卑しからぬ身分の妖精です、
いつでも夏が私にかしずいてくれているのです、
その私が愛するのです、だから私のそばにいつまでもいらして、
妖精たちにお世話をさせるわ、いつでも。
海の底からでも真珠をとってこさせるわ、
花の寝床におやすみになるとときには歌わせるわ、
そして私はあなたの死すべき肉体を清めて、
空気の精のようにしてあげるわ、この手で。
豆の花、蜘蛛の糸、蛾の羽根、芥子の種！
このかたに失礼のないようお仕えするように。
このかたの行く先々で踊ってさしあげるように。
お食事にはさしあげておくれ、杏にスグリの実に、
紫の葡萄に緑のイチジク、それから桑の実に、
熊ん蜂の巣から蜜をとってきて添えるように。
枕もとのあかりには、蠟のついた蜂の太股に
ホタルの目から火をうつしてさしあげるように、
このかたに安らかな眠りと目覚めが訪れるように。
それからおやすみのあいだはこのかたの目に
月の光がかからぬよう蝶の羽根であおぐように。
さあ、妖精たち、ごあいさつなさい、このかたに。

48

それはみんな嫉妬が生んだこしらえごとです。
この夏のはじめから、どこで出会っても、そう、
丘の上、谷の底、森のなか、牧場のすみ、
小石を敷きつめた泉のほとり、燈心草の茂る川のふち、
海の砂浜、ところかまわずそのように喧嘩を吹っかけ、
せっかく風の口笛に合わせて輪踊りをしようと
楽しみにしている私たちの気持ちをだいなしになさる。
そのために、口笛を吹いてもむだと知った風は、
その仕返しに海から毒気をふくんだ霧を吸いあげ、
陸地にたえまなく降らせ続ける。そこで
小さな川は思いあがり、堤を破り、
いたるところで氾濫し、水びたしにしてしまう。
おかげでせいいっぱい頸木を引いた牛もむだぼね、
汗水流した百姓もむだ働き、緑の麦はまだ
穂も出そろわぬ嬰兒のまま立ち腐れ、
泥海と化した野原にはからの羊小屋がとり残され、
烏ばかりが羊の屍に群がって肥えふとる。
モリス遊びのために芝生に切った溝は泥に埋まり、
迷路遊びのこみいった道は、踏む人とてなく、
伸びほうだいに伸びた草でもはや跡形もない。
人間たちは夏だというのに冬の着物を恋しがり、
夏祭りの歌がうたわれる夜はどこにもない。
そのために潮の満ち干を支配する月の女神も、
怒りに面を曇らせ、大気を冷たくしめらせる、
おかげで風邪やリューマチなどが大流行。
この天候異変で、季節までどうやらすっかり
狂ってしまったらしい。霜がその白髪頭を
真紅のバラの若々しい膝に横たえるかと思うと、
冬将軍の氷の禿頭に、まるで嘲笑うように、
初夏の蕾がかぐわしい花冠をかぶらせる。

春、夏、みのりの秋、怒れる冬、それぞれが
着なれた衣をとりかえ、とまどう世の人々は
季節のものを見るだけではいまがどの季節か
さっぱりわからない。

49

休むことを知らぬ「時」は夏を導いて
忌まわしい冬へと誘い、そこで破滅させる、
樹液は霜に閉ざされ、瑞々しい青葉は散りつくし、
美は雪におおわれ、見えるのはむき出しの醜さだけ。

50

たとえ妖精の国を全部もらってもあの子だけは
手放しませんから。あの子の母親は私の信者だった、
風薫るインドで、夜になると、私のそばにきて
おしゃべりをするのもしょっちゅうだった、
かと思うと、大海原の黄色い砂浜に並んですわり、
潮に乗って船出して行く商船を見つけては、
その帆が、浮気な風をはらんで、おなかを
大きくされたのを見て笑ったこともある、
その格好をまねして、かわいい泳ぐような
足どり——そのときはもう私のお小姓を宿して
大きなおなかをしていたけど——陸地に行く帆船が、
商品をいっぱい積んで航海から帰ってくるように、
いろいろなものを拾い集めて私にくれたりした。
でも所詮は人間、あの子のお産で死にました、
だからあの子を育てるのもその母親のため、
あの子を手放さないのもその母親のためなのです。

51

オセロー

あのハンカチはな、
あるジプシー女がおれの母にくれたものだ。
その女は魔法使いで、人の心を読むことができた。
その女が母に言ったそうだ、このハンカチをしっかりと
身につけていれば、夫にかわいがられ、その愛を
ひとり占めにできるだろう、が、もしなくしたり、
人にやったりすれば、たちまち夫の目には
嫌悪の色が浮かび、その心は新しい浮気を求めて
離れていくだろうと。母は死ぬときあれをおれにくれて、
さいわい妻をめとる日がきたらその人にあげなさい、
と言った。おれはそのとおりにした。だからいいな、
あれを自分の目のように大切にするのだ。
なくしたり人にやったりすればとり返しのつかぬ
身の破滅となるぞ。

デズデモーナ

そのようなことがほんとうに？

オセロー

ほんとうなのだ、あれには魔法が織りこんである。
二百年もこの世にあって太陽の運行を
見つめてきた巫女が、神がかりの状態で
あの模様を縫いあげたのみならず、

神の前で浄められたカイコの吐く絹糸をもちい、
秘法をもって乙女の心臓のミイラからしぼりとった
薬液に漬けて染めあげたものだ。

52

おてんと様が泥沼という泥沼から毒気を吸いあげ、
そいつを全部プロスペローのやつにしたたらせて
病気だらけにしちまえばいい！やつの手先の妖精が
聞いていようとこまうものか、いくらでも呪ってやる。
あの妖精どもだって、おれをつねったり、小鬼の姿で
おどしたり、泥沼に突き落としたり、狐火に化けて
夜道を迷わせたりするのも、やつが言いつけるからだ。
なにしろちょっとしたことでいじめやがるからな。
猿になって歯をむき出してキャッキョッキョとおれに
噛みついたかと思うと、次にはハリネズミになって
おれが裸足で歩く道にころがっていて足の裏に
棘を立てやがる。かと思うと、蝮の群れになって
おれをとり巻き割れた舌でヒューヒュー言っ
て気を狂わせようとしやがる。

53

あんたにいちばんいい泉を教えてやるよ、木の実も、
魚も、とってきてやる、薪もたっぷりはこんでやる。
おれをこき使った野郎なんか疫病でくたばりゃいい！
おれはもうあいつのために小枝一本はこびやしねえ、
おれはあんたの家来になる、神様みてえなあんたの。
そうだ、リンゴの生えてる所に案内しよう。
この長い爪で落花生も掘ってやる。それから
カケスの巣のある場所も、すばしっこいネズミザルを
罠にかける方法も教えてやる。鈴鳴りのハシバミの樹にも
連れてってやるし、岩のあいだから鷗の雛を
とってきてもやる。さあ、いっしょに行くかい？

54

さ、輪踊りをして、妖精の歌をうたっておくれ。
それから、二十秒ばかり、むこうへ行っておいで。
何人かは麝香バラの蕾にもぐりこんだ毛虫を退治しに、
何人かはコウモリと戦ってその革の翼をはぎとり、
小さな妖精たちの上着を作りに、また何人かは
美しい妖精たちを見て目を丸くし、ホーホーと
うるさく鳴き立てるフクロウを追い払いに。さ、
歌をうたって私を眠らせておくれ、それから仕事だよ。

（歌う）

舌先割れたまだらの蛇も
トゲハリネズミも出てくるな、
イモリもトカゲも悪さをするな
女王様には近寄るな、
糸吐き蜘蛛も足長蜘蛛も
黒甲虫も出てくるな、
毛虫に芋虫悪さをするな、
女王様には近寄るな、
ナイチンゲールよ、やさしい声で

歌っておくれ、子守唄、
ララ、ララ、ララバイ、ララ、ララバイ、
わざわざ、まじない
あやしいものは
女王様には近寄るな、
おやすみなさい、いい夢を。

55

バック

王様、これはいそいでかたづけなければ、だって、
夜の女神の車を引く龍が雲を切って駆け去って、
むこうの空に早くも暁の女神オーロラの先ぶれが。
あれが近づいてくると、そこここにさまよう幽霊どもが
群れをなして墓場に帰ります。四辻や海の底に
葬られた浮かばれない亡霊どもも、もうすでに、
蛆虫の寝床にもどって行きました、朝日に
その恥ずかしい姿を見られないですむように。
彼らはわれとわが身を光から追放しているのです、
永久に黒い顔した夜のお供をするさだめなのです。
オーベロン

だがおれたちは彼らとはまったく別の精霊だ。
おれはよく朝の恋人オーロラとたわむれたものだ、
それにまた、森番のように、森のなかを歩きまわり、
ついにはあの東の空が燃えるように真紅に染まり、
大海原の暗緑の潮を、その美しい恵みの光で、
金色に変えていくのを眺めたものだ、この目で。

56

バナードー

口をきこうとしたときに鶏が鳴いた。

ホレーシオ

その瞬間にビクッとしたな、呼び出しを受けた
死刑囚のように。聞くところによると、
朝の到来を告げるラッパ手たる雄鶏が、
高らかにのどふるわせてときをつくると、
日の神は目を覚まし、さまよい歩く
もののけたちは、水の中、火の中、地上、空中、
どこにしようとそれを耳にするやいなやたちまち
自分の領域に逃げもどると言う。その話、
嘘でないことをいまのものが証明してくれた。

マーセラス

たしかにいまのものはあの鶏の声で
消えうせたな。これも聞いた話だが、
救い主キリストの生誕を祝う季節が近づくと
暁を告げるあの鳥が夜を徹して鳴きつづけ、
そのためにもののけもさまよい歩かぬと言う。
夜は浄められ、星は人を害する力を失い、
妖精は影をひそめ、魔女は通力をなくし、
神聖至福の気があふれる季節になると言う。

57

バック

いまやライオンどもは飢え、
狼どもは月に吠え、
つらい仕事に疲れはて
百姓どもは夢の果て。
いまや暖炉も燃えつきて、
鋭くフクロウども鳴いて、
瀕死の床に臥す人も
思い出すのは死の衣。
いまや草木も眠るとき、
墓は大きく口開き、
亡霊どもは闇に満ち、
さまよい歩く墓場道。
われら妖精空を駆け、
おてんと様の顔を避け、
月の女神のお供して、
闇を追い行く、夢に似て。
いまや踊らん楽しげに、
ネズミよ出るな、この家に、
おれは先ぶれ、あらかじめ
払い清めるのが役目。
オーベロン
まどろむ暖炉の火をもとに
ほのかな光をこの家に。
踊れ、妖精、それぞれに
小鳥のようにかるやかに。
歌え、私が歌うから、
それに合わせて舞いながら。
タイテーニア
あなたの歌をまず聞かせて。
私たちは手をとって、
舞い踊りましょう、その歌を。
祝福しましょう、この家を。

58

人間は習慣によってなんと変わるものか！
この薄暗い、人も通わぬ、荒涼たる森も、いまでは
人のにぎわう、華やかな町以上に、住みやすく思われる。
ここでは、だれにも見られず、ただ一人腰をおろし、
ナイチンゲールの嘆きの調べに合わせて
おのれの悲しみ、苦しみを歌うことができる。
ああ、この胸を棲家とするわが恋人よ、
いつまでもこの邸を空き家にしておかないでくれ、
このままでは次第に崩れ落ちて廃墟と化し、
もとの姿を思い出せぬほど荒れはててしまうだろう。

59

ところでどう思う、放浪の日々をともにする兄弟たち、
ここの暮らしも、だいたい慣れてみると、飾り立てられた
栄華の暮らしよりも心地よくはないか？この森は
油断も隙もない宮廷よりも危険が少なくはないか？
ここでこそわれらはアダムが受けた罰を、四季の変化を、
身にしみて感じる事ができる、そして氷の牙をむき

荒々しく怒号する真冬の風が、この肌を刺し、
この肉に食い入り、ついには寒さでこのからだ
がちこまるときでさえ、わしは笑って言えるのだ、
「これは廷臣の追従ではない、忠臣の諫言だ、
この身のなんたるかを痛感させてくれるのだ」と。
逆境が人に与える教訓はどうるわしいものはない、
それはガマガエルに似て、姿は醜く毒を吐きはするが、
その頭にはガマ石という貴重な宝石を蔵しておる。
俗塵を遠く離れたここでのわれらの日々は、
樹木にことばを聞き、せせらぎに書物を見だし、
小石に神の教えを読みとり、森羅万象に善を発見する。
わしはこの生活を変えたくはない。

60

ベレーリアス

ああ、ここの生活のほうが、
小言ばかり言われて宮仕えするよりはるかにりっぱだ、
出世のみ求めてうろうろするよりはるかにゆたかだ、
未払いの絹の服を見せびらかすよりはるかに高尚だ。
そういう連中は、仕立屋におせじは言われても、ふえるのは
借金だけ、われわれとくらべれば生活とは言えぬものだ。

グィディーリアス

父上は経験からそう言われますが、私たち雛鳥は
まだこの巢の見えぬところまで飛んで行ったことはないし、
よその空気がどんなものかも知りません。ここの生活は
あるいは最高かもしれません、静かな生活が最高であれば。
そしてきびしい生活をご存じの父上には、お年にも合って、
快適かもしれません。だが私たちにとって、ここは
無知の暗室です、ベッドで旅を夢見るだけです、
あるいは牢獄です、借金とりを恐れるもののよう
に一步も外へは出られないのです。

アーヴィラガス

やがて私たちが
父上の年になったとき、なにを話したらいいのでしょうか？
暗い十二月の夜、激しい風雨の音を聞きながら？
このせまい洞穴のなかで、凍るような時をまぎらすのに、
どんな話をすればいいのでしょうか？私たちは世のなかを
まったく見ていない。まるでけだものだ、獲物を追えば
狐のように敏捷だし、餌食を前にすれば狼のように獰猛だ。
勇気といえど逃げるものを追いかけるだけ、歌といえど、
籠に入れられた小鳥のように、捕らわれの身の運命を
自由に歌うのみだ。

61

緑なる 森の木陰に
膝のばし 楽しい歌を
鳥の音に 合わせて歌う
その日々を 愛するものは
くるが いい くるが いい ここに
この国に
あるは友のみ
敵はただ真冬の嵐。

人の世の 望みは忘れ
野や山に 糧を求めて
得たものに 喜びを知る
その日々を 愛するものは
くるがいい くるがいい ここに
この国に
あるは友のみ
敵はただ 真冬の嵐。

62

なにを言う、それよりはむしろ家邸を捨て、
山野に住んで自然の猛威を相手に戦うわ、
狼やフクロウを友とし、貧困のつらさに
さいなまれるわ！

63

この荒れはてた
人も寄りつかぬ森の、鬱蒼たる樹樹の陰にあって、
ゆるやかな時の歩みを悠々と見送っておられる
あなたがたが、どのようなかたかは存じませんが、
かつてはしあわせな日々をすごしたことがおありなら、
鐘の音が教会へ誘うところに住んだことがおありなら、
りっぱな人の饗宴に招かれたことがおありなら、
瞼にあふれる涙をぬぐったことがおありなら、そして
人をあわれみ、人にあわれまれることをご存じなら、
やさしいご好意こそなににもまして私の頼みの綱、
私はみずからを恥じて剣を収めるのみです。

64

いや、いや、いや、いや！さ、牢獄へ行こう、
二人っきりで、籠の小鳥のように、歌って暮らそう。
おまえがわしに祝福を求めれば、わしはひざまずいて
おまえに許しを乞う、そのようにして生きていこう。
お祈りをし、歌を歌い、昔話をし、蝶のような
けばけばしい連中を笑いの種にし、卑しいものたちの
宮廷の噂に耳を傾けよう。その連中の話に入り、
だれが勝ちだれが負け、だれが全盛でだれが落ちめと、
神のお使いのようにこの世の秘密に通じている
ふりをして語ろう。そして壁に囲まれた牢獄のなかで、
月とともに満ち干きする権力者たちの勢力の消長を
静かに眺めながらすごすでしょう。

65

このような草花を身につけていると、きみのからだは
どこもかしこも生き生きと見える。羊飼いの娘ではない、
四月のはじめに姿を見せる花の女神フローラだ、きみは。
この毛刈り祭りというのはかわいらしい神々の饗宴のようだ、
そしてきみはその女王なのだ。

66

パーディタ
そのお花をとってちょうだい。お年を召したあなたがたに、

思い出の花マンネンロウと恵みの花ヘンルーダを。
この二つの花は冬のあいだずっと色と香りを保ちます。
お二人に神の恵みとよき思い出がありますよう。
毛刈り祭りによくおいでくださいました。

ポリクシニーズ

羊飼いの娘さん——

見れば見るほど美しい娘さんだ——私たち年寄りに
冬の花とはまことに似つかわしい。

パーディタ

今年もだいふけましたが、
まだ夏が去ったとは言えず、と言って身をふるわせる冬も
訪れてはいません。この季節のいちばん美しい花は、
不実の花カーネーションと、自然の私生児とも呼ばれる
縞石竹でしょうが、あのような花は私どもの庭には
咲いていませんし、私も一茎だってほしいとは
思ったことさえありません。

ポリクシニーズ

娘さん、どういうわけで

あの花を蔑むのだな？

パーディタ

あの赤と白とのまだら模様は、
偉大な造化の自然に人工の手が加わってできたもの、
と聞いておりますので。

ポリクシニーズ

それはそうかもしれぬ。だが、
なんらかの手を加えて自然がよりよくなるとすれば、
その手を生み出すのも自然なのだ。したがって、
自然にたいして加えたあなたの言うその人工の手も、
実は自然の生み出す手に支配されているのだ。いいかな、
野育ちの幹に育ちのいい若枝を嫁入らせることによって、
卑しい木に高貴な子を宿らせることがあるだろう、
これは自然のたりないところを補う、と言うより、
すっかり変えてしまう人工の手だ、しかし実は
その人工の手そのものが自然なのだ。

パーディタ

そうですね、たしかに。

ポリクシニーズ

であれば、あなたの庭に縞石竹を咲かせ、
自然の私生児などと呼ばなければいいだろう。

パーディタ

でも私は

一茎だってあの花を植えるために土を掘る気はありません。
この顔に紅白粉を塗って、それがきれいだからという
それだけの理由で、このかたに子供を宿してほしいと
言われたくないのと同じです。ほかの皆様にはこの花を。
香りの高いラベンダーに、ハッカに、シソに、マヨナラに、
お日様とともに寝てお日様とともに露の涙を光らせて起きる
キンセンカも。これはみんな真夏の花ですので、
中年のかたがたにさしあげようと思います。ほんとうに、
皆様、よくいらっしました。

カミロー

私があなただの羊なら、

下を向いておいしい草など食らっておらず、上を向いて
美しいあなたを見て暮らすだろう。

パーディタ

まあ！ もしもあなた様が
そんなことをなさったら、すっかりおやせになって、
一月の風に吹き飛ばされておしまいでしょう。さあ、
美しい私の恋人、あなたにはその青春にふさわしい
春の花がほしかったのだけど。それから、あなたがたにも。
あなたがたはこれからが人生の花盛りなのですから。
ああ、プロサーピナよ、あなたが冥土に連れ去られたとき、
びっくりして冥界の王ディスの車からとり落としたという
あのさまざまな花がほしい！ 燕もまだ姿を見せぬうちに
早くも咲き出して、その美しさで三月の風を
恋のとりこにする黄水仙。色はほのかでありながら、
ジュノーの頬よりも愛らしく、ヴィーナスの息よりも
かぐわしい香りを放つ堇。処女のまま、日の神フィーバスの
燦然と輝くお姿も拝さずに死んでいく—— 娘たちには
よくありがちな病気ね、これは——そのかわいそうな
顔色の悪い桜草。それに、気の強い九輪桜に、
いばっている王冠草。あらゆる種類の百合の花、
イチハツもその一つ。ああ、そういう花がないのです、
あなたがたに花輪を作り、大事な私の恋人の上に
まいてさしあげたいのだけど！

フロリゼル

え、死骸のようにか？

パーディタ

いいえ、恋人同士が寝ころんで遊ぶ土手のようにです、
死骸のようにはではなく。たとえそのようであっても、
埋葬するためにではなく、生きたままの私の腕に
抱かれるために。さあ、花をおとりなさい。あら、私、
復活祭のお芝居で見た女王様のまねなどしてしまって。
きっと衣装のせいね。

67

こちら側がHiems、すなわち冬であります、そしてこちら側がVer、すなわち春であります。
冬のほうはフクロウが、春のほうはカッコウがつとめます。では、春のほうから。

春

まだらな雛菊、紫堇
白銀色のタネツケバナに、
黄金色したキンポウゲなどが、
色とりどりに牧場を飾ると、
そここの木でカッコウドリが
寝とられ亭主をばかにして歌う、
カッコー、
カッコー、カッコー、カッコー悪いと
言われちゃ亭主はつらかろう。
羊飼いの子が麦笛を吹き、
ヒバリの歌が農夫を起こし、
鳩や烏や小鳥がつがい、
娘が夏の肌着をさらすと、
そここの木でカッコウドリが
寝とられ亭主をばかにして歌う、

カッコー、
カッコー、カッコー、カッコー悪いと
言われちゃ亭主はつらかろう。

冬

軒にも壁にも氷柱がさがり、
羊飼いたちはすることもなく、
ディックは薪を家まではこび、
トムの手桶のミルクは凍り、
道はぬかるみ、血はこごえると、
夜な夜な楽しくフクロウが歌う、
ホーホー、
ホーホー、ホーホー、息吹きかけて
おでぶのジョーンがかゆさます。
風はビュービュー枯れ野をめぐり、
咳は神父の説教をときらせ、
小鳥は雪に卵をかかえ、
マリアンの鼻は霜焼けにかかり、
焼けたリンゴがシューシュー言うのと、
夜な夜な楽しくフクロウが歌う、
ホーホー、
ホーホー、ホーホー、息吹きかけて
おでぶのジョーンがかゆさます。

68

網にまきこまれた鳥さながらに、
彼女の腕にアドウニスはいだかれて横たわる、

69

色真黒でくちばしは
焦げ茶色した黒ツグミ、
歌の上手な歌ツグミ、
か細い喉のミソサザイ——
鷺に雀に揚げヒバリ、
同じ調子のカッコウドリ、
カッコウ悪いと鳴くけれど、
寝とられ亭主声もなし、

70

ごらん、眠りに飽きた優しい雲雀は、
その露に濡れた巣を出て、天に向って飛び立ち、
朝を呼び覚めば、暁の銀の胸からは
太陽が莊厳に昇り
世界をいとも輝かしく照らし
そのため糸杉の梢も丘も輝く金のようにみえる。

71

波間からうかがうかいつぶりが
見られると速やかに水中に潜り入るように、

72

まるでそっと忍びよる猟師に気がついた野鴨、
あるいは銃声を耳にした灰色頭の鳥の群れ、

飛びあがるやら、鳴きわめくやら、総崩れ
ちりぢりになって大空を狂ったようにかけまわる、

73

東の空に高らかにさえずるヒバリをお聞きなさい
お日様ももうのぼってます
燃える車を引く馬は花杯の朝露で
喉の渇きを癒してます
キンセンカもその眠たげな金の臉を開いてます
こうして美しいものはみな起き出してます お姫様
負けずにいそいでお起きなさい

74

さ、着きましたよ。動かないで。おっそろしくて
目がくらみそうだ、あんな下のほうを見おろすと。
まんなかあたりを飛んでる鳥やベニバシ鳥が
甲虫ほどにも見えない。崖のなかほどにぶらさがり、
浜芹を摘んでるやつがいる、危ない商売だなあ！
そいつのからだがやっと頭ほどの大きさに見える。
漁師たちが浜辺を歩いてるが、あれじゃあまるで
ハツカネズミだ。沖に錨をおろしている大きな船は
舳ぐらいにしか見えない、舳は浮標ぐらいだ、
ほとんど見えやしない。浜一面の無数の小石に
怒りまかせに襲いかかってはくだけの波の音も、
こう高くちゃあ聞こえやしない。もう見るのはよそう、
頭がくらくらして、目がまわって、まっさかさまに
落っこちかねないや。

75

たしかにあの夏の客、
寺院に棲みつく岩燕が好んで巣を作るのは、
天の息吹きもここでは心を誘う香りを
ただよわせている証拠です。軒下、小壁、控え壁、
見晴らしのいいすみずみはどこもかしこも
吊り床と雛鳥の揺り籠におおわれています。
あの鳥が巣作りをするところはきまって
空気も甘いようです。

76

二羽の鷹のどちらが高く舞いあがるか、
二匹の犬のどちらが大きな声で吠えるか、
二本の剣のどちらがよく鍛えられているか、
二頭の馬のどちらがおとなしく言うことを聞くか、
二人の娘のどちらが愛くるしい目をしているか——
ということなら、私にも多少の判断はつきますが、
このような微妙繊細な法律論議となると、所詮
私の分別は鳥同然、どうにも裁きはつけられません。

77

おれの鷹はいまのところすっかり腹をへらしている、
こちらの言いなりに餌に飛びつくまでほっておこう、
腹がふくれたら囙を使って飼いならすこともできまい。

もう一つ、野性の鷹を手なづけ、飼い主の思いどおり
呼び声に応じて呼びもどす方法がある、つまり、
眠らせぬことだ。じたばた羽ばたいてどうしても
言うことをきかぬやつにはこの手を用いるという。

78

あの女が飼い馴らしえぬ鷹とわかれば、
たとえおれの心の琴線がその脚をつなぎとめていても
口笛を吹いて解き放ってやるぞ、風にのって気ままに
餌をあされるようにな。

79

釣りをするときのいちばんの楽しみは、魚が餌にだまされて、
金色の鰭を動かして銀色の流れをかきわけ、
懸命に食いつくのを見ることだそうですね。

80

皇太子

オーリアンズ公と軍司令官閣下は、馬や甲冑の話をされておいでか？

オーリアンズ

その二つにかけては、殿下は世界じゅうのいかなる君主にもまさる逸品をおもちでしたね。

皇太子

なんて長い夜だろう！私の馬は、四本足で大地を踏みしめるだけの馬ならどんな駿馬とも変
える気にはなれん。あれはな、ああ、夢みたいな話だが、テニスボールのように宙を飛ぶの
だ、鼻から火を吹いて天翔ける天馬、ペガサスだ！あれにうちまたがると、私は舞いあがっ
て鷹になる、あれが空中を駆けめぐって、蹄が地面に触れると、大地は歌うかのようだ。そ
の最低のひびきでさえマーキュリーの笛以上に美しい音楽なのだ。

オーリアンズ

色は、栗色でしたね。

皇太子

気性は、はじける栗のようだ。あれこそはペルセウスの愛馬ペガサスと言っているだろう。
あれは、地水火風の四元素のうち、火と風だけでできている、土とか水とかの鈍重な元素は
微塵も見当たらず、ただ騎手が鞍にまたがるのをじっと待つときにうかがえるだけだ。あれ
が馬の名にあたいする馬であって、ほかの馬はすべてただ動物と呼ばばいいのだ。

軍司令官

たしかに非のうちどころのない名馬です。

皇太子

あれは乗馬のなかの王者だ、そのいななきは帝王の叱咤と聞こえるし、その威容は他を心服
せしめずにはおかん。

オーリアンズ

よくわかりました、そのくらいにして――

皇太子

いや、あの私の乗馬を、ヒバリが起きるときから羊が寝るときまで、次々新しいほめことば
をくふうしてほめ続けることのできないような男は、知恵のひとかけらもちあわせぬやつ
と言うほかない。なにしろ海のようにゆたかな詩の主題なのだから。浜の真砂の一粒一粒が
舌になったとしても、私の馬を語りつくすことはできまい。あれを論ずるのは君主たるもの
の話題であり、あれに乗るのは君主の君主たるものの喜びなのだ。われわれがよく知るとこ
ろの、さらにはいまだ知らざるところの、世界のすべての人々は、それぞれの仕事を投げ
うって、あの馬を賛嘆することに専心すべきだ。私はかつて、あれを賛美する一編のソネッ
トを書いたことがある、こうはじまるのだ、「ああ、自然の生んだ奇蹟よ――」

オーリアンズ

そのようにはじまる詩を聞いたことがありますよ、恋人に捧げるソネットでしたが。

皇太子

それは私が乗馬に捧げた詩をまねしたのだろう、私の馬が私の恋人なのだから。

81

だが見よ、すぐ近くの叢林から、
逞しく、若く、誇らしげな牝馬が、
アドゥニスの駿馬が地を蹴る姿を見て、
駆けて来て、鼻をならし、高くいななく。
頸筋逞しい駿馬は樹につながれていたが、
その手綱を断ちきり、真直ぐに牝馬へと駆けていく。
倣然と駿馬は跳びはね、いななき、躍動し、
今や編んだ腹帯を引き裂く。
その堅い蹄で己れを支えている大地を傷つけ、
大地のうつろな胎内は天上の雷のように鳴り響く。
馬は鉄の轡を歯で噛み砕き、
彼を抑えつけていたものを制御する。
耳はそばだち、編まれてふさふさと垂れたたて髪は、
その弓形の頭の上に逆立ち、
その鼻孔は空気を吸い、また吐き、
さながら熔炉からのように湯気を出す。
その目は倣然と火のように燃え輝いて、
その激しい欲情を示す。
時おり馬はゆるくかける、さながらその歩みを数えるかのように、
おだやかな威容と控えめな誇りをもって。
それから後脚で真直ぐに立ち、騰躍し、また跳躍する。
「ごらん、わたしはこんな風に自分の力を試すのだ、
こうするのはすぐ近くに立っているあの美しい牝馬の目を
惹きつけるためなのだ」というかのように。
乗り手が怒って興奮しようと、馬は何を気にしよう、
嬉しがらせる「ほらあ」という声や、「とまれ、どう、どう」という声も。
手綱も、刺すような鋭い拍車も、
けんらんたる馬衣も色華やかな馬具飾も眼中にない。
馬は恋する牝馬を見、他のなにものも見ない、
他のどんなものも彼の誇らしい目には空しく見えるから。
画家が申し分なく均整のとれた馬を描いて、
生きている実物をしのごうとし、
画家の芸術は、あたかも死したものが生きているものに勝ろうとして、
自然の創造物と競うときのように、
まさにそのようにこの馬は世の常の馬をしのぐ、
その姿も、勇気も、色どりも、足なみも、骨組も。
円い蹄と短いあくと、もじゃもじゃの長いけづめ毛、
幅広い胸、生き生きと輝く目、ほっそりした頭と開いた鼻孔、
高くもたげられた頸筋、短い耳、真直ぐな、この上なく強い脚、
薄い、さらさらしたたて髪、ふさふさした尾、幅広い腰、柔らかな皮膚、
馬がもつどんなものも欠いてはいない、
かかる誇らしい背に乘る誇らしい騎手を除いては。
ある時は馬は遙か遠くへ駆け去っては、立止ってじっと見つめる、
また時には羽毛のそよぎにも跳び出す。
今や彼は風に「追い駆けっこ」を挑もうとしているのだ、
馬は走っているのか、飛んでいるのか、知るべくもない、
強い風は馬のたて髪と尾を吹きぬけて鳴り響き、
鳥の翼のようにはためき揺れる馬毛を吹き煽るから。

馬は恋する牝馬をみて、彼女に向っていなく、
牝馬は彼の心を知っているかのように応えていなく。
女の常として、彼が彼女に慕いよるのを誇りながら、
彼女は無関心を装い、つれなく振舞い、
彼の愛を脚蹴にし、彼の抱く欲情を蔑み、
後脚で彼の優しい抱擁をはねつける。

82

二月ほど前、
ノルマンディーの男がここに来た――
いままで多くのフランス人と会い、戦いもし、
彼らが馬術に長じているのは知っていたが、
この男はまさに神童、鞍に根をはやした感がある。
自在に乗りこなすさまは、人馬一体、
いや、血まで通いあう半人半馬の姿と見えた。
その型のみごとさ、妙技のすばらしさは、
ことごとく意表をつき、この目で見るまでは
思いもよらぬほどであった。

83

それは、ここにくるペトルーチオさんの格好のことですよ。なにしろできたての新しい帽子に歴史的に古いチョッキですからね。それに三度も裏返した古ズボン。ちびた蠟燭入れに使っていた古長靴、それも片方は締め金つき、もう片方は紐で締めるやつ。町の倉庫からもち出した錆びだらけの古刀、それも柄は折れ、鐙はとれちまってるやつ。二本とも用をなさないズボン吊り。馬に乗ったはいいが、鞍ときたら虫食いだらけ、鐙ときたら珍無類、馬自身も尻はゆがみ、鼻は鼻疽にかかってなにやらだらだらたれ流し、上顎は腫瘍ができてふくれあがり、皮膚には出来物、蹴爪には腫れ物、関節には炎症、おまけに黄疸に悩み、耳下腺炎に苦しみ、中風ですぐ引っくり返り、腹のなかには虫が湧き、背骨はひんまがり、肩の骨ははずれ、後ろ脚はくっついてよろよろし、轡はだらしなくたれさがり、面繫は安っぽい羊の皮で、けっつまずくのをやたら引っぱったもんだから何度もちぎれて結び目だらけ、腹帯は六ぺんも継ぎをあてたやつ、鞆は女もののビロードで、もとの持ち主の頭文字が二つ麗麗しく縫いこんであり、あちこち荷紐でつないである。

84

ヒポリタ

私も昔ヘラクレスとカドマスに連れられて、
クレタ島の森でスパルタの猟犬を解き放ち、
熊狩りをしたことがあります。そのときほどの
勇ましい吠え声は聞いたことがありません。なにしろ
森だけでなく、空も泉も、ありとあらゆるものが
一つの叫び声を発したかのようにでした。あれほどの
美しい不協和音、心地よい雷鳴ははじめてでした。
シーシュース
私の猟犬もみんなスパルタ種だ、だから
顎は垂れさがり、毛並みは褐色であり、頭には
朝露を払わんばかりの大きな耳がついており、
膝は曲がり、胸にはテッサリア牛のような垂れ肉がある。
追い足は遅いが、吠え声は大小さまざな鐘のように
よく調和している。これほど高低の声のそろった
猟犬の一群は、クレタ、スパルタ、テッサリア、
いずれの狩人も角笛をもって伴奏したことはあるまい。
聞けばわかるだろう。

85

領主

おい、猟犬どもの世話を頼む。メリマンは少し血を抜いてやるがいい、かわいそうに泡を吹いておる。クロードーはあの声のいい雌といっしょにしておけ。見たか、おい、シルヴァーのやつが生垣の角でいったん見失った獲物をみごとかぎあてたのを？ あいつだけは二十ポンド出すと言われても手放せぬ。

猟師 I

おことばですが、ベルマンだって負けはしません、完全に見失った獲物を見つけ出す点にかけては。今日も二度ほど消えかけた獣の臭いをかぎつけました。私に言わせれば、ベルマンのほうがはるかに上です。

領主

ばかなことを申すな、エコーだって足さえ早ければ、ベルマンが何匹かかったところでかなうまい。とにかくうまいものを食わせ、面倒を見てやってくれ、明日もまた、狩りに出かけるつもりなのでな。

86

暗殺者 I

私たちは男です、陛下。

マクベス

なるほど、帳面づらは男で通用するだろう、シェパード、グレーハウンド、スパニエル、野良犬、彪犬、合いの子犬、野犬も駄犬もすべて犬という名で通るからな。だが値段表では区別してあるぞ、早いもの、遅いもの、敏捷なもの、番犬むきに猟犬むきと、それぞれ豊かな自然に生まれながら授かった素質があり、それに従って値段もちがえば、名称もちがうのだ。だからただ一様に書き並べた目録を見ただけではわかったことにはならぬ。男にしても同じこと。

87

ところがこの雄犬のやつ、お酢のようにすっぱい野郎だ、おふくろは泣き、おやじは嘆き、妹はわめき、女中はうめき、猫は両手をふりしぼり、家じゅう嵐のように大混乱だってときに、この血も涙もない畜生め、涙一つこぼさないでやがる。こいつは石だ、石ころだ、犬っころ程度の人情しかもってないんだ。おれたちが別れるところを見りゃあユダヤ人だって泣いたろう。おれのおばあちゃんなんか、見えない目が見えなくなるまで泣いたんだぜ、別れがつからっていうんでな。

88

「でも、どうしても猟をしようと思うなら、わたしの忠告を聞いておくれ。

臆病な逃げていく野兎にこそ猟犬を放ちなさい、

もしくは狡知を用いて生きている狐にこそ。

もしくは打ち向かう勇気のない鹿にこそ。

これらの臆病な動物たちこそ丘を越えて追跡するがよい、

そして息の長く続く駿馬に乗って、猟犬について行きなさい。

「そしてかすみ目の野兎を犬を放って追い出すとき、

よくごらん、哀れな動物が難を逃れようとして、

風を追い越して駆け、どんなに気を配って
千度も迂回して、十字形に、また突然方向を変えて走るかを。
兎が駆けくぐる生垣の無数の隙間は
敵をうろたえさせる迷路のようだ。
「あるときは野兎は羊の群れの中にとびこむ、
賢い猟犬らの嗅覚をまどわせるために。
また時には地面に穴を掘る兎のすみかへととびこむ、
猟犬らの叫喚して追跡するのを絶つために。
時には鹿の群れの中にもまぎれこむ、
危難は策略を案じ、恐怖は機智を生み出すからだ。
「なぜなら彼の匂と、他の動物らの匂とが混ざると、
勢いこんで跡を嗅ぎつける猟犬どもも疑い惑い、
かまびすしく吠えることをやめる、いとも骨折って、
失われた嗅跡をはっきりと嗅ぎ当てるまでは。
嗅ぎ当てれば吠え始める、山彦がこれに応えて
さながら天空でも、もう一つの狩猟が行なわれているかのよう。
「そうするうちに、哀れな野兎は、遙かな丘の上で、
耳をそばだてて、後脚で立ち、
敵がまだ追いかけて来るかと聴いている。
やがて猟犬らの騒々しい関の声を聞く。
そのとき彼の悲しみは、死に瀕している病人が
吊いの鐘を聞くのにも比べられるだろう。
「そのとき、そのしとど露に濡れた哀れな奴が
あてもなく道をジグザグ状に往ったり戻ったりする。
意地の悪い茨はみな彼の疲れた脚を傷つけ、
物影はみな彼を立止らせ、ざわめきは彼を釘づけにする。
惨めなものは大勢に踏みつけられ、
ひとたび落ちぶれると、誰からも救われないものだ。

89

浮気心はどこに住む？
胸の底にか、頭にか？
どうして生まれ、育つのか？
聞かせておくれ、その答え。
浮気心は目に生まれ、
目だけで育ち、たちまちに
生まれた床で死んで行く。
浮気心を吊って、
鐘を鳴らそう、ディンドンと。

90

だが恋は、まずご婦人の目から学びとると、
脳のなかにのみ閉じこめられてはおらず、
風のように自由に、人の思いよりも早く、
たちまちからだじゅうの各器官を駆けめぐり、
各器官の力に二倍の力を与えることによって
それぞれに本来の働き以上の働きをさせるのだ。
恋は、目になにものよりもすぐれた視力を与える、
だから、恋するものの目は鷺の目さえもくらませる。
恋するものの耳は、神経をピリピリさせている
トカゲが聞きもらすような小さな音さえ聞きとる。
恋の触覚は、殻をかぶったカタツムリの

敏感な角よりもはるかに繊細で感じやすい。
恋の味覚は、酒神バックスのおごった舌などの敵ではない
恋は、勇気の点ではヘラクレスだ、龍に守られた
金色のリングのなる木に登ることなどわけはない。
知恵の点ではスフィンクスだ。声の美しいことは
太陽神アポロがその金髪を系にしたという豎琴だ。
恋が口を開くと、神々はすべてそれに声をあわせ、
その妙なるハーモニーで天国は夢見心地になるという。
詩人も、恋の溜息でそのインクが調合されてはじめて
ペンを手にする勇気が湧いてくる。そうすると、
ああ、その詩句は野蛮人の耳をも陶然とさせ、
暴君の胸にも寛容の心を植えつけるのだ！
女の中から私が学びとった教えはこれなのだ、
女の目はつねにプロメテウスの火を放っている、
女の目は教科書であり、学問であり、学園であり、
人々を集め、教え、はぐくみ育てるものだ、
それ以外にすぐれたものなどこの世にありはしない。

91

あるいはかたつむりが、そのかよわい触角を打たれて、
痛さに殻の洞穴に身を縮め、
暗闇に息をこらして隠れていて
なおしばらくは、這い出ようとする勇気もないのと同じに、

92

詩とは樹液のようなもので、自然に生まれ、
自然ににじみ出るのです。火打ち石の火は
打たれてはじめて点火しますが、詩の優雅な炎は
おのずから発し、岩にぶつかる激流のように
天を目指して燃えあがるのです。

93

狂人、恋人、それに詩人といった連中は、
すべてこれ想像力のかたまりと言っていい。
広い地獄に入りきれないほどの悪魔を見る、
それが狂人だ。恋人もそれに劣らず狂っていて、
色黒のジプシー女に絶世の美女ヘレンを見る。
詩人の目は、恍惚とした熱狂のうちに飛びまわり、
天より大地を見わたし、大地より天を仰ぐ。
そして想像力がいまだ人に知られざるものを
思い描くままに、詩人のペンはそれらのものに
たしかな形を与え、ありもせぬ空なる無に
それぞれの存在の場と名前を授けるのだ。

94

タッチストーン

正直な話、神様がたまえを詩的な人間に造ってくださったらよかったのと思うよ。

オードリー

なんなのさ、シテキって？やることと言うことに嘘がないってこと？つまり真実ってこと？

タッチストーン

じゃあないな、正直な話。真実の詩であればあるほど嘘ででっちあげたものだ。ところが恋
するものはその詩に夢中になる、だから詩でもって恋を誓うのは恋するものとして嘘をつい

てるわけだ。

95

いまは荒廃に帰した時代の年代記をひもとくと、
このうえなく美しい人々が描かれています、そして
死んだ貴婦人や美々しい騎士をたたえる古歌は
美しい人たちの登場によって美しくなっています。
そこに描かれた美の中の最高の美を見ると、
手、足、唇、目、眉などの精密な描写は、
古人のペンがいまあなたの所有するような美を
描きたかったのだ、ということがわかってきます。
つまり彼らの讃辞はすべていまの私たちの時代を
予言し、あなたを予示するものにすぎません、
ただ彼らは想像の目で見るとはなかったのだ
あなたの価値を歌うだけの力はなかったのです。
現代を見ている私たちには悲しいかな
讃美する目はあっても称讃する舌はないのです。

96

猫に生まれてニャーとでも鳴いているほうがまだ、
そんじょそこらのへたな小唄作者になるぐらいならば。
真鍮の燭台を作るときのロクロのまわる音や、
油の切れた心棒に軋む車の音を聞くほうがまだ、
そのほうがまだ齒の浮くような思いをしないですむ、
妙に氣どった詩など読まれるよりも。だいたい
あの詩というやつは、足を引きずる馬みたいなものだ。

97

フィービー
シルヴィアス、この人に恋とはなにか教えてあげて。
シルヴィアス
恋とは溜息と涙でできているもの、
だってそうなんです、あたしはフィービーを思って。
フィービー
あたしはギャニミードを思って。
オーランドー
私はロザリンドを思って。
ロザリンド
ぼくは女ではない人を思って。
シルヴィアス
恋とは誠意と奉仕でできているもの、
だってそうなんです、あたしはフィービーを思って。
フィービー
あたしはギャニミードを思って。
オーランドー
私はロザリンドを思って。
ロザリンド
ぼくは女ではない人を思って。
シルヴィアス
恋とは気まぐれな夢想でできているもの、
激しい情熱と切ない願望でできているもの、
崇拜と忠実と献身でできているもの、

謙遜と忍耐と焦燥でできているもの、
純潔と試練と従順でできているもの、
だってそうなんです、あたしはフィービーを思って。
フィービー
あたしはギャニミードを思って。
オーランドー
私はロザリンドを思って。
ロザリンド
ぼくは女ではない人を思って。

98

なんということだ！ いままでさまざまな
本を読んだり物語を聞いたりしたかぎりでは、
まことの恋が平穩無事に進んだためしはない、
必ず障害がある、たとえば身分がちがうとか——
でなければ、せっかく選んだ相手と結ばれても、
戦争とか、死とか、病気とかに襲いかかれて、
恋はたちまち消えてしまうのだ、音よりもはかなく、
影よりもすばやく、夢よりも短く、そう、
一瞬のうちに天と地をあかるく照らし出して、
「あっ！」という間もなくふたたび暗闇の顎に
のみこまれてしまう、闇夜の稲妻よりも
もっと束の間のいのちとなってしまうのだ。
このように美しいものはたちまち滅びるのだ。

99

恋するものと気ちがいとはともに頭が煮えたぎり、
ありもしない幻を創り出すのだ、そのために
冷静な理性では思いもよらぬことを考えつく。

100

ああ、恋の春は変わりやすい四月の空に似ている、
いま、燦々と美しく輝く太陽を見せているかと思うと、
たちまち一片の雲が現われてすべてを掻き消してしまう。

101

忘れもしない、おれがある女に惚れたとき、剣を石にたたきつけてへし折り、夜中にジェーン・スマイルのところに忍んでくる男はこのとおりにしてやるとわめいたもんだ。忘れもしない、おれはその娘の砵にも、その娘のあかぎれだらけのかわいい手がしぼった雌牛の乳首にもキスしたもんだ。また忘れもしない、おれはエンドウの莢をその娘に見立ててくどき、その蔓から莢を二つとって幸運の贈り物として蔓に返し、涙ながらに「これをおれと思って身につけてくれ」と言ったもんだ。まったくまことの恋をするものは気ちがいじみたまねをするもんだ。この世にあるものはすべて死すべき運命にあると言うが、このように恋するものもすべて死ぬほどばかなまねをする運命にある。

102

これほど恋のご使者にふさわしいかたははじめてです。
ゆたかな夏の到来の間近なるを告げ知らせる
春四月の馨しさといえども、ご主人様ご到着の
先触れとしてまいられたこのご使者にはおよびません。

103

たとえばこういう高い地位はどうだい、
おれの恋人の裾をかかげる役というのは？そうしないと
卑しい大地があの人服からキスを盗み、
その大なる恩寵でうぬぼれのぼせた結果、
夏に咲く花の根を養い育てることなどばかにして、
永遠に荒涼たる冬を作り出さないともかぎらないのでな。

104

ばあやは脚が悪いのだわ。恋の使いは人の思いに、
暗い山々のかなたに影を追いのける朝日の光より
十倍も早いという人の思いに頼まなければ。
だからこそ、恋の女神の車は早い羽根の鳩が引き、
だからこそ、疾風のようなキューピッドは翼をもつ。
もうお日様は今日一日の旅路の
峠にかかり、九時から十二時までといえ
三時間もたっているのに、ばあやはまだ。
もしばあやに愛があり、熱い若さの血があれば、
テニスのボールのように駆けまわってくれるはず。
私の言葉であの人のところにとんで行き、
あの人の言葉で私のもとに。

105

叔母上、尊い日の神が、東のかた
金色の窓から顔をのぞかせる一時間ほど前、
私は心の悩みにかられて外を歩きました。
すると町の西のはずれで、そこに生いしげる
楓の森の木陰に、そんなに朝早いのに
歩いているご子息の姿を見ました。
私が近づこうとすると、それと気づいて
森の奥へずっと入りこんでしまいました。
私は自分の心から彼の心をおしはかり、
一人いるときほどの思いに忙しいと察して、
彼の気持を追わずに自分の気持を追うことにし、
私を避けようとする彼を喜んで避けたのです。
そういえば朝早く、倅の姿をよくそこで見かけたとか。
涙で目にあざやかな朝露の数を増し、
深い溜息で朝霧をさらに色濃くしているという。
だが憂いを晴らす太陽が、はるか東、
暁の女神オーロラのベッドの暗い帳を
ひきあげようとするたちまち、光を避けて
暗い心の倅はこっそり家にたちもどり、
一人、部屋にわが身を閉じこめ、
窓を閉ざし、美しい日の光をしめだし、
自分の手で人工の夜を造りだすという。
このような気分は暗い不吉なものとなるだろう。
その原因をとりのぞくよい相談相手が必要だが。
だが倅は、わが身一人を相談相手とし、
自分の心に―― どれほど忠実かは知らぬが――
とにかく自分の心にかたく秘密を閉ざしている。
さぐりようもはかりようもないほどなのだ。
まるで蕾が、匂やかな花びらを空にひろげ、
あるいは美しい姿を太陽にささげる前に、

早くも意地悪い害虫にむしばまれたようだ。

106

ああ、恋に落ちたのだ、おれは、一分一厘の狂いもなく！
いままで恋の悩みに溜息をつく連中を鞭うつ役人であり、
批判者であり、きびしくとりしめる夜警であったおれが、
キューピッドの小僧をどなりつける教師であったおれが、
そう、おれ以上に威厳をもってやつにたいした男がいたか！
そのおれが、あの盲目の、泣き虫の、わがまま小僧、
大人子供の、巨大な小人のキューピッド閣下のために、
恋歌の摂政であり、腕組みの殿様であり、
溜息とうめき声の正統な君主であり、
ぶらぶら病とめそめそした泣き言の支配者であり、
ペチコートの大公であり、パンツの帝王であり、
宗教裁判の召喚係の皇帝であり、大將軍である
キューピッドのために——ああ、
あわれなわが心臓よ！——
このおれまでがやつの副官となって、チンドン屋よろしく
やつの軍旗をふりかざさねばならぬのか！ああ、おれが
恋をする！女を口説く！妻をほしがる！それも、
ドイツの時計のように、しょっちゅう修繕しても
狂いっばなしで嘘ばかりつき、時の見張り役でありながら
よく見張っていないとあやまちを犯してばかりいる女をだ！
誓約を破ること、それがいちばんひどい罪だ、そして
おれが惚れたのは、三人のなかでいちばんひどい女だ、
ゲジゲジ眉毛の下にたどんを二つくっつけたような、
ひどいご面相の見るからに尻の軽そうな女だ。そう、
あの女なら、たとえ百の目をもつ巨人アルゴスが
宦官として見張っていようと、平気で浮気をするだろう。
その女のためにおれが溜息をつく！夜も眠らず
お祈りをする！ばかな！これは、おれがいままで
キューピッドのちっぽけな恐るべき全能の力を
あまりにばかにしてきたので、やつがおれにくだした
罰なのだ。やむをえん、おれは恋をしよう、手紙を書こう、
溜息をつこう、お祈りをしよう、口説きもうめきもしよう、
貴婦人に恋をするのも、田舎娘に惚れるのも、運命だろう。

107

シルヴィアス

ああ、コリン、おれがどんなに惚れてるかわかるめえ！

コリン

少しはわかるさ、おれだって惚れたことはあるんだ。

シルヴィアス

いいや、年とったおめえにわかるはずはねえ、
いくら若いころのおめえが心底女に惚れこんで、
夜中に枕を抱いて溜息ついたことがあったとしてもな。
かりにおめえがおれみてえに惚れたことがあるなら——
ま、おれみてえに惚れた男がいるとは思えねえが——
そんならきくが、いったいおめえ、何度ぐれえ
惚れたはれたの茶番劇を演じたっていうんだ？

コリン

あんまり数が多いんでもう忘れちゃったぐれえだ。

シルヴィアス

じゃあおめえは心底惚れたことはねえんだ！
惚れたがために夢中になってやってしまう
どんなばかげた些細なことでも覚えていなけりゃ、
惚れたことはねえんだ。
いまおれがしているみてえに、惚れた女の
のろけ話で相手をうんざりさせたことがなけりゃ、
惚れたことはねえんだ。
いまからおれがするみてえに、激情にかられて
突然話相手から逃げ出したことがなけりゃ、
惚れたことはねえんだ。
おお、フィービー、フィービー、フィービー！

108

ああ、もうあてにするものか、紙に書かれた口上も、
小学生の舌先でたどたどしく言う弁舌も。
仮面をつけて恋人を訪ねることもするものか、
盲乞食の歌に似た詩で口説いたりするものか。
琥珀織りなす美辞麗句、絹糸まがいの官廷語、
キザにきどった機知警句、ペダンチックな修飾語、
華麗な大言壮語など、金蠅どもがこのおれに
うぬばれのぼせた蛆虫を生みつけたのだ、ふんだんに。
ああ、もういやだ、まっぴらだ！この純白の手袋に
かけて誓おう——これをはめる手が純白であることに
疑う余地はないのだが——今後求愛するときは
粗末で素朴で率直な手織りのことばにするぞ、おれは。

109

ロザリンド

だが伯父の言う恋の症状があなたには現われていませんね、伯父は恋をしている男の見分け
かたを教えてくれたが、それで見るとあなたが恋の鳥籠に閉じこめられているとは思えな
い。

オーランドー

その症状というのは？

ロザリンド

頬がこけ落ちる、があなたはそうじゃない、目の縁が青黒く落ちくぼむ、があなたはそう
じゃない、口をきく気もしなくなる、があなたはそうじゃない、髭が伸びほうだいになる、
があなたはそうじゃない、ま、この点は大目に見ましよう、まだお若いあなたの髭はもともと
弟の財産程度にわずかなのでしょうから。それから長靴下の靴下どめもはずれ、帽子の帯
もはずれ、袖のボタンもはずれ、靴の紐もはずれ、身のまわりのなにもかもがだらしくす
さんで見えるはずなのに、あなたはそうじゃない、それどころか服装には一分の隙もない、
そこから判断すればあなたはだれかを恋しているというよりご自分を恋しておられるよう
だ。

110

女に惚れていないとすると、昔から言われる恋の目印も信用できなくなります。たとえば、
毎朝帽子にブラシをかけるのは——それはどういうことですか？

111

ヴァレンタイン

おれが恋していると、どうしてわかった？
スピード

そりゃあ、特別な徴候が出てましたからね。第一に、旦那様はプロテュース様と同じく不満家のように腕を組むようになった、駒鳥のように恋の歌を口ずさむようになった、疫患者のように一人歩きをするようになった、ＡＢＣの教科書をなくした小学生のように溜息をつくようになった、おばあさんを埋葬した娘っ子のように泣きじゃくるようになった、食餌療法をしている病人のようになにも食べなくなった、盗っ人を恐れるもののように夜も眠らなくなった、万聖節の乞食のように涙声でしゃべるようになった。以前の旦那様は、笑うときは雄鶏のように関の声をあげたものだった、歩くときはライオンのように闊歩したものだった、ものを食べないのは食事の直後だけだった、悲しそうな顔をするのはお金のないときだけだった。それが、いまの旦那様は恋人のためにすっかり変わってしまった、旦那様を見ても旦那様とは思えなくなってしまった。

112

いまお部屋で縫物をしておりますと、ハムレット様が。上着の胸もはだけ、帽子もかぶらず、靴下も汚れたままだらしなくくるぶしまで垂れさがり、お顔はまっ青、両のお膝はぶるぶるふるえ、まるで恐ろしい話をするために地獄からいま脱け出してきたばかりのように悲しそうなまなざしで――私の前に。私の手首をぎゅっと握りしめ、そのお手を伸ばせるだけうしろへさがり、もう片方のお手をこのように額にかざし、肖像画でもお描きになるように、私の顔をじっとお見つめになりました。そのまま長いあいだ動かずにいらして、やがて私の手を軽くふり、頭をこのように三度うなずかせると、悲しそうに深い溜息をつかれました。いまにもおからだか溜息とともに消えていきそうに思われるほど。それでやっとお手をはなし、肩ごしにお顔をこちらにむけたまま、見ないでも道がわかるように、ドアから出て行かれたのです、最後まで私を見つめて。

113

さあ、私をくどいて、くどいて、いまの私はお祭り気分、すぐにいいわと言うでしょう。

114

たとえばそのなかで、姫の美の祭壇にきみの涙と、溜息と、心とを献げます、と言うのだ。インクが乾くまで書き綴ったら、きみの涙でもう一度ぬらすことだ、そういう誠意が示されるような、感動的な詩を作らなければ意味がないぞ。オルフォイスの豎琴は詩人の神経を弦にしたものだ、その黄金の調べは鉄を溶かし、石をやわらげ、虎の心をなごませ、巨鯨リヴァイアサンをして底知れぬ海より出でて砂の上に踊らせたという。

115

ヴァイオラ

もし私が主人のあの燃える思いに身を焼き、

生きながら死の苦しみをなめるとすれば、あなたの
いまの拒絶の意味がつかめないでしょう。どうしても
納得できないでしょう。

オリヴィア

で、あなたならどうなさる？

ヴァイオラ

ご門の前に悲しみの柳の枝で小屋を作り、
お邸のなかの私の魂にむかって呼びかけます。
さげすまれても変わらぬ恋を歌にたくし、
ものみな寝静まる真夜中に大声で歌います。
こだまする山々にむかってあなたのお名前を叫び、
おしゃべりな大気まで声ふるわせて「オリヴィア」と
言うようにしてやります。そうなればあなたは、
この天地のあいだに身のおきどころがなくなるでしょう、
私をあわれとお思いにならぬかぎり。

116

おお、アポロよ、ダフニを愛したあなたに聞きたい、
クレシダはなにものか、パンダラスは、この私は？
あの人のベッドはインド、横たわるあの人は真珠、
このトロイの宮殿とあの人の住処とのあいだに
目もはるかな荒れ狂う大海原があるとすれば、
このおれは貿易商人、仲をとりもつパンダラスは
おれの頼りない望み、おれの案内人、おれの船だ。

117

うちの娘が好きだって言うけど、
それも信じてます。なにしろ湖を見つめるお月様だって、
娘の目を読もうとでもするみたいにじっと見つめる
あの男にはかなわないぐらいですからね。ぶちまけて言やあ、
どっちのほうがよけいに惚れているかは、キス一回分の差も
ないように思います。

118

ああ、じれったくてたまらぬ、妻は英語が、
そしておれはウェールズ語が、一言も話せぬとは。
おまえの目が語ることばはよくわかる、湧き出る
泉のように美しくあふれるそのウェールズ語なら、
おれにもわかりすぎるほどわかる。人目さえなければ、
おれも同じ涙のことばで答えてやるところだ。
この口づけもおれにはよくわかる、おまえにも
わかるだろう、これこそ心の通う会話なのだ。
だがおれはこのまいつまでも怠けてはいないぞ、
必ずおまえのことばを勉強する。おまえの舌にのると
ウェールズ語も美しくひびく、まるで美しい女王が
夏の四阿で、ひとりリキュートにあわせて口ずさむ
調べ高い歌のように、聞くものの心をうっとりさせる。

119

こう言っているのだ、床に敷きつめた藺草の上に
身を横たえ、私の膝を枕にしてほしい、そうすれば
私は、あなたの好きな歌を歌い、あなたの瞼に

眠りの精が訪れるようにしてあげよう、そして、
こころよい眠気であなたのたかぶった血を静め、
夢とも現ともわからぬ境地にさまよわせてあげよう、
ちょうどあの夜と昼の境め、黄金の馬車に乗った
日の神が、東の空に現われて天空へ旅立とうとする
一時間前の、あのひとときのまどろみのようにと。

120

恋の歌にしてくださいね。恋ゆえに私たちはみんな身を滅ぼす。おお、恋の神キューピッド、キューピッド

121

なにか音楽を。音楽こそは恋するものの
悲しい心の糧だもの。

122

音楽が恋の糧であるなら、つづけてくれ。
食傷するまで聞けば、さすがの恋も飽きがきて、
その食欲も病みおとろえ、やがては消えるかもしれぬ。
いまの曲をもう一度！消え入るような調べであった。
この耳を甘く撫でるようであった、堇の花の
咲き誇る丘を吹く風が、その香りを盗みとって
はこんでくるように。もうよい、やめてくれ。
さきほどの甘い調べもいまはこころよくはひびかぬ。
ああ、恋の精よ、おまえはなんと変わり身が早いのだ、
海のように食欲にすべてを飲みこみながら、
いったんおまえの腹中に入ると必ず、
たとえどのように気高い価値あるものも、
たちまち一瞬のうちに卑しい価値なきものに
変えられてしまう。恋はまことに変幻自在、
気まぐれなままにあっという間に千変万化する。

123

公爵

ここへくるがいい、シザーリオ。おまえも恋をしたら、
その甘い苦しみのうちにおれのことを思い出してくれ。
まことの恋をするものはみなおれのように恋をする――
ほかのことには、そわそわと落ちつきがなく、
ただ恋しい人の面影をのみしっかりと
抱きしめているのだ。この音楽をどう思う？
ヴァイオラ
恋の神様が座を占める胸の底からの
こだまのようです。

124

この堤に眠る月の光のなんと美しいことか！
われわれもここに腰をおろし、忍びよる楽の音に
耳を傾けるとしよう。やわらかく夜を包む
この静けさは、妙なる音楽を聞くにふさわしい。
おすわり、ジュシカ。どうだ、この夜空は！
まるで床一面に黄金の小皿を散りばめたようだ。
きみの目に映るどんな小さな星屑も、みんな

天をめぐりながら、天使のように歌を歌っているのだ、
あどけない瞳の天童たちに声を合わせてな。
不滅の魂はつねにそのような音楽を奏でている、
ただ、いずれは塵と朽ちはてる肉体がわれわれを
くるんでいるあいだは、それが聞こえないのだ。

125

いつだったかおれは
岬の出ばなに腰をおろし、人魚がイルカの背で
歌うのを聞いていた、その美しいなごやかな歌声に
さしもの荒海もおだやかに静まりかえり、
星も海の乙女の音楽に心をひかれ、狂おしく
天から流れ落ちたものだった。

126

私たちの愛が新鮮だったころはまだ春だった、
私もよく歌を歌ってあいさつしたものだ。
だが夏のはじめに歌うナイチンゲールも
夏が深まれば歌わなくなる、と言っても
その悲しみの歌にあたりが静まりかえった夜より
夏のさかりのいまのほうが楽しくないわけではない。
ただ、いまはどの枝も騒々しい歌声に満ちており、
楽しい音楽もいつでも聞けるなら喜びはない。

127

雪より白い白リンネル、
烏も顔負け黒チリメン、
バラの香りのする手袋、
顔の仮面に鼻の仮面、
黒玉細工の腕飾り、
琥珀細工の首飾り、
婦人の寝室用香水、
金糸の帽子と胸当ては
いとしい人への贈り物、
鋼鉄の針とアイロンは
娘さんには必要品、
さあ、お買いなさい、お買いなさい、
いとしい娘に泣かれぬよう、
さあ、お買いなさい、お買いなさい。

128

「『悩める愛が私に送ってきた貢物はすばらしいよ
青ざめた真珠や血のように赤いルビー。
その貢物は悲しみと恥かしさの情緒を私にも感じさせる
ものと思って送られて来たのだ
悲しみは血のない白に恥かしさは紅の情によく解る
恐怖と謙遜の効果は
心の中に陣をしくが、外へ闘い出て来る。』」
「『金髪をいれた小箱を見よ
撚った金線でなまめかしく編んだものを
私は多くの美人から受け取っている
(かれらはそれを涙ながらに受けてくれと懇願した)

美しい宝石で飾ったものをそれに加えてもって来た
また一つ一つの宝石の貴い性質や価値や特質を
よく述べた精巧なソネットをつけて来た。』」

129

オフィーリア

ハムレット様、いただいた贈物をここに、
お返しせねばと気になっておりました。
どうかお受けとりを。

ハムレット

いや、受けとらぬぞ。
なにもやったおぼえはない。

オフィーリア

ま、おぼえがないなどと、そんなはずは。
これにそえてやさしいお言葉まで。そのためにいっそう
この品を大事に思っておりましたのに。その香りも失せました。
お返しします。気高い心には、大事であった贈物も、
贈り主の心が変われば大事でなくなります。

130

まったくあきれた話だ、人が恋にうつつをぬかすのを見てはばかにしていた男が、みずから
恋のとりこになっておのれの嘲笑の的になるとは。しかもそれがクローディオときた。おれ
の知っているあいつは、音楽といえば軍楽隊の勇ましい太鼓と横笛しか縁のない男だった、
それがいまでは祭り囃子の粋な小太鼓や笛を聞きたがる。おれの知っているあいつは、りっ
ぱな甲冑を見るためとあらば十里の道もいとわぬ男だった、それがいまでは新しい服の型
をあこれ考えて十日も眠らないでいる。以前のあいつは、まっとうな武人にふさわしく、
口を開けば平明な言葉づかいをする男だった、それがいまでは口やかましい修辞学者だ――
出てくる言葉はとてつもない大宴会、山海の珍味が次から次へ並べ立てられる。

131

おお恋人よ、どこへ行く？
聞いておくれよ、きみ慕う
心からなる恋の歌。
旅に出たとて、恋人よ、
旅の終わりは、きみ慕う
思いも切ない胸のうち。
おお恋人よ、なに思う？
恋は明日のものでなし、
今日の喜びこそいのち。
待っていたとて、恋人よ、
待てば花咲くものでなし、
若さもはかない夢のうち。

132

これこそ自然がたくみな腕をふるい、赤と白を
みごとにまぜあわせて描いたほんとうの美しさです。
お嬢様、あなたほど残酷な人はこの世におりません、
もしもその美しさをそのまま墓場までおもちになり、
この世に一枚の写しさえお残しにならないとすれば。

133

シルヴィア姫はどんな人？

若者たちがあこがれる
美と貞淑をかねた人。
賛美的となるように
天の恵みを受けた人。
シルヴィア姫はどんな人？
ただ美しいだけでなく
その心根もやさしい人。
盲目の神キューピッドが
その目にきたり宿る人。
シルヴィア姫よ、聞きたまえ、
姫をたたえるわが歌を。
シルヴィア姫よ、受けたまえ、
地上の天使に捧げたる
わが花束を受けたまえ。

134

あなたの実体はなんですか、なんでできているのですか
あなたとは異なる無数の影がつきそっているとは？
人間だれでも一人につき一つの影をもっています、
だがあなたは一人なのにあらゆる影を見せています。
ヴィーナスに愛された美青年アドニスを描けば、
それはあなたをお粗末になぞった絵姿にすぎず、
トロイ戦争の因となった美女ヘレンを再現すれば、
ギリシア服をまとったあなたが描き出されます。
春について、あるいは秋の豊穡について語れば、
春はあなたの美しさの影を見せるにすぎず、
秋はあなたの豊かな恵みとして現われます、
私たちはあらゆるありがたい形にあなたを見るのです。
あなたは外側の美しいものすべてに影を宿している、
だが変わらぬ心の固さはあなただけのものです。

135

なぜ私の詩は新しい華やかな装いを身につけず、
多様性や目くるめく変化に欠けているのでしょうか？
なぜ私は流行を追って時代の先端を行く新技法や
風変わりな複合語に色目をつかわないのでしょう？
なぜ私はつねに同じ一つの主題を書き続け、
その着想に同じ一つの古着を着せるのでしょうか？
これでは一語一語がその生まれ育ちを明らかにし、
私のものであると告げるようなものではありませんか？
ああ、愛する人よ、私が書くのはつねにあなたのこと、
あなたと愛とが私のつねに変わらぬ主題です。
だから私にはせいぜい、古いことばを新しく着せかけ、
すでに使ったことばをまた使うことができるのみです。
太陽が日々に新しく同時にまた古いように、
私の愛もすでに語ったことをつねに語るのです。

136

このお年寄りの前で、
ばくの終生変わらぬ愛の誓いを聞いてくれ！このかたも
かつて恋をしたことがおありのようだから。きみの手を、
鳩の柔毛のようにやわらかくて真白な手をとろう。

この白さをなににたとえればいい、エチオピア人の齒か、
北風に二度までふるい分けられた雪か、

137

あの人は松明に美しい輝きかたを教えているようだ。
夜の頬にたれさがるあの姿は、まるで
黒人娘の耳にたれさがる美しい宝石。

138

この開かれた唇、これは甘いい息が
押し開いているのだ、これほど美しい息でなければ
これほど美しい友だちの仲を裂けはしまい。

139

それに、ああ、あの人の手——
あの手にくらべればどんな白いものでも墨だ、
おのれの黒さを書き記すしかない。そっと握られれば
白鳥の雛の柔毛さえざらざらと感じ、鋭敏な触感さえ
農夫の手のひらのようにごつごつしたものに思われる。

140

おお、来たな、あのかろやかな足どりでは
石敷きつめた道は永遠にすりへりはしまい。
恋するものは、気まぐれな夏の風にそよぐ
蜘蛛の糸に乗っても落ちぬという。
恋のたわむれ心はさほどまで軽いのだ。

141

ああ、しあわせな美しいあなた！あなたの目は彼方の
北斗星、あなたの舌は甘い調べ、麦は緑に、
サンザシの蕾がほころびるころ、羊飼いの耳に
聞こえてくるヒバリよりも美しい音楽。

142

あのいとしい妻は、この娘に似ていた、そっくりであった、
そしておれの娘は、生きておれば、ちょうどこのくらいに
なっていたろう。わが妃に瓜二つだ、その広い額も、
すらっとした背丈も、銀鈴のような声も、宝石のように
輝く瞳も、それを収める宝石箱のように美しい瞼も。
歩く姿は女神ジュノーさながら、
声を聞けば耳はますます飢え、もっと聞きたい
という思いがつのる。

143

ジェークイズ
背の高さは？
オーランドー
このときめく胸のあたりです。

144

彼女の百合の手は、薔薇いろの頬のしたに横たわり、
枕が当然受けるべき接吻を欺き奪っていた。

145

今や彼女はいとも優しく彼の手をとった、
それは雪の牢に囚われた百合の花、
雪花石の紐にとりまかれた象牙のよう、
かくも白い友がかくも白い敵をとりまいているのだ。
一方は熱望し、他方は拒むこの美しい戦いは
二羽の銀色の鳩が嘴を触れ合うよう。

146

もうひとつの美しい手は、寢床のそとに、
緑いろの覆いのうえに置かれていた。その純白の色は
草の辺に咲いた四月の雛菊のようだった。
夜露を思わせる真珠の汗が浮かんでいた。
彼女の目は金盞花のように視力を覆いかくし、
暗闇の天蓋のなかに優しく横たわっていた、
ふたたび見開かれて、日を飾るそのときまで。

147

ああ、ヴィーナス、
この寝姿のなんというあてやかさ！咲きそめた白百合だ！
シーツよりさらに白い！ふれることができたなら！
キスすることができたなら、一度でいい！このたぐいさない
二つのルビーはキスしあっているではないか。この部屋が
このように芳香に満ちているのはこの人の息のせいだ。
蠟燭の炎までこの人のほうにたなびいて、瞼の下を
のぞきこもうとしている、空の青さに縁どられた
この二つの窓の下におさめられているはずの
まばゆい光を拝みたいのだ。
左の胸もとに
小さな黒子が五つ、まるで九輪桜の花びらに秘められた
真紅の露のようだ。

148

彼女の乳房は青い海にかこまれた象牙の地球のようだった。
それは、まだ征服されたことの無い二つの処女世界だった。

149

純白の雪を
霜の力で凍てつかせ、処女神ダイアナの神殿にかけた
氷柱にも似た純潔なご婦人

150

卑しい醜い釣り合いのとれていないものを
恋はりっぱな美しい品のあるものに変えるもの。
恋は目でもものを見るのではない、心で見ると、
だから翼もつキューピッドは盲に描かれている、
恋の心にはどこを捜しても分別などない、
だから無分別を示すよう翼はあるけど目はない。
恋は相手を選ぶときしょっちゅうだまされる、
だから恋の神キューピッドは子供だと言われる。
いたずらな子供はたわむれに平気で嘘を並べたてる、

だから子供である恋の神はやたらに嘘の誓いを立てる。

151

私、恋こがれていたような気がするわ、ロバかなんかに。

152

このしょうのない娘はね、あんた、顔はまずいがね、あんた、それでもおれのもんだ、もらい手のない娘の手をとるなんてね、あんた、おれのしょうのない気まぐれだよ、

153

私の恋人の目は輝く太陽にはくらぶべくもない、
彼女の唇の色より珊瑚のほうがはるかに赤い。
雪が白いとすれば彼女の胸は灰褐色でしかない、
髪が絹系なら彼女の頭にあるのは黒系にすぎない。
バラなら赤と白の混じりあった花を見たことがある、
だが彼女の頬にそのようなバラを見たことはない。
香水ならかぐわしい香りを放つものがある、
彼女の息の匂いなどとうていそれにかなわない。
彼女がしゃべる声を聞くのは嫌いではない、
だが音楽にはもっとところよいひびきがある。
私は女神が歩む姿を見たためしがない、
私の恋人はいつも大地を踏んで歩くから。
だが誓って言おう、私の恋人は、そのような
大げさな比喻で飾られたどの女よりも美しいと。

154

おい、どうした？ どうしてぼくを見つめるのだ？
ぼくの目にはおまえなど大自然が大安売り用に作った
粗悪品としか映っていないのだぞ。まいったな、
どうやらこの女、ぼくの目までとりこにする気らしい。
いやそんな考えは捨てるがいい、高慢な娘さん、
おまえのインクのような眉、黒い絹のような髪、
ガラス玉のような目、クリーム色をした頬などで、
ぼくの心を手なずけようとしてもむりな話だ。
おまえもばかだぞ、羊飼いの雨まじりの南風のように
涙と溜息をこぼしながらこんな女を追いかけるなんて。
この女よりおまえのほうがよほどいい顔をしている。
一千倍も美しいぞ。おまえみたいなばかがいるから
この世のなかは不器量な子供たちでいっぱいになるのだ。
この女がうぬぼれるのは鏡ではなくおまえのせいだ、
おまえのことばどおりに自分を見るものだから
この女は実物以上に美しい顔立ちだと思いこんでいる。

155

船長も水夫長も掃除夫もおれも
大砲係もそいつの助手も、
マル、メグ、マリアン、マージェリーに惚れた、
ケートに惚れたやつはいなかった。
それもそのはず、このじゃじゃ馬は
水夫を見れば、くたばれとぬかす、
タールと油の臭いがいやで
仕立屋ばかりかわいがる。

おれたちゃ水夫だ、海へ行こうぜ、
あんな女はくたばれた。

156

ああ、この人の唇からもれると、
どんな軽蔑や怒りの言葉も美しく聞こえる！

157

いつだって軽蔑と嘲笑を目にちらつかせ、

158

そこで、
陛下が口を開かれれば、放埒ごめんのあたりの空気さえ
ピタリと静まり、ものも言えぬ驚嘆が人々の耳に集まって、
陛下の蜜のように甘いことばを残らず吸いとりとうとするのだ。

159

もう一度、紅玉色の門（唇）は開き、
彼の言葉を甘美に流れさせる、
さながら船乗りには難破を、野原には嵐を、
羊飼いは悲しみを、鳥たちには災いを、
牧人と家畜の群れには突風とはやてを
予言する朝焼けのよう。

160

「たとい恋があなたに二万の舌を貸し与えて、
そのおのおのの舌があなた自身のよりももっと人々を感動させ、
淫らな海の魔女の歌のように魂を魅するとしても、
その人を誘う調べはわたしの耳には空しく消えていく、
なぜなら、お知らせするが、わたしの心はわたしの耳元に武装して立ち、
偽りの声が入って来るのを許さないから。
「そうするのは、人を欺く快い調べがわたしの胸の
静かな柵内に忍びこまないようにするためだ。
欺かれたらわたしの小さな心は滅び去ってしまうだろう、
その寝室の休息を奪い去られて。
否、女神よ、否、わたしの心は恋の苦痛で呻くことは望まない、
かえって心はひとりて眠るからこそ、熟睡するのだ。」

161

美そのものがおのれみずからのうちに
代弁者なしで人の眼を惹きつける力を持っている。

162

恋人同士が手をとって
そら、ヘイ、ホ、ヘイ・ノニノー
緑の畑を踏み行けば
時は契りを交わす春
鳥もさえずる、ヘイ・チ・チ・チ
恋人たちは春が好き。
ライ麦畑にかこまれて
そら、ヘイ、ホ、ヘイ・ノニノー
かわいい二人が寝ころべば

時は……（以下くり返し）
そこで二人は歌い出す
そら、ヘイ、ホ、ヘイ・ノニノー
花のいのちのはかなさを
時は……（以下くり返し）
のがすな二度とこぬ春を
そら、ヘイ、ホ、ヘイ・ノニノー
恋の花咲くこのときを
時は契りを交わす春
鳥もさえずる、ヘイ・チ・チ・チ
恋人たちは春が好き。

163

ある日、ああ、悲しきある日のことなり、
つねに五月をおのが月と定めし恋心は、
いと美しき一輪の花を見たり、
その花はそよ吹く風とたわむれていたたり。
風は人には見えて花のもとに通いぬ、
やわらかに青める葉をくぐり抜けつつ。
かの男は死ぬほどの恋の悩みを味わいぬ、
かくなる上はかの風になりたしと思ひぬ。
彼は言いぬ、風はきみが頬にふるるなり、
われもまたその栄光をこの手にしたし。
されど悲しきかなわが手は誓約により、
花のきみを摘むことあたわざるなり。
ああ、この誓約は若者にふさわしからず、
美しきを摘むこそ若者のつねなればなり。
われ誓約を破るともきみがためにほかならず、
さればそはただわれ一人の罪にはあらず。
きみがためにはジュピターも誓いたまわん、
妃ジュノーも醜き女にすぎざりしと。
ジュピターも神たるその身を呪いたまわん、
きみを慕いて人間に姿を変えたまわん

164

きみはなにをしようと、いつも
したことをいっそうすばらしく見せる。きみが口を開くと、
いつまでもしゃべり続けてほしいと思う、きみが歌を歌うと、
ものを買うにも、売るにも、施しものをするにも、
お祈りをするにも、召使いたちに家事を言いつけるにも、
歌でやってほしいと思う。きみが踊りを踊ると、
きみが海の波であってほしいと思う、そうであれば、
いつまでも踊り続け、踊り続けるだけでほかのことは
しないでいいのだから。きみのすることはなんでも、
一つ一つが世界に一つしかない完全無比のものだから、
そしていましていることを最高の王座につけるものだから、
きみの行為はすべて女王なのだ。

165

あの舌は心の言うままにならぬのか、あの心は
舌に思いを伝えられぬのか——満ち潮の水面に浮かぶ
白鳥の柔毛のように、むこうにもこちらにも

行きかねている。

166

おお、その怖れが彼女の頬をどんなに赤く染めたことか。
はじめはリネンの上においた薔薇のように赤かった。
それから、薔薇を取り去ったあとのリネンのように白くなったのだ。

167

おお、口を開け、輝く天使。あなたこそは
わが頭上にあってこの夜に光を与える天使、
人間どもがあとずさりして見つめんものと
空ふりあおいて驚異の眼をみはれば、
あゆみおそい流れ雲にその身をうち乗せ、
天空をすべるがごとくすすみたもう、
翼もつ天使の御姿そのままだ。

168

あなたはぼくのもの、おお、ぼくの恋人！
あの人にこの心通じてくれ！

169

イノバーバス

ではおれから聞かせよう。
あの女の座した舟は、磨きあげた王座さながら、
水に燃えるように照りはえていた、艫は金の延べ板、
帆は真紅、それにかぐわしい香をたきこめてあるので、
風も恋わずらいに身をこがしていた、櫂は銀、
それが笛の音にあわせてやさしく水をうつので、
波もその愛撫を求めてわれ先にと追い慕っていた。
あの女その人とは言え、いかなる美辞麗句も
たちまち枯渇するほどのものであった、金糸と絹を
織りなした天蓋のなかに身を横たえたその姿は、
想像が自然を越えることを示す画中のヴィーナスを
はるかに越える美しさであった、その両脇には
ほほえむキューピッドのようにえくぼを浮かべた
美少年が立ち、七色の扇で風を送るので、そのために
冷めた頬はほんのりと上気し、あおぐ意味は
無意味となっていた。

アグリッパ

感嘆しただろう、アントニーは！

イノバーバス

侍女たちは一人一人が人魚だ、それがニンフのように
女王の前にかしずき、腰をかがめ、女王をいっそう
美しく見せる飾りとなっていた。舳にはその
人魚の一人が舵をとる、たおやかな花の手が
あざやかな綱さばきを見せると、それにつれて
絹の帆が誇らしげにふくらんでいく。舟からは
えもいわれぬ香りがただよい出て、近くの岸に立ち
見物しているものの鼻をうつ。みんな見にきたので
町はからっぽとなったのだ。アントニーはただ一人
広場にとり残され、空におかって口笛を吹いていた、
だがその空気にしても、真空を作っていいものなら、

やはリクレオパトラを見に出かけ、自然界に
大きな穴をあけたろう。

アグリッパ

感嘆すべきエジプト女だな！

イノバーバス

女王が上陸すると、アントニーは使いをやり、
晚餐に招待した、女王は答えて、アントニーこそ
私の賓客に、と言った、それも辞を低くして
懇願したのだ。礼儀を心得るわがアントニーは、
いまだかつて女に「ノー」と言ったことのない男だ、
十度も顔をあたらせてから宴席におもむいた、そして
そのごちそう代をおのれの心で支払ったわけだ、
口ではなく目で食ったばかりに。

アグリッパ

たいした女王だ！

かつては大シーザーも抜き身の剣をベッドにもちこみ、
耕してみのらせた女だからな。

イノバーバス

おれは一度、女王が

街を四十歩ばかり小走りに行くのを見かけたが、
息を切らせて、あえぎながら、なにか言う、その
ことばをなさぬことばを吐く風情が、かえって
ことばにつくせぬ魅力を生む、といった様子だった。

ミシーナス

その女をアントニーもいまは捨てるはめになったか。

イノバーバス

いや、捨てはしまい。

年齢もその容色をむしばみえず、かさねる逢瀬も
その無限の変化を古びさせぬ女なのだ。ほかの女は
男を満足させれば飽きられる、ところが女王は
満足させたとたんにさらにほしがられる、というのは、
どんな卑しいものも女王にあっては美しく見えるのだ。
聖職者も女王のふしだらには祝福せずにはいられまい。

170

ああ、なんとやさしい心をもった人だろう、
兄上にたいしてさえそのような愛を報いるとは。
もしもキューピッドの黄金の矢が、あの人のもつ
いっさいの感情の息の根を止めるとすれば、
そしてあの人の胸も心も魂も、つまりはその
美しい愛の王座をただ一人の王者が占めるとすれば、
そのときあの人の愛はどのようなものとなるだろう！
さあ、かぐわしい花の褥にこの身をやすめるとしよう、
花に包まれれば恋の思いもゆたかにやすらぐだろう。

171

いいぞ、かわいいキューピッド！恋の矢を王の左乳首の下に的中させてくれたらしい。

172

おれの恋はまじりっけなしの清らかなもんだ、
それにおれはどうせ幸運には恵まれない男だから、
刈り入れをする男のあとをついて行き、おこぼれの

落ち穂を捨うだけでたいへんな収穫だと思うくらいだ。
だからたまにはおまえもおこぼれの笑顔をチラッと
おれに見せてくれ、おれはそれで生きていけるんだ。

173

では、このように
天の神様と奥様の前にひざまずき、まず奥様に、
それから天の神様に、胸の思いを申しあげます、
私はあのかたを愛しております。
私の身内は貧しいけれど正直でした、私の愛も同じです。
どうかお怒りにならないでください、私が愛したからとて
あのかたにさわりはありません。私は無作法にも
贈り物をさしあげたりしませんし、あのかたにふさわしい
価値を身につけるまで奥様になりたいとも思いません、
どうすればそのような価値がそなわるかはわかりませんが。
わかっているのは、愛してもむだ、望みはない、
ということだけ。でも、そのいくら注いでももってしまう
篩のなかに、私は愛の水を注ぎ続けているのです、
尽きることのない愛の水を。こうして私は、
インド人のように、あやまった信仰を抱いて
太陽を崇拝しています、拝んでいるものを見おろしながら
それがなにものであるかご存じない太陽を。

174

ぼくは水先案内じゃない、しかしたとえあなたが
さいはての海に洗われるはるかな岸边にあっても、
このような宝のためならあえて漕ぎだすでしょう。

175

ロミオ
ぼくは誓います、あの果樹の梢を
銀一色に染める清浄な月にかけて――
ジュリエット
いけません、月にかけては、不実な月は
一月ごとに満ちたりかけたりするもの、
あなたの愛もそのように変わりやすいものになります。
ロミオ
ではなんにかけて誓えば？
ジュリエット
誓いなどなさないで。
どうしてもとおっしゃるならあなたご自身にかけて。
私の崇拝する神であるあなたにかけての誓いなら
お言葉を信じますわ。

176

私、気前のよさははてしないこと海のように、
恋の深さも。いくらさしあげてもそれだけ私も
受けとるわけですもの、どちらもきりが無いわ。

177

ジュリエット
まもなく朝、あなたをお帰ししなければ。

でも遠くへはいや、いたずら娘の小鳥と同じ、
その手を離れて少しは飛ばせてもらえても、
足枷をはめられたあわれな囚人のように、
絹の糸を引かれてたちまちつれもどされる。
小鳥の自由を愛ゆえにこそねたむから。

ロミオ

あなたの小鳥になりたい。

ジュリエット

そうしてあげたい。

けれどもかわいがりすぎて死なせるかもしれないよ。

おやすみ、おやすみ。別れは甘く悲しいもの、
朝がくるまでおやすみを言いつづけていたい。

178

トロイラス

もうここがいい。朝の空気は冷たいから。

クレシダ

じゃ、私、叔父を呼びましょう、
門をあけてもらうために。

トロイラス

いや、世話をかけなくていい。

それよりおやすみ。眠りがそのかわいい目をふさぎ、
無心の赤児のようにそのからだじゅうの感覚を
やわらかくくるんでくれるように。

クレシダ

じゃ、さようなら。

トロイラス

さ、早くおやすみ。

クレシダ

私がいやになったの？

トロイラス

なにを言う、クレシダ！せわしい朝が、
ヒバリに起こされ、うるさい鳥を呼び起こさなければ、
夢見る夜が二人の喜びをいつまでもかくしてくれるなら、
あなたから離れるものか。

クレシダ

ほんと、短い夜だったわ。

トロイラス

夜はけしからん魔女だ！ 悪いやつのはそばには
地獄のようにいやになるほどいつづけるのに、
恋人たちのそばからは羽根を生やして飛び去ってしまう。
さ、風邪をひいても知らないぞ。

クレシダ

ね、お願い、

もう少しここにいらして。男の人ってすぐに
行っておしまいになる。まあ、ばかなクレシダ！
冷たくしていればまだいてくださったでしょうに。

179

ロレンゾー

月が美しく輝いている。きっとこんな夜だった、
かぐわしい風が樹樹の梢にそっと口づけして

音もたてずに吹きすぎる、きっとこんな夜だった、
トロイラスがトロイの城壁の上に一人立ち、
その夜クレシダが眠っているギリシアの陣営に
溜息とともに魂を吹き送ったのは。

ジェシカ

きっとこんな夜だった、
シスビーがおそろおそろ露を踏んで恋人に会いに行き、
恋しいピラマスに会う前にライオンの影におびえ、
驚いて逃げ帰ったのは。

ロレンゾー

きっとこんな夜だった、
ダイドーが荒海の岸边に立ち、手にした柳の小枝を
ふりながら、恋人イーニーアスをもう一度カルタゴへ
呼びもどそうとしたのは。

ジェシカ

きっとこんな夜だった、
メディアが夫の老父イースンを若返らせようと
魔法の草を集め歩いたのは。

ロレンゾー

きっとこんな夜だった、
ジェシカという娘が金持ちのユダヤ人の目のかすめ、
ろくでなしの恋人と手に手をとって、ヴェニスから
ベルモントまで逃げてきたのは。

ジェシカ

きっとこんな夜だった、
ロレンゾーという若者がその娘の心を盗もうと、
心から愛しているなどと心にもない愛の誓いを
さんざん並べ立てたのは。

ロレンゾー

きっとこんな夜だった、
かわいいジェシカがかわいらしいじゃじゃ馬のように
恋人に悪態をつき、男が黙って許してやったのは。

ジェシカ

こんな夜の言いっこなら負けっこないのだけど、
邪魔が入ったわ、ほら、足音が近づいてくる。

180

ヴァイオラ

たとえば、きっとどこかにいると思いますが、
一人の女があなた様への愛ゆえに、いまのあなた様と
同じ悩みを味わっていて、あなた様に愛を拒絶されたら、
そのような返事を聞かないわけにはいかないでしょう？

公爵

女のからだは、
いまおれが味わっているような激しい恋の悩みに
耐えられはしまい。女の胸は、これほど大きな愛を
もつには小さすぎる、もち続ける力がないのだ。
女の愛は、悲しいかな、食欲のようなもの、
心の底から湧き出るものではなく、舌先だけのこと、
だからたちまち満腹し、胸やけがし、吐き気をもよおす。
おれの愛はちがう、海のように貪欲で
なんでも消化してしまう。おれにたいする女の愛と、

オリヴィアにたいするおれの愛とは、とうてい
くらべるわけにはいかぬ。

ヴァイオラ

でも私は知っております——

公爵

なにを知っておる？

ヴァイオラ

女の愛がどんなものであるか。

女も私たちに劣らずまことの愛を捧げます。

私の父に娘がありまして、ある男を愛しました、

私が女でしたらきっとあなた様に抱いたであらうような、
深い愛でした。

公爵

でどうなった、その恋物語は？

ヴァイオラ

白紙のままです。自分の恋をだれにも言わず、

胸に秘めて、蕾にひそむ虫のような片思いに

バラの頬をむしばませたのです。そして次第に

やつれていき、病み蒼ざめた憂いに沈みこみ、

それでも石に刻んだ「忍耐」の像のように、悲しみに

ほほえみかけていました。これが愛です、まことの。

私たち男は誓いの言葉を並べます、まことしやかに。

でも心にもない見せかけだけです。口数は多めで

愛情は少なめ、というのが私たちの負いめです。

181

それにしてもおまえは

王侯の墓を見守る忍耐の像のようだ、そのほほえみに会えば
いかなる苦難も露と消えよう。

182

エアリエル（歌う）

金砂銀砂の浜にきて、

手に手をとっておじぎして、

たがいに口づけ交わしたら、

波も静まりかえったら、

踊れ、妖精、かるやかに、

歌え、妖精、華やかに。

お聞きよお聞き、

（あちこちで）ワンワンワン。

番犬の声、

（あちこちで）ワンワンワン。

お聞きよお聞き、歌ってる、

あれはきどって歩いてる

雄鶏の声、

（あちこちで）コケコッコー。

ファーディナンド

あの音楽はどこからくるのだ？ 空か、地中か？

もう聞こえない、あれはきっとこの島の神に

捧げられるものだろう。岸边に腰をおろして

王である父上の船の難破を悲しんで泣いていたら、

あの音楽が波にはこばれて耳もとに忍び寄り、

その甘い調べで波の怒りとおれの嘆きとともに
静めてくれた。おれはあの調べを追ってきた、いや、
あの調べがおれを引き寄せたのだ。だがもう消えた。
いや、またはしまったぞ。

エアリエル（歌う）

父は五尋海の底、
その骨はいま白珊瑚、
かつての二つの目は真珠、
その身はどこも朽ちはてず、
海はすべてを変えるもの、
いまでは貴重な宝物。

海の妖精、弔いの

鐘うち鳴らせ、

（あちこちで）ディン・ドン・ドン、

お聞きよお聞き、

（あちこちで）ディン・ドン・ドン。

ファーディナンド

あれは溺死された父上を弔う歌。これは
どうてい人間業とは思われないし、あの音色も
この世のものではあるまい。今度は頭上から聞こえる。

プロスペロー

その目の帳をあげ、おこうになにが見えるか言ってごらん。

ミランダ

なにかしら？妖精？あら、あんなに
あたりを見まわしている！ほんとうに、お父様、
すばらしい姿をしていますのね。でも妖精でしょう。

プロスペロー

そうではない、あれは食べもするし眠りもする、
おれたちと同じ感覚をもっておる。あの若者は
難破船にいた一人だ、美しさをおしばお悲しみという
虫さえついていなければ、おまえもきっとあれを
美青年と呼んだろう。いまははぐれた仲間たちを
捜しあぐねているところなのだ。

ミランダ

私はあの人を

天上のものと呼びます、この地上のどこを捜しても
あれほど気高い人はおりません。

プロスペロー

（傍白）心に思ったとおりだ、
これでよし。おい、妖精の小僧、よくやった、
二日以内に自由にしてやるぞ。

ファーディナンド

まちがいない、これこそ

あの調べが捧げられた女神だ！お教えください、
あなたはこの島にお住まいなののでしょうか？また、
ここではどうふるまえばいいかご教示願えれば
嬉しく思います。私がいちばん知りたいことは、いちばん
最後になりましたが、ああ、奇跡としか思えぬかた！
あなたが人間の娘かどうかです。

ミランダ

奇蹟などではありません、
ただの娘にすぎません。

ファーディナンド
私の国のことばだ！ああ！
私はそのことばをしゃべる最高の位にあるものです、
その国にいさえすれば。

183

まるで
夢のなかにいるように、力が麻痺してしまった。
父上を失ったことも、この無力感を味わうことも、
友人たちが難破したことも、この人の脅しに黙って
従わねばならぬことも、おれにはつらくはない、
牢獄の格子から、日に一度でいい、あの娘を
垣間見ることができさえすれば。あとは世界じゅう
自由な人間が勝手に使うがいい、おれにはこの牢獄が
宇宙のすべてだ。

184

ファーディナンド
どうか——
お祈りのときにとなえたいので——あなたのお名前を
教えてください。

ミランダ

ミランダと申します——ああ、お父様、
お言いつけにそむいて言ってしまった！

ファーディナンド

ミランダ！

その名の示すとおりすばらしいかた！ この世の
なにものにもまさる宝！今日まで数多くの女性が
この目を引きつけましたし、声の美しさが
この耳をとりこにしたことも数多くありました。
また、さまざまな美点のゆえにさまざまな女性を
好ましく思ったこともあります。だが一人として
魂まで揺さぶられたことはありません、必ず
なんらかの欠点がそのいちばんの美点とさえ争って
うち負かしてしまうからです。ところがあなたは、
おお、あなたは完全無比、人間の最上の美点だけで
造られたかただ！

ミランダ

私は女の人を一人も知りません、
女の顔で覚えているのは、鏡に映る自分の顔だけ。
それにまた男の人と呼べるものも、あなたしか
見たことがありません、もちろんお父様もですけど。
ですからほかの土地では人間がどのような姿形なのか
私にはわかりません。でも、私のいちばん大切な財産、
この操にかけて申します、おそばにいたいと思う人は
この世にあなたしかおりません、また心のなかで
いくら思い描いてみても、好ましい人の姿と言え
ばあなたのほかに浮かんではきません。まあ、つい私、
はしたないことを言ってしまいました、お父様の
言いつけも忘れて。

ファーディナンド

私は、ミランダ、身分を言えば

王子なのです、もしかしたら王かもしれない、
そうでなければいいが！——だから私にはこの
丸太はこびのような奴隷仕事は、青蠅がこの口に
卵を産みつける以上にがまんできないことです。
その私の魂の声を聞いてください、一目見た瞬間、
私の心はあなたの足もとに飛んで行き、おそばにいて、
奴隷になろうと思ったのです。丸太はこびに耐えるのも
あなたのためです。

ミランダ

私を愛してくださいますの？

ファーディナンド

ああ、天よ、地よ、私のことばの証人となり、
それが真実であれば私の告白にしあわせな結果を
授けたまえ！もし嘘偽りであれば私に予定された
どんな幸運もわざわざいに変えてくださってけっこうです！
私はこの世のなにものにもまして、あなたを
愛し、うやまい、尊びます。

ミランダ

私、なんてばかなのでしょう、
嬉しいのに泣いたりして。

プロスペロー

たぐいまれな愛と愛との
美しい出会いだ！天よ、二人が築く未来の上に
恵みの雨を注ぎたまえ！

ファーディナンド

なぜお泣きになるのです？

ミランダ

自分のいたらなさを思いまして。さしあげたいものも
恥ずかしくてさし出せず、死ぬほどほしいものも
くださいと言う勇氣はありません。でもこれは
心にもないことば、かくそうとすればするほど
本心が大きく現われてしまいます。恥じらいの仮面は
もう捨てます！飾らない無垢の心にことばを
教えてもらいます。私と結婚してくださるなら
あなたの妻になります。でなければ死ぬまで娘のまま
あなたの侍女になります。あなたの伴侶となることは
許されなくても、あなたの召使いには、たとえ
お許しがなくてもなってみせます。

ファーディナンド

なにより大事な人、
私はこのとおり膝をつきます。

ミランダ

では私をあなたの妻に？

ファーディナンド

もちろん、心から、
囚人が自由をえた以上の喜びをもって。さあ、この手を。

ミランダ

この手に心をこめて。

185

死んだ羊飼いさん、やっとわかったわ、あんたのことばが、
「恋したもので一目で恋しなかったものはいない」ってことが。

186

いままで胸にあふれる涙が
声を詰まらせておりました。神々よ、このお二人に
恵みのまなざしと祝福の冠を授けたまえ！
われらをこの喜びの場に導きたもうたのはほかならぬ
神々の御心でありますゆえ。

187

「ただあなたの美しい唇で、わたしの唇に触れておくれ——
わたしの唇はそれほど美しくないとはいえ、それは紅い——
キスはわたしのものでもあり、あなたのものでもあるだろう。
地の上にあなたはなにをごらんになるの？顔をあげて、
わたしの眼を覗きこんで！あなたの美しい姿がそこに宿っている、
ではなぜ唇に唇を合せないの？目に目が会っているのに。
「あなたの人を誘う愛らしい唇にみえている優しい柔毛は
あなたがまだ熟れていないことを示しているけれど、味われるのにはふさわしいだろう。
時を利用しなさい、よい機会をのがさないでおくれ。
美はそれ自らのためにだけ費されてはいけない、
盛りの時に摘まれなければ、
美わしい花もやがて朽ちて滅びつくしてしまうのだ。
「あなたはわたしの額にただ一筋の皺も認めることが出来ない、
わたしの目は青く、輝かしく、澆刺としている。
わたしの美は春のように年毎に新たに生ずる、
わたしの肉体は柔らかでふくよかで、わたしの髓は熱く燃えている。
わたしの滑らかな湿りを帯びた手は、もしあなたの手に握りしめられるならば、
あなたの掌の中で溶けてしまうか、少なくとも溶けるように思われるだろう。
「わたしに話せといっておくれ、そうすればわたしはあなたの耳をうっとりさせよう。
あるいは妖精のように、緑の牧場を浮かれ走っていこう、
あるいは水の女神のように、長い乱れ髪で、
足跡も残さず、砂原で踊ろう。
恋はことごとく火で織りなされた精だ、
すこしも沈む重さがなく、ただ軽やかで、昇ろうとする。

188

美しいものからは多くの子孫が生まれ育ってほしい、
そうすれば美しいバラはいつまでも死に絶えはしない、
あなたはいまこの世の生気に満ちあふれた飾りであり、
華やかな春を告げる先触れでありながら、
豊かないのちを自分の蕾の中に埋葬し、
若さを無駄にし物惜しみする浪費家となっている。

189

こう言って、彼女の胸に彼を引きつけて離さなかった
あの美しい腕の甘美な抱擁を振り払い、
家路へと暗い芝原を通過して急ぎ走る。
仰向きに倒れて深く悲しんでいる彼女を残して。
輝く星が空から射られるように、
彼は夜の中へとヴィーナスの目から滑り去っていく。
彼女はその目を彼に向けて放つ、今しがた船に乗りこんだ友を
岸边で見つめる人のように。
波頭が雲と出会って戦っている

あの荒れ狂う波に彼が見えなくなるまで。
そのように情容赦ない漆黒の夜は、
彼女の目を楽しませたあの姿を包んでしまう。
それを見て、ふと過って流れに
宝石を落した人のように狼狽して、
または夜の旅人が心もとない森の中で、
その松明を消されたように途方にくれて、
彼女は暗闇の中に困惑して横たわった、
行く手の道しるべである美しい光を失って。

190

さあ、
口づけを。追放以来待ちわびた、復讐のように甘い
口づけを。嫉妬深い女神ジュノーに誓って言うが、
おまえと別れて以来、おれの唇は純潔を守りとおし、
だれの唇にもふれてはおらぬ。

191

ロザリンド

それに、あの人のキスは聖餐のパンにふれるように神聖なものだわ。

シーリア

あの人は月の女神ダイアナが投げ捨てた唇を買ってきたのよ、真冬のように厳しい修道院の
尼さんだってあれほど神聖なキスはしないわ、あの人の唇には氷のような貞潔がこもっている。

192

「きよらかな唇よ、わたしの柔らかな唇に捺された心地よい捺印よ、
あなたにいつまでも唇を捺してもらうために、わたしはどんな契約をしたらいいだろう？
自らを売ることわたしはいとわないだろう、
あなたが買いとり、支払い、それをよく遇するならば、
もしあなたがこの契約を結ぶなら、約束を破られないように、
あなたの印章をわたしの紅い唇の封蠟の上に捺して下さい。

193

クレオパトラ

釣り竿をもってきて。川へ行こう、そして遠くで
音楽を奏でさせながら、褐色の鰭をつけた魚をうまく
釣りあげてやろう。そのぬらぬらした顎に
先の曲がった針を引っかけて、釣りあげるたびに
一匹一匹をアントニーに見立てて言ってやろう、
「ほうら、つかまえた」って。

チャーミアン

あのときは愉快でしたね、
お二人で賭けをなさり、おやといになった潜水夫が
川底であのかたの針につけた海の魚を、あのかたは
夢中になって釣りあげて。

クレオパトラ

あのとき——ああ、時の早さ——

私があんまり笑うのであの人は機嫌をそこねた、その夜
私があんまり笑うのであの人は機嫌をなおした、翌朝
九時前、私はあの人を酔わせて寝かしつけた、そして
私のスカーフやマントをあの人にかけると、私は

あの人の名剣フィリップパンを腰につけた。

194

ヘレン、ヘクターに手をかして
鎧を脱がせてやってくれないか。あの頑固な締め金も、
あなたの白い魔法の指ですぐにはずれるだろう、
鋼鉄の刃やギリシア人の腕などではけっして
自由にならない締め金だが。あなたにしてもらうことは
ギリシアの王侯が束になってもできないことだ、
大ヘクターを武装解除するのだからな。

195

お母様はあのかたがどう口説くか、まるであのかたの胸を
見すかしておいでのように教えてくださった、そして
男の人の誓いはみんな似たようなものだ、とも。

196

本気であなたの小指をねじ切るかもしれませんよ、
どうしてもほんとうのことを教えてくださらないと。

197

真実の心と心の結婚に障害が入りこむのを
私としてはなんとしても認める気にはなれない、
事情が変われば自分も変わり、相手が心に移せば
自分も心に移すような愛は、愛ではない。
断じて愛ではない、愛は嵐を平然と見すえて
微動だにせず、毅然と立ち続ける燈台なのだ、
北天に輝いてさまよう小舟すべての道しるべとなり、
高さは測れても影響力は測り知れない星なのだ。
バラ色の唇と頬は「時」の半月形の大鎌に
刈りとられようと、愛は断じて「時」の道化ではない、
愛は日ごと週ごとにはかなく変わるものではなく、
最後の審判の日まで耐え続けるものなのだ。
わが身をもって証したこの真実が誤りであれば、
私の詩は無であり、愛はこの世に存在しないのだ。

198

だが娘さん、身のほどを知るがいい、ひざまずき、
断食し、いい男に愛されたことを神に感謝するのだな。

199

そりゃあ、恋っていうカメレオンは空気を食っていればいいのかもしれないが、あたしは食い
ものを食って生きてるんだ、肉ぐらい食わせてくださいよ。

200

ロザライン
ビローン卿、私はお目にかかる前にたびたび
あなたのお噂を耳にしました。口さがない世間の評判では、
あなたは人をからかってばかりいらっしゃるかたで、
痛烈な皮肉や、相手の心を傷つけるような悪口を、
頓智のおもむくまま、だれかれの見境なしに
容赦なく浴びせかける性癖がある、とのことでした。

その毒草をみのりゆたかなあなたの頭から引き抜くために、
また、そうなさらないとあなたのものにならない私を
あなたのものになさるために、これからの十二か月間、
一日も欠かさず、ものも言えずに苦しみうめいている
あわれな病人たちをお訪ねになり、慰めてあげてください。
つまり、これからのあなたの日課は、できるかぎり
あなたの知恵をしぼって、なにもできずに苦しんでいる
病人たちを、なんとかして笑わせることです。

ビローン

死神にのまれかかっているものにばか笑いさせろだって？
それはむりだ、不可能というものだ。どんな冗談も
死の苦しみにあるものにはおかしくないのだから。

ロザライン

ですから人をからかう癖をなくす手段になるでしょう。
その癖がつるのは、くだらない冗談を笑って聞く人たちが
そういうおばかさんたちをもてはやしてやるからです。
冗談が栄えるのは、聞く人の耳のせいであって、
言う人の舌のせいではありません。ですから、
自分のうめき声で耳をふさがれている重病人が
それでもなおあなたのつまらない皮肉を聞いて
喜ぶようでしたら、その癖をお続けなさい、私も
その癖をおもちのままのあなたと結婚することにします。
でももし喜ばないようでしたら、その癖をお捨てなさい、
私はその癖がなくなった、すっかり改心されたあなたに
お目にかかれる日を、楽しみに待つことにします。

201

この顔色で私をおきらいにならないでいただきたい、
これは燃える太陽が、その隣人として生まれ育った
私にくだしたまわれた黒いお仕着せなのだから。
日の神フィーバスの炎さえ氷柱も溶かしえぬという
北国生まれのどんな色白の男でもお連れになるがいい、
あなたの愛を得るためなら、たがいに肌を傷つけあい、
その男と私と、どちらの血が赤いかごらんにいれよう。
たしかにこの顔にはいかなる勇者も恐れをなしたものだ、
だが同時に、私の愛にかけて断言するが、わが国で
もっとも美しさをたたえられている娘たちも、この顔を
愛してくれている。この顔色を変えたいとは思わぬ、
私の女王、あなたの愛を盗みとるためなら別だが。
この半月刀にかけて、
トルコ王ソリマンを三度までうち破ったという
あのベルシア王を斬り倒したこの刀にかけて誓おう、
私はどんな恐ろしい目だろうとにらみ返してみせる、
どんな勇猛な相手だろうと戦いをいどんでみせる、
乳を吸っている子熊を母熊の胸からもぎ離してみせる、
餌食を求めて吠えたけるライオンをからかってみせる、
それであなたを私の妻にすることができるならば。
だが、悲しいかな、もしも英雄ヘラクレスと
その従僕ライカスと、どちらが強いかを決めるのに
骰子を使うとなれば、運次第で弱いほうに大きな目が出ないともかぎらぬ、豪傑も小僧に負けるわけだ。
私とて同じこと、盲目の運命に導かれる身は、

くだらぬやつさえ手に入れうるものを取り逃し、
悲嘆のうちに死ぬかもしれぬ。

202

あれの父親が私を気に入ってくれまして、その邸によく招いては私の身の上話をせがみました。
野戦、城攻め、勝敗の運不運にいのちを賭けた私の歳月の物語を。
そこで私は、まだ幼いころから、話を命じられたそのときまでのことを、逐一語りました。
たとえば破滅をまのあたりにした冒険の数々、海に陸に遭遇した身の毛もよだつ出来事、城壁の割れ目から間一髪逃れ出た思い出、おごり高ぶる敵の手に捕えられ、その結果奴隷に売られた体験談、やっと自由の身となり、それからの諸国流浪の旅に出たの見聞記。
たとえば巨大な洞窟、不毛の砂漠、けわしい断崖、岩壁、天を摩す山頂など、その機会に話しました——そのような物語を。
さらにはたがいに食いあうという食人種アンスロポファジャイ族、顔が肩の下にある珍しい人種のことなども。このような話をデズデモーナは熱心に聞きたがりました。
たえず家事のために席をはずしましたが、大いそぎでそれをかたづけるとすぐにまたもどってきては、おさぼるように私の話に耳を傾けたのです。私はそれに気づき、あるときよい折を見つけて、あれのほうから私の半生の物語をすっかり聞かせてほしいと熱心に頼ませるよう、うまくしむけました。
少しずつは聞いていても、聞きもらした話もだいぶあったからです。もちろん私は承知し、若いころ受けた心の痛手など語り、あれも思わず涙をこぼしたりしました。話が終わると、ねぎらいのかわりに何度も深い溜息をついて、不思議な、想像を絶する不思議な話だ、あわれな、ほんとうにあわれな物語だ、と言い、それを聞かなければよかったのに、聞いたからには私もそういう男にめぐりあいたかった、と申しました。
そしてお礼とともに言ったのです、もしも私の友人があれを愛したら、私の物語をさせればいい、それだけで、あれの心はなびくだろうと。それに力をえて私も言いました、あなたは私のへてきた危険のゆえに私を愛してくださる、私はそれをあわれんでくれるゆえにあなたを愛すると。
これが私の用いました魔法のすべてです。
あれがまいりました、本人の口からお聞きください。

203

だからもし、馬跳びの競争とか、甲冑をつけたまま鞍に跳び乗ることで女心をなびかせることができるものなら、自慢じゃないが私はすぐにも妻を手に入れてみせよう。また、恋人のためになぐりあいをしろと言われたなら屠殺人のように跳びかかっていくだろうし、恋人の心を得るために馬を跳躍させろと言われたら曲芸の猿のように馬の背に乗ってけっして落ち

はしないだろう。だがな、ケート、神に誓って言うが、私には恋の病に蒼ざめて溜息ついたり、息もたえだえに胸の思いを告白したり、美文をつらねて愛の宣言をしたりすることはできない、ただ率直に誓うのみだ、その誓いも強制されなければしないが、誓ったからには強制されても破りはしない。こういう気性の男でも愛することができるなら、ケート、太陽にあらためて焼いてもらうまでもないほど色が黒く、鏡に写して得意に思うところなど一つもない顔の男でも愛することができるなら、きみの目で味つけして私を見てくれ、率直な武人として言おう、このような男でも愛することができるなら、私の妻になってくれ。できなければ、私はきっと死ぬ、そうきみに言っても嘘にはなるまい、もちろんきみへの愛ゆえに死ぬのではなく、人間いずれは死なねばならぬ身だから死ぬのだが。とは言っても、きみを愛していることは嘘ではない。だから、いとしいケート、きみも生きているうちに、率直で誠実一途な男を夫にするがいい、そういう男はきみを裏切ったりはしない、ほかでやたらに女をくどく才覚などもちあわせていないのだから。自分の気持を恋歌にして女心を手に入れることのできるようなことばたくみな連中は、同時にことばたくみに言いつくろって女から逃げることもできる、そう、雄弁家は虚言家にすぎず、恋歌は流行歌にすぎないのだ。すらっとした脚もいずれはしなびる、まっすぐな背中もいずれは曲がる、黒々とした髭もいずれは白くなる、巻き毛の頭もいずれは禿げる、美しい顔もいずれは皺だらけになる、つぶらな瞳もいずれはうつろになる、だが誠実な心だけはな、ケート、太陽や月のように不変だ、いや、太陽のようにであって、月のようにではない、満ちたり欠けたりせず、つねに燃えるように輝き、つねに正しい軌道を守るのだから。そういう男を夫にしたいなら、私を選ぶがいい、私を選ぶことは武人を選ぶことであり、武人を選ぶことは国王を選ぶことだ。この私の愛に、きみはどう答えてくれるのだ？ 聞かせてくれ、美しいケート、美しい愛の返事を。

204

ポーシア

バッサーニオ様、私はあなたのお目にうつる
ただそれだけの女です。私一人のためならば、
これ以上の私になりたいなどとあだな望みを
もつ私ではありません、でもあなたのために、
このままの私より百倍もりっぱな女でありたい、
一千倍も美しく、一万倍も金持ちでありたい、
そう思います。

美德も、美しさも、財産も、お友だちも、あなたに
できるだけよく思われたいというただそれだけのために
できるだけ多ければと願うのです。でもいまの私は
あるかぎりのものを集めてみても限りがあります、
一口で言えば、教養も教育も経験もない小娘です、
ただしあわせなことに、まだ学んで学べないほど
年をとってはいません。もっとしあわせなことに、
学んで覚えられないほど愚かな性質でもありません。
そしてなによりしあわせなことに、あなたのお心に
すべてを捧げる従順な心をもっています、これからは
あなたこそ私の主人、私の支配者、私の王様です。
私自身も私の所有するいっさいも、こうして
あなたのものに。いままではふつつかな私が
この邸の所有者であり、召使いたちの主人であり、
私自身の女王でした、でもいまは、いまからは、
この邸も、召使いたちも、私自身も、ご主人様、
あなたのものです、そのすべてに添えて、この指輪も。
もしこれをお捨てになったり、なくされたり、
人におやりになったりすれば、それこそあなたの愛が
滅び去った証拠、ただではすまぬと覚悟してください。
バッサーニオ

あなたは私からことばをすっかり奪ってしまった、
この血管を流れる血だけが思いを伝えてくれよう。
私の心の働きはなにも考えられぬほど混乱している、
たとえば、国民に愛されている国王が、壇に立って
すばらしい演説をしておわったとき、喜び騒ぐ
群集のあいだに見られるような混乱だ、そこでは
一つ一つには意味のあることばが、入り乱れて
巨大な無意味の騒音と化し、明瞭なのは不明瞭な
喜びの渦だけになってしまう。とにかく、この指輪が
私の指から消えるときは、私からいのちが消えるとき、
そのときは叫んでいただこう、バッサーニオは死んだと。

205

早く、早く、炎の脚の若駒たち、
日の神フィーバスを今宵の宿まではこんでおくれ。
その御子フェイトンが西をめざして鞭をふるえば
たちまち暗い夜をもたらしてくれるだろうに。
恋の成就を助ける夜よ、厚い帳を広げ、
うろつく人の目をかくしておくれ。ロミオが
だれはばかりことなくこの腕にとびこめるように。
恋するものは、みずからの美しさを燈火に、
恋の闇路を照らすもの、またもし恋が盲目なら
夜の闇こそふさわしい。来ておくれ、謹厳な夜、
黒一色のいかめしい喪服の未亡人よ、
汚れなき操を二つかける勝負に
勝ちながら負けるすべを教えておくれ。
この頬に人馴れぬ鷹のようにはばたくうぶな血を、
黒いマントで包んでおくれ。内気な愛が勇気を得、
まことの恋の営みをつつましい行為と思うように。
来ておくれ、夜、来ておくれ、ロミオ、夜の日光、
あなたが夜の翼にはこばれるお姿は
烏の背に降りつもる雪より白く輝く。
来ておくれ、やさしい夜、黒い顔した愛の夜、
そしてロミオを私におくれ。ロミオが死んだら
返してあげる、切りきざんで小さな星にするといい。
そうすればロミオは夜空を美しく飾り、
地上の人という人は夜を愛するようになり、
ギラつく太陽をうやまうことをやめるだろう。
ああ、私は恋の館を買ったというのに、
まだ住んでいない。この身を売ったというのに、
まだ使ってもらえない。今日一日の長々しさ、
祭りの前の夜、新しい服を作ってもらったというのに、
まだ着せてもらえずいらしている
子供のよう。

206

おのれからへだてている寢室の扉のそばに来たのだ。
扉にはもろい掛金が一つかかっているだけ、
美わしきものを手にいれる妨げはほかには何もない。

207

まずその寢室だが――

実はそこにいて一睡もしなかったのだが、あの部屋は寝るのがもったいないようなものだった——壁には絹地に銀の糸で刺繍した壁掛けが掛かっていた、その図柄は誇り高きクレオパトラがアントニーと出会う場面で、シドナス河の水が、群がる船のためか、誇りのためか、兩岸にあふれんばかりになっている。いや、まったく、そのみごとな細工と、高価な材料とが、いずれが上か競いあっているような逸品だ。

部屋の南側には暖炉があって、その装飾は、清らかな月の女神ダイアナが水浴している図だ、一瞬、本物の女神が現われたかと思ったよ。あれを彫った彫刻師はもの言わぬ第二の自然というか、いや、自然以上だ、動かず、息をしないだけで。

部屋の天井には金色の天童たちが浮き彫りにされている。そうだ、言い忘れたが、暖炉の薪架は、銀でできている盲目のキューピッド一対だ、それぞれ松明にもたれ、片足で姿よく立っている。

208

いや、おれはあの人の門の前をうろついていた、地獄の川の渡し場で舟を待つ亡者のように。

209

今夜誓約をかわすことは嬉しい気持ちになりませんの。あまりに無鉄砲、あまりに無分別、あまりに唐突、「光った」というまもなく消えてしまう稲妻にあまりにも似ています。いとしいかた、おやすみ。この恋の蕾は、夏のはぐくむ息吹をうけて、今度お会いするときは美しい花となっていましょう。おやすみ、おやすみ、私の胸のうちにある甘美なやすらいが、あなたの心にも訪れますよう。

210

ああ、ありとあらゆる感情が空に消えて行く、胸をしめつける疑惑も、お先走った絶望も、身をふるわせる不安も、緑色の目をした嫉妬も！残るのは恋だけ！恋よ、落ちついて、有頂天にならないように。喜びの雨を静かに降らせて、度をすごさないように。私のしあわせは大きすぎる、もっと小さくして、この胸がおしつぶされないように。

211

トロイラス
ああ、目がまわる、期待がおれの心をぐるぐるまわすのだ。甘美な味を胸に思い描くだけでもう感覚がとろけてしまいそうだ。どんなだろう、恋の芳醇なうま酒を実際にこの舌で味わったら？死ぬんじゃないか、気が遠くなって狂うんじゃないか、それともその甘い快感はあまりにもすばらしく、

あまりにも微妙で、あまりにも鋭いため、
おれのような粗野な感覚では味わえないんじゃないか。
ああ、心配だ。それにまた嬉しすぎて、逃げる敵を
夢中になって追いかける時のように、なにもかも
わからなくなってしまうんじゃないか。それもまた
心配になる。

パンダラス

姪は支度をととのえて、すぐにまいります。嬉しがるような言葉をかけてやってください
よ、なにしろあれは恥ずかしがり屋で、幽霊にでも会ってびっくりした時のように息をは
ずませています。いま連れてきますからね。まったくかわいらしいやつで、捕まったばかり
の雀のように息をはずませています。

トロイラス

同じ熱い思いがこの胸をしめつけている、
心臓が熱病のときの脈よりも早くうっている、
からだじゅうの力が抜けてしまったようだ、
まるで卑しいものが不意に国王のまなざしに
捕らえられたかのように。

212

私自身の懸念も、あるいは未来をあれこれ夢見て
その成り行きを推量する世間の人々の予感も、
私の真実の愛について、いずれは運命に返すべきもの
とわかってはいても、その期限を定めることはできない。

213

うれしい夢を正夢と信じていいなら、
今日の夢は喜ばしい便りがとどく前兆。
わが胸のあるじなる恋は軽やかに玉座にあり、
今日一日つねならぬ心の喜びに
おれの足はおちおち大地につかぬありさま。
あの夢、ジュリエットが来るとおれが死んでいる——
奇妙な夢だ、死んだ人間が考えたりするのだ——
そしておれの唇に日づけしていのちを吹きこむ、
おれは生き返り、やがて帝王となる。
ああ、恋がわがものとなればどんなにうれしいことか、
恋の影だけでもその喜びはこれほどゆたかなのだ。

214

これはまさしく恋ゆえの狂気、
その激しさはみずからを破滅に導き、
自暴自棄なふるまいを招きかねない、
人の身をそこねるとどんな激情といえども
かなわぬほどだ。

215

ああ、この嬉しさ！
嵐のあとに必ずこのようなやすらぎが訪れるなら、
風よ、死人の目をさますまで吹きまくるがいい！
怒濤にもてあそばれる船がオリンポスの山より高く
登りつめたかと思うと、たちまち地獄の底まで
まっさかさまに落ちようとかまうものか！ このおれは、
いま死ぬことができれば一番しあわせかもしれぬ。

おれの魂はこの上なく満ちたりているので、これからはかり知れぬ生涯に、二度とこのような喜びが訪れるとはどうしても考えられないのだ。

216

この胸を切り裂いてくれ、いますぐ苦痛を与えてくれ、さもないと歓喜の大波がおれの頭上にどっと崩れ落ち、いのちの防波堤を突き破り、そのしあわせな渦に巻かれておれは溺れてしまうだろう。

217

ああ、私の大事な大事な大事な従妹、私がどんなに深く恋の淵に落ちこんでしまったかあなたにわかってもらえたら！でもそれを測ることはできないわ、私の恋は底が知れないほどなもの、ポルトガルの海のように。

218

トロイラス

クレシダ、私は真心こめてあなたを愛している、そのために神々を怒らせてしまった。この冷たい唇が祈りの言葉をつぶやくときよりはるかに熱烈にあなたを思っているの、神々があなたをとりあげるのだ。

クレシダ

神様にもねたむ心はあるのかしら？

パンダラス

ある、ある、それはもう疑う余地はない。

クレシダ

私がトロイに別れなければならぬって、ほんとう？

トロイラス

恨めしいがほんとうだ。

クレシダ

ではトロイラスにも？

トロイラス

トロイにも、トロイラスにも。

クレシダ

ああ、そんな。

トロイラス

しかもますます。意地悪な運命が、別れのあいさつも許さず、猶予の時も与えず、再会を約そうとしても二人の唇から荒々しくその約束を奪いとり、固く抱きあおうとしても二人の腕をむりやり引き離し、愛を誓おうとしてもその言葉が生まれる寸前に息の根を止めてしまうのだ。

何千たびも溜息をついてやっと結ばれた二人も、引き離されるときはどうだ、あっけない溜息一つでたちまちわが身一つとなる。意地悪な「時」はあわてふためく泥棒よろしく、盗みとった品々を手あたり次第になにもかも袋につめこんでいる。

空に輝く星の数ほどの別れの言葉は、ひとことひとことキスの判を押してたしかめなければならないのに、

「時」のやつ、口ごもりながらのたった一度のさようならと、息もたえだえなたった一度のキスしか許してはくれぬ、それも嗚咽の涙にくれながらの苦いキスだ。

219

ジュリエット

もういらっしゃるの？ 朝はまだまだなくてよ。
あれはナイチンゲール、ヒバリではなくてよ、
あなたのおびえていらっしゃる耳に聞こえたのは。
毎晩鳴くの、むこうのあのザクロの樹にきては。
ほんとうよ、ほんとうにナイチンゲールだったのよ。

ロミオ

あれはヒバリ、朝の到来を告げるさきぶれだった、
ナイチンゲールではない。ごらん、あの東の空、
意地悪な光の縞が雲の裂け目を縁どっている。
夜空のまたたく燈火は燃えつき、楽しげな朝が
霧に浮かぶ山々の頂きに爪先立ちしている。
もう行かねば、生きるべく。とどまれば死ぬのだ。

220

さようなら！あなたは私が所有するには貴重すぎる、
その価値はあなたもきっとわかっているでしょう。
高貴な地位にともなう特権があなたを解放します、
あなたを束縛する私の証書は期限が切れました。

221

クレオパトラ

いいえ、ご出立の口実などお捜しにならないで。
さようならと言って出てお行きなさい。ここにいたい、
と仰せのときにはことばも必要だった、出て行く、
ということば以外は。私たちの目と唇には
永遠があった、眉には祝福があった、五体には
そのすみずみまで天上の清らかさがあった、それは
いまでもそう、でなければ最高の武人であるあなたが
最高の嘘つきということになる。

アントニー

どうしたのだ、女王！

クレオパトラ

ああ、あなたと同じ背丈がほしい、そしてあなたに
エジプトの女王にも魂があることを見せてやりたい。

アントニー

これでお別れだ、女王。

クレオパトラ

ね、ちょっと一言。

二人は別れなければならない、いえ、そんな話ではない、
二人は愛しあってきた、いえ、そんなことでもない、
それはもうご存じのはず、私が言いたいのは――
ああ、私の忘れっぽさときたらアントニーそっくり、
すっかり忘れてしまった。

アントニー

女王であるあなたが

その気まぐれを臣下のように抑えきれぬとあらば、
あなたを気まぐれそのものと思うだろう。

クレオパトラ

気まぐれでも

クレオパトラのように胸に固く抱きしめているのは
どんなにつらいことか。でも、どうか許して。
私の魅力も、あなたの目にこころよく映らぬときは、
かえってわが身の仇となる。あなたがお立ちになるのは
名誉のため、それならあわれむものとてない私の
愚かなことばには耳をかさず、神々の恵みを受けて
お立ちなさい。あなたの剣には栄誉の月桂樹が飾られ、
あなたの足もとには勝利の花がまかれますよう！
アントニー
さ、奥へ。別離とはいえ残りもすれば去りもする、
あなたはここに残るが私とともに行くのだし、
私は去って行くがあなたとともにとどまるのだ。
さ、行こう！

222

あなたから離れているあいだ、季節は春でした、
華やかなまだら模様の（晴着をつけた）四月が
万物に青春のはずむような息吹きを送りこんだので、
陰気な農耕神さえいっしょに踊り浮かれたほどでした。
だが小鳥たちの歌を聞いても、色とりどりに咲く
花それぞれの甘い香りをかいても、私は
楽しい夏物語を語る気にはなれなかったし、
咲き誇る花床から花を摘む気にもなれませんでした。
また、純白の百合を讃嘆することもなく、
深紅のバラを称讃することもありませんでした。
この花々は甘く香るだけのもの、喜びの模写、
あなたをモデルにして描いたあなたの似姿にすぎません。
だが私には永い冬に思われ、あなたがいらないから
あなたの影と思って花々とたわむれたのでした。

223

早咲きのスマレを私はこう言って叱りました——
「香りゆたかな盗人よ、その甘い香りをどこから盗んだ、
わが愛する人の息からだろう？そのやわらかな頬の
うるわしい華やかな色も、わが愛する人の
血管にひたして染めあげたものだろう？」
私はまたあなたの手の白さを盗んだなと百合をとがめ、
あなたの髪の色を盗んだなとマヨラナを責めました、
バラの花は恐れおののいて不安の棘の上に身をおき、
恥に顔を赤らめたり絶望で真白になったりしていました。
赤でも白でもない第三のバラは両方から色を盗み、
さらにあなたの息まで盗品の一つに加えたのですが、
その盗みの罰を受けてか、青春の花のさかりに
復讐心に燃える害虫に食いつくされ、死にました。
まだまだ多くの花を私は見てきましたが、どれもこれも
あなたから香りや色を盗んだものばかりでした。

224

でも、苦しくはあっても楽しかった、
しょっちゅうあのかたのお顔を見て、おそばにすわって、
あの弓形の眉を、鷹のような目を、美しい巻き毛を、
この胸のキャンバスに描き写すことは——お顔の特徴を

一点一画もゆるがせにせず写しとることのできるこの胸に。
あのかたもいまは行ってしまわれた、私の恋心は、ただ
その思い出を偶像のように拝むしかない。

225

最初に私をあなたの奴隷にしたもうた神にかけて、
私はあなたの快樂の時を制限しようと考えたり、
その時間をどう使ったか問いつめたりはしません、
下僕としてご都合のままにお仕えする身ですから。
私は（お心に従う身ですから）独房に閉じこめられ、
あなたがご自由に歩いてもかまいません。
忍耐力を養い、あなたの不当な仕打ちを責めずに
その一つ一つを黙って受け入れることにしますから。
どうぞ好きなところにおいでなさい、あなたの特権は
強大であり、ご自分の時間をお望みのままに
割り当てることもできるし、ご自分の犯した罪を
ご自分で許す権利だっておもちなのですから。
待つことが地獄であろうと私は待たねばなりません、
あなたの快樂が善であれ悪であれとがめはしません。

226

早足で過ぎ行く歳月に喜びをもたらすものよ、
あなたから離れているあいだ季節はまるで冬でした！
どんなに凍える思いをし、暗い日々をすごしたことか！
どんなに老いた十二月の枯野ばかり目にしたことか！

227

クレオパトラ

マンダラゲを飲ませて。

チャーミアン

なぜそのようなものを？

クレオパトラ

私のアントニーがいないこの長い退屈な時間を眠ってすごしたいの。

ああ、チャーミアン、

あの人はいまどこかしら？立っているかしら、

すわっているかしら、歩いているかしら、馬の上かしら？

ああ、しあわせな馬、アントニーを乗せているとは！

りっぱにお役に立つのだよ！おまえが乗せているのは

この地球の半分を背負って立つ巨人、全人類の

剣であり胃であるかた。いまこう言って、あるいは

つぶやいているかもしれない、「わがナイルの蛇は

どこにいる？」と。いつもそうお呼びだったから。

ああ、甘い毒をなめる心地。考えていてくださるかしら、

日の神フィーバスにかわいがられて肌をこがし、

時の手で皺を刻まれた私のことを？額の秀でた

ジュリアス・シーザーがこの世にあったとき、私は

帝王にふさわしい供え物だった。大ポンペーも

その目を私の額から離さず、そこに視線の錨をおろし、

彼のいのちである私を見つめたまま死んでもいい、

と言いたげだった。

アレクサス

エジプトの女王にごあいさつ申し上げます。

クレオパトラ

マーク・アントニーとは似ても似つかぬおまえか！

でもあの錬金術師のもとから帰ってきたので、

おまえまであのと同じ金色に輝いて見える。

私のマーク・アントニーはどうしておられる？

アレクサス

あのかたは、女王、最後に口づけを——何度となく
くり返したあげく最後の口づけを——この東方の真珠に。

そのときのおこばが私の胸にこびりついております。

クレオパトラ

この耳でもぎとりたい。

アレクサス

こう仰せでした、「頼む、

心変わらぬローマ人より偉大なるエジプトの女王に

この真珠を贈ると伝えてくれ。さらにこう言うのだ、

このささやかな贈り物は手付けにすぎぬ、いずれはその

ゆたかな王座にかずかずの王国を捧げ、東方諸国すべてを

女王の支配下に加えようと」そしてうなずかれると、

悠然と駿馬にうち乗られましたが、馬のいななきに

私の申しあげたいこともうち消されてしまいました。

クレオパトラ

で、あの人は沈んでいた、それとも陽気だった？

アレクサス

季節で言えば炎熱と酷寒の中間にあたりましようか、

沈んでもおられず、陽気でもないご様子でした。

クレオパトラ

ああ、なんて調和のとれたご気性！それでこそ、

それでこそ、あの人よ、チャーミアン、いいこと。

あの人は沈んではいなかった。その顔色に一喜一憂する

兵士たちに、晴れやかなお顔を見せたかったから。

あの人は陽気でもなかった、それはそのお心が

喜びの泉である私とともにエジプトにある証拠。

それでその中間とは。まるで天使のようなお心ばえ！

あなたにはどんなに激しい喜びも悲しみもよく似合う、

ほかのだれにもまねはできない。

228

あなたの奴隷である私は、あなたのお望みのまま

いついかなる時でもお仕えするほかありません、

あなたがお命じにならぬかぎり、私には

費すべき時間もなすべき仕事もありません。

また（わが主君よ）、あなたを待って時計を見ても、

私ははてしなく続く時間を責めはしません、

またあなたがこの下僕に別れを告げ出て行っても、

あなたのいないつらさをいとわしいものとは思いません。

またあなたがどこにいるのか疑い深く尋ねたり、

どんなご用なのかあれこれ邪推したりもしません、

まじめな奴隷にふさわしく、あなたが周囲の人々を

どんなにしあわせにしているか想像するのみです。

愛は忠実な愚か者だから、欲望のおもむくまま

あなたがなにをなさろうと悪いとは思いません。

229

私が死んでも、あまり長くは嘆かないでください
せいぜい、陰々滅々たる鐘が鳴り渡り、
私が卑しいこの世を去ってさらに卑しい蛆虫と
あの世へ行ったらと告げるまでにしてください。
この詩を読んでも、書いた手は思い出さないでください、
私はあなたをあまりにも愛しているので、私を思っ
て嘆いたりされるとつらいのです、それよりむしろ
やさしい思いの中に私のことは忘れてください。
ああ、（いいですか）あなたがこの詩を読むとき
私は（おそらく）土といっしょになっていますが、
あわれな私の名前を口にすることさえせず、
あなたの愛を私のいのちとともに朽ちさせてください。
こざかしい世間があなたの嘆きをのぞき見て
死んだ私のことであなたを嘲笑ったりしないように。

230

と申しますのも、
人間はとかく、わが手のうちにある大事なものを、
値うちどおりには認めぬもの。手を離れてはじめて、
その価値に気づき、手もとにあったとき、
自分のものであるがゆえにかくされていた、
美点が見えてくるのです。クローディオ伯爵も同じこと、
自分の言葉ゆえにお嬢さんが亡くなったと聞けば、
在りし日の面影が、もの思いにふける伯爵の心に、
なつかしくもひそかにしのびよって、
その愛らしい姿のはしばしまでが、
生きておいでのときよりさらに美しい
装いをまとい、さらにいじらしく、
さらに生き生きと、伯爵の心の目に
浮かびましょう。

231

彼女を愛したというそのことばで、最後の決算から
数十の罪が削除されよう。だが、遅すぎた愛は、
手おくれになった許しと同じく、「世を去ったものは
善き人であった」と叫んで、いたずらに当の本人に
痛恨をおぼえさせるのみだ。われわれ人間は、
無分別にも手のうちにある大切な宝を軽んじ、
墓に収めてはじめてその真価を知ることが多い。
不当にも憎しみに駆られて友人を亡きものにし、
あとになってその死骸の上に涙を注いだりする。
恥知らずにも憎しみがなした行為にたいし、
愛は目覚めて泣くが、憎しみはのうのうと寝て暮らす。

232

男は恋をささやくときは四月だけど結婚すれば十二月、娘も娘でいるあいだは五月だけど人
妻になれば空模様が一変する。私はあなたにやきもちをやくでしょう、バーバリー産の雄鳩
が雌鳩にやく以上に激しく。そしてやかましくわめき立てるでしょう、雨が降る前のオウム
以上にうるさく。それに新しいものを次から次にほしがるでしょう、ものまね猿以上に気ま
ぐれに。またなんの理由もないのに噴水のダイアナ像のように泣き出すでしょう、それもあ
なたが陽気になりたいという気分のときに。あるいはハイエナのように笑い出すでしょう、

それもあなたが眠りたいという気分のときに。

233

かりに今日、私が妻を迎えたとすれば、
私は自分の欲望の導きによって妻を選びます。
欲望に火をつけるのは目と耳です、この二つは
欲望と分別のあいだに横たわる危険な海の水先案内ですから。とすれば、欲望がいったん妻と選んだものを、あとでいやになったからといって避けるわけにはいきません、そこから逃げ出して名誉を保つことはできないのです。われわれは商人からいったん買いとった絹をよごしたあとで返したりはしないし、あるいは満腹したからといって手をつけていないごちそうをわざわざ屑籠に捨てたりもしません。

234

まあ、あなた、なぜそのようにいつもお一人で？
私にどんな落ち度があるのでしょうか、この二週間、
夫ハリーのベッドから遠ざけられねばならぬような？
どうかおっしゃって、いったいなにがあなたから
食欲も、快楽も、安眠までも奪ってしまったのです？
なぜ下ばかり向いていて、一人でおいでのときなど
突然ハッと驚いたように立ちあがったりするのです？
なぜ、生き生きとしたお顔の色もなくしてしまい、
妻への愛と夫にたいする妻の権利とを私からとりあげ、
うつろな物思いととげとげしい憂鬱に沈むのです？
ときどき浅い眠りに入っても、おそばで眠られぬまま
聞いていると、うわごとのようにつぶやくのは
激しい戦のこばかり。はやる軍馬に号令をかけたり、
「ひるむな！進め！」と大声を出したり、
突撃だの、退却だの、塹壕だの、テントだの、
逆茂木だの、橋頭堡だの、胸壁だの、あるいは
バジリスク砲、キャノン砲、カルヴァリン砲、
捕虜の身代金、戦死した兵士、といったような、
なまなましい戦闘のこのみ口走っておいでになる。
そのようにあなたのお心のうちに戦いがあればこそ、
そのようにおやすみの最中にもお心が乱され、
額には、いまかき乱されたばかりの川面に浮く
泡のように、大粒の玉の汗が浮かびあがり、
お顔には、突然重要な命令を与えられた人が
思わず息を飲むときに見られるただならぬ表情が
見受けられるのです。これはなんの前兆でしょう？
なにか容易ならぬことを考えておいでにちがいない。
ぜひ聞かせてください、私を愛してくださるならば。

235

ポーシャ
あなた、
お願い、どうかお悩みのわけを私にうちあけて。
ブルータス
からだのぐあいがよくない、それだけだ。

ポーシャ

ブルータスは賢いおかた、おからだが悪ければそれをよくする手段を考えようとなさるはずです。

ブルータス

だから考えている。さ、ポーシャ、やすむがいい。

ポーシャ

ブルータスがご病気？胸をはだけて歩きまわり、じめじめした夜明けの空気を吸うことが、おからだにいいとでも言うのですか？ ブルータスがご病気？

それなのに健康のもとであるベッドを脱け出し、からだによくない夜の空気に身をさらすとは。

風邪でもひいてますます病気をつのらせようという

おつもりですか？ いいえ、ブルータス、

あなたのご病気のもととはあなたのお心にある、

妻という名と権利にかけて、私はそれを

知らなければなりません。こうしてひざまずいて

お願いします、昔ほめてくださった私の美しさと

あなたの愛の誓いにかけて、また私たちを結びつけ

一身同体としてくれたあの神聖な誓約にかけて、

どうか私に、あなたの半身に、つまりあなたご自身に、

うちあけてください、なぜふさいでおいでなのか、

今夜訪ねてきたのはなにものなのか。たしか六、七人、

暗闇にさえもお顔をかくした人たちがここに

おみえでしたが。

ブルータス

立ってくれ、やさしいポーシャ。

ポーシャ

立ちもしましょう、あなたがいつもの

やさしいブルータスであれば。結婚の約束のなかに、

あなたに関する秘密を妻の私が知ってはならぬという、

そんな条項がありまして？私があなと一体なのは、

いわば条件つきであって、ただ食事をともにし、

閨のお伽をし、ときには話し相手になるという、

それだけのことなのですか？ 私はあなたの愛の

本宅にではなく、街はずれに住んでいるのですか？

であればポーシャはブルータスの娼婦です、妻ではなく。

ブルータス

なにを言う、おまえこそおれのまことの妻だ、

この悲しい心臓を訪れる真赤な血潮にも劣らぬ、

大切なおれのいのちだ。

ポーシャ

そのおことばがまことなら、あなたの秘密を

私に教えてくださっていいはずです。たしかに私は

女です、でもブルータスが妻に選んだ女です。

たしかに私は女です、でもケートーの娘として

恥ずかしくないだけの評判をえている女です。

このような父をもち、このような夫をもつ私を、

世間並みの弱い女としか思いにならないのですか？

私はうちあけられた秘密を洩らす女ではありません。

私の心の固さは前にはっきり証拠をお見せしたはず、

そう、この手でここに、この太股に、傷を負わせて。

その痛みにじっと耐えた私が、夫の秘密をじっと

守りとおせないとも思っていますか？
ブルータス
ああ、神々よ、
私をこのりっぱな妻にふさわしい夫にさせたまえ。
あ、あれは！戸をたたいている。ポーシャ、
しばらく奥へ行ってくれ。すぐにもおまえの胸に
おれの心の秘密を託すつもりだ。
おれが交わした誓約を、この額に刻まれた
悲しい文字の意味を、すっかり話して聞かせよう。

236

トロイラス
ああ、私はこう思っていたものだ——
女の心のなかでは、たとえばあなたの心のなかでは、
愛の燈火は永遠に燃えつづけ、貞節の美德は
美しい容貌よりも長く若き日の誓いをまもり、
血は老いていっても胸のうちは日々に新たに
熱い思いを若返らせることができるだろうと。
また、こうも自分で思いこもうとしたものだ——
私のほうであなたに誠意と真実をつくせば、
あなたのほうも私にそれにひとしいだけの
純粋な愛をもってこたえてくれるだろうと。
そう考えて有頂天になっていたものだ。だが、ああ、
私は正直の上にばかりつくほど単純だった、
赤ん坊より単純なほど正直言っただけだった。

クレシダ

その点なら私も負けないわ。

トロイラス

それはいい、
正直と正直がどちらが正直かを争う勝負となるぞ。
未来の正直な若者たちは、恋の真実を証明するとき
きっとトロイラスの名を口にしよう。そして、
愛の誓約やおおげさな比喻にみちた詩を作るとき、
真実のたとえに使いふるされた文句、たとえば、
「まことなること鋼鉄のごとく、草木の月にたいするごとく
太陽の昼にたいするごとく、鳩のつれあいにたいするごとく
鉄の磁石にたいするごとく、地球の中心にたいするごとく」
その他さまざまな比喻を並べたあげく、最後に
恋の真実の正当な証として、その詩を清めるために、
「まことなることトロイラスのごとく」と結ぶだろう。

クレシダ

どうかあなたの予言があたりますよう。
私だって髪の毛一筋ほどでも真実を裏切れば、
時がわれを忘れるほど年老いても、
雨垂れがトロイの石畳に穴をあけても、
暗黒の忘却が町々を飲みこんでも、
強大な国々があとかたもなく消えはて
塵と化しても、長く記憶にとどめて、
恋する不実な娘たちの不実な口から口へ
私の不実をなじらせるといいわ、不実のたとえに、
空気だの、水だの、風だの、砂丘だのもち出し、
「狐の子羊にたいするごとく、狼の子牛にたいするごとく、

豹の雌鹿にたいするごとく、継母の子供にたいするごとく」
など並べたあとに、不実の心臓にとどめを刺すように、
不実なることクレシダのごとくと言わせればいいわ。

237

つつしみ深い乙女にとっては、美しい肌を
月に見せることさえ恥ずかしい行為だ。
貞女の鑑といえども世間の中傷はまぬがれぬ。
春の若草も、まだその蕾が開かぬうちに
虫に食われて枯れはてることが多いし、
清らかな朝露も、おりたばかりのときに
毒気が狙いをつけてしのびよるものだ。
だから気をつけろよ。身をまもるには用心が第一だ、
青春はほうっておいてもおのれにそむくのが大好きだ。

238

自然は
いっさいのものを正当な所有者に返すことを要求する、
ところで、いっさいの人間関係にあって、
夫ほど妻の正当な所有者はあるまい。したがって、
この自然の法則が人間の欲情に破られたり、
偉い人が盲目的な欲望におのれを失い、
勝手にこれをねじ曲げたりする場合にそなえて、
秩序ある国家には必ず国法がある、それが
自然の法則にそむく度しがたい欲望にたいし、
暴れ馬を制する轡の働きをするのだ。

239

まあ、いけないわ、そのように眉をひそめ、
そのように蔑みの色を目に浮かべるのは。それは
あなたのご主人を、王様を、支配者を、傷つけるし、
あなたの美しい顔を霜が牧草を荒らすように汚すし、
あなたの名声を風が蕾を散らすようにだいなしにする、
どう見てもあなたにふさわしいやさしい顔ではないわ。
怒った女はかき乱された泉のようなもの、泥だらけで、
濁って、汚らしくて、清らかさは消え失せてしまう。
そうなればどんなに喉のかわいた人でも、口をつけて
飲む気にはなれないでしょう、たとえ一滴でも。
夫は私たちの主人、私たちのいのち、私たちの保護者、
私たちの君主なのよ、だって私たちのためを思い、
私たちが安楽に暮らせるよう、身を粉にして、
海に陸に働き続けているのだから。嵐の夜も、
寒風吹きすさぶ昼も、休む暇さえ惜しむように。
私たちが家でぬくぬくと手足を伸ばしているあいだも。
それなのに私たちに求める貢ぎ物といえば、ただ
愛と、やさしい顔と、従順な心と、それだけ。
借りはこんなに大きいのに支払いはほんのわずか。
そこで、妻が夫にたいして負っている義務は、
臣下が主君にたいして負うのと同じものになり、
妻がわがままで、ひねくれて、不機嫌な顔をして、
夫の正しい意志に従順に従おうとしないならば、
とりもなおさず、思いやりのある君主にたいする

不逞の反逆者、忘恩の謀反人になるわけです。

240

昔はあなたがすすんでお誓いになったものだわ、
あなたが耳にして音楽と聞こえるものはない、
あなたが目にして喜びとなるものはない、
あなたが手にしてこころよい感触はない、
あなたが口にしておいしい味わいはない、
もし私の声、姿、愛撫、料理がなかったら、などと。
それがどうして、ねえあなた、どうしてこのように
あなたご自身を他人あつかいなさるようになったのです？
あなたご自身なのですよ、この私は。だって私は
自分には他人だけど、あなたとは心も一つ身も一つ、
あなたの魂ともいのちとも言うべきものでしょう。
ああ、どうかあなたご自身を私から引きはなさないで。
だって私から私を残してあなたご自身だけを
引きはなそうとするのは、白波嚙む海のなかに
一滴の水を落として、それをそのまま
増えも減りもしないもとの姿で、また
海から引きはなそうとするようなもの。

241

イアーゴー

お気をつけなさい、将軍、嫉妬というやつに。
こいつは緑色の眼をした怪物で、人の心を餌食とし、
それをもてあそぶのです。たとえ女房を寝とられても
それを運命とあきらめて、不実な女への愛を
思い切ることでできる亭主はしあわせというべきです。
だが、ああ、一瞬一瞬が地獄の苦しみでしょうな、
愛してなお信じえず、疑ってなお溺愛する男は！
オセロー

ああ、みじめだろうな！

イアーゴー

貧しくても心満ちたりたものは富んでいます、十分に。
かぎりない富をもつものもいつ貧しくなるかと
つねに怖れをいただけば、冬枯れのように貧しいと言えます。
あらゆる人々の魂がどうか嫉妬にだけは
毒されませんように。

オセロー

なぜ、なぜそのようなことを言う？

なにを考えているのだ、このおれの生涯が嫉妬に毒され、
月の満ち欠けとともに新たな疑惑にさいなまれるだろう
とでも言いたいのか？ ばかな。おれは一度疑えば
一度に晴らす男だ、女々しい山羊ではない。
この魂の働きをおまえがほのめかしたような
たわいのない絵空ごとの臆測におけたりするか。
おれはそう簡単に嫉妬にかられはせぬぞ、
いくら妻のことを美しいとか、人づきあいがいいとか、
話上手だとか、歌や踊りがうまいとか言われてもな。
貞淑であればそのような美点は貞淑に花をそえるものだ。
それにまたおれは自分に弱点があるからといって、
あれが裏切りはせぬかと怖れたり疑ったりはせぬぞ。

あれは自分の目でおれを選んだのだ。いいか、イアーゴー、おれはまず見てから疑う、疑えば証拠をつかむ、証拠をつかめば、とるべき道は一つだ、ただちに愛をすてるか、嫉妬をすてるかだ！

242

「なぜなら愛が君臨するところでは、心をかき乱す疑懼が愛情の歩哨と自称しているからだ。疑懼は偽りの警報を伝えて騒擾をそそのかし、平和な時のさなかに『それ撃て、殺せ！』と叫んで、優しい『愛』をかき乱して情火を冷却させる、風と水が烈火を鎮めるように。この不機嫌な告発者、この争いを育む間諜、愛のかよわい若芽を蝕むこのしゃくとり虫、この言いふらすおしゃべり、不和の種を蒔く疑懼、あるときは真実を知らせるが、ときには偽りのしらせをもたらすこのおしゃべりの疑懼がわたしの心臓を訪れて、わたしの耳にささやく、もしわたしがあなたを愛するなら、当然あなたの死を恐れなければならない、と。

243

でも嫉妬深い人はそれでは満足しないでしょう、理由があるから嫉妬するのではなく、嫉妬深いから嫉妬するんですもの。嫉妬というものはみずからはらんでみずから生まれる化け物です。

244

空気のように軽いものでも、嫉妬に狂う男には、聖書の言葉と同じ重みのある証拠の品となる。こんなものでも役には立つだろう。ムーアは早くもおれの毒にやられてまるで別人のようだ。邪推ってやつはそれ自体毒なんだ、そいつは初めのうちは特にいやな味もしない、ところが、ちょっとでも血の中に入りこむとたちまち硫黄の山のように燃えあがる。

245

この嫉妬はなにものにもかえがたいお妃ゆえのものだ、お妃がたぐいまれなおかただけにそれだけ嫉妬は強く、王が高貴な身分であるだけにそれだけ嫉妬は激しく、また、つねに親友をもって、任じていた男によって名誉を汚されたと思いこんでいるだけに、もちろん、それだけ王の復讐は苛酷なものとなるにちがいない。

246

あれの熱心さは度がすぎる。友情の交換も度がすぎると情欲の交換となる。この胸騒ぎはなんだ、心臓が踊り騒いでいるが、それは喜びのためではない、喜びではない。あの歓待ぶりはどうだ、無邪気な顔をよそおうのも、無遠慮にふるまうのも、やさしい心からの、ゆたかな胸のうちのからのものであって、女主人にふさわしいことかもしれぬ、それは認めよう。だが、ほら、あのように手のひらにふれ、指をつねるのは、

そして鏡にでもむかうように作り笑いを浮かべ、獲物を追う角笛のような溜息をつくのは、ああ、あのような歓待ぶりは気に入らぬ、寝とられ亭主のしるしである角をはやすのはまっぴらだ。

247

『疑念』というあの気むずかしい、喜ばれない客が、忍びこんで来て、宴を乱すことを恐れて。

248

ああ、結婚とはなんと呪わしいものか、かわいい女を自分のものと呼びながら、その心をものにすることはできぬのだ！ おれはむしろヒキガエルとなって穴蔵の湿気を吸っていたい、愛するものの心の片隅を大事にとっておいて他人に使わせるよりは。

249

もしおまえが結婚するというなら、持参金がわりに呪いの言葉をくれてやる。たとえおまえが氷のように貞潔、雪のように清浄であろうと、世間のかげ口はまぬがれぬだろう。

250

声をひそめてささやきあってもなんでもないと言うのか？ 頬と頬とをすり寄せても？ 鼻をくっつけあっても？ 唇を吸いあっても？ 笑いかけて、急にやめて、溜息をついても？——それこそまぎれもない不貞のしるしだ——それに、足と足とをからみあわせても？ すみでこそこそしても？ 一時間が一分のうちに過ぎ去り、早く昼が夜になればいいと願っても？ 自分たち以外の他人の目はすべてソコヒにかかってくれば、自分たちの犯す悪事が見られないですむのにとっても？ それでもなんでもないと言うのか？ とすればこの世は、そしてこの世にあるすべては、なんでもないのだ。大地をおおうこの大空もなんでもない、ボヘミアもなんでもない、おれの妻もなんでもない、なにもかもなんでもないのだ、もしこれがなんでもないのであれば。

251

おれは歌うぜ、だれでもが真実と思うあの歌を——結婚するのは運次第、間男されるは自然の法。

252

でも私の考えでは、妻があやまちを犯すとすれば、それは夫のあやまちなのです。夫がそのつとめを怠り、私たち妻に与えるはずの宝物をよその女の膝に注ぎこんだり、急にばかばかしい嫉妬に狂い、私たちを閉じこめたり、なぐりつけたり、腹立ちまぎれにお小遣いをへらしたりすれば、私たちにだって意地はあります、いくらやさしい女でも仕返しぐらいしたくなります。亭主どもに教えてやるといいのですわ、

女房だって感じかたに変わりはないって。ものは見えるし、
匂いはかげる、甘いからいの区別はつく、その点亭主と
同じだって。だいたいということなのでしょう、
亭主が女房からほかの女に乗りかえるのは？ 楽しみかしら？
そうだと思うわ。もって生まれた浮気っぽさかしら？
それもあると思うわ。身をあやまるのは意志の弱さかしら？
それもそう。とすれば、私たち女だって男と同じように、
浮気心も楽しみたい気持も意志の弱さもあるでしょう？
だったら私たちを大事にさせるか、いやなら教えてやることです、
私たちの犯す罪は、亭主どもの罪に教えられてのことだって。

253

涙流すな 嘆くな乙女
男心は 移り気なもの
今日は海辺に 明日は山に
求めさまよう 浮気もの
泣くな乙女よ 未練はすてて
明かるい笑顔を 作っておくれ
どうせ悲しい 人の世ならば
せめて楽しい ふりをしよう。
涙声にて 歌うな乙女
歌えば胸は ふさがれるもの
夏の青葉と 男の嘘は
切っても切れない 仲だもの
泣くな乙女よ 未練はすてて
明かるい笑顔を 作っておくれ
どうせ悲しい 人の世ならば
せめて楽しい ふりをしよう。

254

だってあんた、あたしに誓ったろう、半メッキの杯にかけてさ、うちのイルカの間で、円
テーブルにすわって、石炭の暖炉の前で、降霊祭の水曜日に、ほら、あんたが王子様に頭を
ぶち割られた日だよ、お父様の王様がウィンザーの歌うたいにそっくりだなんて言ったから
さ、あのとき、あたしがあんたの傷を洗ってやってたら、あんた誓ったじゃない、あたしと
結婚して奥方にしてやるって。嘘だ、なんて言えるかい？ そしたらそこへ肉屋のおかみさ
んのミセス・ポークが飛びこんできて、ねえ、クィックリーのおかみさん、って呼んで、少
しお酢を分けてもらえない？小エビをどっさりもらったのよ、って言ったもんで、あんたっ
たら、おれも少し食いたいな、なんて言い出すもんだから、あたし、小エビは生傷に毒よ、
って言ってあげたじゃない？そしてポークのおかみさんが階段をおりて帰ってしまったら、
あんたあたしに、今後はああいう下賤なものとは親しくするな、間もなくああいう連中から
奥様と呼ばれる身分になるんだぞ、って言ったじゃない？そしてあたしにキスして、三十シ
リングでいいからもってこい、って偉そうに言ったじゃない？さあ、聖書に手をおいて、嘘
だと言えるもんなら言ってごらん。

255

山の窪みに反響する隣の谷間の
悲しげな物語が山から聞える
この二重の声に私の心はほだされて
私は横になりその悲しい調べの物語に聞き入った。
まもなく青ざめた気まぐれな一人の娘を見た
手紙をさき指環を二つにこわし
悲しみの風と雨で自分の世界を荒しまわる。

頭には麦藁帽子をかぶり
日光をよけて顔を守っていた
その顔に時々見えたものは
破滅した一つの美の死骸に思われた。
「時」はまだそのうぶな若さをみな
刈り取ったのではなく、若さは残っていた
暴風雨にさらされたが或る美が枯老の窓からのぞいていた。
髪は結われてはいるが正しく編まれてもいない
飾り気のない結い方であった
髪毛が乱れて麦藁帽子からさがって
青白い痩せた頬にもたれていた
髪はまだ紐でしばられていて
だらしなくゆるく編まれてはいたが
型通り結ばれくずれてはいなかった。
彼女は手籠から無数の愛の贈物
琥珀や水晶や黒玉の珠などをとり出して
それを一つ一つ川の中へ投げこんで
泣きぬれる川の岸に坐った
高利貸しのようにぬれ手にぬれ手をかさね
また王様の手のように貧しい人が少しばかり願っても
恵んでくれないで、あり余る人が全部を願えば恵むのだ。
彼女は折った手紙を沢山もっていた
それを読んで、溜息して、破って川の流れに捨てた
歌を彫った金や角の指環を沢山割って
川底の泥の中に墓場をみつけよと言いながら捨てた
まだ他にも血で書いた沢山の文もあった
心を尽し愛をこめて絹のリボンを
巻いて美しく秘密らしく封印されたもの。

256

あの女が不実であれば、ああ、天はみずからをあざむくものだ。
おれには信じられぬ。

257

あの人のベッドで不義を働いた？不義ってなに？
ベッドにいて夜とおし眠らず、あの人に思いをはせること？
一時間ごとに涙を流すこと？ついうとうとして、
あの人の身に恐ろしいことが起こった夢を見て、
うなされて跳び起きること？それが不義なの？

258

ええい、毒草め、
おまえは愛らしく美しい、かぐわしい香りがする、
おかげで五感もうずく、おまえは生まれてこなければよかったのだ！

259

もう要りませんあの甘い
嘘をささやく唇は、
もう要りませんあの明るい
朝と見まごう両の目は。
だけど返してくださいな
私の捧げた口づけは、

どうぞ返してくださいな
むなしく捧げた口づけは。

260

いやいや、困った女です。
あの女の日も頬も唇もものを言う、それどころか
足まで話しかけるようだ。淫蕩な性質が
四肢五体の一挙一動に顔をのぞかせている。
ああ、あのような浮気女は口も達者なら
色事も達者だ、自分のほうから誘いをかけ、
好きそうな男ならだれにでもみだらな思いを
あからさまに見せつける。機会さえあれば
喜んで男のものになるいたずら娘だ。

261

ギリシアの王妃を連れ帰ったのです。その若さと新鮮さは
アポロも顔色なからしめ、オーロラも古びて見えるほどだ。
なぜ彼女を引き止めるか？ ギリシアが叔母を引き止めるから。
彼女は引き止める値うちがあるか？ ああ彼女こそは真珠、
それを求めて一千にあまる船が海に乗り出し、
王冠をいただく王たちが商人になりさがったほどだ。

262

あの女こそ国にたいして手ひどいことをしたのです。
いいですか、パリス、あの女の不貞の血一滴ずつのために
ギリシア人が一人ずつ死んでいるのです。あの女の
腐れ肉一オンスずつのためにトロイ人が一人ずつ
殺されているのです。だがあの女は口をききはじめて以来、
ギリシア人やトロイ人がいのちをすてていいような
りっぱな言葉を一度も吐いてはいないのです。

263

ヘレンこそは名誉、名声の的であり、
勇敢、勇壮な行為へとかり立てる拍車です。
そのとき示される勇氣は敵を打ち倒すに足り、
得られる名声は長く歴史にとどまるに足るのです。

264

「この戦争を惹き起こした娼婦のヘレンを見せておくれ、
この爪であの美しい顔をひき裂いてやるから。
愚かなパリスよ、燃えさかるトロイの町が担っているこの怒りの重荷は
お前の激しい欲情が招いたものだ。
お前の眼差が今ここに燃えあがる炎に火をつけたのだ。
そして、このトロイでは、お前の眼差が犯した罪ゆえに
父も、息子も、母も、娘も、死んでいくのだ。
「なぜ、ただひとりのひそやかな楽しみごとが
数多くの人々の公けの苦しみとならねばならぬのか。
ただひとりて犯した罪の報いは、
罪を犯した男の頭の上にのみふりかければいい。
罪のない人々を、罪によって生れた苦しみから解き放つがいい。
ただ一人を罰するために、なぜかくも数多くの人々が滅びねばならぬのか。
なぜ一人の罪の罰を、町の人々すべてが受けねばならぬのか。」

「ごらん、ここにヘキューバが泣き、ここにプライアムが死んでいる。
ここに雄々しいヘクターが倒れ、ここにトロイラスが悶絶している。
ここに友と友が枕を並べて血の河に横たわり、
友が心ならずも友を傷つけている。
ひとりの男の欲情がかくも多くの人々の命を破滅させるのだ。
プライアムが愛情に目を眩まされず、息子の欲望を抑えていたなら、
トロイは炎によってではなく、名声によって輝いていたろうに」

265

そんなことは信じないでください、女のためにも。
われわれにも母親がある。理由もなしに悪態をつく
わからず屋の悪口屋どもに、クレシダの例をもって
女性全体を非難する便宜を与えないでください。
それよりもいまのはクレシダではないと考えてください。
あれがあの人？ いや、あれはダイアミディーズのクレシダだ。
美しい女に魂があるとすれば、あれはあの人ではない。
魂が誓いをまもるとすれば、誓いが聖なるものとすれば、
聖なるものが神々の喜びたもうものとすれば、
一がーであって二でないとしたら、断じて
あれはあの人ではない。おお、理性は気ちがいじみている！
みずからの味方にもなり、みずからの敵にもなる、
矛盾した根拠によって。理性は理性に反しても
おのれを失わず、おのれを失えば理性に反さなくても
理性的なのだ。あれはクレシダであってクレシダではない！
おれの魂のなかでいまふしぎな戦いがはじまっている、
本来離ればなれになるはずのないものが
天と地よりもはるかに大きく離れてしまった、
しかもその無限のへだたりのあいだには、機織りの神
アリアクニーのあの細い細い横糸を通すほどの、
髪ひとすじほどのわずかな隙間さえないのだ。
証拠はある、おお、地獄の門よりたしかな証拠だ。
クレシダはおれのものだ、天に誓った絆に結ばれて。だから
証拠はある、おお、天そのものよりたしかな証拠だ。
天に誓った絆がゆるめられ、ほどかれ、はずされ、
女の五本の指先が結んだもう一つの絆ともども、
あれの真実のかけらが、愛情のおあまりが、
腹いっぱいつめこんだ誓約の滓、屑、油じみた
食べのこしが、ダイアミディーズのものになったのだ。
おお、クレシダ、不実なクレシダ、不実な女、
どんな不実なものもおまえの汚れた名前と並べれば
みんなりっぱに見るだろう。

266

私の思いもことばも狂人となんら変わりはない、
支離滅裂で真実から遠くかけ離れているのだから。
なにしろ君は地獄のように黒く夜のように暗いのに、
私は白妙の美しさと言い、輝くようだと思うのだから。

267

ああ、私の心に不動の強さがほしい！それが
私の胸と舌のあいだに大きな山を築いてほしい！
いくらこの私に男の心があっても、力は女。

女が秘密を守るのはなんとつらいことだろう！

268

私の陽気なジグ踊りも全く忘れた
私の恋人の愛もみな失くされてしまったのだ
彼女の真実な堅い昔の愛には
拒む心がしっかり据えつけられてしまった
一つのつまらない不運が私の損失をみなひき起した
おお不運よ呪うべき気まぐれの運の女神よ
今やっとわかったことは浮気は
男よりも女の方に沢山残っていることだ
清い泉も湧かない
美しい小鳥の声もきこえない
みどりの草も生えない
草は枯れる
牧人は泣きながら立っている
羊の群はみな眠っている
森の女精はうしろでのぞいている
おそろしように。
貧しい牧人の私たちによく知られている喜びも
野原に集まるわれわれの楽しい会合も
私たちの夕暮の遊びもみな失くなった
愛が死んだからすべて恋愛も私たちから消えた。
さようなら、美しい乙女よ
君のような女はひとりもいなくなった
美しい喜び、私の悲しみの本が。
可哀そうなコリドンは
ひとりぼっちで生きなければならない
彼を助けるものは一人もいなくなったと思う。

269

私の恋人が自分は真実でできている女と言え、
私は嘘と知りながらそのことばを信じると言う、
自分がまだ嘘をあやつる世間の手管など知らない
世なれていない若者と、彼女に思わせたいのだ。

270

そのためだ、そのためなのだ、ああ胸が痛む。
その名を口にさせるな、清らかな星！
そのためなのだ。だが血を流すのはやめよう、
傷をつけるのはやめよう、雪よりも白く、
アラバスターよりもなめらかなあの肌に――
だが生かしてはおけぬ、でないとまた男をだます。
この火を消し、それからいのちの火を消そう。
燃えあがるろうそくの火よ、おまえは一度消しても、
あとで後悔すれば、またもとの光を
ともしることができる。だがいのちの火、
大自然の創造になるこの上なく美しい光よ、おまえは
いったん消してしまえば、ふたたびともしことのできる
あのプロメシュースの火を捜すあてもない。このおれには、
バラを手折れば、生き返らせるすべはない、
枯れしぼむのみだ。枝にあるうちにおまえの香りを。

ああ、この息のかぐわしさ、正義の神もその剣を
折りたくなろう。もう一度、もう一度。
死んでもこのままであってくれ、おまえを殺しても
おれの愛が変わらぬように。もう一度、最後のキスを。
こんなに美しく、こんなに罪深い女はいない。涙が出る、
だがこれはきびしい涙、天の悲しみだ。愛すればこそ
罰を加える神の鞭だ。

271

心弱きもの、おまえの名は女！

272

え？目があるのですか？
それを愛とは言わせませぬ。あなたのお年になれば、
情欲の血もしずまり、分別の命ずるまになるもの。
その分別がありながら、どうして
これから、これへ！
たしかに感覚はおもちだろう、欲望がある以上。
だがその感覚はたしかに麻痺しているのだ。
どんな気ちがいにしろ、狂気にとりつかれた
感覚にしろ、これほどの相違を見分ける力が
ないはずはない。いったいどんな悪魔にたぶらかされ、
盲にひとしい行為をなさってしまったのです？

273

恋のおそろしい化け物とは、意欲は無限だが実行は有限、欲する心ははてしないがおこなう
には限度がある、ということだ。

274

「それを愛とは呼ばないで下さい、愛は天上へと去ってしまった、
汗ばんでいる肉欲が地上で愛という名を奪ってから。
『愛』のあどけない見せかけのもとに、
『肉欲』は若々しい美を食べ、その醜い罪で美を汚した。
この情欲に燃える暴君は美を汚し、たちまち滅ぼす、
さながら青虫が若葉を食い尽すように。
「愛は雨後の日光のように慰めるが
肉欲の作用は晴天の後の嵐だ。
愛の優しい春はいつもそのみずみずしさを保っているが、
肉欲の冬は夏がまだ半ばも過ぎないうちにやって来る。
愛は度を過ぎてうんざりすることはないが、肉欲は飽食して死ぬ、
愛は真実一路だが、肉欲はこしらえものの虚偽にみちている。

275

伯爵夫人

なぜ結婚したいのか、そのわけを言っごらん。

道化

このあわれな肉体が要求するんだよ、肉のやつがおれを駆り立てるんだ。憎い悪魔に駆り立
てられちゃあ、行くところまで行かざるをえないってわけさ。

276

情欲の行為とは恥ずべき放蕩三昧に
精神を浪費することであり、また情欲とは

行為にいたるまで偽誓、殺人、悪意に満ち、
野蛮、過激、粗暴、残忍で信頼すべくもない。
人はこれを楽しむやいなやたちまちさげすみ、
理性を越えて追い求めても、手に入れるやいなや
理性を越えて憎む、まるで人を狂わせるために
仕かけられた毒餌を飲んだかのようだ。
追い求めるのも狂気、手に入れても狂気、
行為の前も、最中も、後も、常軌を逸し、
体験中は至福、体験後は悲嘆そのもの、
行く手にあれば喜び、通りすぎれば一場の夢だ。
そのことは人々もよく知っているが、この地獄に導く
天国とも見える女を避ける道はだれも知らない。

277

「おれが求めるものを手にいれたら、それで何を獲ち得るといふのだ。
ただ、夢と、吐息と、泡のようにはなく消え去る喜びのみだ。
七日の悲しみを支払って一分の楽しみを購うものがあるか。
玩具を手に入れるために、永遠の時を売りわたすものがあるか。
ひと粒の甘い葡萄のために、蔓を切り倒すものがいるのか。」

278

「でも情けない！妾は未だほんとにうぶなとき
一人の青年から求婚されたのです
その人は自然に恵まれ容貌がよかったので
娘の眼は彼の顔の上一面にへばりついた
愛は住むところがなく、彼をその住家とした
彼の美しい体に愛が住み
愛は新しく宿され、新しく神に祭られた。」
「彼の鳶色の垂髪はうねり捲かれてさがっていた
風が軽くあたるたびごとに
彼の唇の上にその絹の束がなげられる
美しいことをするとはどんなことか、すればすぐわかる
彼を見れば誰でも心が迷わされた
人間の種づけたあの広い広い樂園が
彼の顔に微細画として小さく描かれていたからです。」
「男性の小さい展示が彼の顎にもうありました。
彼の不死鳥もあの若々しい皮膚の上に毛を刈らない
ビロードのように天から降りて来たばかりのよう
その裸の皮膚はこの鳥の羽衣よりも美しい。
でも彼の顔はそうした高価な装飾で輝いていたが
ただ心配になるのは、このままで最美なのかまた
装飾がない方が最美なのか迷わせます。」
「おじいさん、あの一滴の小さい玉の涙の中に
なんという地獄の妖術がひそんでいることでしょう！
あの眼の洪水にかかると
どんなに岩のような心でも水にくだかれよう。
どんなに冷たい胸でもここで温められるのです。
二重の違った効果——冷たい貞操と熱い怒り
ここから火が出てまたそれを冷やかに消してしまう。」
「ごらんなさい、彼の情熱は手管にすぎません
そのために妾の理性は涙にとけたのです。
そこで妾の貞操の白い衣を脱ぎすてて

妾の貞節の守りと恐怖心を振り落したのです。
彼が妾にも思われたように、彼にも
すべてがとけて見え、妾たちの涙が違っているのは
彼の涙は妾を毒殺し、妾の涙は彼を生きかえらせた。」
「そんな風に彼は裸のかくれた悪魔を
美の女神の着物をきせて包んでいました。
無経験の者がこの誘惑者をのさばらせると
この男は天使童子のように人の頭の上にはばたくのです。
うぶな若い娘はみな恋人にさせられるのです。
ああ、妾もやられた、でもまたそうした場合には
どうするのがよいのか妾にはわかりません。」
「おお、あの彼の眼の偽りの潤い
おお、あの彼の頬をよくもやす嘘の火
おお、あの彼の心から無理に出す雷
おお、あの彼の海綿の肺から出る悲しい息
おお、みなあの自分のものでない借りものの感動には
前に騙された女もまた騙されるでしょう
また仲なおりをした娘もまただまされるでしょう」

279

デズデモーナ

私の母のところにバーバラという小間使いがいて、
恋をしたの。ところがその恋人は頭がおかしくなって、
あの娘を棄ててしまった。あの娘は「柳の歌」が好きで——
古い歌だけど、あの娘の運命を暗示していたわ、
それを歌いながら死んでいったの。その歌が今夜
私の頭から離れない。どういうわけか、あのかわいそうな
バーバラのように、頭を片方にかしげて歌ってみたくて
しかたがない。ね、お願い、いそいでね。

エミリア

夜着をおもちしましょうか？

デズデモーナ

いえ、ここでピンをはずして。

ロドヴィーコーってりっぱな人ね。

エミリア

なかなか男前ですし。

デズデモーナ

話もお上手だし。

エミリア

ヴェニスにいる知り合いの女が、あの人の唇にちょっとでも触れられるなら、パレスチナま
ではだしで行ってもいい、と言っておりましたわ。

デズデモーナ

あわれあの娘はカエデのかげで

溜息ついて歌ってた

ああ、青い、青い、柳

胸に手を当てかき上げた首を

お膝にのせて歌ってた

ああ、柳、柳、柳

そばを流れる小川の声も

あの娘の嘆きを歌ってた

ああ、柳、柳、柳

したたる涙に無情の石も

あわれを感じて歌ってた——
これをしまっておいて——
ああ、柳、柳、柳——
ね、早くしてね、すぐにおもどりになるから——
ああ、青い、青い、柳こそ
私の髪の花飾り。
とがめてはいやあの人のこと
罪は私にあるものを——
間違えた、これは二番じゃなかったわ。あら！だれかしら、ノックするのは？
エミリア
風ですよ、あれは。
デズデモーナ
つれない人ととがめてみたら
つれない返事が返ってきた
ああ、柳、柳、柳
こっちが女と浮気をしたら
そっちも男と寝ればいい——
さ、もうさがっていいわ。おやすみ。

280

最後のご決意を、女王様、明るい一日は暮れました、
夜の闇へ旅立ちましょう。

281

日向で無邪気な娘たちが、糸をつむいだり、
編物をしたり、針を動かしたりしながら
よく口ずさむ歌なのだ。飾り気のない真情を、
無垢な恋心を、のどかに歌いあげているところは
古代の姿を彷彿させる。
くるがいい、くるがいい、死よ、
この身を杉の柩に横たえよ。
去るがいい、去るがいい、息よ、
美しいむごい娘に殺されて。
櫟の枝、経帷子の胸にさし、
着せておくれ、
二人とないまことの愛に死ぬものを
飾るために。
花一つ、花一つさえ、
この身をおさめた柩にそなえるな。
友一人、友一人さえ、
悲しみの野辺の送りに従うな。
人知れぬ山奥の地に、この身を
埋めておくれ、
墓を見てまことの愛に泣くものを
避けるために。

282

だが恋の道は——泳ぎの名人リアンダー、はじめて恋の取り持ち役を使ったトロイラス、その他昔の長袖武士の恋物語はいくらでもあるが、みんな韻など踏まずにリズムにのって、なだらかな歌の道をひた走っている、あわれなおれのように恋のぬかるみ道に足をとられるようなことはない ...だいたいおれのような恋を韻など踏んであらわせるものか

283

このあわれな世界ははじまってからほぼ六千年になるが、当の本人が死んだためしは一人もありませんよ、恋のためになど。トロイラスはギリシアの武将アキレスに脳天をたたきつぶされて死んだ、その前に恋ゆえに死んでいいだけのことを彼はしていた、それなのに彼は恋する男の鑑の一人とされている。リアンダーはたとえヒーローが尼になったとしても、あの暑い夏の一夜さえなければのんびり長生きしたはずだ、あの夜、彼はヘレスポントの海に水浴びに行き、痙攣を起こして溺れ死んだにすぎない、それを当時のばかな歴史家たちが、「セストスのヒーロー」に会うために泳いで行く途中の出来事にしてしまった。だがそういう話はみんな嘘です、男は次から次へ死んでいき蛆虫の餌食となっているが、恋のために死んだものは一人としていないのです。

284

クレオパトラ

さあ、アントニー――

手を貸して、みんな―― ここへあなたを引きあげます、

さあ、手伝って。

アントニー

ああ、いそいでくれ、息がもたぬ、

クレオパトラ

まるでお魚を釣るよう！なんて重いのか、

あなたは！悲しみに力が抜け、それでいっそう

重いのだわ。私に女神ジュノーの力があれば、

翼もつマーキュリーに命じてあなたを引きあげさせ

ジュピターのそばにすわらせるのに。さ、もう少し――

いざとなるとたあいなことを願うものね――さ、

ここへ、ここへ。

ようこそここへ！死ぬのはこの胸、

あなたのいのちの泉で！口づけで生き返らせてあげる、

この唇にその力があればすり切れてもいい。

一同

お気の毒な！

アントニー

おれは死ぬぞ、エジプトの女王、死んでいくぞ。

葡萄酒をくれ、ほんの一言でいい、話をしたい。

クレオパトラ

いえ、私に言わせて、思う存分悪口を言わせて、

不実な浮気女の運命が私に毒づかれて腹を立て、

その糸車をこわしてしまうほど。

アントニー

ほんの一言だ、女王、

シーザーにおまえの名誉と身の安全を乞うのだ。おお！

クレオパトラ

その二つが両立するとでも。

アントニー

まあ、聞いてくれ、

シーザーの側近ではプロキュリアス以外信用するな。

クレオパトラ

私が信用するのは私の決意とこの手だけ、

シーザーの側近などだれ一人信用しません。

アントニー

おれの末路のこのみじめな変わりようを、

嘆き悲しんでくれるな。それよりも、かつておれが

もっとも偉大な、もっとも気高い、世界の王者として、
華やかにすごした日々を思い起こし、その心を
慰めてくれ。おれは卑しい死にざまをさらすのではない、
卑怯にも同胞に胃を脱いで見せるのでもない——
ローマ人たるおれがローマ人たるおれの手によって
雄々しくも散っていくのだ。ああ、氣力が失せていく、
もう、おれは——

クレオパトラ

だれよりも気高い心をおもちのあなたが
死ぬというの？私のことなどかまわずに？私は、
あなたがいなければ豚小屋同然のこの世に、ただ一人
生き残らなければならないの？

ああ、ごらん、

世界の王冠が溶けてしまった。アントニー！

戦の花飾りはしぼみ、武人の柱は倒れてしまった。

小さな子供もいまでは大きな大人と肩を並べるのだ、

すべては平等になり、優劣の差は消え失せ、

夜ごと訪れる月のもとに、きわ立つものは

なに一つ残っていない。

チャーミアン

お気をたしかに、女王様！

アイアラス

女王様までお亡くなり！

チャーミアン

女王様！

アイアラス

女王様！

チャーミアン

ああ、女王様、女王様、女王様！

アイアラス

エジプトの女王様！

チャーミアン

シーツ、静かに、アイアラス！

クレオパトラ

もう女王ではない、ただの女、私を支配するのは

乳しぼりの娘や、下働きの女と同じような、

あわれな感情にすぎない。意地悪な神々に

この王笏を投げつけ、こう言ってやりたい、

あなたがたが私の大事な宝石を盗みとるまでは、

この世界も神々の国にひとしかつたと。だが

もうすべてはむなしい。忍耐は愚かなきわみだし、

忍耐を破るのは氣ちがい犬と同じ。それなら

罪ではあるまい、死のお迎えを待たずに、こちらから

死の隠れ家に飛びこんでも。どうしたの、女たち？

さ、元気をお出し！おまえまで、チャーミアン！

みんなりっぱな女ではないか！ああ、ごらん、

私のあかりは燃えつき、消えてしまった！さ、みんな

元気を出して。この人を埋葬してから、そのあと、

りっぱに、いさぎよく、ローマ人の流儀に従い、

死神が誇らしく思うようにこの身をゆだねよう。

さ、行こう、偉大な魂を宿した器もいまは冷たい。

ああ、おまえたち！もう私たちに味方はいない、

頼りになるのは、覚悟とすばやい最期でしかない。

285

クレオパトラ

私は夢を見た、アントニーという皇帝の夢を。
もう一度あのような眠りがほしい、もう一度
あのような人に会えるように！

ドラベラ

失礼ながら、女王――

クレオパトラ

あの人の顔は大空のようだった、そこには
太陽と月がかかり、軌道をめぐり、小さな丸い
この地球を照らしていた。

ドラベラ

女王、どうかお聞きを――

クレオパトラ

あの人の両脚は大海原にまたがり、高くかかげた
その腕は世界の頂を飾る虹だった。あの人の声は
天上の音楽のように豊かに調和がとれていた、そう、
親しいものの耳には。だが大地を揺るがす気になれば
たちまちとどろく雷鳴となった。あの人の恵み深さは
冬を知らず、つねに刈りとれば刈りとるほど実りを結ぶ
秋だった。あの人の楽しむさまは、水を切る
イルカのように、水のなかに生きながら、歓楽の波間に
姿を没し去ることはなかった。国王も領主も
あの人のお仕着せを着て歩き、王国も島々も
あの人のポケットからこぼれる銀貨だった。

ドラベラ

女王！

クレオパトラ

私が夢に見たような人が実際にいたと、あるいは
いたこともありうるとお思い？

ドラベラ

いいえ、女王。

クレオパトラ

よくもそんな嘘を、神々も聞いておられるのに。だが
そのような人がいるとしても、あるいはいたとしても、
夢の限界を越えていよう。不可思議なものを生む力は
自然も空想にはおよばない、がアントニーのような人を
想像することは、空想に挑む自然の傑作であり、
夢の描く姿など圧倒しさるだろう。

286

声高く歌う鳥よ

アラビヤにだけある一本の樹の上で

悲しげな先触れのラッパを吹け

その音に清らかな鳥どもは集まる

だが悪魔の汚ない先触れであり

情熱の愛の死を予言して

叫んでいる先触れの汝は

この鳥どもの行列に近よるな

この鳥の集会には

どの暴君らしい猛鳥は禁ぜよ
鳥類の王、鷲だけは別だ
そして厳かにこの葬礼の式をあげるのだ。
葬式の音楽をよく知っている
白い袈裟の坊さんよ
死を予言して鳴く白鳥になってくれ
鎮魂歌は君の特権であるから。
人間の三倍も生きる鳥よ
汝が呼吸する息から
汝の黒い種属をつくるというが
この会葬者の中へはいつてくれ
さあこれから讃美歌が始まる
愛も貞節も死んだのだ
不死鳥と山鳩は
互いに一つの炎となってにげて行った。
この二羽の鳥は愛し合っていたので
この二鳥の愛はただ一体となって生きていた
二つの違いはあるが、分れてはいなかった
愛には数の観念は殺されていた。
心は遠くはなれているが、切りはなされてはいない
この山鳩とその夫人の間には
距離はあっても空間は見られなかった
こうした愛が人間なら一つの奇跡になろう。
かれらの間に愛が光っていたので
山鳩は自分の愛の報いが
不死鳥の眼の中に燃えているのを見た
かれらは互いに互いの宝庫であった。
本質が破壊されたので
自己は元の自己と違ってしまった
単一の性質のもつ二重の名は
二つとも一つとも呼べなかった。
「理性」はそれ自体破壊されたが
離れている二つのものが一つになるのを見た
両方とも自分自身でなくなり
成分がよく調合されたので
この時「理性」は叫んだ—— この調和した一つのものは
なんという真のつがいだろう！
成分がそういうように結合して残るなら
愛には理性があり理性には何もない。
この時「理性」はこの挽歌を作った
愛の共同支配者であり愛の星である
不死鳥と山鳩のために
かれらの悲劇の場面へのコーラスとして。
挽歌
美と真理と美德とが
純潔無垢の恩寵となって
灰につつまれてここに眠る
死はいまは不死鳥の巣となり
山鳩の誠実な胸は
永遠に憩う
子孫を残さない
それはかれらの不能のためではなく

それは純潔な結婚であったからである
真理はありそうであり得ない
美は誇ってもそれは美でない
真理と美は埋葬された
真実な人たちも美しい人たちも
この墓碑に来て
この死んだ鳥のために祈りをささやけ。

287

おお、創造の輝かしい天頂にまで炎を噴きあげる
詩神ミューズよ、なにとぞ力をかしたまえ、
舞台には一王国を、演ずる役者には王侯貴族を、
この壮大な芝居の観客には帝王たちを与えたまえ！
そうすれば武名高きヘンリーも、王にふさわしく、
軍神マルスの姿をとって登場し、その足もとには
飢餓と剣と火が、革紐につながれた獵犬のように
控えたであります。

288

舞台はトロイであります。ギリシアの島々より、
誇り高き王侯たちは怒りに血をたぎらせ、
恐ろしい武器弾薬を満載した船に乗りこみ、
アテネの港にわれ先にと集まってまいりました。
その額に王冠をいただくものだけでも六十九名、
トロイ撃滅の誓いを交わし、アテネ湾より
フリジア目指して出帆しました。トロイでは、
その城壁の奥深く、若君パリスがギリシアの高官
メネレーアスの妻であったヘレンを奪い連れ、
愛を交わしておりました。これが戦争の原因であります。
さて、ギリシアの艦隊は
テネドスの港に着くや強力な兵器をぞくぞくと
陸揚げし、戦意も新たな精兵たちはたちまち
トロイ平原に威風堂々の陣を張りめぐらしました。
対するトロイの王プライアムは都の六つの城門、
すなわちダーダン、ティンブリア、ヒーリアス、
キータス、トロイエー、アンティノリディーズを、
頑丈堅固な鎧と門をもって固め、
トロイの子らの士気をあおります。
希望の女神は浮気にもトロイ、ギリシアの双方に
かわるがわるほほえみかけるので、勝利の栄冠は
いずれのものともわかりません。このように、
序詞役をつとめます私、甲冑姿であらわれたのは

289

召使い 2

じゃあ、また騒がしい世のなかになるな。どうせ平和なんて、剣を錆びさせ、仕立屋を繁盛
させ、小唄作者をはやらせるだけだ。

召使い 1

戦争がいいね、おれも。昼が夜にまさるように、戦争は平和にまさる。なにしろ陽気で、目
がさめて、耳がさえて、生き生きとしてる。ところが平和ときたらまるで中風病みのよいよ
いだ、陰気で、目がかすんで、耳が遠くなって、死んだも同然だ。戦争が殺す人の数より
も、平和が生む私生児の数のほうが多いだろう。

召使い 2

そのとおりだ、戦争はある意味で強姦犯人と言っていいが、平和だって寝とられ亭主製造業
であることは否定できまい。

召使い 1

うん、だから平和になると人間はおたがいに憎みあうようになる。

召使い 3

なんとなれば、そうなる人間はおたがいを必要としなくなるからだ。おれは金を出しても
戦争を買いたいね。

290

シャローさん、この私に兵隊の選びかたを指図しようとなさるのか？手足や、筋肉や、図体、骨格、柄の大きさなどはどうでもいいのだ！問題は根性ですよ、シャローさん。たとえばこのウォートだ、ごらんのとおりむさくるしいなりはしておるが、こいつめ、弾丸をこめて撃つ段となれば、きっとブリキ屋のトンカチのようにトントン拍子にやってのけるだろうし、進撃したり退却したりする際には、酒屋の小僧が坂をころがりおりるより早く突っ走るだろう。それからこの三日月面のやせこけたシャドー、こいつなんかも兵隊にはもってこいだ、第一、敵の的にならん、これじゃあペナナイフの刃を狙うようなもんですからな。それにまた、この女物の仕立屋フィーブルだが、いざというときの逃げ足の早さはこいつがいちばんだろう！戦争にほしいのは貧相な男、でっかい男は厄介だ。

291

いまやイギリスの若者はことごとく火と燃え、遊興用の絹の衣装はタンスの底に眠っております。いまや繁盛しているのは鎧冑の製造業者だけ、名誉の念のみが人々の胸を支配しております。彼らは田畑を売り払って馬を買い求めました、使神マーキュリーよろしく翼もつ蹄を駆ってキリスト教徒の国王の鑑につき従うために。いまや彼らの頭上には希望が燦然と光を放ち、王ヘンリーと彼につき従うものたちに約束されたまばゆいばかりの帝王の王冠と貴族の冠におおわれて、そのために一振りの剣も目につかぬほどです。

292

皆様はすでにごらんになったもののご想像ください、王が十分軍備をととのえて、サザンプトンの埠頭で船に乗りこまれたお姿を、そして美々しい艦隊が絹の軍旗を昇る朝日に翩翩とひるがえしていた光景を。どうか想像力を働かせ、ごらんください、ほら、いま水夫たちが麻の縄梯子をよじ登っていきま、お聞きください、混乱した騒音を静ませようと船長が鋭い呼び子を吹いております。いかがです、無数の帆が目に見えぬ微風をいっぱいにはらんで巨大な船体をはこび、波高い大海原にくっきりと白い航跡を残していくではありませんか。どうか皆様はいま海岸にお立ちになり、はるか沖合いの怒濤の上に舞い踊る一つの都を見ている、とお思ってください、堂々たる王の艦隊がハーフラールを目指して進む姿はそのように見えるのです。

293

ガワー

どうした、マックモリス大尉！坑道の工事は中止したのか？工兵隊は手を引いたのか？

マックモリス

イエシ・キリシトにかけて誓って言うけど、ありゃあ掘りかたがまじかった、工事は中止だ、しでに引き揚げのラッパも吹かれとる。このおれの手と死んだ親父の魂にかけて誓って言うけど、あの工事は失敗だった、すたがって中止された。おりゃあ、イエシ・キリシトにかけて誓って言うけど、あと一時間もありゃああの町をぶっ飛ばすていたとこだ。まったくありゃあ失敗だった。このおれの手にかけて誓って言うけど、ありゃあ完全な失敗だった！

フルーエリン

マックモリシュ大尉、一つお願いがあるのだが、恐縮ながらあんたと議論さしえてもらえん
だろうか、つまり、なにがしかは兵法、特にローマの兵法について、ちゅうか、関して、
ちゅうか、討論形式で、いいかな、それも交友的談義の形式で、論を戦わしえたいのだ、
ちゅうのも、なにがしかは自分の説を満足さしえるためであり、なにがしかは、いいかな、
兵法の指定事項に関して自分の心を満足さしえるためでもある、それが大事な点なのだ。

ジェーミー

そいつはよか、非常によか、両君ともよか大尉だからな。おいだってよか機会を見つけた
ら、両君のお許しを願って議論に加わりたかぐらいだ、いや、ほんなこつ。

マックモリス

いや、イエシ・キリシトにかけて誓って言うけど、議論などすている暇がないんだ、なに
する今日は暑い、天候も戦争も国王も公爵たちものぼせている、議論などすている場合じゃ
ない。わが軍は町を包囲攻撃中であり、ラッパは突破口への突撃を命ずているのに、われわ
れは、イエシ・キリシトに誓って言うけど、しゃべっているだけでなに一つ行動をすたら
ん、これはわれわれ一同の恥だ、神にかけて誓って言うけど、こうすてずっとすているの
は恥だ、この手にかけて誓って言うけど、これは恥なのだ。かつ切るべき敵の喉笛があ
り、なしべき仕事山積すているというのに、イエシ・キリシトに誓って言うけど、これ
じゃあいかなのだ！

294

一同武装し、武器を手をしています。
ダチョウのように胄に差した羽根飾りの美々しさは、
まるで水浴びしたあと風にはばたく鷺のよう、
金色の鎧に身を固めた姿は英雄の像さながら、
士気のさかんなることは五月の野をわたる風、
光り輝く様は真夏の天空を支配する太陽、
子山羊のように意気高く、雄牛のように猛り立つ、
といったありさま。王子ハリーは、胄をかぶり、
脛当てをつけ、その凜凜しい若武者ぶりは、
翼もつ使神マーキュリーが大地に降り立ったかと
見まごうばかり、ゆらりと鞍にうちまたがる姿は、
天使が雲間より舞いおりて、はやる天馬ペガサスを
縦横に乗りこなし、その鮮やかな手綱さばきで
世の人を瞠目させるつもりかと思われました。

295

やつらがくるのは美しく飾られた
生贄としてだ、まだ熱い血の噴き出すままに
戦の女神、炎の目をしたベローナに捧げてやる。
祭壇に座す軍神マルスもやつらの血で、耳もとまで
朱に染まるだろう。ええい、おれは燃えてきたぞ、
こんな豪勢な獲物が目の前にいると聞きながら
まだ手に入れておらぬとは。

296

王子

それより、ジャック、うしろからぞろぞろくるのはどこの部隊だ？

フォールスタッフ

おれの部下さ、ハル、おれの。

王子

あんなみじめな兵隊ははじめて見たぞ。

フォールスタッフ

いいじゃないか、槍先にかけられるには結構役に立つさ。鉄砲玉の餌食なんだ、鉄砲玉の。墓穴を埋めるには身分など関係ないだろう。どうせやがては死ぬ運命の人間なんだ、やがては死ぬ運命の。

297

またしても皆様の想像力に訴えます、いま、
忍び寄るささやき声と、人々が瞳をこらす夜の暗闇とが、
広い宇宙を満たしているものとお考えください。
陣営から陣営へ、夜の暗い洞穴を通して、
両軍のひそやかな物音が静かに流れています、
敵味方の歩哨たちは、それぞれの定位置につきながら、
相手の秘密のささやきをほとんど聞きとることができます。
かがり火はかがり火と照らしあい、その蒼白い炎を通して
おたがいに影がゆらめく相手の顔を見ることができます。
軍馬は軍馬と応じあい、その誇り高いいななき声で
まどろむ夜の耳をつんざいています。テントでは、
武具師たちが槌音もいそがしく、騎士たちを飾る
鎧冑に仕上げの鋳をうっており、恐ろしい
戦闘準備の物音をあたりに鳴りひびかせています。
農家の雄鶏は一勢に関をつくり、時計は鳴って
眠たげな朝の三時がきたことを告げています。
その数を誇り、自信に満ちあふれ、浮かれ気味の
フランス軍将兵は、その傲る目で見おろしている
イギリス軍を賭け草に、骰子をふっています、
そうして、醜悪な魔女のびっこをひきひき進む
退屈な足どりにも似た、夜の遅々とした歩みを
叱っているのです。死を宣告されたイギリス軍将兵は、
祭壇に捧げられた生贄のように、かがり火のかたわらに
身じろぎもせずすわっており、明日に迫る身の危険を
心のうちに思いめぐらしています、そのうち沈む姿は、
憔悴した頬と戦塵にまみれた外套を月影に浮かばせ、
一人一人を恐ろしい幽霊のように見せています。
ああ、この消耗しきった軍の総大将たる国王が、
歩哨から歩哨へ、テントからテントへ、みずから
巡察される姿を拝するものはだれでも、「神よ、
この国王陛下の頭上に称賛と栄光を与えたまえ！」
と叫ばずにはいられないでしょう。そのようにいま
国王は全軍の将兵を見まわっておられるのです、
その温顔に微笑をたたえ、彼ら一同にあいさつされ、
兄弟よ、友人よ、同胞よ、と呼びかけておられるのです。
王者にふさわしいそのお顔には、強大な敵軍に
包囲されている不安など影さえありません、
また、一睡もなさらず疲労の極にありながら、
その顔色にはかげり一つ見せておられません、
ただただ明るいご様子とやさしい威厳をもって、
暗いわずらいを吹き飛ばしておられるのです。
そこで、それまで色蒼ざめ意気消沈していた兵たちも、
国王の元気なお姿を見て勇気をふるい起こします。
その寛大なまなざしは太陽にも似て、ゆたかな恩恵を
一人一人にあまねくわかち与え、霜のような恐怖を
たちまち溶かし去るのです。どうか、皆様、
その夜の国王ハリーの面影を、未熟ながらせいいっぱい

写してみるつもりですので、ご高覧願います。

298

もう一度あの突破口へ突撃だ、諸君、もう一度！
それが成らばイギリス兵の死体であの穴をふさいでしまえ。
平和時にあっては、もの静かな謙遜、謙譲ほど
男子にふさわしい美徳はない。だが、いったん
戦争の嵐がわれわれの耳もとに吹きすさぶときは、
虎の行為を見習うがいい。筋肉を固く引き締め、
血を湧き立たせ、やさしい心を恐ろしい怒りの顔で
おいしく、目を爛爛と輝かすがいい、
城壁の狭間から敵をにらむ大砲のように。
さらにその目の上に眉毛をおおいかぶせるがいい、
そそり立つ崖が、荒々しい大洋の波におしばまれ
削りとられた土台の上に、見るも恐ろしく突き出て
のしかかるように。さあ、歯を食いしばり、
鼻をひろげて息をのみ、せいいっぱい勇気を
ふりしぼるのだ。進め、進め、イギリスの貴族たち、
百戦錬磨の父親たちから受け継いだ武勇の血を忘れるな！
かの父親たちは、一人一人がアレキサンダー大王となって、
この地において朝から晩まで奮戦し、ついにあたりに
敵影を見なくなるまで剣を鞘に収めることはなかったのだ。
その父親から生まれた息子であるとの証拠を見せるがいい、
さもないと母親に不貞の汚名を着せることになるぞ。
いまこそ、身分卑しいものに身をもって模範を示し、
戦のしかたを教えてやれ。それから、イギリスの郷土たち、
イングランドに生み育てられたおまえたちの五体をもって、
ここフランスで存分にイギリス魂を示し、この私に
さすが母国の名に恥じぬものたちだと叫ばせてくれ。
それを私は信じて疑わぬ、おまえたちの勇気に輝く
目を見れば、卑怯卑劣な男は一人もいないとわかるぞ。
おまえたちは革紐につながれた獵犬のようにはやっておるな、
さあ、獲物が飛び出した、はやる心についていけ、
突撃しながら叫ぶのだ、「神よ、ハリーに味方したまえ、
守護聖人セント・ジョージよ、イギリスを守りたまえ！」

299

フルーエリン

おそれながら、歴史に名高い陛下の祖父君ジョン・オヴ・ゴーント、および大叔父君黒皇太子エドワードは、ものの本で読みましたところでは、ここフランシュの戦場で名声赫赫たる戦果を収められたとか。

王

そのとおりだ、フルーエリン。

フルーエリン

まことに陛下の仰しえのとおりです。もし陛下がご記憶であられましゅうるならば、そのときわがウェールジュの一隊は、葦畑でりっぱな功績をあげました、モンマシュ帽に葦をつけましてな。陛下にご承知いただきたいのでありましゅうが、葦は今日にいたるまでそのときの功績の名誉のしるしとなっちります。陛下も聖デーヴィッドの日には堂々と帽子に葦をつけられることと確信しゅうる次第です。

王

私も記念すべきその名誉のしるしをつけるでしょう。私も、知ってのとおり、おまえと同郷のウェールズ人だから。

フルーエリン

ワイ河の水しゅべてを傾けつくしても、陛下のおからだからウェールジュの血を洗い流しゅことはできましえん、それだけは断言いたします。神よ、み心にもみ胸にもかないましゆるかぎり、陛下のウェールジュの血に祝福を与え、永久に維持さしえたまえ！

王

ありがとう、同郷人。

フルーエリン

イエシュ・キリシュトにかけて誓って申しあげましゆるが、私は陛下の同郷人であり、たとえなにものがそのことを知ろうといささかもかまいましえん。私はそのことを世界じゅうに公表いたしましゅ、私は、神のおかげで、陛下を恥じゅかしく思う必要などないのでしゅ、陛下が正直な善人であられましゆるかぎり。

300

ウスター

今度はおれが秘密の書物をひもとくとしよう、そして、おまえの飲みこみの早い不満の耳に、重要かつ危険な物語を読み聞かせてやろう、それは、たとえば轟々と流れる急流の上に、一本の槍を渡してぐらつく橋とし、それを頼りに越えるような、危険に満ちた冒険談となろうが。

ホットスパー

足を踏みはずせばそれまでか！のるかそるかだ。危険が東から西へ横切るなら、こちらは縦一文字、名誉を北から南へ突っ走らせて、取っ組みあいだ。ああ、どうせこの血を湧き立たせるなら、獲物はライオンであってほしい、野兎の相手はごめんだ！
ノーサンバランド

どうやら、倅のやつ、早くも大手柄に思いをはせ、その夢に自制心をすっかり失ってしまったようだ。

ホットスパー

ええい、畜生、おれにとっては朝飯前の仕事だぞ、青白い月の額から金色に輝く名誉の冠を奪いとるのも、あるいは海底深くもぐりこみ、測量糸さえ届かぬその深みから、溺れていた名誉の前髪をつかんで引きずりあげるのも！ただし、そのようにして名誉をとりもどしたものが、競争相手なしにその栄光をことごとく独り占めできればの話だ、

301

だがなぜおれをいつまでも引き止めるのだ？
おれに話したいというのはどういうことだ？
それが少しでもおおやけのためになることであれば、片方の目に名誉を、片方の目に死を突きつけるがいい、おれはその二つを平然と見つめてみせよう。
神々にかけて言う、おれはこう見えても死を恐れる以上に名誉を愛する男なのだ。

302

フォールスタッフ

おい、ハル、おれが戦場でぶっ倒れるのを見たら、おれのからだにまたがって敵を防いでくれよ、それが友情ってもんだぜ。

王子

その友情をはたせるのは巨人コロッサスだけだろう。ま、いまのうちに祈りをすませ、みんなに別れを告げておくのだな。

フォールスタッフ

これが寝る前のお祈りっていうんだったら文句ないがなあ。

王子

ばか、おまえのいのちは神様に借りているのだぞ。

フォールスタッフ

まだ返すときじゃないだろう、期限もこないうちに返すなんてまっぴらだ。催促もされないのになんだってこっちからすすんで支払わなきゃならないんだ？ま、そんなことはどうだっていい、いざとなりゃあ名誉がおれを突き進ませてくれるだろう。だが待てよ、いざとなつて、その名誉のおかげでおれが突き刺されてもしたらどうなる？そうなったら、名誉が足をもとどおりにしてくれるか？まさか。腕は？だめだ。傷の痛みをとってくれるか？これもだめだ。じゃあ名誉には外科医の心得はないのか？ない。名誉ってなんだ？ことばだ。その名誉ってことばになががある？その名誉ってやつに？空気だ。結構な損得勘定じゃないか！その名誉をもってるのはだれだ？こないだの水曜日に死んだやつだ。やつはそれにさわっているか？いるもんか。聞こえているか？いるもんか。じゃあ名誉って感じられないものか？そうだ、死んじまった人間にはな。じゃあ生きてる人間には名誉も生きてるのか？いるもんか。なんでだ？世間の悪口屋が生かしておかんからだ。だからおれはそんなものはまっぴらだと言うんだ。名誉なんて墓石の紋章にすぎん。以上でおれの教義問答はおしまいだ。

303

ああ、人の目が

今日の戦の結果をあらかじめ読みとれるものなら！

まあよかろう、やがては今日一日も終わるだろう、

終われば結果もわかるだろう。

304

人間とはなんだ？ 畜生と変わりがないではないか。

人間に前後を見きわめる大きな力を授けた神は、

その能力、神にも似た理性を、使わないまま

かびさせようとしてお与えになったのではあるまい。

ところがこのおれはどうだ、畜生のもの忘れか、

それとも事のなりゆきをあれこれ考えすぎで

臆病なためらいか、そう、考える心というやつ、

もともと四分の一は知恵で、残りの四分の三は

臆病にすぎないのだ、いずれにしろおれにもわからぬ、

「これだけはやらねば」と言いつつのめめと暮らす

おれ自身が。そのための名分、意志、力、手段には

こと欠かぬのに。大地をおおう実例がおれを駆り立てる。

見ろ、あの兵士たち。あれだけの兵力と費用を

率いる王子のいたいたしいまでの若さ。

だがあの王子の胸は崇高な大望によくらみ、

いかなる結果が待ちうけるかは眼中になく、

はかない頼りないいのちを運命にさらし、

死と危険に敢然と挑戦する、それもただ

卵の殻ほどの問題のためだ。真の偉大さとはなにか。

たいした理由もないのに軽挙盲動することではなく、

名誉がかかわるとあらば、たとえ藁しべ一本のためにも

死を賭して闘う理由を見出すことこそ偉大なのだ。

305

大アガメムノンに申しあげる、ここトロイには

国王プライアムを父とする王子ヘクターがおりますが、
この長々しい退屈な休戦によって剣も腕も
錆びつくことを恐れ、私にラッパ手をとめない
こう申せとのことです。王侯、貴族諸卿、
もしギリシアの華とたたえられる騎士のなかに、
安楽をむさぼるよりも名誉をおもんじ、
危険を恐れるよりも人々の賞賛を求め、
勇気の二字を旨として恐怖を胸にもたず、
恋人に口づけしながらその耳にささやく
むなしい誓いの言葉以上に恋人に愛を捧げ、
その恋人の美しさと徳の高さを剣によって
あえて証明せんという人あらば、その人に挑戦する。
ヘクターは、トロイ、ギリシア両軍の面前において、
その愛を捧げる人が、ギリシア人の腕に抱かれた
いかなる婦人よりも、聡明で美しくて誠実であることを
証明する、あるいは証明すべく最善をつくしたい。
そのために明日、ラッパの音を合図に、
ギリシアの陣営とトロイの城壁の間において、
真実の愛をもつギリシア人に戦いを挑むものである。
この挑戦に応ずるものあらばヘクターは敬意を表しよう、
なければ、ヘクターはトロイにもどってこう言うだろう、
ギリシアの婦人はことごとく不器量で、折れ槍一本の
値うちもないらしいと。以上であります。

306

どうです、このお顔に宿る気品は。
太陽神アポロの巻き毛、主神ジュピターの額、
三軍を叱咤激励する軍神マルスのまなざし、
天を摩する山頂におり立ったばかりの
使神マーキュリーの立姿。
神々が天下にむかって、これこそ
人間のなかの人間、男のなかの男と
知らしむるために印を押した契約書。

307

一般に、
勇気は最上の美德であり、勇気をもつものは
最高の栄誉を与えられるものとされている。
とすれば、私がお話しようとする人は、この世に
並ぶものなき至高の人物ということになる。
タークィンがローマに攻め寄せてきたとき、彼は
十六歳にして抜群の働きをした。当時の総指揮官は、
私の敬愛する人物だが、彼の奮戦ぶりを目撃している、
彼はその髭も生えそろうぬ幼顔で、髭面どもを
追い散らし、一人のローマ兵が危ないと見てとると、
その前に仁王立ちになって、わが執政官の面前で
敵を三人まで倒した。またタークィンその人をも
一騎打ちで屈伏せしめたのだ。舞台でならまだ
女の役を演じる年ごろでありながら、戦場において
その日随一の勲功をあげた男となり、そのために
柏の冠を額にいただいた。このようにして彼は
幼年にして一人まえの男となり、荒海もしのぐ猛威を

ふるうにいたった。その後十七回の激戦において、彼はつねに勝利の栄光を独占してきた。このたびの
コリオライ市の内外の働きについては、私としては、語るべきことばもない。彼は逃げる味方を押しとどめ、身をもって目ざましい手本を示し、臆病者の恐怖を楽しい遊びに一変せしめたのだ。敵兵はまるで疾走する船の前の海草のようにおなしくなびき伏し、その舳先の前に倒れていった。彼の剣は死の刻印だ、触れれば必ず死のしるしを残す。全身くまなく鮮血にまみれた彼が腕をひとふりすれば、それに答えて死んでいく敵兵の悲鳴がこだました。さらに彼は、単身、地獄の城門に突入し、そこをもあざやかな死の色に染めると、助けも待たずにとって返し、たちまち勢いをとりもどした味方を率い、星の力を受けたかのように、一気にコリオライを攻め落とした。こうしてすべてを手中にしたおりもあり、遠くからの戦闘の物音が彼の待ちかまえた耳を刺した、と見るや、彼は勇気を倍加し、肉体から疲労を一掃し、たちまち戦場へと駆けつけた。そして敵軍に割って入った姿は、血潮の川を泳ぐもののようであり、その殺戮には終わりがなくと見えた。こうして戦場も町もわがものとなるまで、彼は一度として息を入れ、からだを休めることをしなかった。彼は戦利品など目もくれず、どんな貴重な品々もそのあたりの汚物のようにみなし、吝嗇そのものも与えるであろうものさえ欲せず、自分の行為にたいする報酬はすなわちそれをおこなうことにあるとし、人生をあるがまま生きればそれで満足だ、と言うのだ。

308

ヴォラムニア

あの子がまだ私の一人息子としてか弱い幼子であったときも、美しい若者に成長して人の目を引くようになったときも、また、国王が一日だけ貸してくれと頼んできて、母親としては一時間でも目の届かぬところにやりたくないと思うようなときでも、私は、ああいう子には名誉こそふさわしいと考えて——名声がいのちを吹きこまねば壁にかかった絵も同然でしょう——そう考えて、栄誉が得られそうなところには喜んで危険におもむかせたものです。残酷な戦争にも出してやった、するとあの子は名誉の柏の冠を額にいただいて帰ってきました。私はね、ヴァージリア、あの子が生まれて男の子だとはじめて聞かされたときより、あの子が男らしい働きをはじめて見せてくれたときのほうが、はるかに嬉しかったのです。

ヴァージリア

でも万一そのために戦死なさったら、お母様、そのときは？

ヴォラムニア

そのときはあの子の名声が私の息子となったでしょう、それをわが子と思ったでしょう。

309

なるほどねえ、王の尊い血が燃えあがるとき、王者の尊厳ってやつはその栄光を天に噴きあげるんだなあ！
ああ、いま死神めは、その顎を鋼鉄でもって裏打ちし、兵士たちの剣をその歯、その牙としている。
そして、いま死神めは、勝敗決せぬ王同士の戦闘において、人の肉を食いちぎり、饗宴を開いている。

310

ま、とにかく仲直りしようか、ジャック。あんた、もうじき戦に行くんだろう。二度と生きてるあんたに会えるかどうか、知ったこっちゃあないんだもんね。

311

ヴォラムニア

私にはおまえの夫の打ち鳴らす太鼓が聞こえる、
オーフィディアスの髪をつかんで投げ倒すのが見える、
熊に出会った子供のようにヴォルサイ人が逃げまどう、
あの子は足を踏みならして部下を叱咤する――

「ええい、憶病者め！きさまら恐怖に狼狽するのか、
それでもローマ人か！」そして鎖帷子をつけた
勇ましい手で血まみれの額をぬぐい、突き進んで行く、
まるで日やとい農夫が、全部刈りとらないと
賃金がもらえぬと思って、ひたすらなぎ倒すように。

ヴァージリア

血まみれの額ですって？ああ、血など見るのもいや！

ヴォラムニア

ばかなことを！血こそ男にふさわしいのです、
勝利の記念碑を飾る金箔よりも。あのヘクターに
乳を飲ませたときのヘキュバの胸も、ギリシアの剣に
傷ついてなおひるまなかったときのヘクターの
血まみれの額ほどには美しくなかったのです。

312

さすがのおれもまだ、北国の熱血漢、ハリー・パーシーの気分にはなれないな。なにしろ朝飯前にスコットランド兵を六、七ダース殺しておいて、手を洗いながら奥方にこう言うのだ、「糞くらえだ、こんな平和な世のなかは！これでは腕がなまる」そこで奥方が、「ねえ、ハリー、今日は何人殺したの？」ときく。すると、「おれの馬に薬を飲ませてくれ」と言ってから、「十四、五人ってところかな」と答えるのが一時間もあとのことだ、そして、「ささやかなものだ、とるにたらぬ」とつけ加える。

313

これほど母の恩を受けた男はいないのに、この子は母の願いを罪人の哀訴のように聞き流す。これまでおまえは一度も私に孝行をつくしてはくれなかった、それなのにこのあわれな母鳥は、ほかに雛を望まず、羽ばたいておまえを戦場に送り出し、名誉に包まれて無事に凱旋すれば喜んでふところに迎えたものだった。

314

もし戦死する運命にあるとすれば、わが国に与える損失はわれわれだけで十分だ。また、もし勝って生き残るとすれば、少数であればあるほど名誉の分け前は大きくなる。
だから頼む、一人でも多ければいいなどと望んでくれるな。
神に誓って言うが、私には黄金にたいする欲はない、
だれが私の費用で飲み食いしようと少しもかまわないし、
人が私の衣服を身につけてもなんとも思わぬ、
そういう外面的なものを求める欲は私にはないのだ。
だがもし、名誉をほしがるのが罪であるとすれば、
私はこの世でいちばん罪深い人間ということになる。

だから、伯爵、本国からの援兵を一人でも望んでくれるな。
私はこの大いなる名誉を、必ず得られると信じているのに、
一人でもふやすことによってその分だけ私の分け前を
減らしたくないのだ。頼む、一人の援兵をも望むなよ、
それよりも、ウェスモランド、全軍に布告してくれぬか、
このたびの戦いにのぞむ勇気をもたぬものは
立ち去るがいいと。そのものには帰国の許可証も出し、
その財布には旅費も入れてやることにしよう。
われわれは、ともに死ぬことを恐れるようなものと
ともに死ぬことを望みはしないのだ。
今日は十月二十五日、聖クリスピアンの祭日だ、
今日を生きのびて無事故郷に帰るものは
今日のことが話題になるたびにわれ知らず胸を張り、
聖クリスピアンの名を聞くたびに誇らしく思うだろう。
今日を生きのびて安らかな老年を迎えるものは、
その前夜祭がくるたびに近所の人々を宴に招き、
「明日は聖クリスピアンの祭日だ」と言うだろう、
そして袖をまくりあげ、古い傷あとを見せながら、
「聖クリスピアンの日に受けた傷だ」と言うだろう。
老人はもの忘れしやすい、だがほかのことはすべて忘れても、
その日に立てた手柄だけは、尾鰭をつけてまで
思い出すことだろう。そのとき、われわれの名前は
日常のあいさつのようにくり返されて親しいものとなり、
王ハリー、ベッドフォード、エクセター、ウォリック、
トールボット、ソールズベリー、グロスターなどの名は
あふれる杯を飲みほすたびに新たに記憶されるだろう。
この物語は父親から息子へと語りつがれていき、
今日から世界の終わる日まで、聖クリスピアンの祭日が
くれば必ずわれわれのことが思い出されるだろう。
少数であるとはいえ、われわれしあわせな少数は
兄弟の一团だ。なぜなら、今日私とともに血を流すものは
私の兄弟となるからだ。いかに卑しい身分のものも
今日からは貴族と同列になるのだ。そしていま、
故国イギリスでぬくぬくとベッドにつく貴族たちは、
後日、ここにいなかったわが身を呪い、われわれとともに
聖クリスピアンの祭日に戦ったものが手柄話をするたびに
男子の面目を失ったようにひけめを感じるだろう。

315

アントニー

やつをたたき返してやったぞ、だれか先へ行って、
女王に戦果を報告しろ。明日は日の昇る前に、
今日逃げおおせたやつらに血を流させてやる。
みなに礼を言いたい、あっぱれな強兵たちだ、
よくやってくれた、それも義務感からではなく、
各人がおれの大義をわがこととして戦ったからだ。
一人一人がヘクターかと思われたぞ。さあ、
城内に入り、妻や友を抱きしめ、今日の手柄を
話してやるがいい、聞くものは嬉し涙をもって
おまえたちの血のりを洗い流し、口づけをもって
おまえたちの傷口を癒してくれよう。
その手を。

この妖精の女王におまえの殊勲を推賞しよう、
感謝の祝福を受けられるように。
おお、この世の光、
鎧をつけたこの首を抱きしめてくれ、そのままの姿で
剣も通さぬ鋼を貫いておれの心臓まで飛び込んでこい、
そこで高鳴る胸を乗りこなすのだ！
クレオパトラ
王のなかの王、
武勇の神、この世の大きな罠にも捕らえられることなく、
ほほえみながら凱旋されたのね？
アントニー
いとしいナイチンゲール、
敵はそのねぐらにたたき返したぞ。どうだ、おまえ！
この髪に白いものがまじりはじめたとはいえ、まだ
頭はぼけぬ、体力を養って若いものと互角に
戦うこともできるぞ。この男を見てやってくれ、
おまえの恩恵の手をこの男の唇に与えてはくれぬか。
口づけするがいい、わが勇士。この男の戦いぶりは、
神が人類を憎みたまい、この勇士の姿を借りて
破壊のかぎりをつくしたかと思われたほどだ。

316

パンダラス
あれはヘクターだよ、おまえ、あれだ、あれだ、あれこそまごうかたなきヘクターだ。お帰りなさい、ヘクター！どうだ、りっぱな人物だろう、おまえ。万歳、ヘクター！りっぱな顔立ちじゃないか、え、おい。あれこそ男のなかの男だ。
クレシダ
ほんと、男のなかの男ってかたね。
パンダラス
そうだろう。あの顔を見ていると、こっちまでいい心もちになってくる。それにどうだ、あの胄の傷、見えるか、え、おい？見えるだろう？あれは冗談なんかじゃない、本物の闘いのあとだ、胄の下も傷だらけのはずだ。
クレシダ
みんな刀の傷かしら？
パンダラス
刀だろうがなんだろうが、あの人は平気さ。たとえ悪魔が相手でも恐れることはない。まったく見ているこっちまでいい心もちだ。

317

大軍に包囲されたトロイの城からは
人々の信賴的、豪胆なヘクターが雄々しく戦場に出陣していった。
多くのトロイの母たちは、若々しい息子たちが
輝く武器を打ち振うさまを見て、喜びを分ちあった。
だが、彼女たちの希望の表情にはふさわしからぬ物腰が現われ、
楽しい喜びのなかから、憂わしげな怖れが覗いていた、
まるで、きらびやかに輝くものに染みがついたように。
彼らの戦いの場、ダルダニアの岸边から
葦の茂るシモイスの川の堤まで、赤い血が流れていた。
川波はうねり逆巻いて、激戦を真似ようとした。
その戦列は、痛み傷ついた岸边にぶつかり、
ふたたび引き退き、さらに大いなる戦列と合し、
援軍といっしょに力を合せて

シモイス川の堤に泡立つ波を打ちつけるのだった。

318

トロイの勇士、わしは何度も見た、あなたが、
運命になりかわって、ギリシアの若者の隊列を
残酷無惨に斬り進むのを。またわしは見た、あなたが
英雄ペルセウスのごとく激し、フリジアの馬に
拍車をかけるのを。そして敗れ屈したものには
目もくれず、空中に振りあげた剣を倒れたものに
振りおろすのをやめたあなたを見て、わしは
そばにいるものにこう言ったものだ、「見ろ、
あれこそは人のいのちをつかさどるジュピターだ」と。
そしてまたわしは見た、あなたがギリシア軍に
包囲されてなお、オリンピアの力士のように、
悠然と一息入れているのを。そのような姿は見たが、
つねに胃をいただくその顔を間近に見るのは
はじめてだ。わしはあなたのおじいさんを知っておる、
剣を交えたこともある。りっぱな軍人であられた。
だがわれわれ軍人すべての神マルスにかけて言う、
あなたにはかなわなかったと。この老人にあなたを
抱かせていただきたい。この陣営にようまいられた。

319

コスタード

われこそはポンペーなるぞ、世に言うデカポンペーなるぞ——

デュメーン

デカじゃない、大だ。

コスタード

ああ、そうでした、「大」でした——世に言う大ポンペーなるぞ、
敵をさんざんこらしたる天下無敵の将なるぞ。

浜辺に沿って旅をしてたまたまこの地にきたるなり、

フランス王女の御前に、かように武器をおくものなり。

お姫様が「ご苦労、ポンペー」とおっしゃればおらの役はおしめえた。

王女

大ご苦労でした、大ポンペー。

コスタード

大ご苦労って言われるほどじゃありませんが、けっこうちゃんとやったでしょう。「大」
のところでとちったのはだいなしだったけど。

ビローン

この帽子に半ペンス賭けてもいい、ポンペーが最高の英雄だ。

ナサニエル

われこそは世に在りしとき、世界の征服者であった、

東西南北駆けめぐり、手中に収めたのであった。

この紋章を見るがいい、われこそはアリサンダーなるぞ。

王女

まあ、征服者がおろおろして。アレキサンダー、続けなさい。

ナサニエル

われこそは世に在りしとき、世界の征服者であった——

ボイエット

そう、そのとおりだ、アリサンダー、世界を制したのであった。

ビローン

おい、大ポンペー——

コスタード

なんです、もうコスタードですよ。

ビローン

あの征服者を追っ払ってくれ、あのアリサンダーを。

コスタード

あんたにかかっちゃあ征服者アリサンダーもいいとこなしだ！いまに壁掛けの絵からあんたはそぎ落とされちまうだろう、矛をもって便器に腰掛けてるみてえなあんたの紋章のライオンも、エージャックスに便器ジャックされて乗っとられ、エージャックスが九人目の英雄になるだろう。まったく、征服者だってえのに、こわがってものも言えねえんだからなあ！

みっともねえから逃げちまいなさいよ、アリサンダー。

追っ払いましたよ。なんてまあおとなしいばかな人だろう、正直もんだからすぐ顔に出ておろおろしちまうんだ。あれでもなかなかいい人だし、球ころがしの名人でもあるんですがねえ。ただアリサンダーは——ごらんのとおりです——ちと役が重すぎました。でもいまにほかの英雄たちがやってきて、それぞれ思ってることを言うでしょう。

320

あの愛すべき勇士ヘクターはすでに死体となっております。どうか、愛すべきかたがた、死者の骨に鞭打つようなまねはよしてください、彼とても存命中はりっぱな人物だったのですから。

321

ガワー

まったくすばらしい名君だよ、国王ヘンリーは！

フルーエリン

そりゃあ陛下はな、ガワー大尉、ウェールジュのモンマシュ生まれだからさ。あの町はなんと言ったっけな、アレキサンダーデカ王の生まれた町は？

ガワー

アレキサンダー大王だろう。

フルーエリン

だって、きみ、大はでかいちゅうことじゃないのか？だから、デカ王も、大王も、偉大王も、巨大王も、壮大王も、表現はいささかことなるが、結局同じことだろう。

ガワー

アレキサンダー大王が生まれた町はたしかマセドンだ。父親はマセドンのフィリップと呼ばれていたはずだから。

フルーエリン

そう、おれもアレキサンダーが生まれたのはマシェドンだと思う。いいかな、大尉、世界地図を一目見れば、マシェドンとモンマシュの両者のあいだにまったく類似した状況のあることがわかるはじゅだ。マシェドンには河がある、モンマシュにも同様に河がある、モンマシュにあるのはワイ河ちゅう河だ、マシェドンのほうのはなんちゅう河だかしゅっかり忘れてしまった、だがそんなことはどうでもいい、二つの河は右手の指と左手の指が似ているようにそっくりだし、どちらの河にも鮭がいる。

322

ハムレット

人間、帰りつくところはあさましい道具にすぎぬか。アレキサンダーの尊い亡骸も、酒樽の栓になりかねないのだな。

ホレーシオ

それは少しとっぴょうしもないお考えでは。

ハムレット

いや、そうではないぞ。ごく控えめに考えていっても当然そうなる。つまりこうだ、アレキサンダーが死ぬ、埋葬される、塵と化す。塵は土だ。土からは粘土がとれる。となれば、アレキサンダーのなれのはての粘土で酒樽の栓が作られぬともかぎるまい。

かつては世界に君臨せしシーザーも
死してはあわれ一片の土くれと化し、
かつては天下を畏怖せしめし帝王も
いまは壁穴ふさぎ北風防ぐ身となる。

323

あいつはばかだ、阿呆だ、ごろつきだ、ときどき戦争に行くのも軍服姿でロンドンに帰っていい格好したいからだ。ああいうやつらにかぎって指揮官たちの名前をよく知っている、そしてだれがどこで手柄をたてたかをペラペラと暗唱してみせる、これこれの砦で、これこれの突破口で、これこれの防衛線で、だれがみごとに血路を切り開き、だれが敵弾に倒れ、だれが面目を失い、そのとき敵軍の様子はどうか、といったようなことを、軍隊用語を駆使して滔滔とのべたてるのだ、新しくひねり出した誓言の文句で味つけしながら。それも、将軍のような髭をはやし、戦塵にまみれた軍服をつけてしゃべるものだから、ビール瓶の林立するなかで脳味噌をアルコール漬けにした連中の耳には、思いもよらぬほど効果がある。だが、時代の恥辱とも言うべきそのような輩を見分ける目は養っておかねばならんぞ、さもないととんだ間違いをしでかすことになるのでな。

324

みんな大挙して押しかけ、唾はその姿を見ようとし、
盲はその声を聞こうとしています。年配の婦人は
手袋を、若い婦人や娘はスカーフやハンカチを、
あの人が通ると投げかけています。貴族たちは
ジュピター像にたいするように腰を曲げ、平民たちは
帽子の雨を降らせ、歓声の嵐を浴びせています。
こんな騒ぎははじめてです。

325

ほら、ごらんください、
イギリスの浜辺には老若男女が総出でお出迎えし、
歓声と拍手でもって、国王の雄大な露払い役とも言うべき
大海の波のどよめきを吹き消しております。
こうして国王は上陸され、威風堂々あたりを払って
行進を開始されました。人の思考力のなんと早いことか、
たちまち国王はロンドン郊外のブラックヒースに
到着されたものとご想像願います。そこで貴族たちは、
国王の傷だらけの胃と、折れ曲がった剣を先頭に立てて、
ロンドン市中を行進したいと願い出ました。しかし
国王はそれを拒絶されました、虚栄心や自己顕示欲など
さらさらおありにならず、勝利の榮譽、栄冠はすべて
ご自身のものではなく、神に捧げるべきものと
お考えになったからです。さあ、どうか皆様、
想像力の鞆にせいっぱい空気を送りこんで、
ロンドンじゅうの市民が続々集まるさまをごらんください。
市長並びにその同僚たちは、大礼服に身を包み、
まるで古代ローマの元老院議員たちのように
足もとに群がる平民たちを従えて、凱旋する
彼らのシーザーを出迎えに歩をはこんでおります。
たとえばいま、身分は国王ヘンリーに劣るとも
同様に市民に愛されているわれらの将軍が、
女王陛下の命によるアイルランド征討を終え、
反逆者をその剣先に串刺しにして凱旋されるならば、
いかに多くの泰平の民が歓迎のために飛び出すことでしょう。

だがそれにまさる、はるかにまさる理由をもって
彼らは国王ヘンリーを歓迎したのです。

326

あの男にどんな魔力があるのか存じませんが、
あなたの部下たちも、食前の祈りに、食事の話題に、
食後の感謝に、あの男の名前を出す始末です。

327

ああ、血も涙もない冷酷なローマの平民ども、
きさまらはポンペーを忘れたのか？ 幾たびきさまらは
城壁や胸壁にのぼり、塔や窓にむらがり、
いや、煙突のてっぺんにまでよじのぼって、
子供を腕に抱いたまま、気の遠くなるほど
長い一日を、いつまでもじっと根気強く、
大ポンペーのローマ凱旋を見んと待ったことか。
そしてその戦車がはるか彼方に姿を見せただけで、
きさまらは一斉に歓呼の声をあげ、そのどよめきが
うつろな川岸にこだまして、そのために
さすがのタイバー川も土手の下でおののき
身をふるわせたではないか？
それなのにいま、きさまらは晴れ着を身につけるのか？
それなのにいま、きさまらは仕事を休むのか？
それなのにいま、きさまらはあの男の道に花を撒くのか、
ポンペーの血族を滅ぼしての凱旋を祝うために？

328

舌のあるものはみなあの男のことを話題にし、
目の悪いものは眼鏡をかけてまであの男を見ようとする。
おしゃべりな乳母は泣きわめく赤ん坊もそっちのけで
噂話に夢中になる。台所の下女は煤だらけの首に
いちばん上等なスカーフを巻きつけ、塀によじのぼって
あの男の姿を一目拝もうとする。店も屋台も窓も
人で鈴鳴りだ、屋根にすわるやつ、その棟に
またがるやつ、種々雑多な連中が顔をそろえて
見物しようと懸命だ。めったに姿を見せぬ神官たちも、
平民どもと押しあいへしあい、場所を確保しようと
息を切らしている。いつもはヴェールに顔を包む
貴婦人たちも、その美しく化粧した頬を太陽の
燃える口づけにさらし、白い肌が赤く日焼けするのに
黙って耐えている。たいしたばか騒ぎではないか、
あの男の守護神が、なんていう神様か知らないが、
ひそかにその五体にもぐりこみ、あの男を
優美な姿に変えてもしたようだ。

329

ロス

閣下のご子息は、みごと武人の務めを
はたされました、まだ成年にも達せぬのに、
戦っては一步も退くことなく、あっぱれ
若武者ぶりを示されつつ、男らしい最期を
とげられました。

シーワード

死んだか、やつは？

ロス

はい、ご遺骸は戦場からすでに運ばれてきました。

お悲しみはご子息の人柄のりっぱさとともに
はてしないこととお察しします。

シーワード

向こう傷であったか？

ロス

はい、額の上に。

シーワード

では神の兵士となってくれよう。

たとえ髪の毛の数ほど息子がいたとしても、
これ以上りっぱな最期は望めまい。

330

追放されたノーフォーク公は、何度となく、
キリストのために十字の旗をひるがえし、
邪教徒たるトルコ人、サラセン人相手に
キリスト教団の栄光を守るべく戦いました、
そして赫赫たる戦功をあげましたが、連戦の疲れから
イタリアに退き、ついにヴェニスにおいて、
その身をかのうるわしい国の大地にゆだね、
その清らかな魂を、彼が長年その旗のもとに
戦ってきた、主キリストのみ手に捧げたのです。

331

ああ、アントニー、
その酒池肉林の宴をよしてくれ。おまえはかつて、
モデナにおいて、ハーシアスとパンサ両総督を
討ちとったものの、退却を余儀なくされたことがあった、
そのとき、つきまとう飢餓相手におまえはよく戦った、
蝶よ花よと育てられたおまえなのに、土民もおよばぬ
がんばりを見せたものだ、馬の小便を飲みほし、
けだものさえ吐き気をもよおすどぶどろの溜り水にも
平気で口をつけた、どんなきたない生け垣になった
どんなまづい木の実でもいとわず噛みくだいた、
そう、雪におおわれた草原をさまよう雄鹿のように、
おまえは木の皮まで齧った。アルプスの山中では
それを見ただけで死んだものさえいるという
あやしげな肉を食ったと聞いている。そのすべてを——
いま言えばおまえの名誉を傷つけることになるが——
おまえは武人にふさわしく耐え抜き、その顔に
やつれさえ見せなかったのだ。

332

この身を八つ裂きにするがいい、ヴォルサイの
大人も子供もおれの血で剣を汚すがいい。小僧だと！
嘘つき犬め！正しい記録があれば書いてあるはずだ、
鷲が鳩小屋に舞いおりたように、おれの羽ばたきが
コリオライのヴォルサイ人をふるえあがらせたとな。
おれ一人でやったのだぞ。なにが小僧だ！

333

ああ、いまとなつては、
さらばだ、静寂、さらばだ、心の平穩！
さらばだ、羽根飾りをつけた軍隊、野望でさえ
美德となる生死を賭けた戦い——おお、さらばだ！
さらばだ、いなく駿馬、りょうりょうたるラッパの音、
士気を鼓舞する大鼓のひびき、耳をつらぬく笛の音、
堂々たる軍旗、輝かしい戦場における
いっさいのもの、その誇り、壮絶な光景！
それに、ああ、破滅を呼ぶ大砲、そのすさまじい砲声は
不滅の雷神ジュピターの怒号にもまさるおまえ、
さらばだ！オセローの生涯の仕事は終わってしまった！

334

この歴代の王の玉座、この王権に統べられた島、
この尊厳にみちた王土、この軍神マルスの領土、
この第二のエデン、地上におけるパラダイス、
自然の女神が、外国からの悪疫を防ぎ、
戦の手から守らんとして築いた、この砦、
この幸福な種族、この小宇宙たる別天地、
しあわせ薄くしてねたみにとりつかれた外敵の
悪意の手の侵入にそなえて、みずからを守る
城壁ともなり、館をめぐる堀ともなる、
白銀の海に象嵌されたこの貴重な宝石、
この祝福された地、この大地、この領地、このイングランド、
代々の王を生み育てたこの母胎、この乳母、
その種族ゆえに恐れられ、その血統ゆえに名高く、
頑迷なるユダヤの地にある、この世の救い主、
聖母マリアのみ子の墓をとりもどさんとして、
キリストの教えのため、真の騎士道のために戦い、
はるか海外にまで雄名をはせた、あの
尊い王たちを生み育てたこの国、この尊い、尊い国、
世界のすみずみにまで名声をとどろかせたこの尊い国、
それがいま、おれは死にのぞんではっきり断言するが、
貧しい小作地かなにかのように貸し出されているのだ。
天を摩す荒波にかこまれ、海神ネプチューンの
飽くことなき包囲攻撃を、その岩壁ではね返していた
イングランドも、いまは恥辱にかこまれ、腐った羊皮紙に
インクの汚点をたらした書類に縛りつけられている。
他を征服することをつねとしていたイングランドが、
恥ずかしくもみずからを征服してしまっているのだ。

335

わがイングランドは、最初にみずからの手でみずからを
傷つけぬかぎり、傲慢な征服者の足もとにひれ伏すことなど
かつてなかったし、これから断じてないでしょう。
こうして貴族諸卿がふたたび祖国にもどってきたからには、
たとえ全世界が三方から攻めてこようとびくともしません。
もはやわれわれを悲しませるものはなに一つないでしょう、
イングランドがおのれ自身にたいして忠実である以上。

336

バーボン

ノルマン人とはいえ、
やつらは私生児のノルマン人、ノルマン人の私生児です！
このいのちにかけて、やつらになんの抵抗も見せずに
進撃を許すとすれば、私は公爵領など売り飛ばし、
地球の片隅にのさばっているやつらのアルビオン島の
湿った薄汚い畑でも買い求めることにします。

軍司令官

戦の神よ！彼らはどこから勇敢な気質を得たのです？
彼らの気候は寒冷で、陰気で、霧が深く、太陽も
悪意を抱くもののように蒼ざめた顔に渋面を作り、
みのった作物を枯死させているではありませんか？
あの泡立つ水、疲れた馬の薬、彼らのいわゆるビールなどで、
彼らの冷たい血を熱い勇気に変えられるものでしょうか、
葡萄酒で生気を吹きこまれたはずのわれわれの血が
凍りついているように見えるのに？ああ、われわれは、
わが国土の名誉のためにも、藁屋根の氷柱のように
悄然とぶらさがるのはよしましょう、あの冷血な人種でさえ
われわれのゆたかな土地に勇気の汗をたらしているのです。

337

狂気の世界だ！狂気の王たちだ！狂気の和解だ！
ジョン王は、国全体にたいするアーサーの権利を奪うため、
うめえこと穴埋めできるならと喜んでその一部を手放すし、
フランス王は、その鎧を良心という締め金で締めあげ、
宗教的情熱と慈悲心に駆り立てられ、神の兵士として
この戦場にやってきながら、ちょっと耳打ちされると
あのさまだ、耳打ちしたのは、あの心変わりをさせるやつ、
あのこすっからい悪魔、あの口から出まかせのやり手ばばあ、
あの誓約破りの常習犯、あの見さかいなしにだれもかも、
王、乞食、老人、若者、処女を問わずにしぼりあげ、そう、
処女の場合なんか、処女の名のほか失うものをなに一つ
もちあわせていないとなると、その処女をだましとる悪党、
あの作り笑いを浮かべる紳士、「利益」っていう名の
おべんちゃら野郎だ、世のなかをねじ曲げる錘野郎だ、
世のなかはそれ自体ちゃんとバランスがとれているので、
本来まっすぐな道をまっすぐ進んでいくものであるのに、
この利益ってやつ、この邪道へと足を引っばる錘野郎、
この世のなかの動きの支配者、この便宜主義者が、
その方向、目的、進路、目標を強引にねじ曲げ、
公正な道を踏みはずして突っ走らせてしまうのだ、
そしてこの錘野郎、この利益ってやつ、このポン引き、
このやり手ばばあ、このすべてを変えてしまうことばが、
移り気なフランス王の目ん玉にいきなり飛びこみ、
弱きを助けようとしていた固い決意をねじ曲げ、
断固、名誉ある戦争にのぞむはずであったのに、
卑劣、醜悪きわまる和睦を結ばせてしまった。

338

ああ、なんて不名誉な和睦だろう！
われわれは自分の国にしながら、侵入してきた

外敵にたいし、公正な条約を申しこむのですか、
妥協し、迎合し、話しあいによって卑屈な休戦を
とり結ぶのですか？ 贅沢三昧で甘やかされた
髭も生えそろわぬ小僧が、意気高らかに
わが武勇の国土を踏み荒らし、軍旗をひるがえして
わが大空をばかにしているのに、黙って見のがしていて
いいのですか？武器をとりましょう、陛下！

339

このあまりにもばかばかしい無礼極まる侵入騒ぎ、
この甲冑を身につけての無分別極まる仮面劇、
この髭も生えそろわぬ若僧による戦争ごっこを、
王は笑いながら見ておられるが、それというのもすでに、
このちゃちなしゃらくさい餓鬼どもの軍勢を
その領土内からたたき返す用意ができておられるからだ。
王のお手の力は知っておろう、かつておまえの家の前で
おまえを打ちのめしてほうほうのていで逃げ出させ、
おまえを隠し井戸の底にバケツのように飛びこませ、
おまえをむさくるしい馬小屋の床に這いつくばらせ、
おまえを戸棚のなかに質草のように横たわらせ、
おまえを豚小屋に押しこめさせ、おまえの身の安全を
かろうじて穴倉のなかに求めさせ、おまえの国の
鳥の鳴き声を耳にしても、それがイギリス軍の
関の声ではないかと思ってぶるぶる身ぶるいさせたらう、
おまえの部屋においてさえおまえをこらしめた
あの勝利のお手が、ご自分の国でひるむとも思うのか？
ばかな。よく心得ておけ、武装された勇敢な王は、
巢の雛鳥に近づこうとする外敵を一挙に襲撃すべく、
大空高く舞いあがる鷲のように勇み立っておられるのだ。
おまえたち、墮落しきった恩を忘れた謀反人ども、

340

天よ、誓い破りの王たちを撃つべく武器をおとりください！
未亡人の叫びを、夫がわりにお聞きください、天よ！
この呪われた日に捧げる私の祈りをお聞きになり、
この日を平和には終わらせないでください、日の沈む前に
誓い破りの王たちのあいだに戦争を起こさせてください！

341

おお、神々が年寄りをあわれみ、孝行をよしとされ、
神々ご自身年寄りのお身であるとすれば、これを
ご自身のことと考え、天使を送ってわれを助けたまえ。

342

死体を抱きあげろ。
なにがなんだかわからなくなってきた、どうやらおれは
この世の茨と危険のなかに道を見失ったらしい。
イギリス全土を軽々ともちあげたものだ、おまえは！
王の血が流れていたその小さな亡骸から、
この国のいのち、権利、真実が、天国へ
飛び去ってしまった。いまこのイギリスは
いがみあいの場と化し、その堂々たる王権は

主を失って食い荒らされ、噛みちぎられている。
いま山犬のような戦争は、しゃぶられて骨だけになった
王位を狙って猛り狂い、毛を逆立ててはやり立ち、
牙をむいて平和のやさしい目をおびやかしている。
いま外国からの軍勢と国内における不満分子は
合流して一体となり、果てしれぬ巨大な混乱は、
病に倒れた獣に襲いかかろうとする鳥のように、
篡奪された王座がいまにも朽ちはてるのを待っている。
いまこの嵐に耐えうる外套と腰紐をもつものは
しあわせと言うべきだ。

343

ああ、お許しください、血まみれの土と化した
シーザー、私があの虐殺者どもの言いなりに
おとなしくしていることを！いまのあなたは
時の流れを生きたもっとも高潔な人間の廃墟だ。
この尊い血を流したものの手に災いあれ！
この傷口を前にして予言しよう——まるで
物言わぬ口のように、真紅の唇を開き、おれの舌に
かわりに語ってくれと哀願する傷口を前にしてだ——
この世の人間どもの五体に呪いが降りかかるだろう。
家には骨肉あい食む争いが、国には激烈きわまる
内乱が、イタリア全土に苦しみの種を蒔くだろう。
流血と破壊がありふれた日常茶飯事となり、
どんな恐ろしい光景も人々の目を驚かさなくなり、
ついには赤子が戦争の爪に八つ裂きにされるのを
目のあたりにしても、母親はほほえむだけとなるだろう。
あわれみは日々に見る残虐行為に息の根をとめられ、
復讐を求めてさまよい歩くシーザーの靈魂は、
地獄から出てきたばかりの復讐神エイテを伴い、
全土にひびき渡る王者の声をもって、高らかに
「虐殺だ」と命じ、戦争の獵犬どもを解き放つだろう。
そしてこの卑劣な行為は、埋葬を求めてうめく
腐れ肉の山とともに、天までその悪臭を放つだろう。

344

両陛下のご面前にて次のような質問をいたしましても
どうかお咎めなきよう、ひとえにお願い申し上げます。
そもそもいかなる障害、いかなる不都合があって、
諸芸の乳母であり、豊穡と生誕の嬉しい母である
「平和」が、あわれにも裸にされ、傷だらけにされ、
世界最高の庭園であるわが肥沃なるフランスに
そのうるわしい顔を見せなくなったのでしょうか？
悲しいかな「平和」は久しくフランスから追放され、
その作物はことごとく大地に落ちたまま放置され、
山なす収穫がゆたかさゆえに腐っていております。
人の心の陽気な慰め手である葡萄は、摘みとられぬまま
枯れしぼみ、たいらに刈りこまれるはずの生垣は、
髪ぼうぼうの囚人のように乱れた小枝をのばしております。
耕されずに遊んでいる土地には、毒麦、毒人参、
悪臭を放つ毒草カラクサケマンなどが根をおろし、
そのような野蛮な雑草を引き抜くための鋤は

すっかり錆びております。なだらかにひろがる牧場には、かつてはまだらの九輪草、ワレモコウ、緑のクローバーなど、可憐な草花が一面に咲いておりましたのに、いまは鎌も入れられず、手入れもされず、荒れ放題となり、忌まわしいスカンポ、卑しいアザミ、その他棘とか蓐とか、なんの役にも立たないもののみわがもの顔にはびこり、美しさをそこねると同時に牧場の用をなさなくしております。こうして葡萄畑や、遊び地や、牧場や、生垣が、本来の性質を失うと荒れはててすさんでしまうように、われわれの家も、われわれ自身も、子供たちも、われわれの祖国にふさわしい学問を忘れ、あるいは暇がないことを理由に身につけようとしなideしていると、血を流すこと以外になにも考えぬ兵士のように野蛮になり、悪口を吐き散らし、悪相を呈し、異様な風体をなし、することなすことすべて不自然で非人間的と見えるようになってしまいます。

345

口に出して言わなくても、この身なりと、やつれた姿を見れば、おまえの追放以来私たちの暮らしがどんなであったかわかるはず。考えてもごらん、ここにきた私たちほどふしあわせな女がこの世にまたとあろうか。一目見て目は喜びの涙にあふれ、胸は嬉しさに躍るはずのおまえの顔が、この目を悲しみの涙にぬれさせ、この胸を恐怖におののかせる。母は、妻は、息子は、自分の子が、夫が、父が、その祖国の腸を引きちぎるのを、黙って見ていなければならない。あわれな私たちにとって、おまえの敵であることほどつらいことはない。せめて神々に祈ろうとしても、おまえがその唯一の慰めをさまたげる。私たちにどうして祈ることができよう、ああ、どうしてできよう、一方では私たちの大事な祖国のために祈りながら、同時に私たちの大事なおまえの勝利を祈ることが？ああ、私たちは育ての親である祖国か、祖国の誇りであるおまえか、いずれかを失わねばならない。いずれが勝って望みをかなえられようと、私たちを待ちうけるのはおいなる不幸でしかない。おまえが国を売った裏切り者として、手枷をはめられ、ローマの街を引きまわされるのを見るか、おまえが勝ち誇って廃墟と化した祖国を踏みにじり、雄々しくも自分の妻や子の血を流した栄誉に輝く姿を見るか、どちらかしかないのだから。私としても、いいですか、戦によって決着がつくまでじっと運命の裁きを待つつもりはありません。おまえが説得されず、双方の名誉を保つよりどうしても一方の破滅を求めずにはいられないということになれば、おまえは祖国を攻撃し土足にかけらるだろう、だがそれは——そんなことはしないと思うが——おまえを生んだ母の腹を踏みにじることです。

346

というのは、おれみたいなものが言うのもなんだが、王様だっておれと同じ人間にすぎん、王様だって堇の花はおれと同じように匂うだろうし、大空はおれと同じように見えるだろう。五官の働きだって人間の条件どおりだろうし、国王のしるしである飾りをとって裸になればただの人間だろう。そりゃあその感情はおれたちよりはるかに高いところまで舞いあがるかもしれん、だがいったん舞いおりるとなるとおれたちと同じ翼で舞いおりるんだ。

347

荒海の水を傾けつくしても、神の塗ったもうた聖油を
王たるこの身から洗い落とすことはできぬ、
まして世のつねの人間どもの吐くことばごときで
神の選んだもうたその代理人を廃位させることはできぬ。

348

まして、神の威厳をその身に体現しておられ、
神の選んだもうたその副官、執事、代理人として
聖油を塗られ、王冠をいただき、長年王座にあるおかたが、
この場においてにならぬのに、卑しい臣下の宣告によって
裁かれていいものでしょうか？ああ、禁じたまえ、神よ、
キリスト教国において、清められた魂の持ち主が
そのような不正、非道、邪悪な行為をなすことを！
私は一臣下として、臣下であるあなたがたにたいし、
神に励まされ、神の定めたもうた王のために申します、

349

一般庶民が享受しうる
無限の心の安らぎを、王はどのくらい捨てねばならぬのか！
しかも、王がもっていて庶民がもっていないものといえば、
儀礼のほかに、形式的儀礼のほかに、いったいなにがある？
ところでおまえは、儀礼という偶像は、なにものだ？
どういう神なのだ、おまえを崇拝するものたち以上に
この世の人間の苦しみをなめなければならぬとは？
おまえの財産はどのくらいある、おまえの収入は？
ああ、儀礼よ、せめておまえの価値だけでも教えてくれ！
おまえがありがたがられるほんとうの意味はなんなのだ？
おまえは、他人の心に畏怖、畏敬の念を起こさせる
地位、階級、格式以外のなんだというのだ？
とすれば、恐れられているおまえは恐れているものより
ふしあわせだ。
おまえがしばしば飲んでいるのは、芳醇な尊敬の杯ではなく、
追従の毒杯だ！ああ、この上なく偉大なるもの、国王よ、
病気にかかって、儀礼に治療を命じてみるがいい！
その追従の舌先から吐かれるむなしいことばで
火のような熱が吹きさまされるとでも思うのか？
腰を折り、頭をさげれば、病気が屈伏するとでも？
おまえは乞食の膝を曲げさせることはできるだろうが、
その健康な膝を自分の膝ととりかえることはできまい。
ああ、国王の安眠をたくみにもてあそぶ高慢の夢よ、
おれはおまえの正体を見つけたただ一人の国王だ。
戴冠式のときに塗られる聖油も、王笏も、王玉も、
帝王のしるしである宝剣も、宝杖も、王冠も、
金と真珠とを織りなしたきらびやかな王服も、
王の名の前につらぬられる仰々しい尊称も、

王が座す玉座も、この世の岩壁をひたひたと打つ
栄華の高波も、そう、それら全部をあわせても、
華麗をきわめる儀礼よ、それら全部をあわせて
豪奢なベッドに敷きつめても、けっして国王を
安らかな眠りへ誘うことはできぬのだ、みじめな奴隷が
苦勞して稼いだパンで腹を満たし、心にわずらいなく、
ぐっすり眠る、あのような眠りへと誘うことは。
奴隷たちは、地獄の申し子である恐ろしい夜を見ることなく、
馬丁のように、日の出から日の入りまで、ひたすら
日の神フィーバスの眼前で汗水流し、夜のあいだは
樂園の眠りを楽しみ、夜が明ければまた起き出して、
日の神が天空を行く馬に乗るお手伝いをする、こうして一生、
つねに走り行く季節を追い、有益な労働に身を捧げ、
墓場にいたるのだ。そのようなみじめなものたちは、
儀礼などには目もくれず、昼は身を粉にして働き、
夜は眠りをむさぼっている、だがそのほうが
国王よりなんとしあわせな立場にあることか。
奴隷は、一国の平和な民として、平和を享受している、
ただその粗末な頭では思いもつかぬだろうが、
国王はその平和を維持するために、百姓どもが
安眠をむさぼる時間も、寝もやらず心を砕いているのだ。

350

ああ、神よ！私にはどんなにしあわせと思えることか、
貧しい羊飼いにすぎぬ身の上で暮らすことが！
いま私がしているように丘の上に腰をおろし、
日時計の目盛りを一つ一つ巧みに刻みつけ、
それを見れば、時のたつのがわかるのだ——
何分たてばちょうど一時間になるか、
何時間たてば一日の終わりとなるか、
何日たてば一年が一めぐりし終えるか、
何年たてば人の一生が尽きはてるか。
それがわかると、時間の割りふりをするのだ——
何時間、羊の世話にかければいいか、
何時間、自分の休息にかければいいか、
何時間、考えごとにかければいいか、
何時間、遊びごとにかければいいか、
何日間たてば、雌羊は子をはらむか、
何週間たてば、母羊は子を生み落とすか、
何年間たてば、自分は羊の毛を刈りとれるか。
こうして、分、時、日、週、月、年と、
時がその使命を終えるまで過ぎていくと、
白髪頭を静かな墓穴に横たえることになるのだ。
なんと楽しい、すばらしい生活ではないか、これは！
サンザシの茂みが、無邪気な羊の群れを見守る
羊飼いたちに与える陰は、どんなに楽しいものだろう、
豪奢な刺繍の天蓋が、臣下の謀反を恐れている
国王たちに与える影よりも、はるかに！
そう、間違いない、一千倍も楽しいはずだ。
つまり、羊飼いが心安らかに楽しく味わう
粗末なチーズ、革袋から飲む冷たい薄い酒、
さわやかな木陰での日ごとの昼寝のほうが、

心労、疑惑、裏切りにかしずかれて国王が味わう
山海の珍味、黄金の杯になみなみと注がれる美酒、
贅をこらしたベッドでの眠りよりはるかにましなのだ。

351

おれは頭よりからだを働かす男だ、食うもんは自分で稼ぐ、着るもんは自分で手に入れる、人の恨みは買わねえ、人のしあわせは妬まねえ、他人の喜びは自分も喜ぶ、自分の悲しみはがまんする。おれのいちばんの自慢は雌羊が草を食い子羊が乳を吸うのを見ることだ。

352

ベーツ

うわべはどんなに勇気をお見せになろうと、きっと内心では、こんな寒い晩でもテムズ河に首までつかっているほうがここにいるよりまだましだと思っておられるんじゃないかな。おれだって王様がここにおいでにならなけりゃあいいのにとと思うし、脱け出せるものならどんな危険を犯してもお供したいと思うよ。

王

おれの良心にかけて誓って言うが、王様はいまおいでになるところ以外のどこにも行きたいとは思いじゃないだろう。

ベーツ

そんなら一人でここにおいでになりゃあいいんだ。どうせ王様は身代金を払えば帰国できるんだし、それでおおぜいのあわれな兵隊たちのいのちが助かるんだもの。

王

一人でここにおいでになりゃあいいっていうのは、王様がきらいだからじゃないんだろう、人の心をためそうとして言うてみただけだよ。おれは王様のおそばで死ねればそれがいちばんの本望だ、今度の戦は正義の戦だし、大義名分はおれたちの王様にあるんだから。

ウィリアムズ

そんなことはおれたちの知ったこっちゃないな。

ベーツ

というか、知ろうとしなくたっていいことだよ。おれたちは王様の家来だってことさえ知ってりゃ十分なんだ、かりに大義名分が王様になくたって、おれたちは家来として服従したんだってことで罪は消えるんだ。

ウィリアムズ

そのかわり、大義名分がなけりゃあ王様自身がひどい責任をしょいこむことになるぜ、最後の審判の日には、戦場でちょん切られた足や腕や首がぞろぞろ集まってきて、「おれたちはしかじかのところで戦死しました」ってどなるだろうからな。あるものは口汚く悪態をつき、あるものは外科医を呼び求め、あるものは故郷に残してきた食うや食わずの女房のことを、あるものは借りたままになっている借金のことを、あるものは別れを告げる間もなく引き離された子供たちのことをわめきたてるだろう。戦場で死ぬものはろくな死にかたをしてないはずだ、だいたい血を流すのが目的の戦争だもん、慈悲もへったくれもあるもんか。その連中がみんなお祈りも懺悔もせずろくな死にかたをしなかったとなると、そういうめに会わせた王様の罪はどれくらいことになるぜ、みんなはただ王様の命令に服従しないのは臣下の義務に反するので戦っただけなんだから。

王

そうすると、おやじの言いつけて商用に旅立った倅が、船の遭難により懺悔する間もなく死んだ場合、倅の罪の責任はあんたの論法でいけば送り出したおやじが負わねばならんことになる。あるいはまた、主人の命令でなにがしかの金をはこんでいた使用人が、途中で盗賊に襲われ、これまた多くの罪を清める暇なく死んだ場合、使用人を地獄へ堕としたのは主人の仕業ということになる。だがその論法は間違っているぞ。王様は兵士一人一人の死に責任を負ってはいないんだ、おやじが倅の、主人が使用人の死に責任を負ってはいないように。それぞれ彼らに一仕事してもらおうと思ったとき、死んでもらおうとは思っていなかったのだから。それにまた、いくら王様の大義名分が清浄潔白なものであっても、いざ戦争によってことを決しようというとき、その兵士がすべて清浄潔白なものというわけにはいくまい。あ

るものはあらかじめ念入りに計画された人殺しの罪を犯しているかもしれん、あるものは偽りの誓いによって処女の操を破っているかもしれん、あるいは強盗略奪によって平和のやさしい胸を血に染めたものが戦争に従軍してその罪から身にかくそうとしている、そういうものさえいるかもしれんのだ。そういった連中は、法の網をくぐり、その罰をまぬがれているわけだが、たとえ人の目からはのがれえても、神のみ手から逃げる翼は彼らとともっていないはずだ。戦争は彼らにたいする神の鞭、神の復讐なのだ、だから彼らはかつて国王の法律を破った罰をいま国王の戦争で受けることになる。つまり彼らは、死刑を恐れたところから無事逃げおおせ、安全と思っていたところでのちを失うわけだ。そのような連中が懺悔もせず死んで地獄に墮ちたからといって、王様にはなんの責任もあるまい、いま彼らが罰せられるのはかつての罪ゆえであり、それにたいして王様にはなんの責任もないのだから。臣下一人一人のつくすべき義務は王様のものだが、臣下一人一人の魂は自分のものだ。したがって戦場における兵士は、病床における病人と同じように、一人一人が自分の良心の塵を一つ一つ洗い清めるべきだ。そのようにして死ねば、死はそのものにとって利益であるし、死ななければ、そのように心の準備を得るために失った時間は祝福すべきだろう。そして、死をまぬがれたものは、自分があるがままに罪を懺悔して神にすべてをゆだねたので、神もそれをよしとされ、一つには神の偉大さをお示しになるために、一つにはほかのものに心の準備がいかに大切かを教えさせるために、自分を生かしておいてくださったのだ、と考えても罪にはならないだろう。

ウィリアムズ

たしかにそのとおりだな、罪にまみれたまま死ぬものはその罪を自分でかぶらにゃならん、王様にその責任はないわけだ。

ベーツ

おれだって王様におれの責任をとってもらおうとは思わんよ、それでも王様のためにせいっぱい戦うつもりだぜ。

353

ボリングブルック

見ろ、リチャード王みずから姿を見せたぞ、
まるで火と燃える東の門から顔を出した
太陽が、西への輝かしい旅路を進もうとして
ふと見ると、よこしまな雲がさえぎって
その栄光を暗くし、その行く手を汚しているの、
真赤になって腹を立てている、といったところだ。

ヨーク

それにしてもなんと王にふさわしいお顔だろう。
あの鷲のような目の光には、人を畏服せしめる
威厳が輝いている。ああ、ああ、なさけないことだ、
あのような美しいお姿が汚されることになろうとは！

王

あきれはてた男だな、おれはこんなにも長いあいだ
おまえが恐れかしこんでひざまずくのを待っておった、
おれはおまえの正当な王であると思っていたからだ。
もしそうなら、どうしておまえはおれの面前にあって
膝を曲げず、正当な臣下の義務を怠るのだ？
もしそうでないなら、いつ神のみ手がこのおれを
神の代理たる職から解かれたか、教えてもらおう。
おれにはよくわかっておるのだ、いかなる人間も
この神聖な王笏に手をかけることはできぬし、
あえて手をかければ、冒瀆、窃盗、篡奪となることは。
おまえは、国じゅうのものがおまえと同じように
魂を汚し、おれに反逆し、いまのおれは孤立無援、
一人の味方もおらぬ、と思いこんでおるのだろう、

だが、いいか、わが主であられる全能の神は、
おれに味方されるべく、その黒雲のなかに
悪疫の大軍を召し集めておられるぞ、それは、
臣下の身でありながらおれの頭上に手をふりあげ、
尊い王冠をおびやかそうとするおまえたちの、
いまだ生まれざる子供たちの上に降りかかるだろう。

――
王はどうすればいい？服従せねばならぬのか？
王は服従しよう。退位せねばならぬのか？
王は喜んで退位しよう。失わねばならぬのか、
王の名を？神の名において、それを捨てよう。
おれの宝石のかずかずをロザリオの珠にかえよう、
おれの豪華な宮殿を隠者の小屋にかえよう、
おれの華やかな衣装を乞食の衣にかえよう、
おれの意匠を凝らした金杯を木皿にかえよう、
おれの王笏を巡礼の手にする杖にかえよう、
おれの無数の臣下たちを一对の聖像にかえよう、
そして、おれの大きな王国を小さな墓に、
小さな小さな墓に、名も知れぬ墓にかえよう、
さもなければおれは、国王行幸の大通りに、
人々の行き交うにぎやかな街路に埋められ、たえず
臣下の足が主君の頭を踏みつけるにまかせよう、
生きているいま、おれの心を踏みにじるやつらのことだ、

354

ああ、なんということだ、王として君臨していたときの気持を
脱ぎすてもせぬうちに王の前に呼び出されるとは。私はまだ
うまくとり入ったり、お世辞を言ったり、頭をさげたり、
膝を曲げたりするすべを習っておらぬ、もう少し時間を
かしてくれ、悲しみが私にそういう服従のしかたを
教えてくれるまで。だが、このかたがたの顔には
見覚えがある。かつて私に「万歳！」と叫んだ
私の家臣たちではないか？ユダもキリストにそうしたが、
彼には十二人の弟子のうち一人をのぞいてみな忠実だった、
私には一万二千の家臣のうち忠実なものは一人もおらぬ。
神よ、王を守りたまえ！だれもアーメンと言わぬのか？
私が一人二役を演ずるのか？では言おう、アーメン！
神よ、王を守りたまえ！私は王ではない、それでも
アーメンと言おう、天が私を王とお思いくださるならば。

――
王冠をよこせ。では、従弟、王冠を手にするがいい。
さあ、従弟、
こちら側には私の手、そちら側にはあんたの手がある。
この黄金の王冠もいまは深い井戸のようなものだ、
そこにかかってかわるがわる水を汲みあげる二つの桶は、
一方はからになってつねに空中高く躍っておるが、
他方は底に沈んで人目にふれず、水がいっぱいになっておる。
底に沈んで悲しみを飲み、涙でいっぱいのが、私だ、
そしてもちろん、高く舞いあがっているのが、あんただ。

――
さあ、よく見るがいい、私が私ではなくなるさまを。
私の頭から、この重い冠をとってさしあげよう、

私の手から、この厄介な笏をとってさしあげよう、
私の心から、王権の誇りをとってさしあげよう。
私は自分の涙で、王の聖油を洗い落とそう、
私は自分の手で、王の冠を譲り渡そう、
私は自分の舌で、王の地位をとり消そう、
私は自分の息で、王への服従の義務を吹き飛ばそう。
あらゆる栄華も威厳も遠去けることを、私は誓う、
領地も地代も収入もことごとく、私は捨てる、
法令も布告も法規もすべて、私は白紙にもどす。
神が私への誓約を破りたるものを許したもうように！
神があんたへの誓約を破らざるものを守りたもうように！
なに一つもため私になに一つ嘆きの種がありませぬように！
すべてを得たあんたにすべての喜びが与えられますように！

やい、おまえたちはみんな、手をこまねいて突っ立ち、
みじめさにさいなまれている私を見ておるな、
なかにはピラトのように手を洗い、うわべだけ
あわれみを見せかけるものもおるようだが、いいか、結局
おまえたちピラトは、私をおごい十字架へ引き渡したのだ、
その罪は、いくら水で洗っても落ちるものではないぞ。

ああ、この身が雪だるまの王であればよかった、
であれば、ボリングブルックという太陽に照らされ、
溶けて流れて水しずくと消えることもできたろうに！
善良なる王よ、大いなる王よ、大いに善良なる王——
とは呼ばぬが、私のことばがまだイギリスで通用するなら、
ここにすぐ鏡をもってこさせてはもらえまいか、
私がいまどのような顔をしておるか見たいのだ、
王の威厳の破産した顔というやつをな。
鏡をくれ、そこに記された文字を読んでやろう。
深い皺がまだ刻まれておらぬのか？ 悲しみが
あんなにもたびたびこの顔に打撃を加えたのに、
これ以上の深い傷を与えなかったというのか？
ええい、おべっか使いの鏡め、おれが栄えていたときの
家来同様、おれをだますのだな！これが、
かつては毎日一つ屋根の下に、一万もの人間を
かかえていた顔か？これが、太陽のように、
仰ぎ見るものをつねにまぶしがらせた顔か？
これが、愚かな行為のかずかずに顔をかしてやり、
ついにはボリングブルックに顔をつぶされた顔か？
はかない栄光が輝いておるな、この顔には、
その栄光のようにはないのだ、この顔は。

355

「哀れな毀れた鏡よ、わしはいくたびも見たのだよ、
お前の美しい姿のなかで、わしの老年が新しく生れかわるのを。
だが今は、あの美しい若々しい鏡が、古び錆びはて、
長い年月に摩り減らされた、骨もあらわな死神の姿を示している。
ああ、お前はその頬からわしの姿を引き裂きすてた。
そして、わしの鏡の美をことごとく砕き去った。
もはやわしはかつてのおのれの姿を見ることもできないのだ。

356

美というのは空しいあやふやな品物にすぎない
たちどころに色あせる光る色沢だ
まず蕾が出はじめるとすぐ枯れる花だ
すぐにこわれるもろいガラスだ
あやふやな善で色沢で花であって
一時間のうちに失くなり、色あせこわれ死んでしまう。

357

馬丁

あっしは王様でいらしたときお厩にいました
馬丁でござえます。ヨークのほうへめえりましたもんで、
すったもんだしてやっとのこと、もとのご主人である
王様のお顔を拝むお許しをいたでえたようなわけで。
ああ、胸がつぶれる思いでござえました、ご即位の日に
ボリングブルック様が、あの栗毛のバーバリー馬に乗って
ロンドンの通りを行列されるのを見ましたときは！
あなた様がたびたびお乗りになったあの馬でござえます、
あっしが夜も寝ずに世話してやったあの馬でござえます。

王

あのバーバリーに乗って行ったか？ で、やつは
彼を乗せてどんな様子だった？

馬丁

傲り高ぶって、大地をばかにするように蹴ってました。

王

乗っているボリングブルックも傲り高ぶっていたろう！
あの馬は、この王の手からよくパンを食ったものだ、
この手は、やつの首をたたいて得意がらせてやったものだ。
やつはけつまずきそうにはしなかったか？倒れそうには？
傲るものは倒れるというが、やつはその背中を横領している
あの傲り高ぶる男の首の骨を折ろうとはしなかったのか？
いや、許してくれ、馬よ、おまえを罵ってなんになる？
おまえは、人の言うままになり、人を乗せてはこぶよう
生まれついている。おれは馬として生まれはしなかった、
それでもおれは、ロパのように重荷をはこばされ、
ボリングブルックに拍車をあてられ、酷使されている。

358

ここへこい、 ハリー、わしのベッドのそばにすわれ。
よく聞くのだぞ、おそらくはこれがわしの残す
最後の戒めとなろう。神はもとよりご存じのことだが、
わしがこの王冠を手に入れるについては、さまざまな
道ならぬ道を通ったものだ、そしてわし自身承知のことだが
これを頭上に載いてからも無事平坦の道ではなかった。
おまえには、もっと平和のうちに、もっと民心を得た上で、
もっと正当なものとして、これが譲り渡されよう、
これを手に入れたときの汚れはすべて、わしとともに
地中に葬り去られるであろうからな。わしの場合、
これは暴力によって強奪した栄誉としか思われなかった、
現に、自分たちが助力したから獲られたのだと称して
わしを公然と非難するものも少なくはなかった、
その声は日ましにつのって、抗争となり、流血となり、

平和であるべき世を乱したのだ。彼ら大胆不敵の逆徒は、おまえも知るように、わしが身命を賭してことごとく滅ぼし去った。わしの治世はこの一つの主題を演じ続ける芝居であったのだ。だがいまわしが死ぬことになれば周囲の空気は一変する、わしが無理して獲得したものも、おまえには正々堂々と手に入る、つまりおまえは正当な継承者としてこの王冠を額に戴くことになる。

359

総指揮官は働き蜂が帰る蜂の巣のごときもの、その働き蜂が巣に集まらないでどうして蜂蜜が期待されましょう。同じ仮面で序列がかくされると、もっとも卑しいものまでりっぱに見えてしまいます。天の星々も、惑星も、宇宙の中心であるこの地球も、序列、階級、地位、規則、進路、均衡、季節、形式、職務、慣習を正しい秩序のもとに一系乱れずまもっております。だからこそ天空高く輝く荘厳な太陽は、他の星のなかにあって天の玉座につき、その万物を癒す恵みの光をもって邪な惑星の悪影響をただし、さながら国王の発する命令のようにたちまち善意の方向を定めるのです。だが惑星がその配列を乱して要らざる混乱におちこむと、悪疫が蔓延し、災厄が襲い、暴動が起こり、海は荒れ狂い、大地は揺れ動き、風は吹きすさび、天変地異に見まわれるではありませんか。国家の統一としあわせな平和は、根底から揺さぶられ、くつがえされ、引き裂かれ、壊滅するにいたるではありませんか。このように序列が、つまり高いもくろみへの梯子がぐらつくとき、大事業は成りがたいのです。社会生活も、学校編成も、同業組合も、海を越えて交わされる平和な通商も、長子の相続権も、年長者の特権も、王冠、王笏、月桂冠の大権も、すべては序列によらざればあるべき位置を保てません。序列を排してその弦の調子を狂わせれば、耳ざわりの不協和音を生じます。

360

国家は、上・中・下の階級に分かれてはいるが、それを、いわば音楽のように、一つにまとめ、ごく自然な完全なハーモニーを鳴りひびかせるのが政治というものであろう。

361

それゆえに天はまた、人間という小王国をもさまざまな機能に応じて分割し、各部分をたえず努力させ、活動させてもいるのです、各部分の努力の目標、活動の目的は、服従にあります。蜜蜂とても同じこと、彼らは自然の法則に従って

人間世界に秩序ある行動とはなにかを教えてください。
彼らには一人の王がおり、各種の役人がおります、
あるものは行政官として、本国にあって政治を司どり、
あるものは商人として、外に出て貿易に従事し、
あるものは兵士として、鋭い針をもって武装し、
ピロードのようにやわらかな夏の花々を襲撃し、
その戦利品をもって、陽気な行進曲を奏しつつ
王のいます本陣へと凱旋してまいります。
王は王としての職務に多忙をきわめております、つまり、
鼻歌まじりに黄金の屋根を葺く石工たちや、
おとなしく蜜を捏ねあげる一般市民たちや、
重い荷物を背負って狭い城門を押しあいへしあい
通り抜けてくるかわいそうな労働者たちや、
あくびをする怠け者を不機嫌な咳払いとともに
蒼白い獄吏へ引き渡すいかめしい判事たちを、
監督しているのです。私が言いたいのはこういうことです、
多くのものがそれぞれ勝手な方向に動いていようと、
一つの目的のために結ばれていればそれでいいのです、
多くの矢が異なる位置から放たれて一つの的に集まるように、
多くの道が四方八方から近づいて一つの町で出会うように、
多くの河が流れ流れて結局は一つ的大海原に注ぐように、
多くの線がまっすぐ伸びて日時計の中心で合するように、
数百数千の行動も、それぞれ同時に開始されながら、
なんの支障もなく、万事うまくはこんで、ついには
一つの目的に到達しうるのはです。

362

音楽だな？

フム、調子が狂っておるぞ！調子が乱れ、
リズムが狂うと、美しい音楽もだいなしだ！
人生という音楽においても同じことが言えよう、
いまここで、弦が乱れ調子がはずれるのを
聞きとがめるほどいい耳をもつおれなのに、
国の政治という音楽にかけては、狂った調子を
聞き分ける耳がなかった。

363

かつて詩人は歌った、
オルフォイスが木や石や水の流れを動かしたと。
木石のような頑なさも洪水のような狂暴さも、
音楽を聞けばそのあいだだけ性質を変えるのだ。
心のうちに音楽をもたないもの、美しい調べにも
心を動かされないもの、そういう人間はただ
謀反、陰謀、破壊にのみむいている。その精神は
闇夜のように頑迷であり、その感情は地獄に接する
エレボスのように暗黒だ。そういう人間はけっして
信用してはいけない。

364

オルフォイスがリュートをとれば
木々の梢も雪積む峰も
首うなだれて聞き惚れぬ

オルフォイスの調べにつれて
可憐な花も緑の草も
常春のごと萌え出でぬ
オルフォイスの歌声聞けば
高ぶる海の荒波さえも
頭をたれて静まりぬ
オルフォイスの妙なる曲に
胸の痛みも心の憂さも
眠りにつくごとく消えはてぬ

365

庭師

おい、あのぶらさがってる杏の実を縛りあげてきな、
まるで手に負えねえ餓鬼どもみてえに、放蕩の重みで
生みの親である枝をひん曲げてやがる。
たわんでいる枝に突っかい棒をあてがってやれ。
おめえは死刑執行人のつとめをはたしてきな、
おれたちの民主国家であんまり偉そうにのさばってやがる
あの伸びすぎた小枝の頭をちょん切るんだ、
おれたちの政治は万事平等でなきゃあいけねえや。
おめえたちがそれをやってるあいだ、おれは
厄介者の雑草を引っこ抜いていよう、きれいな花から
大地の養分を横どりするふてえやつだからな。

徒弟Ⅰ

だけどねえ、親方、どうしておれたちはこの
せめえ囲いのなかで、りっぱなお国のまねごとなんかして、
法とか秩序とか形式とか守らなきゃあならねえんで？
でえいち、海に囲まれた庭であるこのお国を見たって、
はびこるのは雑草だけ、お国でいちばんきれいな花は
息の根をとめられ、果樹園は荒れ放題、垣根はこわされ、
花壇はめちゃめちゃ、せっかく育った大事な草木も
毛虫だらけじゃねえですか？

庭師

シッ！ 黙ってろ。
この荒れ放題の春がくるにまかせておられるおかたは、
もうご自分が木の葉の散る秋に会っておいでなんだ。
かわいそうに、
ちゃんとお国の手入れをなさってりゃあよかったんだよ、
おれたちがこの庭を手入れするように！おれたちは
適当な季節に、果樹の皮にわざと傷をつけるだろう、
ありゃあ樹液という血を抜かねえと、増長しやがって
育ちすぎ、あっという間に枯れちまうからだ。
あのかたも、成りあがりの連中にそうなさってたら、
連中も生きのびて実を結び、あのかたもその忠義の果物を
味わっておられたろうよ。おれたちは余分な枝を
切り落とすだろう、ありゃあ実をつけた枝を生かすためだ、
あのかたもそうなさってたらまだ王冠をつけてらしたろう、
それをたたき落とされたのは手入れを怠ったせいだろう。

366

洞察力というものは、いったん目をさませば、
冥土の神プルートーが手に握る黄金さえ

一粒残らず数えあげ、計り知れぬ大海の底まで探り、
たとえ声を立てずに揺り籠に眠ったままの
人の考えといえども、神のように見通してしまう。
そして国家には魂があり、真実を見通す
神秘の力がある。それはなにびとの干渉も許さず、
その働きは神聖にして犯すべからざるものであり、
筆舌ではつくせぬほどのものだ。

367

もしもこのわしがだな、おやみやたらに
世間に顔を出し、始終俗衆どもの目に身をさらし、
わしの姿を安っぽいありふれたものとしていたならば、
かつてわしに王冠をいただきさせてくれた世論は、
そのまま当時の王リチャードに忠誠を捧げていたろう、
そしてわしはいまもむなく追放の日々を送り、
名声も希望ももたぬ一介の野人にすぎなかったろう。
めったに姿を見せなかったからこそ、わしが動けば
彗星を見るように人々は驚異の目で仰ぎ見たのだ、
「あ、あの人だ」と子供たちに教えるものもあれば、
「どの人がボリンブルックだ？」ときくものもいた。
そこでわしは、天上から盗みとったあらゆる美德を
面にあらわし、謙遜の借り着を身につけた、そうして
わしは、人々の胸から忠誠の誓いを、その口から
歓呼の叫びを、もぎとるように手に入れたのだ、
それも、王冠をいただいた先王の目の前でだ。
こうしてわしはこの身をつねに新鮮にしておいたので、
わしの姿は、めったに拝めぬ法王の礼服のように、
見られるときは必ず驚異の目をもって見られ、
たまにしか訪れぬがそれだけに華やかなお祭りのように、
現われればたちまち王としての威厳をかちえたのだ。
あの軽薄な先王はどうだ、浅はかな道化どもや、
火花を散らしてはすぐに消える線香花火のような
オ人どもをお供に、あちこち気どって練り歩いたろう、
おかげで王の権威も尊厳も阿呆どもと変わりなくなり、
偉大な名前も彼らの嘲笑でもって汚されるままとなり、
身分にそむいてまで彼らの保護者面をしたあげく、
はては口のへらぬ青二オどもと悪口を言って笑いあい、
髭も生えそろわぬ若僧どもと駄洒落合戦に興ずる始末。
こうしてやつは、連日公衆の前にその姿をさらし、
市井の徒とのつきあいに浮き身をやつしたのだ。
だが人々の目も、毎日のように見せつけられると、
やがて飽きがくる、蜜の味と同様、その甘さが
いとわしくなってくる、ほんのわずかの甘すぎが
耐えがたいほどの甘さに感じられるようになるのだ。
やつにしたところで、姿を見せても、季節遅れの
六月のカッコウと同じこと、聞くものがいるとしても
耳を傾けるものはいない、見るものがいるとしても
その目はもう見飽きてたくさんだといったものばかり、
日輪の威容をそなえた人物が、久しく待ち望んでいた
人々の前に、燦然と光を放つときに見られるような、
熱のこもった賛嘆のまなざしなどどこにもない、
ただ眠たげに瞼をたれ、やつを目の前にしても

うつらうつらするか、せいぜい不機嫌なときに
いやな相手が現われたというような目つきで、
食傷してうんざりしたやつの姿に一瞥をくれるのみだ。

368

父上はお墓にあってさぞ困っておいでだろう、
その亡骸とともに私の放埒をも埋葬したのだから。
そして私は父上の精神を受け継いで真剣に生きる、
私についての世間の予想を裏切り、予言をうち破り、
ただ外見のみを見て私をこうと決めつけていた
世人の悪評をみごと吹き飛ばしてみせる。いままで、
私の血は傲り高ぶって浮ついた横道へ流れていた、
だが今日からは流れを変えてもとの本道に復し、
洋々たる国家の大河に合流して、威風堂々、
王者にふさわしい威厳をもって流れることだろう。

369

ケード

だからみんな、勇気を出せ、おまえらの大将は勇気にあふれ、世直しをすると誓ってるんだ。いずれこのイングランドでは、3ペンス半のパンが1ペニーで買えるようになるだろう、1クォート入りの酒瓶に3クォート半の酒が入るようになるだろう。弱いビールなんか飲むやつはおれが重罪に処してやる。国じゅうすべて共有地とし、チープサイドの市場でおれの馬に草を食わしてやる。やがておれが王様になれば、王様になるのは決まりきったことだが――

一同

国王陛下万歳！

ケード

ありがとう、諸君――そのときは金なんか廃止する。だれが飲み食いしようと勘定は全部おれがもってやる。そしてみんなにおんなじ服を着せてやるから、みんな兄弟みたいに仲よくなり、おれを王様として尊敬するだろう。

ディック

まず第一に、法律家連中を皆殺しにしてえな。

ケード

ああ、おれもそう思ってた。まったく嘆かわしい話じゃないか、罪もない子羊を殺して羊皮紙を作り、その羊皮紙になにか書きなぐって人間を消しちゃうってことは？蜂の針には毒があるって言うやつもおるが、おれに言わせりゃ毒があるのは蜂の蜜蠟のほうだ、一度その上に印を押してみろ、二度とおれはおれの自由になるおれじゃあなくなるんだ。

370

ゴンザーロー

私がこの島をまかされるとすれば――

アントーニオ

こっちは

イラクサの種でも蒔かされるか。

セバスティアン

スカンポかゼニアオイでもな。

ゴンザーロー

つまり島の王となりますれば、どうすると思いで？

セバスティアン

へべれけにはならぬだろう、酒がないからな。

ゴンザーロー

その国家では、万事世のなかと逆にしたいと思います。

まず、取引はいっさい認めません。官職は廃し、
学問は広めず、裕福とか貧乏とかの差をなくし、
したがって奉公というものもなくなるわけです。
契約、相続、境界、領地、田畑、葡萄畑などなくし、
所有権をめぐる法律問題も起こらなくなります。
金属、穀物、酒、油などの使用を禁じ、職業はなにも
なくなります。男はみんな遊んで暮らします、
女もです、ひたすら無心に清純に生きるのです。
君主権もなくします——

セバスティアン

それで王になろうというのか。

アントーニオ

この国家論の結論は序論を忘れているようです。

ゴンザーロー

暮らしに必要なものは自然が産み出してくれます、
人間が汗水流して働くことはありません。そうなれば
反乱も重罪もなく、剣、槍、短刀、銃砲などの
武器も無用の長物とないます。大自然はひとりでに
豊かにかぎりなく五穀を実らせ 幼子のように
無心に遊ぶ人々を養ってくれるでしょう。

セバスティアン

幼子のような人々だと、結婚もないわけか。

アントーニオ

無心しては遊ぶというと、悪党と淫売女だけだ。

ゴンザーロー

このように非のうちどころない政治をおこなえば、
かの黄金時代をしのぐ世となり——

セバスティアン

国王は安泰となる！

アントーニオ

ゴンザーロー万歳！

371

メニーニアス

昔々、あるとき、からだじゅうの器官が
胃袋にたいして反乱を起こした。言いぶんはこうだ——
胃袋は、底なし穴のように、からだのまんなか
でんとすわりこんで、のうのうと暮らしている、
ただごちそうをのみこむだけで、ほかの器官と
協力して働こうとはしない。一方ほかの器官は、
見たり、聞いたり、考えたり、指図したり、歩いたり、
感じたり、たがいに助け合ってからだ全体の
共通の目的のために奉仕し、その要求を満たすべく
努力している、というわけだ。そこで胃袋は答えた——
市民！

で、どう答えたんです、胃袋は？

メニーニアス

まあ、待て、話すから。胃袋は微笑を浮かべて、
と言っても腹の底からの笑いではないぞ——
この胃袋は口をきくぐらいだから、笑っても
おかしいとは思わないでくれよ——ただ嘲笑うように
答えたのだ、その不平分子たち、胃袋のとりぶんを嫉む

謀反人どもに。それも当然だろう、諸君が
元老院議員たちを責める理由と同じだからな、
自分たちのように働かないと言うのは。

市民！

それで胃袋は——

どう答えたんです？ 王冠をいただく頭や、
見張り役の目や、相談役の心臓や、兵士である腕や、
駿馬である脚や、ラッパ手である舌や、そのほか
われわれのからだのなかにあって、守ったり助けたり
さまざまな働きをする器官が、もしも——

メニーニ阿斯

もしもどうした？

よくペラペラとしゃべる男だ！もしもどうした？

市民！

もしもほかの器官が、からだのなかのごみためである
大食らいの胃袋に抑えつけられたら——

メニーニ阿斯

そしたらどうした？

市民！

その器官が、もし一斉に文句を言い出したら、
胃袋はなんと答えます？

メニーニ阿斯

それを話そうというのだ、
諸君にわずかでも、どうせわずかしかないだろうが、
辛抱する気があれば、胃袋の答えが聞けるはずだ。

市民！

あんたの話がまわりくどいんでね。

メニーニ阿斯

まあ、聞いてくれ。

この謹厳な胃袋はなかなか思慮深く、不平分子どもの
軽率さはもち合わせていないから、こう答えた、

「なるほど、同僚諸君」、と彼は話しはじめた、

「私はどんな食物でもまっさきに受けとりはする、

だがそれで諸君は生きていけるのだ。それも

当然の話だろう、なにしろ私はからだ全体の

倉であり店であるのだから。思い出していただきたい、

私はそれを血液の流れをとおして送り届けている、

心臓という宮廷にも、脳髄という玉座にもだ。

さらに、人体のあらゆる廊下や小部屋をとおして、

もっとも強い筋肉から小さな血管にいたるまで、

私からいのちの糧である栄養分を受けとらぬものは

一つとしてないのだ。もっとも、諸君には、

すぐには」——と胃袋が言うのだ、いいな——

市民！

いいですよ、それで？

メニーニ阿斯

「もっとも、諸君には、

すぐには私がみんなになにを与えているか、

わからないかもしれない、だが決算をしてみれば、

諸君が私から受けとるのは食物のいちばんいいところで、

私には滓しか残らないのだ」どう思う、諸君？

市民！

それが答えか。で、いまの場合と関係あるんですか？

メニーニ阿斯

ローマの元老たちがこの胃袋で、諸君は反乱を起こした諸器官というわけだ。考えてもみろ、元老たちがなにゆえ会議をかさね、心をわずらわすか。公共の福祉にほかならぬ。それを正しく理解すれば、すぐわかるはずだ、諸君が受ける公共の利益はすべて彼らが生み、彼らの手をへているのであって、諸君自身が作り出すものではないことが。

372

漁師 3

ねえ、親方、魚ってやつは海んなかでどうやって生きてるんかね？

漁師 1

そりゃあ、おめえ、陸の上の人間とおんなじよ、大物が小物を食って生きてるんだ。おれに言わせりゃあ、大金持ちのしみったれなんぞ、まるで鯨だね、貧乏人の小魚どもを遊び半分に追っかけまわして、あげくのはてはがぶり一口さ。そんな鯨なら陸の上でもいくらだっているぜ、村の教区をそっくりそのまま、教会も塔も鐘もまると飲みこむまで口を閉じねえって話だ。

373

きみやほかの人たちが、人生をどう考えているか、それはおれにはわからない。だがこのおれ自身は、おれと同じ人間を恐れて生きるような人生はまっぴらだ、それぐらいなら死ぬほうがましだと思う。おれはシーザーと同じように自由人として生まれた、きみだってそうだ。おれたちは同じものを食う、同じように冬の寒さに耐える力がある。そう言えばこういうことがあった、寒風の吹きすさぶ日だった、タイバー川はたけり狂って岸を打っていた、シーザーはこう言ったのだ、「おい、キャシ阿斯、おれといっしょにこの激流に飛びこみ、向こう岸まで泳ぎ抜く勇気があるか」おれはそのことばを耳にするやいなや、服も脱がずにザンプと飛びこみ、ついてこいと言った。あの男、続いて飛びこんだよ。流れは轟々ととどろく、おれたちは元気いっぱい水を打ち、波をかきわけ、激流なにするものぞと心をかき立てながら泳ぎ進んだ。ところがどうだ、まだ目的の地点に着かぬうちに、シーザーのやつ悲鳴をあげた、「助けてくれ、キャシ阿斯、溺れそうだ！」おれは、かつてローマの太祖イーニ阿斯が、トロイを包む猛火から老父アンカイシーズを肩にかついで救い出したように、タイバーの波浪から疲れはてたシーザーを救い出したのだ。それなのにその男がいまや神様だ、そしてキャシ阿斯はみじめな虫けらだ、シーザーがなにげなく会釈の一つもすれば、あわてて腰を折らねばならぬ。あの男はスペインで熱病にかかったことがある、発作が起こるたびに、この目ではっきり見たが、ぶるぶるふるえたのだ、そう、神様がふるえたのだ。その唇は敵を目前にした臆病者のように色を失い、いまや一瞥をもって世界を畏怖せしめるその目も

光をなくしていた。おれはあの男のうめき声も聞いた、
そう、いったん口を開けば全ローマ人が耳をそば立て、
その一語一語を手帳に書きとめるあの舌が、どうだ、
「飲み物をくれ、ティティニアス」と悲鳴をあげたのだ、
病気の小娘のように。これが驚かずにいられるか、
こんな意気地のない弱虫が、この壮大な世界の
先頭に立って、あろうことか勝利の栄冠を
独り占めにしようとは。

374

いいか、おい、あいつはロードス島の巨人像のように
世界狭しとばかり立ちはだかっているのだぞ。
おれたちちっぽけな人間はその巨大な脚のあいだを
うろつきまわり、恥ずべき墓穴を捜しているにすぎぬ。

375

おれがおまえたちであれば心を動かされるだろう、
おれが哀願によって人の心を動かせる男なら
人の哀願によって心を動かされもするだろう。
だがおれは北極星のように不動だ、
天空にあって唯一動かざるあの星のようにな。
空には無数の星屑が散りばめられておる
それはすべて火であり、それぞれ光を放っておる、
だが不動の位置を保持する星は一つしかない。
人間世界も同じだ、この世には無数の人間がおる、
すべて血肉をそなえ、理性を与えられておる。
だがおれの知るかぎり、その数知れぬ人間のなかで、
厳然として侵すべからざる地位を保持するものは
一人しかない。それがこのシーザーだ。

376

それぐらいのことは当然
心得ているべきであった。歴史が教えてくれている、
望まれて権力の座につくものも座につけば民心は離れる、
民衆に愛されていいあいだは愛されず、凋落するものも
姿を消せばはじめて惜しまれる。この大衆というやつ、
たとえて言えば流れに浮かぶ花菖蒲だ、潮の変化に
身をまかせ、あっちへ行ったりこっちへきたり、
ただようままに腐っていく。

377

うつろいやすい民衆の心を土台にして家を建てるものは、
ぐらついてあぶなっかしい住居に身をおくことになる。
ああ、愚かな大衆どもめ、おまえたちはかつて、
おまえたちの望みどおりボリンブルックが王座につく前は、
天を拍つ歓呼の声をもって彼に祝福を与えたものだった！
ところがいま、彼がおまえたちの望んだ栄光に包まれると、
なんという食い意地の汚さだ、もう彼に食い飽きて、
みずから胸をむかつかせて彼を吐き出そうとしている。
そう言えば、おまえたち野良犬は、その貪欲な胸から
故王リチャード二世を吐き出したくせに、いままた
その反吐の死体をもう一度食いたがり、捜し求めて

うるさく吠え立てている。こういう連中が信じられるか？
リチャード王在世中はその死を願っていたやつらが、
いま、その墓に熱い恋心を捧げているのだ。故王が、
世の賞賛を一身に集めたボリンブルックのあとに従い、
傲然とかまえたロンドン市中を溜息ながらに引きまわされた
あのとき、その頭上に汚物を投げつけたおまえたちが、
いま、「大地よ、あの王を返し、この王をのんでくれ！」
とわめいているのだ。人の心の、なんと呪わしいことか！
過去と未来は美しく見え、現在はもっとも醜いと思うのだ。

378

ああ、愚かなおまえたちはなにを誓ったのかも知らぬのだ。
見るがいい、私がこの羽をおこうへ吹く、
すると風がまた私のほうへ吹きもどす、
私が吹けば私の息に従ってあっちへ行き、
風が吹けば風の言いなりになってこっちへくる、
つねに勢いの強いほうに支配されて動くのだ、
おまえたち平民の軽薄さもこの羽と同じだ。

379

衆人の求むるもの！この「衆人」とはおそらく
愚かな大衆のことだろう、彼らは外観でものを選び、
愚かな目の教える以上のものを学ぼうとはせぬ、
内側までは見ないのだ、だから岩燕と同じように、
嵐のときにも壁の外側に巣を作る、それもわざわざ
風雨をまっこうから浴びる場所を選んでしまう。
おれは衆人の求めるものなど選びはしないぞ、
このおれはそんじょそこの平民と心を同じくしたり、
無知蒙昧な愚衆と肩を並べたりするような男ではない。

380

コリオレーナス
この頭をさらしものにしろと言われるのか？
卑しい舌で気高い心に嘘つきの汚名を着せろと？
よろしい、やりましょう。
さあ、おれの気性よ、消え失せろ、そのかわりに
売女の魂でも乗り移るがいい！太鼓に合わせて
戦場で鍛えられたおれの喉よ、笛のように細い
宦官の声か、赤子に子守唄を歌う小娘の喉に
変わってしまうがいい！この両の頬には
奴隷の微笑をみなぎらせ、この両の目には
小僧の涙をあふれさせるのだ！この唇のあいだに
乞食の舌を動かし、馬に乗るとき以外にはけっして
曲げたことのないこの膝を、施し物を受けるときの
乞食のように曲げるのだ！ああ、そんなことが
おれにやれるか！おれの真実をみずから汚し、
からだの動き一つ一つでもって消しがたい卑しさを
心に教えるようなことが！
ヴォラムニア
それなら好きになさい。
おまえに頭をさげて頼むのは私の恥です、おまえが
平民に頭をさげて頼む以上に。なにもかも

破滅させるがいい。母はおまえの誇りを目にしたい。
おまえの危険な頑なさを恐れはしない。私も
おまえと同様、死ぬことなど平気です。好きにおし。
おまえの負けじ魂は私の乳房から吸い取ったもの、
その誇りをもち続けるがいい。
コリオレーナス
ご安心ください。
母上、私は広場に行きます。これ以上どうか
お叱りにならないでください。私はやつらから
好意を盗みとり、信頼をだましとり、ローマじゅうの
あらゆる市民に愛されるようになって帰ってきます。

381

さあ、耳を開いて聞きな、それがし、「噂」が大声で
しゃべろうってんだ、耳に蓋するわけにはいくまい？
日の登る東のかたより日の沈む西の涯まで、
風を早馬に仕立てて乗りまわし、この地上に起こる
あらゆる出来事を伝えひろめるのがおれの役目だ。
悪口、中傷をひっきりなしにこの舌先にのせ、
それを世界各国のことばでしゃべりまくり、
人々の耳に偽情報を詰めこむのがおれの商売だ。
たとえばおれが天下泰平だと言うのは、かくれた敵意が
平和の微笑のかげに刃を秘めてこの世を傷つけてるときだ。
また、大きくふくれあがった世界の胎内から
いまにも暴虐な戦争が生み落とされると思わせ、
兵隊集めや防衛準備に狂奔させておいて、実は
なにごともなし、なんて騒ぎを起こすのも、このおれ、
「噂」の仕業でなくてなんだ？「噂」とは
疑心暗鬼、揣摩憶測が吹き鳴らす笛だ、それも
穴をおさえて吹くだけでいとも簡単に音が出るので、
あの無数の頭をもつどじな怪物、たえずざわついて
あっちへふらふらこっちへふらふらする大衆ってやつでも、
むやみに吹き立てることができるんだ。いや、いまさら
天下衆知のおれの実体をご説明する必要はなかったな、
あんたがたはおれの身内なんだから。ではなぜここに
「噂」が出てきたか？実はそれがし、ヘンリー王の
勝戦を見てまいった、

382

ああ、
なんてひどい中傷だ、その刃は剣よりも鋭く、その舌は
ナイル河の毒蛇すべてよりも毒に満ち、その息は
天を駆けめぐる風に乗って世界の隅々にいたるまで
嘘をまき散らす。国王も、王妃も、高位高官も、
生娘も、人妻も、そう、墓穴の奥底にいるものまでも、
この蠅のような中傷を避けることはできぬ。

383

肩をすくめたり、フンと鼻先で嘲笑したりする
中傷の烙印が――

384

こういうことには倦みはてたので安らかに死にたい、
たとえば貴重な価値が乞食として生まれ、
たとえば無価値な空虚が美々しく飾られ、
たとえば清純な誠意が無惨にそむかれ、
たとえば金ピカの栄誉が場ちがいと与えられ、
たとえば無垢の美德が乱暴にも淫売あつかいされ、
たとえば正当な完璧さが不当にも侮辱され、
たとえば真の力が無能な権力に無力化され、
たとえば学芸が時の権勢に口をふさがれ、
たとえば知識が識者ぶった無知に支配され、
たとえば素朴な真実がばか呼ばわりされ、
たとえば囚われた善がいばった悪の奴隷にされる、
こういうことには倦みはてたのであの世に行きたい
ただ私が死んで愛する人をひとり残すのがつらい。

385

ああ、身分、階級、官職といったものが汚れた手では
つかみえず、清らかな栄誉がそれを手にするものの
価値によってのみ得られる世であれば！ そうなれば、
いま低い地位にあるものが何人高位につくだろう！
いま主人面しているものが何人下僕となるだろう！
卑しい種がどれだけ本物のりっぱな種のなかから
ふり出されるだろう！ そしてりっぱな種が
どれだけいまの世の糞殻や屑種のなかからえり出され、
新たな栄誉を得るだろう！

386

「おお、機会よ お前の罪は大きい。
反逆者に裏切りを行なわせるのはお前だ。
小羊のいるところに狼を連れていくのはお前だ。
罪の行為を企む者がいると、お前が時期を定めてやる。
正義を、掟を、理性を、蔑むものがお前なのた。
罪が、人目を避けて、お前の暗い穴蔵に身をひそませ、
かたわらをさまよい歩いてゆく魂をひっ捕まえる。

387

快樂とか、復讐とかは、蝮同様のつんぼであって、
公正な判断の声には耳をかさぬものだ。

388

上に立つ人が雷神ジュピターのように声高に
厳罰をふりかざすと、ジュピターも安眠が
乱されまじやう、下っぱの小役人まで一人残らず
雷を借り受けようと天を騒がせるでしょうから。
雷だけの世のなかになります！ 慈悲深いジュピター、
あなたは稲妻をともしなすさまじい雷電をもって
楔もうちこめない瘤だらけの樫の木は引き裂いても、
か弱い灌木はお見のがしになる。ところが人間は、
傲慢な人間は、束の間の権威をかさに着て、
自分がガラスのように脆いものであるという
たしかな事実も悟らず、まるで怒った猿のように、
天に向かって愚かな道化ぶりを演じては天使たちを

泣かせています。もしも天使たちが人間のように
笑うことができれば、きっと笑い死になさるでしょう。

389

大地よ、草の根を与えてくれ。
それ以上のものをおまえから得ようとするやつには、
舌が引きつるような毒を添えてやれ。なんだ、これは？
金貨か？黄金色にきらきら輝く貴重な金貨だな？
いや、神々よ、私は真剣に祈っているのだ、
どうか草の根を！だが、これだけの金があれば、
黒を白に、醜を美に、邪を正に、卑賤を高貴に、
老いを若きに、憶病を勇氣に変えることもできよう。
神々よ、どういうことだ、これは？どうしてこれを？
これはあなたがたのそばから神官や信者たちを引き離し、
まだ大丈夫という病人の頭から杖を引きはがすしろものだ。
この黄金色の奴隷めは、
信仰の問題においても人々を結合させたり離反させたりし、
呪われたものを祝福し、白癲病みを崇拜させ、
盗賊を立身させて、元老院議員なみの
爵位や権威や栄誉を与えるやつなのだ。
枯れしぼんだ古後家を再婚させるのもこいつだ、
膿みただれたできものだらけの患者さえ一目見て
嘔吐をもよおすような女でも、こいつをふりかければ
たちまち四月の花と化けるのだ。

390

ああ、国王をも殺すかわいいやつ、血のつながった
父親と息子をも引き離すいいやつ、美しく輝いて
婚礼の神ハイメンのもっとも清らかな床をも汚すやつ、
軍神マルスのように勇敢なやつ、頬を赤らめれば
処女神ダイアナの膝につもる聖なる雪をも溶かす
求愛者のように、若々しく、みずみずしく、愛すべく、
優雅なやつ！おまえは目に見える神だ、おまえは
いかに両立しがたいものでも手を握らせ、キスさせるし、
あらゆることばをあやつりいかなる目的をもなしとげる。
おまえは心の試金石だ、おまえの奴隷である人間どもは
裏切り者だ、だからおまえの力でやつらをあい戦わせ、
破滅させるがいい、この世がけだものの帝国となるように！

391

ぼろをまといえ
小さな悪事もすけて見える、法衣や毛皮のガウンは
すべてを包みかくす。罪には金の鎧を着せるがいい、
正義の鋭い槍先も傷つけることなく折れるだろう。
ぼろを着せれば小人の藁□でも刺し貫いてしまおう□
罪人など一人もおらぬ、一人も、いいな。一人もだ、

392

天よ、つねにかくのごとく
ありたまえ。ありあまるものをもち、欲望を
ほしいままにする輩、天意をないがしろにし、
おのれが感ぜぬゆえに人の不幸に目をつむる輩に、

天の力を感じさせたまえ。そうすれば富の分配も公平に行きわたり、各人が衣食に満ちたりるでしょう。

393

着る服もないみじめなやつ、おまえたちもどこかでこの無情な横なぐりの風雨に耐えているだろう、教えてくれ、頭を入れる家もなく、腹を満たす食べものもなく、穴だらけのぼろをまとう身で、このような嵐をどうやってしのぐのだ？ ああ、わしはいままで気づかなかった。いい薬だぞ、栄華におごるやつ。みじめなものが味わう苦痛を身をもって味わうがいい、そうすれば余分なものを貧乏人にわけ与え、天の正義を示すようになるだろう。

394

これでは墓にいるほうがまだましだろう、激しい風雨にその裸身をさらすよりは。人間とはこれだけのものにすぎぬのか？よく見るがいい。おまえは蚕に絹を、けだものに革を、羊に毛を、猫に麝香を借りてはおらぬ。どうだ！わしら三人はまがいものではないか！おまえはまじりけなしの本物だ。人間、衣装を剥ぎとれば、おまえのように、あわれな裸の二本足の動物にすぎぬ。ええい、捨ててしまえ、借り物など！おい、このボタンをはずしてくれ。

395

ハムレット

ポローニウス、この役者たちを手厚くもてなしてくれ。いいな、手厚くだぞ。役者とは時代の縮図、生きた年代記だ。死んでから墓碑銘にどんな悪口を書かれるよりも、生きているうちにこの連中に悪い評判を立てられないよう気をつけたほうがましだ。

ポローニウス

かしこまりました、このものたちには相応のあつかいを。

ハムレット

なにを言う、もっと十分にもてなしてやれ。相応のあつかいを受けるとなれば、人間だれだって鞭をまぬがれまい。おまえのそのりっぱな身分相応のあつかいをしてやるのだ。この連中にそれだけの値うちがなければ、それだけおまえの親切が値うちをもつことになるう。

396

われわれの頭上で

荒れ騒ぐ神々に、いまこそ真の敵を見いださせよう。

ふるえおののくがいい、卑怯にも、ひそかな罪を

抱きながら、正義の鞭をのがれられると

思うやつ。身をかくすがいい、その手を鮮血に

染めたやつ。偽りの誓いを立てたやつ。謹厳な

面つきをしながら邪淫にふけるやつ。おびえるがいい、

卑劣にも巧みにたくらんだうわべにかくれ、

人のいのちを殺めたやつ。ひたかくしにされたかずかずの

罪業よ、おまえを包む胸を引き裂き、この恐るべき

神々の呼び出しに答えて慈悲を乞うがいい。わしは

罪を犯すよりも犯された人間だ。

397

じゃあ言うがな、相棒、おまえが王様になったら、おれたち、夜の世界の騎士を、昼の目をかすめる盗賊呼ばわりだけはさせないでほしいな。おれたちは月の女神ダイアナ様お気に入りの狩人、夜の紳士だ、だからこう呼ばせてもらいたい、おれたちこそ、大海原同様、かの高貴にして貞潔なる月の女神に仕え、その光のもとに盗みを働く、品行方正の士であると。

398

さあ、金をやるぞ、泥棒ども。
これで人の心を狂わす葡萄の血をすすってこい、
おまえたちの血が煮えくり返るまで飲んだくれ、
縛り首をまめがれるがいい。医者信用してはならぬぞ、
やつの解毒剤は毒だ、おまえたちが盗む以上に殺しておる。
財産もいのちも奪いとるがいい。悪事の限りをつくせよ、
悪事専門の職人ども。一つ、泥棒の見本を教えてやろう。
太陽は泥棒だ、その強大な引力でもって大海原から
こっそり水を吸いあげておる。月もあきらかに泥棒だ、
その青白い光は太陽からかすめとったものだ。
海もまた泥棒だ、その揺れ動く大波は月を溶かして
塩からい涙に変えたものなのだ。大地もちろん泥棒だ、
あらゆる生きものの排泄物から盗みとった堆肥でもって
ものを養い育てておる。あらゆるものはすなわち泥棒だ。
おまえたちを暴力でもってとりおさえ、鞭打つ法律も
天下ご免の大泥棒だ。おのれを愛してはならぬ。行け、
おたがいに盗みあえ。

399

不愉快なことを言う男だな！おまえは知らぬのか、
地上をあまねく照らす太陽が地球のかげにかくれ、
反対側の世界を明るくするとき、こちら側では
暗闇にまぎれて窃盗、強盗のたぐいが横行し、
大手をふって人殺しや乱暴を働くことになるが、
大地の下をまわってふたたび太陽が顔を出し、
東の山々に誇らしげにそびえる松の梢を赤く染め、
あらゆる罪の巣窟をすみずみまで照らし出すと、
殺人、謀反、そのほか憎むべき罪のかずかずは
身につけていた夜の衣を無惨にはぎとられ、
赤裸にむかれたおのれの姿におののくのみなのだ。

400

逃げられるだけは逃げ、
生きのびてやろう。それには、そうだ、できるだけ
卑しい、あわれな姿をとることだ、貧乏神が
人間を蔑んで、畜生同然に落としめたような、
そういう姿をな。顔には泥を塗りたくり、
腰にはぼろ布をまとい、髪はもつれほうだいにし、
もって生まれた裸をさらして、きびしい風雨の
追究にあえて立ち向かおう。この国にはそのための
りっぱなお手本がある、あのベドラムの
気ちがい乞食だ。彼らはうめき声をあげ、
なえて感覚を失ったむき出しの腕に、針、木串、
釘、マンネンロウの小枝などを突き刺し、
その見るも無惨な格好で、貧しい百姓家から
寒々とした村、羊小屋、水車小屋まで訪れ、
狂気の呪いや祈祷をもって施しを強要する。

401

ええい、必要を論ずるな。どんな卑しい乞食でも、

その貧しさのなかになにかよけいなものをもっておる。
自然の必要とするものしか許されぬとすれば、
人間の生活は畜生同然となろう。おまえは貴婦人だ、
あたたかい服を着るだけでも贅沢であれば、
あたたためもくれぬおまえの贅沢な服など
自然は必要とせぬはずだ。

402

お気の毒なご主人様は、宿なしの乞食となられ、
人にいやがられる貧乏という病気を背負って、ただ一人
軽蔑そのものの姿で歩かれるのだ。

403

いまはこのように
落ちぶれてはおりますが、もとをただせば、これでも
強大な国王たちと肩を並べる家柄に生まれたのです。
それが、無情な「時」のために、父はいのちを断たれ、
私はつらい浮き世の荒波にもてあそばれて、やむなく
人に仕える身の上となりました。

404

神の御心により
どのような苦難がこのおれに課せられようと、
ありとあらゆる苦痛や恥辱がこのむき出しの頭上に
雨となって降りそそぎ、首まで貧窮にひたされ、
この身も最後の望みも奴隷の鎖につながれようと、
おれの心のどこかにはひとしずくの忍耐が
見出しえたはずだ。だが、ああ、このおれが、
磁石の文字盤の北極のように、世の嘲りの針を
避けがたく突きつけられる身になろうとは、
いや、それも耐えてみせよう、うむ、それさえも。
だが、おれの心を大切にしまっておいた場所、
生きるも死ぬもそこと定めておいた場所、
いのちの川が流れるも涸れるもそれ次第という泉、
おまえの胸——そこから投げすてられるとは！
その泉を汚らしいヒキガエルがつるんだりはらんだりする
水溜りにする気か！ういういしいバラ色の唇をした
天使、忍耐よ、こうなれば顔色を変えるがいい、
そう、悪魔のように陰惨な顔つきにだ！

405

小犬どもめ、トレーもブランチもスイートハートも、見ろ、寄ってたかってわしに吠えつき
おる。

406

憐れみが生まれたばかりの裸の赤児の姿を借りて
トランペットの疾風にうちまたがり、あるいは
天童の姿となって目に見えぬ大気の天馬にうち乗り、
その恐ろしい所業を万人の目に吹きつけよう、
涙の雨が溜息の風を溺らせるまで。

407

なにごとだ、その大げさな悲しみようは？
その嘆きを聞けば、大空をめぐる星も呪縛にかかり
驚きのあまり足をとどめよう。

408

私は私の悲しみに、傲慢になるよう教えてやります、
その持ち主が身を伏せれば悲しみは傲慢になれるでしょう。
さあ、私と私の悲しみの偉大な王座の前に、二人の王を
こさせなさい。私の悲しみはあまりにも偉大なので、
それをささえるものは巨大で堅固の大地のほかにはない。
ここに、私と悲しみはすわります。二人の王に
伝えなさい、この王座の前にきてお辞儀をするように。

409

フランス王

その髪を紐で結びなさい。ああ、あの美しい
ゆたかな髪に、なんという愛情が読みとれることか！
たまたま銀色の一滴がしたたり落ちて頬を伝うと、
その一滴に何千もの友人である髪が集まり、
その嘆きとともに分かちあっている、まるで
まことの、切り離しえぬ、忠実な恋人同士が、
一つの不幸のなかでしっかり結びつくように。

コンスタンス

では行きましょう、イングランドへ！

フランス王

その髪を結びなさい。

コンスタンス

はい、そうします、でもなぜ結ぶのかしら？

私はこの髪をいましめから解いてやったとき、
「ああ、この手が髪を自由にしたように、私の息子を
救い出してくれたらいいのに！」と叫んだものでした。
でもいまは、その髪が自由がねたましい、
またこのように縛りつけてやりましょう、
私の息子もかわいそうに捕らわれているのですから。
枢機卿、いつだったかおっしゃいましたね、
私たちは天国で親しいものに会えばそれとわかると。
それがほんとうなら、私はまた息子に会えるでしょう、
この世に生まれた最初の男の子カイン以来、
つい昨日産声をあげた子供にいたるまで、
あの子のように清らかなものはいなかったのだから。
でもいまにあの私の蕾は、悲しみの虫におしばまれ、
生まれながらの美しさはその頬から追われ、
幽霊のようにやせこけ、瘡の発作に襲われたもののよう
に色青ざめ、見すばらしい姿となって、死ぬでしょう。

410

このすばらしい一幅の絵のかたわらに、ルークリースは来た、
あらゆる苦悩の描かれている顔を探し求めて。
心の痛みが多少の痕を刻みつけている顔は数多く見られた。
だが、あらゆる苦悩と悲しみとを宿した顔は、
狂気のように嘆き悲しむヘキューバただ一人のものだった。
彼女は老いの眼差でプライアムの傷を見つめていた。

老王は血を流し、勝ち誇るピラスの足もとに横たわっていた。

411

さりながら、だれか見し、おお、だれか見し、
老王の妻ヘキュバ、面を包みし妃の姿を
素足のままに逃げまどい、あふるる涙に
さしもの焰も消えんばかり。王冠をいただきし
その頭上には古布一枚、あまたの王子をもうけし
その細腰には危急に際して巻きつけたる毛布のみ。
だれかこの妃の姿を見てもなお、運命神の心なき
業を激しい舌をもて呪い責めずにおられようぞ。
神々とてもかのピラスが、残酷無惨な剣先に、
夫の五体切りきざむ、その光景を前にせし
ヘキュバがあぐる狂乱の叫びを耳にしたまわば、
神々とても人の世のあわれを知りたもうものなれば、
天に輝く星々を悲しみの涙に濡らしたもうらん。

412

先ほどの役者はどうだ、たかが作り話、
かりそめの情熱に動かされ、その魂を
絵そらごとの世界にうちこんでいたではないか。
あげくのはて、顔は蒼ざめ、目は涙をたたえ、
頬はひきつり、声はかすれ、全身の動きは
心に描く想像の人物になりきっている。
なんのためだ？ なんの理由もありはしない。
ただヘキュバのため！
だがヘキュバはあの男にとってなんだ？
あの男はヘキュバにとってなんだ？ 泣くほどの
理由はあるか？

413

なぜなら、悲しみは、揺れ動く重い鐘のように、
一度鳴らせば、あとは自分の重みで鳴り続けるものだから。

414

恐怖におののく目をしているな。かつてその頬にあった
あの生き生きとした血の色はどこに消えた？
そのような曇った空を晴らすには一雨降らせねばなるまい。
嵐を降らせるがいい、フランスの情勢はどうなっている？

415

どうだ、あの男の顔は書物の扉のように、
中味の悲劇を予告しているようではないか。
有無を言わさぬ激しい津波に襲われた浜辺の
荒廃の跡にも似た顔つきだ。

416

きっとおまえのように
生気を失った、意気消沈した、呆然自失した、
死人のような顔をした、悲しみにうちひしがれた男が、
深夜、プライアム王の寝所の帳をかかけ、トロイの城も
なかば燃え落ちましたと報告しにきたとき、

プライアムはそれを耳にする前に落城を察知したろう、

417

マクベス

悪魔に黒く染めてもらえ、その蒼白い面を！ばかが。

どこでその腑抜けたガチョウ面を手に入れた

召使い

実は一万にあまる――

マクベス

ガチョウがきたか？

召使い

軍勢がです。

マクベス

そのおびえた面の皮をひんむき、血の色を

通わせてこい、青虫め。どこの軍勢だ、阿呆？

ええい、くたばるがいい、生っ白い臆病面など

見たくもない。どこの軍勢だ、青ビョウタン？

418

だが、ああ、なんとつらいことだろう、他人の目をとおしてしあわせをのぞき見るのは！

419

忍耐と悲嘆と、

いずれが王妃にふさわしいか争っているようでした。

日光と雨が同時に降り注ぐことがあります、

お妃様の微笑と涙はそれ以上に美しい光景でした。

赤い唇にたわむれる明るい微笑は、目を訪れた客の

なにびとなるかも知らぬげで、また目から去る客は

ダイヤモンドからこぼれ落ちる真珠と見えました。

まことに悲しみほどいとおしいものはないでしょう、

だれにでもあれほど似合うならば。

420

苦難に会っても、頬の色はやつれて変わるかもしれませんが、

心は少しも変わりません。

421

悲しみというものは単独ではやってこない、

必ず大挙して押し寄せてくる。

422

失ったものは二度ととりもどせない、その悲しみは

忍耐も癒す力があるまい。

423

忍耐せねばならぬぞ。人間、泣きながらこの世に

やってくる、そうだろう、はじめて息を吸いこむとき、

おぎゃあおぎゃあと泣くだろう。おまえに一つ

説教してやろう。

人間、生まれてくるとき泣くのはな、この

阿呆どもの舞台に引き出されたのが悲しいからだ。

424

ああ、家に帰りたい。

425

陛下、どうぞ私のために公正なお裁きを、さらにはお慈悲をお願いいたします。もともと私はご領地の外で生まれた他国者であり、頼るものもないあわれな女にすぎません、この場にもだれ一人、公平な態度で、悪意なく裁判をすすめてくれそうな人は見当たらないのです。ああ、陛下、いったい私のどこがいけなかったのでしょうか？どのようなふるまいがご不興を招くものとなり、このように離婚を迫られ、陛下から見捨てられる原因となったのでしょうか？天も照覧あれ、私は陛下の忠実でつつましい妻でした、お心にそむくようなことは一度もしておりません、ひたすら陛下にきらわれることのみ恐れておりました、喜びも悲しみも、陛下のお顔をうかがってはそれになっておりました。いったいいつ私が陛下のお気持ちにさからったでしょう、いつ私がわがままな気持ちを押しとおしたでしょう？たとえば陛下のご友人であれば、たとえ私の敵であっても、私もまた愛そうとつとめなかったことがありましたか？あるいは、私の友人であっても、陛下のお怒りを招けば、私もまた友情を断ち切らなかったことがありましたか？いえ、それどころか、二度と顔を出すなとまで言いました。どうか思い出してください、陛下、私はこの二十年間、あなたの忠実な妻でした、多くのお子たちももうけました。もし、この長い年月のあいだに、たった一度でも、私の名誉にそむき、結婚の誓約を破り、陛下にたいする愛と務めを裏切るような行為があったと証明できるなら、神のみ名においてお願いします、私をおそばから追い出し、忌まわしい嘲りのただなかへほうり出し、もっとも冷酷な裁判官の手に突き出してください。

426

慈悲は義務によって強制されるものではない、天より降りきたっておのずから大地をうるおす恵みの雨のようなものなのだ。祝福は二重にある、慈悲は与えるものと受けるものとをともに祝福する。これこそ最高のものが所有しうる最高のもの、王にとっては王冠よりもふさわしい王者のしるしだ。王の手にする王笏は仮の世の権力を示すにすぎない、つまりそれは畏怖と尊厳を誇示する表象であって、そこにあるのは王に対する恐れ of 念でしかない。だが慈悲は、この王笏による権力支配を越え、王たるものの心の王座にあって人を治める、つまりそれは天にまします神ご自身の表象なのだ。したがって地上の権力が神の力に近づくのは慈悲が正義をやわらげるときだ。だからシャイロック、おまえが正義を要求するのはわかるが、考えてみろ、正義のみを求めれば、人間だれ一人救いにはあずかれまい。そこでわれわれは慈悲を求めて祈る、

その祈りそのものが、われわれに慈悲を施せと
教えているのではなかろうか。こういう話をしたのも
おまえの要求する正義をやわらげようと思えばこそだ、

427

ああ、なんていうことを！
この世に生まれた人間はそれだけで罪を犯しています、
それでも神は罰しようとなさらず、救いの道をお示しになりました。もしも最高の裁判官である神が、いまのままのあなた様を裁かれるとすればどうなりましょう？ それをお考えになれば、その唇に慈悲の言葉が湧きあがってくるでしょう、生まれ変わった人のように。
偉いかたがたの身分の高さをあらわすしるし、たとえば国王の冠とか、公爵代理の剣とか、式部官の杖とか、裁判官の衣とかは、いずれも、慈悲の心にくらべれば、そのかたがたにそれほどふさわしいとは思いません。もしも兄があなた様であり、あなた様が兄であれば、あなた様も兄のようなあやまちを犯すかもしれませんが、兄はあなた様のように苛酷な処置はとらないでしょう。

428

罪びとの面に目を向けるのが慈悲のつとめではないか？
人が祈るのはなんのためか、一つは罪に落ちぬよう、もう一つは罪に落ちたものが許されるよう祈る、そうではないか？

429

エスカラス
閣下が謹厳なかたであることは十分承知しているが、あなたとて、感情に心が動かされるとき、時が所と、所が欲望とうまく一致すれば、あるいは情欲が思いきった行動に出てその目的をとげられるようなことがあれば、いまあの男を罰せられるまさにその罪を犯し、ご自身のうえに法律を課さねばならぬことがないとはかぎりすまい、その点ご賢察されたい。

アンジェロ

誘惑されるということは、エスカラス、誘惑におちいることとは別だろう。たしかに罪人に死刑を宣する十二名の陪審員のなかには一人や二人、自分たちが裁く犯人よりもっと重い罪を犯しているものがあるかもしれない。だが法があつかうのは公然と法にふれたものだけだ、盗賊を断罪するものが盗賊であろうと、法律は関知しないのだ。われわれが宝石を拾うのも目に入ったからであり、目に入らなければそれを踏みつけていささかも意に介すまい。かりに私も同じ罪を犯しかねないからと言ってあの男の罪を軽くしてやることはない、むしろあの男を断罪する私が実際に同じ罪を犯せば、

私自身の判決を適用して死刑に処していただきたい、
差別することなく。

430

リア

見ろ、あそこにいる裁判官があそこにいるこそ泥を叱りつけておる。よく聞けよ、おまえの
耳にこっそり言うからな。二人が入れかわった。さあ、右か左か、どっちが裁判官で、どっ
ちがこそ泥だ？百姓の犬が乞食に吠えかかるのを見たことがあるだろう？

グロスター

はい。

リア

そうしたら乞食めはやくざ犬から逃げ出したろう？そこに権威というものの巨大な姿が見ら
れるのだ。犬も権威ある役職にあれば人間を従わせることができる。

431

どうかご自分の胸を訪ね、
扉を開き、そこに私の兄と同じ罪の心がないか
お聞きになってください。もしもそこに兄のように
人間本来の邪な心がひそんでおりましたら、
兄のいのちを奪おうというお考えをお口には
出さないでください。

432

エアリエル

あなたの術は少し

効きすぎたようです、いまごらんになればあなたも
あわれとお思いになるでしょう。

プロスペロー

そう思うか？

エアリエル

はい、私が人間でしたら。

プロスペロー

おれもそう思うだろう。

おまえが、空気にすぎぬおまえまでが、彼らの苦痛を
あわれと思うのに、おれが、彼らと同じ人間であり、
同じ感覚をもち、同じ悲しみを味わうこのおれが、
おまえほど同情の心を動かされずにいられようか。
彼らの非道な仕打ちは骨身にこたえてはおる、
だが、おれは激しい怒りよりも気高い理性に
味方しようと思う。いま選ぶべき正しい道は、
恨みを晴らすことではなく徳を施すことにある。
彼らが後悔している以上、おれの計画もそれまでだ、
もう苦しめはせぬ。自由にやらせ、エアリエル、

433

ひざまづくことはない、

おれに罰する力があるなら、それはきみを救うことだ、
きみへの恨みがあるなら、きみを許すことだ。これからは
人々に親切をつくして生きるがいい。

434

なんてすばらしい！

りっぱな人たちがこんなにおおぜい！人間がこうも
美しいとは！ああ、すばらしい新世界だわ、
こういう人たちがいるとは！

435

吹けよ 吹け吹け 冬の風
おまえの心はあたたかい
恩を忘れる人よりも。
姿を見せぬ 冬の風
おまえの牙は痛くない
吐く息は荒れ狂うとも。
ヘイホー 歌え ヘイホーと
緑樂しき柵に
友はおおかたうわべのみ
恋はおおかた仇な夢。
ヘイホー 歌え 柵に
森の暮らしの楽しさに。
凍れや 凍れ 冬の空
おまえは胸を傷つけない
恵みを忘れる人よりも。
川面をひるます 冬の空
おまえの棘は痛くない
人を裏切る友よりも。

436

忘恩という、石の心をもつ悪魔めは、わが子の姿で
あらわれるとき、海の怪物より恐ろしいわ。

437

438
風よ、吹け、きさまの頬を吹き破るまで吹きまくれ！
雨よ、降れ、滝となり、龍巻きとなり、そびえ立つ
塔も、風見の鶏も、溺らせるまで降りかかれ！
稲妻よ、一瞬にして雷神の心を伝える硫黄の火よ、
柏の大木をまっぶたつに突ん裂く雷のさきぶれよ、
わしの白髪を焼きこがせ！そして天地を揺るがす
雷よ、丸い地球がたいらになるまで打ちのめせ！
いのちを生み出す自然の母胎をたたきつぶし、
恩知らずな人間を作り出す種を打ち碎け！

439

人間の薄情さに胸がむかついているおれも、
生きている人間である以上腹はへる。
母なる大地よ、
おまえはそのはかり知れぬ胎内から万物を生み出し、
はてしない胸でそれを育てあげる。その同じ成分で、
おまえの子、傲慢な人間を増長させもすれば、
黒いヒキガエル、青い蝮、金色のイモリ、
目のない毒蛇、その他、太陽神ハイペリオンの
燦然と輝く大空のもとに忌まわしい姿をさらす
ありとあらゆる生きものはびこらせもする。
そのおまえに頼む、すべての人間を憎むこのおれに、

おまえのゆたかな胸から草の根一本だけ分けてくれ。
たえまなくはらみ続けるその多産な子宮を干あがらせ、
恩知らずな人間などもう一人も生まないでくれ。
はらむなら、虎、龍、狼、熊などがいい、あるいは、
おまえのあおむきの顔が紺碧の大天井にたいして
いまだかつて見せたことのないような、新種の化け物を
生みつけてもいいぞ。ああ、草の根だ、ありがたい！
おまえの牧場や葡萄畑や耕作地は荒地になってしまえ、
そのおかげで恩知らずな人間は、酒を飲み、
油っこいものを食らって、純な心を濁らせ、
いっさいの思考力を失っているのだ――

440

新緑のまぶしい五月のある日
マートルの木陰に腰をおろした
跳びまわる生き物たち、さえずる小鳥たち、しげる木々、萌えいずる草花
冬のさみしさが消え去ったと思いきや、ナイチンゲールが悲しげに一羽
かわいそうに、かえりみられることもなく心を痛めている
彼女の悲しげな小曲が聴くものの憂いを誘う
フィフィフィ、トゥルトゥルトゥル
悲しみの告白に涙を抑えられない
目の当たりにする悲哀はまるでわが身のことのよう
嘆いても仕方ないことと思う、救いをさしのべるものはないのだ
聞く耳のない木々、思いやりなどない熊たち
パンディオン王は死して、友はもはやいない
仲間の鳥たちは歌っている、あなたの悲しみなど気にも留めず
気まぐれな運命が見せる作り笑いに、あなたも私も欺かれた
うわべの友人ばかり、困ったときに助けるものはいない
言葉は風のようにはかない、本当の友は得がたい
気前良くすれば友であったものが
困窮しても、分け与えてはくれない
放蕩するものには、気前が良いとお世辞をのべる
かなしい事だが、まるで王様を称えるかのように
悪に耽溺するものならば、誘惑しようとする
女性にへつらうものならば、戒律を与えよう
しかし、一度、幸運に見放されてしまえば、名声も失う
気の置けなかった友が去っていく
本当の友ならば、必要なときこそ支えとなろう
悲しいときに共に悲しみ、眠られぬ夜を共に明かす
心にのしかかる悲しみの重荷を、少しでも代わろうとする
本当の友とうわべの友の違いがそこにあらわれる

441

もし執事役たる私に不正があるとお疑いでしたら、
どのようなきびしい検査役にとり調べをお命じになっても
いっこうにかまいません。神々もご照覧のはずです、
お邸じゅうの部屋という部屋が飲み騒ぐ居候たちで
いっぱいになり、酒倉はとめどなく葡萄酒の涙を流し、
客間はすべて煌煌たるあかりに輝き、浮かれ騒ぐ
楽の音と歌声に湧き返っておりましたとき、私は一人
むなしく酒を流し続ける酒樽のそばへ引きさがり、
この目から涙を流しておりました。

442

おれに執事がいたのか、
そんなに忠実で、正直で、やさしい心をもった執事が？
そう聞くとおれの荒々しい気性もやわらいでしまう。
顔を見せろ。間違いない、この男は母親から生まれた
ふつうの人間だ。
永遠に冷静であられる神々よ、例外なくすべての人間に
悪態をついたおれの軽率さを許してくれ！おれはいま
正直な人間が一人いたことを宣言する。誤解するなよ、
一人だけ、ほかにはおらぬ——その一人は、執事だ。
おれは人間を一人残らず憎もうとしていた、おまえは
その憎しみからのがれえた、

443

アダム
ここに五百クラウンあります、
お父様にいただいた給金を溜めておいたのです、
この老いの手足が思うように動けなくなり、
老いばれと蔑まれ見捨てられるときがきたら、
これが私の面倒をみてくれるだろうと思ひまして。
これをおもちください、鳥にも食べものを恵み、
雀にも飢えないよう配慮なさる神様のことです、
老後の私を見殺しにはなさらないでしょう。この金は
すっかりさしあげますから、どうか私をあなたの
召使いにしてください。
オーランドー
ああ、年老いたおまえが見せてくれるものこそ
昔ふうの律儀な奉公人氣質というやつだ、昔は
汗水流すのも奉公第一、報酬は二の次だったという。
おまえはいまの流儀にはむいていない、いまは
汗水流すのもすべて立身出世のためにすぎん、
だからいったん望みをとげると、とげたとたんに
奉公もおしまいだ。そこがおまえとちがうところだ。

444

忠実な心がはたしえぬことを、出来栄えではなく
心栄えで見てやるのが、上に立つものの喜びなのだ。
いつだったか、あるところで大学者たちが私を迎え、
あらかじめ用意した歓迎の辞をのべようとした、
ところが私の前に出ると彼らは身をふるわせ、
顔色を失い、文の途中で絶句してしまい、
練習を積んだことばも臆して喉に詰まり、
ついには声もなく黙りこんで、歓迎の辞も
宙に浮いてしまった。だがな、ヒポリタ、
私はその沈黙に歓迎の意を汲みとったのだ。
臆して声もない忠実な心の控えめな態度に、
臆面もなく押しつけがましい雄弁をもって
しゃべりまくる舌以上のものを読みとったのだ。
私の耳には、愛と舌を縛られた純朴な心とは、
ことば数が少ないほど多くを語るように思われる。

445

おれたちはまだ
同じ悲しみに心を合わせてお仕えする仲間なのだ。
おれたちの船は難破した、おれたち水夫は沈み行く甲板で
高波のおどしにふるえている、この上は世間の荒海へ
別れ別れに飛びこんで行かねばなるまい。

446

ああ、人の世の、なんとうつろいやすいことか！
固く誓いあった親友が、胸は二つでも心は一つ、
昼も夜も、食事も遊びも、片時も離れることなく、
わかちがたい友情に結ばれた双子とも見えていたのが、
あっという間に、ほんの些細なことをめぐる
いさかいから、たちまち不倶戴天の敵となり、
憎み合うようになることもある。かと思うと、
仇敵同士が、おたがいに相手のいのちを奪おうと、
夜も眠らず精魂傾けて策を練っていたのに、ふとした
卵一つの値うちもないきっかけで無二の親友となり、
その後の運命をともにすることもある。

447

フォールスタッフ
もし砂糖入り白葡萄酒を飲むことが悪であれば、そのような悪人たちを、神よ、救いたま
え！もし年をとってなお陽気に騒ぐことが罪であれば、私の知っている居酒屋の年老いた亭
主たちはみな地獄に墮ちることになります。もしふとっていることが憎まれねばならぬ理由
になるとすれば、エジプト王パロの夢に出てきた憎らしいやせ牛が愛されねばならぬこと
になります。それよりも、父上、ピーターを追放してください、バードルフを、ポインズを追
放してください、ただあの愛すべきジャック・フォールスタッフ、やさしいジャック・
フォールスタッフ、忠実なジャック・フォールスタッフ、勇敢なジャック・フォールスタッ
フ、そう、年をとっているがゆえにますます勇敢なと言うべきジャック・フォールスタッ
フ、あの男だけはあなたの息子であるこのハリーの友として残してやってください、あの男
だけはハリーのそばから追放しないでください。あの丸いジャックを追放することは、この
地球を追放するのと同じことになります。

王子

それでもいい、わしは断じて追放するぞ。

448

私は何度となく見てきた。燦然と輝く朝日が
王者の目で見やって山々の頂を嬉しがらせ、
金色の顔をあらわして緑の草地に口づけし、
鈍色の小川に天上の錬金術を施すのを。
そしてまた見てきた、やがて卑しい黒雲が湧き、
醜いちぎれ雲にその神々しい顔をおおわれて、
見すてられた地上の世界から姿をかくされると、
恥辱にまみれたままこっそり西へ向かうのを。
私の太陽もそれとまったく同じこと、ある朝早く
栄光に満ちた光で私の額を照らしたのに、
悲しいかな私のものであったのはほんのひととき、
いまは大空の雲が私からかくしてしまった。
だが私の愛は少しも彼をさげすみはしない、
天上の太陽がかげると地上の太陽もかげっていい。

449

私には慰めになる人と絶望させる人と、二人の恋人がいる、
二人は守護霊のようにたえず私にささやきかける。
善霊のほうは色の白い実に美しい男であり、
悪霊のほうは色の黒いまことに不吉な女である。
女の悪霊はすぐにも私を地獄に引きずりこもうと、
男の善霊を誘惑して私のそばから引き離す、
そして淫靡な華麗さで彼の純潔をかき口説き、
私の聖者を悪魔にまで墮落させようとする。
そして私は天使が悪魔に変わったのではないかと
疑ってはいるのだが、はっきりしたことはわからないままである、
だが二人とも私から離れておたがいに仲よくなったのだから
多分男の天使は女の地獄にくわえこまれたのだろう。
私はこのことがわからないまま疑いながら生きるだろう、
悪霊が善霊に悪い病をうつして追い出すまでは。

450

顔を見て
人の心のありようを知るすべはない。
あの男にはわしも絶対の信頼をおいていたのだが。

451

友情とはこんなはかない、血のかよわぬものなのか、
二晩とたたぬうちに冷えきってしまうとは？

452

その話でよくわかる、
熱い友情の冷めていく姿が。おまえも、ルシリアス、
覚えておくといい、愛が病み衰えはじめると、
きまってわざとらしい儀礼を用いはじめるのだ。
飾り気のないあるがままの誠実には駆け引きはない、
だが実意のないからっぽの人間は、馬にたとえれば、
駆け出したときだけ威勢よく、さっそうと見え、
いかにも勇氣ありげだが、いざ戦場で激しい拍車に
耐えねばならぬときになると、頭を垂れ尻ごみする
見かけ倒しの駄馬なのだ。

453

友情はほかのことには信義をまもるが、
色恋沙汰となるとたちまち豹変する。
だから恋するものは自分の口を使うのだ.....
これからみんな自分の目にもものを言わせるがいい、
他人にまかせてはならぬ。美人とは魔女だ、
その呪文にかかれば友情も溶けて情欲となる。
よくある話ではないか、そうと知らぬおれでもなかったのに。

454

私たち二人しか知らない内緒話、二人で交わした
姉妹の誓い、二人がすごしたあの楽しい時間、
早足にすぎ去る時が別れを迫るので悲しい思いをした
二人だったのに——ああ、みんな忘れてしまったの？
学校時代の友情も、少女時代の無邪気さも？

私たちはね、ハーミア、二人の手芸の神様のよう、
二本の針で一つの花を刺繍したものだったわ、
一つのお手本を見て、一つの座布団にすわって、
同じ歌を、同じ調子で、声をそろえて歌いながら。
まるで二人の手も、からだも、声も、心も、
一つになったかのように。そうして育ったのよ、
双子のサクランボのように、見たところは二つに
別れていても、別れた部分からなる一つのもの、
一本の軸になった二つの美しい実のように。

455

あのときは幼すぎてわからなかった私も、いまでは
ロザリンドのりっぱな人柄がよくわかります。
この人が謀反人なら私もそうです、私たち二人は
寝るのも起きるのもいっしょ、勉強も遊びも食事も
いっしょ、どこに行くにも片時も離れず、まるで
ジュノーの車を引く二羽の白鳥のようでしたから。

456

エミーリア

なんという友愛でしょう、
親友を追うあのお姿！王が出立なさってからというもの、
あの方が余興をなさる様子ときたら、まるで心ここにあらず、
真剣さと技が必要であるにも関わらず、上の空。
勝とうが負けようが一向にお気になさらず、
手では一つの遊びをなさりながら、頭では別のことを
お考えになり、お心は、このあまりに違った双子を
一度にあやす乳母のよう。姉上はご覧になりましたか、
王が出立なさってからのあの方を？

ヒポリタ

ええ、じっくりと。
それであの方が好きになりました。お二人は、
数々の危険で悲惨な戦場で、敵と飢えとを相手にし、
共に陣営を張って戦っていらしたのです。お二人が
小舟で渡った激流は、どんなに小さなものでも、
身の毛もよだつ轟音をたてて猛り狂いました。
死神が住む場所を一緒に探し出しました。しかし、
運命が二人を死から呼び戻したのです。その友愛の絆は、
巧みな指で、長年にわたり心を込めて、結ばれ、
織り込まれ、しっかりとからみあわされていますから、
古くなることはあっても、ほどけはしないのです。
テーセウス様ご自身もご判断がつかないでしょう、
自らのお気持ちを二つに分け、どちらも公平に
扱うなら、ご自身がどちらを愛しているか。

エミーリア

もちろん、
陛下が一番愛しているのがだれか、はっきりしています。
礼節と理性のある者なら、それはお姉様と言うでしょう。
私にも昔、親友がおりました。お姉様が
戦に出ていた折り、その子はお墓の花となり、
死神を小躍りさせ、月に別れを告げました。
月はそれですっかり青ざめたのです。その子も私も

十一歳のときでした。
ヒポリタ
フラヴィーナね。
エミーリア
ええ、お姉様は、
ペイリトオスとテーセウスの友情をお話になるけれど、
あのお二人の愛は、しっかりと
成熟していて、強い判断力で結ばれ、
お互いに必要としているご様子は、
からみあった愛の根っこに水を注ぐよう——でも、
こうして溜め息まじりにお話をする私とあの子は、
無邪気そのものだった。好きだったから愛しただけ。
この不思議な自然界がどういうわけか
すばらしい結果を生み出すように、私たちの魂もお互いに
不思議に働き合った。あの子が好きになったものは、
私もすてきだと思い、そうじゃないものは、嫌いになった——
口に出してみるまでもなかった。私が、摘んだ花を、
ちょうどその頃膨らみ始めた胸の谷間に挿したりすると、
あの子も、ああ、欲しい欲しいと同じ花を求めて、
同じように可愛い揺り籠に挿した。そして、その胸で、
花は不死鳥のように香りを残して死んでしまった。
私の髪飾りも、みんなあの子は真似しようとした。
あの子の好みの服——何気なく、
たまたま着てみた可愛い服——を、私は、
一番大切な機会に着ていくことにしていたわ。
私が何か新しい曲を小耳にはさみ、
思いつきで口ずさんでいたりすると、あの子ったら
それはもう、心を寄せ、いえ、魂を預けて、
眠りながらもそれを歌ったわ。このお話は、
愛に激しく燃える人にはお馴染みの、
昔の愛のつまらぬ話。結末はこう。
乙女と乙女の誠の愛は、
男女の恋より強いはず。

457

サフォーク伯も横たわっています。サフォークが
一足先に死にました、満身創痕のヨーク公は
血の海にひたされているサフォーク伯のところへくると、
その顎髭をとって抱き起こし、顔面に大きく口を開けて
血を噴き出している傷口に口づけし、大声で叫びました、
「待ってくれ、サフォーク！おれの魂もいま
おまえの魂について天国へ行くところだ。だから
待ってくれ、親友ではないか、翼を並べていっしょに
飛んで行こう、この栄誉に輝く戦場で轡を並べて
ともに武人のほまれをまっとうする働きをしたように」

458

このおれの心が
自分で好き嫌いを判断し、人を見分けるようになってから、
きみこそ心の友と決めているのだ。きみという男は、
あらゆる苦勞に耐えながら、たえてそれを顔に出さない。
運命が罰をくだそうと褒美をくれようと、

ひとしく感謝の念をもって受け入れる。
理性と感情がほどよく調和していて、運命の女神の
思いのままの音色を出す笛にはならない。まったく
うらやましくなる。激情の奴隷ではない男、
そういう男がいたらおれはこの胸に、胸の底に、
堅く抱きしめるだろう。いや、いま抱きじめている。

459

ハムレット

この笛を吹いてくれぬか？

ギルデンスターン

私には吹けません。

ハムレット

頼む。

ギルデンスターン

ほんとうに吹けないのです。

ハムレット

頭をさげて頼んでいるのだ。

ギルデンスターン

まったくさわったこともありませんので。

ハムレット

なに、たやすいことだ、嘘をつくのと同様に。この孔を五本の指でこうおさえ、口で息を吹きこめばいい、それできれいな音が出てくる。いいか、この孔をおさえるのだ。

ギルデンスターン

しかし私にはいい音色を出す自信がありません、なにしろ心得がないのです。

ハムレット

なるほど、するところをおれをよほどばかにしているのだな！ おれなら吹き鳴らすことができる、おさえどころも心得ている、というのだろう。おれなら心の秘密の孔に指をあて、低い音も高い音も自由に吹きこなす自信がある、というのだろう。この小さな笛にも、妙なる音楽をかなでる力はある、それすら吹きこなせないくせに、なんだ！ このおれを一本の笛よりもあつかいやすいと思っているのだな？ おれをどんな楽器あつかいしようと勝手だが、甘く見てがきあつかいしてもそう簡単に甘い音色は出さないぞ。

460

アペマンタス

ここにいると聞いた。噂によると、

あんたはこのごろおれの流儀をまねしているようだな。

タイモン

とすれば、おまえが犬を飼っていないせいだ、

おれがまねしたくなるような犬を。おまえなんか

梅毒にとっつかれるがいい！

アペマンタス

そいつは病気にかかったやつの

たわごとだ、前途を失った身に起こるみじめな女々しい

憂鬱病にな。なぜ鋤を手にする？ こんなところで？

奴隷のようななりをして、浮かぬ顔をする？

あんたにごまをすった連中は、絹物を着て、酒を飲んで、

やわらかいベッドに寝て、病気もちの安香水の女を

抱いているぞ、タイモンなんて男がいたことなど忘れてな。

皮肉屋のまねをしてこの森を汚すのはよすがいい、

ごますりのおかげで落ちぶれたのだから、今度はあんたが

ごますりになって出世をはかるんだな。膝を折り曲げ、

ご機嫌をとりたい相手の鼻息で、あんたの帽子を
吹き飛ばさせるんだ。そいつのどんな悪い癖でもほめあげ、
すばらしいと言ってやるんだ。あんたもそう言われたろう、
そして、近づくものには悪党でもだれでも耳をかしたろう、
客ならだれでも喜んで迎える飲み屋の給仕人のように。
どん底まで落ちるがいいぜ、また財産をもってもどうせ
悪党どもの手に落ちるのがおちだ。おれのまねはよしな。

タイモン

おまえのまねをするぐらいならこの身を投げ捨てるだろう。

アペマンタス

もう投げ捨てているじゃないか、あんたにふさわしく
いままでは気ちがい、いまは阿呆になって。いいか、
騒々しいからっ風があんたの侍従役をつとめ、
あたたかいシャツを着せてくれるとでも思うのか？
鷲よりも長生きしている苔むした老木が小姓役をつとめ、
あんたの指図どおり使い走りに行くとも思うのか？
氷におおわれた小川の水が朝の熱い飲みものとなり、
二日酔いをなおしてくれるとも思うのか？　ためしに、
生まれたままの素裸で悪意に満ちた天の憎しみに
その身をさらしている生きものたち、着るものもなく、
住む家もなく、激しい風雨に耐えているけだものたちを
呼び寄せて、あんたにごまをするよう命じてみろ、

タイモン

おまえは、運命の女神のやさしい腕に抱かれて
かわいがられたことのない、犬同様に育った下郎だ。
おまえだって、おれたちのように、襁褓にくるまった
赤子のときから、この短い浮世が提供する楽しい階級を
次々にのぼって行き、ついには言いなりになる下郎どもを
顎で使う身分になっておれば、きっと底抜け騒ぎの酒に
耽溺していたろう、夜ごと相手の変わる情欲のベッドに
青春の身をもち崩していたろう、冷たい反省の教えには
耳もかさず、ひたすら目の前にある甘い遊びに
うつつを抜かしていたろう。ところがこのおれは――
そう、おれはこの世をおれの菓子屋だと思っていた、
人々の口も、舌も、目も、心も、おれに使われるべく
控えていたが、おれには使いきれぬほどだった、
やつらは、まるで柏の大木についている葉のように、
無数にこのおれにへばりついていて、それが冬の嵐に
一夜にして吹き散ってしまった、そのためにいまのおれは
いかなる嵐にもむき出しの身をさらされている――それは、
いい境遇しか知らぬおれには、かなりつらいことなのだ。
おまえははじめからつらい境遇に育った、苦勞にはもう
なれているだろう。そのおまえがなぜ人間を憎むのだ？
やつらはおまえにごまをすらなかった。おまえもやつらに
なに一つ与えなかった。おまえが悪態をつくとすれば、
その相手はおまえのおやじしかおらぬはずだ、なにしろ
あのおんぼろおやじはいやがる女乞食に詰めものをして、
おまえという二代目のろくでなしを作ったのだからな。
さあ、もう失せろ！最下等の人間に生まれなかったら、
おまえはきっと悪党のごますりになっていたろう。

他人の意見への気苦労は淵の底に投げ捨てたので、
私の両の耳はマムシの耳のようにすっかりふさがれ、
批判の声もへつらいの声もいっさい聞こえてきません。

462

およそ人間のなかで、
おのれの純潔を信じ、胸を張り、他を指さして、
こいつはごますりだ、と言いうるものがあるか？
一人がごますりならみんなそうだ、運命の階段はすべて、
その下の段によって、ごまをすられるのだ。学のある頭は
金のある阿呆にペコペコする、すべてはゆがんでいる、
この呪われた人間世界にまっすぐなものはなに一つない、
あるとすれば、単刀直入の悪だけだ。したがって、
あらゆる宴会、交際、人の集まりは、忌みきらうべきだ！

463

おまえたちに、
なにも知らぬおまえたちにとくと知らせてやりたいわい、
都会の商人どもの金に汚いやり口を。続けるもやめるも
ともにむずかしい宮廷の遊泳術を。てっぺんまで登れば
必ず落ち、落ちぬまでも滑りやすくて落ちると同様の
ひどい不安に明け暮れするそこでの生活を。あるいは
戦争の苦労を。名誉、名声の名のもとに、ひたすら
危険を捜し求める無駄なほねおりを。捜し求めるうちに
死んでしまえば、勇士の名が残るか悪名を負わされるか
わかったものではない、いや、たいていの場合は
りっぱな働きをして悪く言われる、さらに悪いことには
その悪口を甘んじて受けねばならぬのだ。ああ、息子たち、
その実例がこのおれだ、おれのからだにはいたるところに
ローマ人の剣による傷跡がある、おれの名声もかつては
名のあるもののなかでも第一位だった。シンベリンの寵愛を
一身に浴びて、話題が勇士のこととなれば必ず
おれの名前が引き合いに出されたものだ。そのころのおれは
枝もたわわに実をつけた木であった、ところがある夜、
嵐が、あるいは盗賊が、どう呼んでもかまわぬが、
おれの熟した実を、いや、茂った葉までも揺り落とし、
丸裸にしてしまった。

464

忠実なしもべさ、ご主人にもご婦人にも誇りをもって仕えたもんだ。髪をちぢらせ、愛のし
るしの手袋を帽子に飾り、奥方様のご要望にこたえて内緒のお勤めまでしたもんだ。口から
出まかせに誓いを立て、おてんとう様の見ている前でそいつを破ったもんだ。寝ては女をも
のにする手だてを考え、起きてはそいつを実行した男よ。酒は溺れるほど好き、博打はふと
ころがうづくほど好き、女はトルコの王様もおそれいったと言うほど好きな男よ。心はすぐ
向きを変え、耳はすぐ悪事に乗り、手はすぐ血にひたす、怠情にかけては豚、狡猾にかけて
は狐、貪欲にかけては狼、狂暴にかけては犬、獰猛にかけては獅子って男よ。靴のきしみや
絹ずれについだまされて、あわれな心を女に捧げるんじゃないよ。女郎屋に足を踏み入れた
り、ペチコート割れ目に手を差し入れたり、高利貸しの帳簿に署名したりするんじゃない
よ。悪魔めに負けないようにしなよ。

465

ハムレット

それに、おれだって一国の王子だ。スポンジに命令されて簡単に返事ができると思うか？

ローゼンクランツ

この私がスポンジだとおっしゃるのですか、殿下？

ハムレット

そうとも、国王の寵愛、恩賞、権力、なんでも吸いとるスポンジだ。だがそういう部下が結局は国王にとっていちばん役に立つのかもしれないな。猿が栗の実をほおばるように、口のすみにふくんでおいて、好きなときに呑みこめばいいのだから。きみたちの吸い取ったものが必要になれば、きみたちをギュッと絞ればいい、そうすれば、スポンジだもの、きみたちはもとどおりからからにひからびるわけだ。

466

まったく、鳩が豆を拾うように洒落を集めては折を見てそいつを吐き出すやつですよ、あの男は。つまり洒落の行商人です、人が集まるところならどこでも、村祭りでも、宴会でも、集会でも、市場でも、縁日でも、出かけて行って洒落を小売りするのです。われわれ卸し商にはありませんな、あのように商品を上品に飾って見せる才能は。ああいう男は女にもててもててしょうがないでしょう、やつがアダムなら自分からイブを誘惑したでしょう。態度もキザならことばもキザ、なにしろお辞儀をしながら自分の手にキスするので手がすりへったって男ですから。言ってみれば礼儀作法のものまね猿、ロやかましい先生で、双六遊びをするにも骰子にむかいお上品なことばでどなりつけるというおかたです。歌を歌わせれば低脳的なテノールで歌うし、案内役をさせればあんなにいい案内役はいない。ご婦人はいい男とおっしゃる、階段さえあの男に踏まれるたびにその足にキスをする。だれにでも愛想笑いをむけ、鯨の骨のように白い歯を見せてくださる、というのだからおもしろい。律気な人は、黙っていると義理を欠くような気がするので、敬意を表するのです、お口の上手なボイエットさん、と呼んで。

467

あのとき、あの犬めは尻尾を振って、このおれになんとお世辞たっぷりの愛嬌をふりまいたことか！

468

そのニヤニヤした顔ったら、チーズなんてもんじゃないわ、最近出た地図みたいに縦横クチャクチャに線が入って皺クチャ。あんな顔にお目にかかったことないわ。なにかぶつけてやろうかと思ったけどやっとながまんしたの。

469

あんたはね、アントーニオ、これまで何度となく取引所でおれに悪態をつきなすったものだ、おれが金を貸し、利息をとるのはけしからんとな。おれはいつも肩をすくめてじっとがまんしてきた、忍耐ってのはおれたちユダヤ人の勲章なんでね。あんたはおれのことを異端者だの人食い犬だのと呼び、このユダヤ人の上着に唾を吐きかける、それもただおれがおれの金を好きに使うからというだけのことで。そのあんたにおれの助けが必要となったらしい、あきれるじゃないか、おれのところにきて言うには、

「シャイロック、金を貸してくれ」と、こうだからな。
このおれの髭に唾を吐きつけたあんたがだぜ、
まるで玄関先から野良犬を蹴っとぼすように
おれを足蹴にしたあんたが、金を用立てろ、だ。
どうぞ返事したものかね？ こういうのはどうだろう、
「犬に金がありますか？野良犬に三千ダカット
貸すことができますか？」ってのは？それとも
腰を低くかがめ、奴隷のようにびくびくしながら、
息を殺し、蚊の鳴くような声で、恐る恐る
こう申しあげるのは――
「旦那様はこないだの水曜に唾を吐きかけてくださり、
いつだったかは足蹴にかけてくださいました、また
犬と呼んでくださったこともございます、そのお礼に
しかじかの金額必ずご用立てしましょう」ってのは？

470

ただ、覚えているのは、やっと戦いが終わり、
悪戦苦闘のために喉は引つつる、息は切れるで、
ぐったりと剣を杖に身をささえているところへ、
一人の貴族が現われたことです。こいつときたら、
にやけて、めかし立てて、まるで花婿、その顎は
髭を刈りこんで刈り入れあとの切り株だらけの畑のよう、
化粧品屋みたいに香水の匂いをプンプンさせ、
その上、人さし指と親指の先で香料箱をつまみ、
そいつをひっきりなしに鼻先に押しついたり、
離したり、これには鼻のほうも腹を立てたと見え、
しまいにはフンとばかり鼻先であしらう始末、
そうしてニヤニヤしながらしゃべり続けていました。
そこへ兵士たちが遺体をついで通りかかると、
無作法にもどなりつけ、この無礼な下郎どもめ、
見苦しい不浄の死体をはこぶのに、貴族たるおれの
風上を通るとはなにごとか、とこうですからね。
それなのに私に話しかけるときは、よそゆきの
奥様ことばなんか使ったりするんです。そうして、
いろいろな話をしたついでに、捕虜を陛下に引き渡せ、
と言いました。ところが私は傷が冷えてズキズキ痛む、
その上オウム野郎にジリジリ悩まされるで、とうとう
苦痛といらだたしさから、ついいいかげんな返事を
してしまったようなわけです、引き渡すと言ったか、
引き渡さぬと言ったかさえ、覚えてはおりません。
なにしろその男ときたら、けばけばしく飾り立て、
香水を匂わせ、奥女中のような口調で大砲や軍鼓や
手傷の話をするんですからね――頭にくる！――
たとえば、撲身の傷には鯨の脳味噌からとった
鯨蠟にまさる妙薬はありませんですなあ、とか、
悲しいかな硝石などというけしからんしろものが
罪のない大地の底から掘り出されたばかりに、
あたら多くの勇敢な将兵が卑怯な飛道具によって
いのちを落としたわけですなあ、とか、私とても
卑劣な大砲さえなければ軍人になってましたよ、とか、

471

おまえもな、ベンヴォーリオ、たとえばこういう連中の仲間じゃないか、酒屋の敷居をまたぐなり、テーブルの上に剣を投げ出し、「きさまなんぞおれには無用」と言いながら、二杯目の酔いが回るところには、それこそ無用なことながら、栓を抜く給仕相手に剣を抜く。相手がハシバミの実を割ったという、もう喧嘩だ。おまえの目がハシバミ色をしているという理由でだ。だいたいそんな目でなけりゃあ、目の色変えて喧嘩の種をみつけ出したりするものか。おまえの頭のなかは卵の殻の中身よろしく、喧嘩がいっぱいつまっている。しかもおまえの頭は喧嘩のたびにたたかれて、古卵よろしく腐ってらあ。通りで咳をした男がいると、もう喧嘩だ。ひなたで寝ていた犬の目をさましたという理由でだ。仕立屋がいると、もう喧嘩だ。復活祭の前だというのに新調の上着を着ていやがるという理由でだ。まだある。新調の靴に古い紐をつけていやがるという理由でだ。そのおまえがおれに、喧嘩するなとご意見かい。

472

こんな正直のかけらも身につけていない下郎が
剣を身につけているからです。こういうにやつき野郎は、
ネズミのように、神に結ばれた解くに解けない人間の絆を
噛み切ってしまいます。ご主人様のからだのなかに
むらむらと激情がこみあげると甘い言葉でたきつけ、
火には油を注ぎ、氷には雪をぶっかけます。
いいも悪いもご主人様の風向き次第、屋根の上の
風見鶏よろしく、くるくる自由に向きを変えます。
飼い犬よろしく、わけもわからずついていくだけです。

473

こちらが誘えば猫にミルクだ、すぐのってきます、

474

おまえはな、悪党さ、ごろつきさ、残飯あさりの乞食野郎さ、卑しい、高慢ちきな、薄っぺらな、汚らしい、年三枚のお仕着せもらいの、年収百ポンドの最低紳士の、いやらしい、毛糸の靴下野郎さ、肝っ玉は小娘同様の、喧嘩をこわがって訴訟に頼るいくじなし野郎さ、父なし子の、鏡ばかりのぞくみえっぱりの、おせっかいの、にやけ野郎さ、カバン一つが財産の下司野郎さ、ご主人のためとあらば喜んで女をとりもつ女衞野郎さ、要するに悪党と乞食と臆病者と女衞と淫売の倅とをこねて丸めた野郎さ、いま言った肩書きを一つでも否定するならぶんなぐってひいひい言わせたくなる野郎さ。

475

なにを、この蛇足野郎！蛇足の爪の垢野郎！

476

役に立たねえもつれ系の、なまっ白い眼帯の裏地の、放蕩ものの財布の紐野郎め？ああ、まったく情けねえ世のなかになったものだ、蚊トンボの未熟児みてえな連中がうじょうじょしていやがる。

477

こういうやつがいるのだ、
一度ぶっくらぼうなもの言いをほめられたため、
わざと無礼、粗暴な態度をとり、本性をゆがめてまで
格好をつけるようになる。おせじは言えません、
正直率直を旨とし、つねに真実を語りますってわけだ。
認められればそれでよし、認められなくても
正直者で通る。おれは知っているぞ、こういう悪党は、
正直を売り物にしながら、露骨な言葉に陰険狡猾な

意図をかくしている。お役目だいじにペコペコ追従する
愚かなガチョウどもよりはるかに油断のならないやつだ。

478

おれが家来になっているのはやつをうまく利用するためだ。
人間だれでも主人になるわけにはいかんし、主人はだれでも
忠実な家来をもつわけにはいかん。そりゃあたしかに
忠義一途にペコペコするやつはいくらでもいるだろう、
卑しい奴隷の境遇をありがたくおしいただき、
ロバ同然に主人のために一生働きどおし、その上
飼い葉をあてがわれるのが関の山、老いぼれたあげくはクビだ。
そんなばか正直な野郎はくそくらえだ。だがな、
そうでないやつもいるぞ。見かけはりっぱな忠義面、
腹んなかではひたすらわが身を大切にしている、
ご主人様には忠勤ぶりをごらんに入れて、かげでこっそり
うまい汁をすする、たっぶりすすって私腹をこやし、
あとはわが身が第一だ。こういうやつには根性がある、
かく言うおれもその一人さ...

479

だがよく聞く話ではないか、
謙遜というものは、若々しい野心が足をかける
梯子であり、高きに登らんとするものはまずこれに
顔を向ける、だが一度そのてっぺんに登れば、
たちまち梯子には背を向け、今度はさらに高い
雲を望み、いままで登ってきた足もとの階段には
軽蔑の目を向けるという。

480

いいな、クロムウェル、おれの命令だ、野心は捨てろ、
天使さえその罪で墮落した、とすればどうして人間が、
神の姿になぞらえられたものが、それで成功を望めよう？
自分を愛するのは最後にし、自分を憎む人々を大事にしろ。
不正墮落より清廉潔白のほうが結局は成功の早道だ。
つねに右手にはおだやかな平和をたずさえろ、そうすれば
悪意の舌も沈黙するだろう。正義を守り、恐れを抱くな。
すべてを国のため、神のため、真実のために捧げるよう
心がけろ、それでもし倒れるとすれば、クロムウェル、
おまえは殉教者として倒れるのだ。
ああ、クロムウェル、クロムウェル、
おれが王に仕えた半分ほどの熱意をもって天にまします
神にお仕えしていたら、神もこの年になったおれを
素裸で敵のなかにほうり出されたりはしなかったろう。

481

天使の長が地獄に墮ちようと天使たちは天に輝く

482

キャサリン

あの男ははてしない貪欲の人だった、つねにわが身を
王侯たちと同列におこうとした、ひそかな策謀によって
全王国をおのれに隷属させた、聖職者の地位買収などは

公正な手段だった、おのれの意見がすなわち法律だった、
王の前でも平気で嘘をつき、ことばづかいもその意味も
つねに表裏のある男だった。人をあわれむことはなく、
あるとすれば、その人を破滅させようとするときだった。
口約束は、かつてのあの男のように、強大だったけれど、
その実行は、いまのあの男のように、無にひとしかった。
身のおこないは邪悪を極め、聖職者たちに
邪悪な手本を示した。

グリフィス

奥方様、人の犯した悪事は
真鍮に刻まれて永く残り、善行は水に記されて
たちまち消えると言います。あの人の善行を
お聞きいただけないでしょうか？

キャサリン

いいわ、グリフィス、
私も悪意はもたない女だから。

グリフィス

あの枢機卿ウルジーは、
卑しい家柄の出ではありましたが、疑いもなく
栄誉ある地位につくべく生まれついた人でした。
幼いころより学問を身につけ、りっぱな学者となり、
知能は抜群、弁舌はさわやかに、よく人を説得しました。
自分を愛さぬものには傲慢に冷たくあたりましたが、
自分を慕うものには初夏の日のように暖かく接しました。
ものを手に入れるには飽くことを知らず、それはたしかに
罪と言えますが、ものを人に与えるとなると、まさに
王侯さながらでした。その永遠の証人となるのが、
あの人によってイプスウィッチとオクスフォードの
二か所に創設された学問の府です、一方は創立者とともに
倒れました、恩人よりも長生きしたくなかったのでしょうか、
だがもう一方は、未完成ながら、すでに世に名高く、
学術の高峰と仰がれ、日に日に隆盛の勢いにあるので、
全キリスト教国は永くあの人の功績をたたえるでしょう。
あの人の失脚も、あの人にとってはしあわせでした、
というのは、そのときはじめて自分というものがわかり、
小さな存在にすぎぬ身のありがたさを知ったのですから。
また、その老後には人間の与える以上の栄誉を得て、
つまり神を恐れる心を得て、死んでいったのですから。

483

あの男は本を
読みすぎる、ものを見る目も鋭い、人の行為を
奥底まで見抜く。あの男は芝居を好まない、
おまえとちがってな、アントニー。音楽も聞かない。
めったに笑いもしない、たまに笑いを見せるときも、
まるでおのれを嘲るような、そしてつい笑いを見せた
おのれの心を蔑むような、そういう笑いかただ。
ああいう男は、おのれよりも偉大な人物を見ると、
きまって心がおだやかではなくなってくる、
だからああいう連中は非常に危険なのだ。

484

やつめ、おれに恥をかかせた、おれのもうけを五十万ダカットは邪魔した、おれが損をすりゃあ嘲笑った、おれが得をすりゃあばかにした、おれの民族を蔑んだ、おれの商売をだめにした、おれの友だちには水をさした、おれの敵には火をたきつけた、いったいなんのためだ、やつがそうするのは？おれがユダヤ人だからだ。ユダヤ人をなんだと思ってやがる？ユダヤ人には目がないか？手がないか？五臓六腑が、四肢五体が、感覚、感情、情熱がないとでも言うのか？キリスト教徒とどこがちがう、同じ食いものを食い、同じ刃物で傷つき、同じ病気にかかり、同じ薬でなおり、同じ冬の寒さ、夏の暑さを感じたりしないとでも言うのか？針を刺しても血が出ない、くすぐっても笑わない、毒を飲ましても死なないとでも言うのか？だからおれたちは、ひどいめに会わされても復讐しちゃうかんとも言うのか？だが、ほかのことがあんならと同じなら、この点だって同じだろうぜ。かりにユダヤ人がキリスト教徒をひどいめに会わせたとする、それにたいする忍従の道とはなんだ？復讐だ。とすりゃあ、もしもキリスト教徒がユダヤ人をひどいめに会わせたなら、それにたいする忍従の道とは、キリスト教徒のお手本に従えば、なんだ？もちろん、復讐だ。この道ならぬ道をあんならがせっかく教えてくれたんだ、おれもそのとおりやってみせてやる、いや、教えられた以上にりっぱにやってみせてやらなきゃ、腹の虫がおさまらん。

485

たしかにことばを教えてくれたな、おかげで
悪口の言いかたは覚えたぜ。

486

尼寺へ行くがいい。罪深い子の母となったところでなんになる？ おれはこれで、けっこうまともな男のつもりだ。それでもなお、わが身のもつ罪惡をいくらかでも数えられる。母よなぜおれを生んだ、と恨みたくなるほどだ。おれは傲慢だ、執念深い、野心も強い、その気になればどんな罪でもおかすだろう。それをいちいち、考えにまとめる頭も、形に描く想像力も、実行に移す時間もないぐらいだ。このおれのような連中が天地のあいだを這いずりまわって、いったいどんなことをする？

487

次にリーガンを解剖させてくれ。心臓のまわりになにかがあるか見たいのだ。このような冷酷な心臓を作りなす原因が、自然のままのからだのなかにあるのではないか。

488

「なぜ、まだ咲きやらぬ花の蕾に毛虫がはいりこむのか。
また、雀の巣のなかで忌わしい郭公鳥が孵るのか。
蟾蜍が毒の泥で清い泉を濁らせるのか。
高貴な人の胸のなかに暴虐の欲情がひそむのか。
王侯みずからおのれの定めた掟を破るのか。
でも、世の中には完全無欠なものなどありはしない。
なにかの穢れが汚さずにはおかぬ。

489

大自然よ、おまえこそおれの女神、
おまえの掟こそおれの服する義務だ。なぜおれは
忌まわしい習慣に縛られ、口さがない世間の思惑に
相続権を奪われ、黙っていなければならんのだ？
たかが一年かそこら兄貴より遅れて生まれたという、
それだけのことで？なぜ私生児だ、不正の子だ？
おれだって、見ろ、五体満足だ、精神健全だ、
容姿端麗だ、正当な奥方が生んだご子息と
どこがちがう？なぜおれたちに烙印を押すんだ、
やれ私生児の、不正の子の、不正の私生児のと？

私生児は自然の本能が人目を忍んで燃えあがるとき
作られるんだ、体力も気力も人一倍充実してるぞ。
気がのらない味気ないあきあきしたベッドで
夢うつつのあいだに生みつけられたそんじょそこの
ばかものどもとはできがちがう。

490

われらをおおっていた不満の冬もようやく去り、
ヨーク家の太陽エドワードによって栄光の夏がきた。
わが一族の上に不機嫌な顔を見せていた暗雲も、
いまは大海の底深く飲みこまれたか影さえない。
われらの頭上には勝利の花輪が誇らしげに飾られ、
傷だらけの武具は記念の品として壁に掛けられている。
けたたましい軍鼓の響きはさんざめく宴の声に、
重苦しい進軍の足どりは軽やかな踊りにと変わった。
戦の神も、そのきびしい顔をなごやかにほころばせ、
つい昨日までは武装した軍馬にうちまたがって
恐れおののく敵兵どもの心胆を寒からしめていたのに、
いまはどうだ、ご婦人の部屋に入りびたって、
みだらなリュートの音に合わせて踊り騒いでいる。
だがおれは、生まれながら色恋遊びには向いておらず、
鏡を見てうっとりするようなできぐあいでもない。
このおれは、生まれながらひねくれて、気どって歩く
浮気な美人の前をもったいつけて通る柄でもない。
このおれは、生まれながら五体の美しい均整を奪われ、
ペテン師の自然にだまされて寸詰まりのからだにされ、
醜くゆがみ、できそこないのまま、未熟児として、
生き生きと活動するこの世に送り出されたのだ。
このおれが、不格好にびっこを引き引き
そばを通るのを見かければ、犬も吠えかかる。
そういうおれだ、のどかな笛の音に酔いしれる
この頼りない平和な時世に、どんな楽しみがある。
日向ぼっこをしながら、おのれの影法師相手に
その不様な姿を即興の歌にして口ずさむしかあるまい。
おれは色男となって、美辞麗句がもてはやされる
この世のなかを楽しく泳ぎまわることなどできはせぬ、
となれば、心を決めたぞ、おれは悪党となって、
この世のなかのむなしい楽しみを憎んでやる。

491

鏡を買うまでせいぜい輝いてくれよ、美しい太陽、
歩きながらおれの影法師を拝むことができるよう。

492

そうだ、思い出した、あの薬屋——
このあたりに住んでいるはず——先日も
ボロをまとい、たれさがる眉の下から
薬草を見分けていた。頬はやせこけ、
貧苦に身をすりへらして残るは骨だけ。
みすばらしい店先には亀の甲羅、
剥製のワニ、異様な形の魚の皮などが
ぶらさがり、店の中の棚の上には

わずかばかりの空き箱、緑色の壺、
貯蔵用の袋、そのなかの黴びた種、
荷造り縄の使い残り、薔薇を固めた香料などが
ちらばり、それで店らしい形をととのえていた。
その貧しいさまを見て、おれは思ったものだ、
「もし毒を手に入れる必要のある男が来たら、
マンチュアでは毒を売れば即座に死刑というが、
この貧乏な薬屋ならきっと売るだろう」と。

493

実はあるいかさま師から毒薬を手に入れてあります、
それをひたしたナイフで少しでも血を出せば、
もう助からぬほどの猛毒、月夜に集めた
どんなききめの強い薬草をもってしても、
ほんのかすり傷を負うたもののいのちさえ
救うことはできません。これを私の剣の
切先に塗っておきます、一筋の傷でも
あの男に死をもたらしましょう。

494

おお、草、樹、石などがその本性に秘める
褒めるべき功德のなんと偉大なことか。
どんな害あるものも、この世にあれば
この世になんらかの益を与えるもの、
どんな善なるものも正しい用法に悖れば
もとの本性をすてて思わぬ悪をなすもの、
美德そのものが悪徳に転ずるも用法次第、
行動次第で悪徳もまた栄誉をうる。
このひとくきの小さな花のやわらかな外皮に、
害毒もひそめば薬効もつつまれている。
匂いをかげばかいだ鼻から五体まで爽快にし、
口蓋にふくめば心臓から五感まで麻痺させる。
このように二人の王がいがみあう戦は
草のみならず人間にもある、美德と背徳だ。
悪心が勝ちをおさめるところ死という害虫が
躊躇することなくその花をむしばみつくす。

495

おまえの身には一種の符丁がついており、
それを見ればおまえがどういう生きかたをしてきたか
すぐにわかる。おまえの美德はおまえのものだが、
おまえをその美德のみに、また美德をおまえのみに、
浪費していいほどおまえのものとは言えぬぞ。
天は人間が松明を用いるように人間を用いられる、
松明が照らすのはおのれ自身のためではない、
同様に人間の美德もおのれのうちにのみとどまれば、
なきにひとしい。人間の心が美しく造られているのは
美しい行為を生むためにほかならず、自然がその
すぐれた力をいささかでも人間に貸したとすれば、
計算高い女神にふさわしく、債権者として
感謝のみでなく利息までもとりたてようとの
魂胆なのだ。

496

人を傷つける力はあるながら傷つけようとしない人たち、
いかにもやりそうに見えながら実際にはやらない人たち、
ほかの人の心を動かしながら本人は巖のように
動かず、冷たく、誘惑にのろうとしない人たち、
そういう人たちこそ天上の美を受け継ぎ、
自然の富を浪費せず維持し続けるもの、
そういう人たちこそ自分の美貌を所有する主人、
ほかのものは自分の美点の召使いにすぎぬ。
夏の花はたとえ種を残さずおのれひとり
生きて死ぬにしても、夏には美しい姿を見せる、
だがもしその花が卑しい疫病にとりつかれると
どんなに卑しい雑草にも劣る惨めな姿をさらす。
どんなに美しいものも卑しい行為で醜くなり、
白百合も腐れば雑草よりいやな臭いを放つ。

497

蝮が這い出るのはきまってうららかな日だ、

498

アキリーズ

なにをお読みか？

ユリシーズ

妙な話だ、

こう書いてある——人は他人による反射作用によらざれば、
いかにゆたかに身の内外に才能を所有しようとも、
おのれのものとして誇ることも感ずることもあたわず。
たとえばある人の美德は、他人の上に輝き、
彼らを熱するにおよんではじめて、彼らがその熱を
ふたたびその人に送り返すがごとし。

アキリーズ

それは別に妙な話ではあるまい、ユリシーズ。
美貌の持ち主にしたところで本人はそれと
知るよしもない。他人の目に写ってようやく
美しいとわかるのだ。感覚の精髓とも言うべき
われわれの目にしたところで、おのれを離れねば
おのれを見ることはできぬ。他人の目に出会って
ようやくおたがいの姿を認めることができる。
つまり視力はおのれ自身にむかうわけにはいかぬ、
外に旅立って、おのれ自身を見うる所に居を定め、
はじめておのれの姿がわかる。いささかも妙ではない。

ユリシーズ

私もその点は難解だとは思わない。
ごく当然のことだから。問題はこの著者の論旨だ。
彼は綿密な論証をかさねて明確に結論している、
いかに天分に恵まれ、天分を発揮しうるものでも、
人はその天分を他人にあきらかに示さぬかぎり、
なにものも所有せざると同然と言うべきなり。
また、その天分を示して世人の喝采を受け、
そこに具体的な形を見るにいたらざるかぎり、
おのれの天分を知らずと言うべきなり。世人の喝采は

丸天井のごとくその声を反響させもすれば、
太陽に向かい立つ鉄の扉のごとくその姿および
その熱を受け、また反射するものなればなり。

499

たしかに偉大な人物も、いったん運命にそむかれると
人間にもそむかれる。落ちめになったと悟るのは、
自分で落ちたなと感ずるより早く、他人の目が
それと教えてくれるのだ。人間は所詮蝶と変わらぬ、
はなやかな羽根を見せるのも短い夏のあいだだけだ。
人間は人間としての価値で尊敬されるのではない、
地位とか財産とか目上のものの寵愛とかいった
外側につけられた価値で尊敬を勝ちえるのだ。
これは本人の功績によるだけでなく偶然手に入る
ものでもある、足もとがあぶないのだ。だから
これが崩れると、これによりかかる世間の尊敬も
同様に足もとのあぶないしろものだ、ともに崩れる。

500

新しい栄誉は
新しい衣服と同じだ、着なれるまではなかなか
身につかぬものだ。

501

アキリーズ
おれの名誉にかかわる問題だ。おれの名が手ひどい傷を受けそうだ。
パトロクラス
だからご用心なさい。
自分でこさえた傷はなかなかおらないもの。
しなければならぬことをしていないのは、
非人情な危険に好きにしろと委任状を渡すことです。
危険はおこりの発作のようにおそいかかりますよ、
のんびりひなたぼっこしているときでさえも。

502

名誉、名誉、名誉！ああ、おれは名誉をなくしてしまった、いのちより大切なものをなくしてしまった、ここにいるのは畜生同然の残骸だ。

503

名誉というものは、将軍、男女を問わず、
魂にとって一番の宝であることは言うまでもありますまい。
財布なら盗まれてもいい、大金であつてもたいしたことはない、
自分のものがそいつのものになるだけの話です。どうせ金は
天下の廻りものですからな。ところが名誉となると、
盗んだやつにはなんの得にもならないのに、
盗まれるほうは大損です。

504

あんな小さな燈火がこんな遠くまで光を放つとは、
きっとあのようにいい行為は悪い世のなかを照らすのね。

505

人間の一生は、善と悪とをより合わせた糸で編んだ網なのだ。われわれの美点は欠点によって鞭打たれることがなければ高慢になるだろうし、われわれの罪悪は美德によって慰められることがなければ絶望するだろう。

506

気がかりなのは

そのご気性、あまりにも人情という甘い乳が多すぎて
近道を選べないのでは。あなたは偉大な地位を求める
野心はおもちだけど、それにともなうはずの
悪心はおもちにならない。手に入れたいと望みながら
手を汚すことは望まない。あやまちを犯したくないが
あやまたずかちとりたい。

507

冷淡な態度を見せたり、
彼の意志を無視したりして、せっかくの彼の愛情を鈍らせ、
おまえにたいする好意を失わせるようなまねだけはするな。
彼も、こちらが大事にしてやれば、心やさしい男なのだ、
あわれみのために流す涙ももっておれば、慈悲のためには
太陽のようにもの惜しみしない手ももっておる。ただ、
ひとたび腹を立てれば、火打ち石のように頑なになり、
冬空のように気まぐれになり、夜明けに吹きすさぶ
氷雨まじりの烈風のように激しさを見せることになる。
だから彼の気性には十分注意して大事にしてやることだ、
そのあやまちをとがめるには、彼の気分が明るく
陽気なときを選んで、丁重なことばで言うがいい、
だが機嫌が悪いときは、しばらく自由気ままにさせておき、
陸にあがった鯨がもがいて疲れはてるように、彼の激情が
自然におさまるのを待つのだ。

508

王の顔色を見ろ、赤くなったり青くなったり、
ご自分の希望と良心のあいだを行き来しているのだ、
まるで恐ろしい二つの軍勢のあいだの伝令使のように。
あれほど腫れあがった王の激情は、いまに破れるだろう。

509

いまだ

手ばなさずにいて、その罪が許されようか？
腐敗しきったこの世では、罪に汚れた手も
黄金で裏打ちされれば正義を曲げる力をうるし、
不正な手段で手に入れた財宝も法律を買収する
役に立つ例さえよく見られる。だが天にあっては
そうはいかぬ。ごまかしはきかないのだ。犯した行為は
あるがままの姿であらわれ、われわれは
いやおうなくその罪の面前に引き出され、
証言を迫られる。ではどうすればいい？ どうすれば？
悔い改めれば、そう、悔い改めればすべては許される。
だがもし悔い改めることができぬとすれば？
ああ、みじめな！ 死のように黒いこの胸のうち！
鳥もちにかかった小鳥同様、もがけばもがくほど
自由が失われる！力をかしたまえ、天使たち！

やってみるぞ。曲げるのだ、固い膝を。鋼鉄の心も
生まれたての赤児のようにやわらかになってくれ！
それができれば望みもある。

510

どうしたのだ、これは？
あの女のせいかな、おれのせいかな？ 誘惑するものと
されるものと、どちらの罪が重い？ ああ！
あの女ではない、あの女が誘惑したのではない、
おれなのだ、董のそばに横たわる死骸のように、
日の光に花は咲き誇るがおれは貞淑な輝きに
腐っていくのだ。女の淫らさよりも淑やかさに
情欲をそそられることがありうるのだろうか？
荒地にはこと欠かぬのに、わざわざ聖域を
とりこわしてまで、悪事を犯す場所を作る必要が
どこにある！ああ、ばかな、ばかな！
おまえはなんだ、なにをするのだ、アンジェロ？
あの女の清らかさのために、あの女を汚そうと
劣情を抱くのか？あの兄を生かしておこう、
裁判官が盗みを働くならば、盗っ人にも当然
盗む権利があるはずだ。ああ、おれはあの女を
愛しているのか、もう一度あの声を聞きたいと思い、
あの目を見たいと願うのは？なんの夢だ、これは？
こざかしい悪魔め、聖者を釣りあげるために
聖者を餌にしたな！貞淑を愛する心につけこみ
罪に誘う、そういう誘惑ほど危険なものはない。
淫らな女であれば、もって生まれた肢体に
化粧の美しさを加えて迫ってきても、おれの心は
一度も動かされなかった。だがあの貞淑な乙女には、
すっかり心をとりにこにされた。たったいままで
色に溺れる男をばかにして笑ったおれだったのに。

511

性格！そいつは不正確だぜ！人間、これこれの性格でございましてと言ったって、おのれ次第
でどうにでもなるものさ。この五体が庭だとすれば、その庭師はおのれの意志だ。だからそ
こにイラクサを植えようとチサの種を蒔こうと、ハッカを生やそうとジャコウ草を引っこ抜
こうと、一種類だけ植えようと何種類でも蒔きちらそうと、ほったらかして荒れ放題にしよ
うとせっせとこやしをやって育てようと——いいか、それを好きなようにやる力はおれたち
の意志にあるんだ。人間を秤にたとえれば、理性の皿と本能の皿がうまく釣りあいをとって
いる、でなければいやしい情欲にのぼせてとんでもない結果を招くのがおちだ。さいわいお
れたちには理性があって、たけり狂う色欲も肉のうずきもいきり立つ情欲もさましてくれ
る。おまえが愛と呼ぶのも、そういった欲望の木の枝に顔を出した新芽のようなものと思う
がね。

512

人間ってやつ、ばかばかしさもこうなると天下一品だな、運が悪くなると、たいていはおの
れが招いたわざわいだというのに、それを太陽や月や星のせいにしやがる。まるで悪党にな
るのは運命の必然、阿呆になるのは天体の強制、ごろつき、泥棒、裏切り者になるのは星座
の支配、飲んだくれ、嘘つき、間男になるのは惑星の影響、って言うようなもんだ。人間の
犯す悪事はすべて天の力によるってわけだ、女ったらしにはもってこいの口実だぜ、おのれ
の助平根性を星のせいにできるんだからな。おれのおやじがおふくろを抱いたのは龍座の尻
尾の下、おれが生まれたのは大熊座の下、したがっておれは乱暴者の女ったらしってことに

なる。チェッ、ばかな、おれはいまのままのおれだったろうぜ、たとえこの私生児ご誕生のとき天上のもっとも貞淑な星が輝いていたとしてもな。

513

私たちが望む美味は、おのれのものとしたその瞬間に、忌わしくも饅えた味になってしまう。

514

われらの意志と運命とはさからいあって進み、われらの意図するところはくつがえされるがつね、思いはわれらのものなれど結果はわれらのものならず。

515

だがわれわれはする気のないことを思わずしてしまうことがある。自分にたいして悪魔になり、自分の弱い心を誘惑することがある、心の変わりやすさをつい忘れてしまうのだ。

516

愛の焰のなかには一種の燈芯のようなものがあって、それがやがて火勢を衰えさせもする。なにごとも最善の状態を永久に維持することはできぬ。

517

だが人間、不行跡にとつぷり首までつかると——なさけないかな——賢明な神々がこの臉を縫いつけ、澄んだ分別をおのれの濁った汚物のなかにほうりこみ、われとわがあやまちを賛美させる、そして人間が意気揚々と破滅におかう姿を笑って見ているのだ。

518

神々は正しく裁かれる、人間が不義の快樂にふければそれを道具として罰をくだされる。

519

神々の手にある人間は腕白どもの手にある虫だ、気まぐれゆえに殺されるのだ。

520

星のせいだ、天の星がわれわれ人間の性質を支配するのだ。でなければ同じ夫婦から生まれた子供たちが、これほどまでちがうはずがない。

521

私たちは、人間を救う力は天のみにあると思いこんでいる、でも、その力が私たち自身のうちにあることもよくある。天も私たちに自由に動く余地を与えている、だから思ったとおりことがはこばないのは私たちの怠慢から。

522

だから、ブルータス、おれたちが人の風下に立つのは

運勢の星が悪いのではない、罪はおれたち自身にある。

523

哲学なんかくそくらえだ！

哲学でジュリエットが作れますか、町全体を
ひっくり返せますか、大公の宣告を取り消せますか？
哲学など無用無益、もうお話はやめてください。

524

ああ、凍てつくコーカサスの山々を思い浮かべれば、
火を手づかみにすることができましようか？
頭のなかで山海の珍味を想像してみるだけで、
えぐるような飢えの切っ先をしのべるでしょうか？
あるいは、夏の暑さを思い出せば、素っ裸で
十二月の雪のなかをころがれるものでしょうか？
とんでもない！よいことを思い描けばますます
いまの悪さが身にしみて感じられるものです。
残忍な悲しみの歯が腫れ物を噛み切ってくれればまだいい、
なまじっかな噛みかたをされるときもっとも苦痛は激しい。

525

どんなにありがたい哲学を説くものでも
歯の痛みをじっと辛抱できはしなかったはずだ、
たとえ神聖な文句を堂々と書きつらね、
不運や災難をばかにしていたものでもな。

526

クローディオ

みじめなものの心を癒す薬はただ一つ、
望みだけです。

私は生きる望みをもちつつ、死ぬ覚悟をしております。

公爵

死ぬ決意をなさることだ、生きようと死のうと
それだけ気が楽になる。人生にこうお言いなさい。
たとえおまえを失うとしても、愚かものだけが
失いたがらぬものを失うにすぎぬ。おまえは
一息の呼吸だ、空をめぐる星の影響を受け、
おまえの住処である肉体をたえず苦しめておるのだ。
おまえは死神にもてあそばれる道化以外の
なにものでもない、死を避けようと逃げまわっても
結局は死に向かってひた走るのだ。おまえには
気高さはない、おまえに必要な便宜はすべて
卑しさがつちかったものだ。おまえにはけっして
雄々しさはない、蛇のか弱い二股の舌にさえ
恐れおののくのだ。おまえの最高の安息は眠りだ、
それをおまえはしばしば求めながら、眠りにすぎぬ
死をひどく恐れておる。おまえはおまえ一個の
ものではない、土から生ずるかすかすの穀物のおかげで
おまえでありうるのだ。おまえにしあわせはない、
手に入らないうちはつねに아가き求め、手に入れば
つねに忘れてしまう。おまえにたしかさはない、
月の満ち欠けに応じておまえの気分も微妙に
変わっていく。おまえは富んでおれば貧しいのだ、
金の延べ棒を背にしてあえぎ歩むロバのように、
重い富を背負って人生の旅路を歩み、あげくのはて
死がその荷をおろすのだ。おまえに友はない、
おまえを父と呼ぶおまえ自身の子供たちさえ、
血肉をわけ与えたものたちさえ、なぜさっさと
おまえをかたづけぬと、痛風、発疹、リウマチを
呪っておる。おまえには青春も老年もない、
あるのはただその二つを夢見る午睡だけだ、
若さに恵まれているあいだは富には恵まれず、
痛風病みの老人に物乞いをせざるをえない、
そして年をとって富を手に入れたときには
情熱も意欲も健康も美も失い、せっかくの富も
享受できなくなる。それでも人生の名にあたいする
なにがあると言えよう？ しかもこの人生には
さらに無数の死の苦しみがある、それなのに人間は
すべてを平等にする死を恐れておるのだ。

527

イザベラ

死ぬのが

こわいの？ 死は想像しているうちがいちばんこわい、
実際の死の苦痛は、私たちに踏みつぶされる
あわれな虫けらも、私たちをひねりつぶす巨人も、
その大きさに変わりはないわ。

クローディオ

なぜそう責めるのだ？
美辞麗句をつらねたやさしい言葉を聞かなければ
決心もできぬおれだと思うのか？おれだって
死ぬと決まれば、死の暗闇を花嫁のように迎え、
この両腕に抱きしめるだろう。
イザベラ
それでこそ私のお兄様、お墓のなかの
お父様の声を聞く思いがするわ

528

それはそうだが、死んで知らぬ世界に行くこと、
冷たくじっと動かなくなっても腐っていくこと、
この生き生きとした温かなからだ感覚を失って
一塊の土くれになること、喜びにあふれる魂が
地獄の炎の海にほうりこまれ、あるいは厚い氷に
閉ざされた凍てつく世界に押しこめられること、
目に見えぬ風のとりことなり、宙にただよい、
地球のまわりをたえまない激しい力にあおられ
吹き飛ばされること、無法なわけのわからぬ思いが
胸中を吹き荒れるというもっとも悲惨な人間より
さらに悲惨なめに会うこと——ああ、あまりにも
恐ろしい！老齢や苦痛や貧窮や投獄が
われわれ人間に与えうるどんなつらい、
どんないとわしいこの世の生活だって、
この死の恐怖にくらべればまるで楽園だ。

529

臆病者は死ぬまでに何度も死ぬ思いをする、
勇者が死を味わうのは一回かぎりのことだ。
おれもこれまで、さまざまな不思議を耳にしたが、
なかでもわからぬのは人が死を恐れることだ、
考えてもみろ、死とはまぬがれがたい帰結だ、
くるときには必ずくる。

530

前兆などいちいち気にしてもはじまらぬ。雀一羽落ちるのも神の摂理。来るべきものはいま
来ればあとには来ない。あとで来ないならばいま来るだろう。いまだなくても必ず来るもの
は来るのだ。なによりも覚悟が肝要。人間、するべきいのちについてなにがわかってい
る？とすれば、早くするることになったとしても、それがどうだというのだ？かまうことは
ない。

531

また悪い考えを？人間、がまんしなくちゃあ、
この世にくるのもこの世を去るのも自由にはならない、
機が熟するを待つ覚悟がだいじです。

532

人間の一生は「ひとつ」と数えるひまもないのだ。

533

いや、死ぬことなど泥酔して眠りこむことぐらいにしか思っていないやつです。過去も現在
も未来も、後悔したり気にしたり恐れたりするやつではありません。死をなんとも思わない

ばかさがげんは死んでもなおらないでしょう。

534

思えば長いこと生きてきたものだ、おれの人生は
黄ばんだ枯れ葉となって風に散るのを待っている。
それなのにどうだ、老年にはつきものの
栄誉、敬愛、服従、良き友人たちなどなに一つ
おれには期待できそうもない。そのかわりにあるのは、
高くはないが深い呪詛の声、口先だけの敬意、追従だ、
それをしりぞけたくともこの弱い心にそれはできぬ。

535

明日、また明日、また明日と、時は
小きざみな足どりて一日一日を歩み、
ついには歴史の最後の一瞬にたどりつく、
昨日という日はすべて愚かな人間が塵と化す
死への道を照らしてきた。消えろ、消えろ、
つかの間の燈火！人生は歩きまわる影法師、
あわれな役者だ、舞台の上でおおげさにみえをきっても
出場が終われば消えてしまう。白痴のしゃべる
物語だ、わめき立てる響きと怒りはすさまじいが、
意味はなに一つありはしない。

536

この世のなかになに一つ、私を楽しませてくれるものはない、
人生は味気ないものになってしまった、居眠りするものの
鈍い耳を悩ませる語り古された物語のように、
にがい恥辱が人生の甘い喜びをうちこわした以上、
あとに残るのは恥辱とにがい苦しみだけだ。

537

おれは近ごろ——なぜだか自分でもわからぬが——鬱々として楽しまず、武道や運動の日課
もやめてしまった。そしていまでは、気が重いせいか、この壮麗なる大地も荒涼たる岩山と
しか見えぬし、このすばらしい天蓋、大空、見ろ、この頭上をおおうみごとな蒼穹、金色に
輝く星を散りばめた大天井も、おれには濁った毒気のあつまりとしか思えぬのだ。それにま
た、この人間とはなんたる自然の傑作か。理性は気高く、能力はかぎりなく、姿も動きも多
様をきわめ、動作は適切にして優雅、直観力はまさに天使、神さながら、この世界の美の精
髓、生あるものの鑑、それが人間だ。ところがこのおれには、塵芥としか思えぬ。

538

運命の女神にも人々の目にも冷たくそむかれ、
私はひとり見すてられたわが身を嘆き、
むなしい泣き声で聞く耳もたぬ天を悩まし、
わが身を眺めてはこのような身の上を呪う。
そして将来の希望に満ちた人のようにになりたい、
あの人のような顔立ち、この人のような友をもちたい、
この人のような学識、あの人のような才能がほしいと願い
自分のもっとも恵まれた資質さえもっとも不満になる。
だがこのような思いに自分を卑しめているうちに、
私はふとあなたのことを思う、するとたちまち私は、
（夜明けとともに暗く沈んだ大地から舞いあがる
ヒバリのように）天の問口で讃歌を歌い出す。

あなたの美しい愛を思うだけでしあわせになり、
わが身を国王とさえとりかえたくないと思う。

539

甘い沈黙が支配しているわが心の法廷に
過ぎ去ったなつかしい思い出を召喚すると、
私の求めた多くのものが欠けていることに気づき、
荒廃させる「時」への古い悲しみを新たにすることができる。
すると死のはてしない夜に吞まれた友たちを思い、
（涙を流すことのなかった）目を涙に溺らせ、
すでに清算ずみの愛の悲しみに改めて泣き、
消え去って二度と戻らぬものを嘆くことができる。
すると過ぎた悲しみの数々をいままた悲しみ、
苦しみの一つ一つを重苦しく数えあげていき、
すでに嘆き終えた嘆きを悲しく清算して
支払いずみでないかのように支払いなおすことができる。
だが（愛する人よ）そのときあなたを思うと
すべての損失はつぐなわれ悲しみは終わりとなる。

540

鬱ぎ屋言っても、私の場合学者のそれとはちがう、あれは競争心にすぎん、音楽家のそれともちがう、あれは気ちがいじみたものだ、宮廷人のそれともちがう、あれは高慢から生まれるものだ、軍人のそれともちがう、あれは野心がもとだ、法律家のそれともちがう、あれは権謀術策の一つだ、貴婦人のそれともちがう、あれは気むずかしいというだけだ、恋するもののそれともちがう、あれは以上全部をひっくるめたものだ、要するに私の憂鬱は、多くの成分をまぜ合わせ多くの物体から抽出された私固有のものなのだ、つまり私の歩んできた旅路についてのさまざまな瞑想と言っている、その思い出にふけるとき気まぐれな悲しみが私を包みこんでしまうのだ。

541

だがどういうわけか、この胸のあたりが妙だ。といって別にどうということもあるまい。愚にもつかぬことさ。ただの胸さわぎというやつ、女ならば気にもしようが。

542

ああ、このあまりにも硬い肉体が
崩れ溶けて露と消えてはくれぬものか！
せめて自殺を罪として禁じたもう
神の掟がなければ。ああ、どうすればいい！
おれにはこの世のいとなみのいっさいが
わずらわしい、退屈な、むだなこととしか見えぬ。
いやだいやだ！この世は雑草の伸びるにまかせた
荒れ放題の庭だ。胸のむかつくようなものだけが
のさばりはびこっている。

543

だから私を憎みたいならいますぐにも憎みなさい、
いまは世間が私のどんな行為にも逆らっています、
あなたも運命の悪意と結託し私を屈伏させなさい、
あとでふいに襲ってひどいめにあわせたりしないでください。
ああ、私の心がようやくこの悲しみから逃れたとき、
征服した嘆きの後陣に現われたりしないでください、
風の夜が去ったあと雨の朝が続いてはかないません、

破滅させる気なら先へ延ばしたりしないでください。
私を捨てるなら、ほかの小さな悲しみがさんざん私を
いじめたあと、最後に捨てたりしないでください、
先陣に立って襲いかかってください、そうすれば
最初に運命の最悪の力を味わうことができます。
ほかの悲しみは、いまは悲しみのように見えても、
あなたを失うことにくらべたらそうは見えません。

544

話しているあいだにだいぶ夜も更けたらしい、
われわれも自然の要求には従わねばなるまい、
しばらく睡眠をとり、からだを休めるとしよう。

545

夢の話だからな。
して夢とはひまなやつの頭が生みだす子供、
つまり親はほかならぬくだらん空想というわけだ。
して空想とは空気のように実体は希薄、
風よりさらに気まぐれなものだ。して風とは、
いま北国の凍てつく胸に言い寄るかと思うと、
たちまち腹をたてて風向きを変え、
雨降る南国へ顔を向けるというやつだ。

546

クラレンス

ああ、そうだろう、なにしろゆうべはひどかった、
恐ろしい悪夢、身の毛もよだつ光景の連続でな、
忠実なキリスト教徒の名にかけて、あのような夜は
二度とすごしたくない、たとえその一夜とひきかえに
死ぬまでしあわせな昼を手に入れることができようと。
まったく不気味な恐ろしさに満ちた夜であった！

ブラッケンベリー

どういう夢でした、お聞かせ願えませんか？

クラレンス

どうやらおれは、この塔を抜け出し、船に乗り、
バーガンディーへ渡ろうとしているらしかった。
その船にいっしょに乗っていた弟のグロスターが
おれを船室から誘い出し、二人で甲板を散歩した。
そこからイングランドの岸边をふり返りながら、
ヨーク、ランカスター両家のバラ戦争のあいだ
二人の身にふりかかった数えきれぬほどの苦難を
語りあっていた。そのうちに甲板の滑りやすい足場に
さしかかった、とたんにどうやらグロスターは
なにかにつまずいたらしい、そして倒れかかって、
ささえようとしたおれにぶつかり、おれはそのまま
逆巻く怒濤のただなかにまっさかさまにほうりこまれた。
ああ！溺れることの苦しさが身にしみた！
すさまじい水のとどろきをこの耳にした！
ぞっとするような死の姿をこの目にした！
何千という恐ろしい船の残骸や、何万という
魚に食い散らされた人の死骸を見たように思う。
金の延べ棒、巨大な錨、うず高い真珠の山、

価値もつけがたい宝石、価値も知られぬ宝玉、
そのようなものが海底いっぱいにはまっていた。
なかには死人の髑髏にはまっている宝石もあった、
かつて両の目のあった穴にしのび入り、そこで
かつての目を笑いものにするかのように光り輝き、
ぬらぬらした海底の肌にチカチカと色目を使い、
あたりに散らばる死人の骨に嘲笑を浴びせていた。

ブラッケンベリー

死を目前にしながら海底の秘められた光景を
まざまざとごらんになる余裕があったのですか？

クラレンス

どうやらそうらしいのだ。おれは何度も思いきって
死のうとした、だが意地悪な水はたえずおれの魂を
肉体のなかに押さえつけ、広大な自由な虚空へ
さまよい出ることをどうしても許してはくれないのだ。
おれの胸は押しつぶされそうな魂を抱いてあえぎ、
いまにも張り裂けてそれを海に吐き出すかと思われた。

ブラッケンベリー

それほどの苦しみにもお目覚めにはならず？

クラレンス

ああ、それどころか夢は死後までも続いた。
それからなのだ、おれの魂に嵐が襲いかかったのは。
どうやらおれの魂は、詩人たちがカロンと呼ぶ
あの陰気な渡し守りに導かれて、この世の境にある
憂愁の川を渡り、永遠の夜の国へはこばれたらしい。
そこで新来の魂を最初に迎えたのは、おれの舅、
あの名高いウォリックだった、彼は大声で言った、
「裏切り者のクラレンスめ、誓いを破ったおまえに
この暗闇の世界がどんな刑罰を与えうるのか！」
そう言い残して彼が消えると、次にふらふらと
天使に似た人影が現われた、その輝くような金髪は
血にまみれていた、彼はかん高い声で叫んだ、
「きたな、裏切り者の、誓いを破った、不実なクラレンス、
テュークスベリーでよくもぼくを刺し殺したな。
復讐の女神たち、この男を存分に苦しめるがいい！」
その声とともに、忌まわしい悪魔の一団がたちまち
おれをとりかこんだようであった、やつらは口々に
憎悪の叫びをこの耳に注ぎこんだ、そのわめき声で
おれは身をふるわせながら目覚めたが、そのあと
しばらくはまだ地獄にいるとしか信じられなかった。
それほど恐ろしい思いを刻みつけたのだ、その夢は。

547

こうなれば芥子の実、マンドラゴーラ、
そのほか、ありとあらゆる眠り薬をもってしても、
昨日までおまえのものであったあのころよい眠りを
楽しむことはないぞ。

548

医師

人間のいのちを養う乳母は休養です、それが
お父君には欠けておられます。睡眠を誘うには

さまざまな薬草がありますが、その力を借りれば
お悩みの目に安眠をもたせましょう。
コーディーリア
ありとあらゆる
貴い秘薬、いまだ知られざる大地の薬草よ、
私の涙で芽を出しておくれ！心正しいかたの悩みを
救う力となっておくれ！

549

あの無心の眠り、
心労のもつれた絹糸をときほぐしてくれる眠り、
その日その日の生の終焉、つらい労働のあとの水浴、
傷ついた心の霊薬、大自然が用意した最大のごちそう、
人生の饗宴における最高の滋養

550

病める心は
耳をもたぬ枕におのれの秘密をうちあけるのだ。

551

なにを言う、このおれはたとえ胡桃の殻に閉じこめられようと、無限の宇宙を支配する王者
と思いこめる男だ、悪い夢さえ見なければ。

552

いまは、何千何万というもっとも貧しい国民でさえ
眠りにについているだろう。ああ、眠り、安らかな眠り、
大自然のやさしい乳母よ、わしはおまえをおびやかしたのか、
この両の瞼を閉ざし、五感をこころよい忘却にひたすべく
訪れてくれなくなったというのは？ああ、眠りよ、
おまえは煤にくすんだ貧しい小屋のなかに入りこみ、
寝心地の悪い藁布団の上にゆっくり手足を伸ばし、
うるさい夜の羽虫のうなりも苦にせずやすむのに、
香をたきこめた高貴なものの部屋には入ろうとせず、
豪華絢爛をきわめた天蓋つきの寝台はことさら避け、
妙なる楽の音を耳にしてはまどろむこともしないのか？
ああ、怠惰な眠りの神よ、なぜおまえは下賤なものの
卑しいベッドには喜んで身を横たえながら、国王の臥床は
夜番の詰め所や火の見櫓のように不眠の場所にするのだ？
おまえはあの目くらむ高いマストの上で見張りをする
船乗りの少年の瞼をも閉じさせるではないか、たとえ
吹きすさぶ風に波は逆巻き、その恐ろしい頭をもたげて
雲をのみ、死者も目を覚ましそうな轟音を発して
荒れ狂おうと、おまえはその居丈高な大波を揺り籠とし、
安らかなこころよい眠りへと誘ってやるではないか？
そのおまえが、ああ、依怙贔屓する眠りよ、嵐の夜
船乗りの少年に安眠を恵むおまえが、どうして
風のそよぎ一つせぬ静かな静かな夜、しかも
おまえを迎えるためのあらゆる手立てを講じた国王には
安眠を拒むのだ？しあわせな賤民よ、眠るがいい！
王冠をいただく頭には安らぎが訪れることはない。

553

ああ、栄華を極めたあとにくるどん底のみじめさ！

554

健康ならば喜んでहतす務めも、病気となると
怠りがちになるものだ。人間も自然には勝てぬ、
病に苦しむときは精神も肉体とともに苦しみ、
日ごろの自分を失ってしまう。

555

なぜ王冠を枕もとになどおいておかれるのだろう？
閨の友としてこれほどわずらわしいものはないはずだが。
ああ、磨きあげられた不安のもと！黄金の心労の種！
おまえは眠りの門を大きく開いて、いかに多くの不眠の夜を
招き入れることか！それを抱いて眠っておられるとは！
だがその眠りは、手製の粗末な寝帽子をかぶり、
大いびきをかいて一夜をすごす連中の眠りにくらべれば、
半分も深い安らかなものではあるまい。ああ、王座よ！
おまえはそこにすわるものの心を苛み、夏の日盛りに
重装備をつけた兵士のように、身の安全を保証しながら
身を焼く苦しみをなめさせるのだ。おお、唇のあたりに
鳥の柔毛がついている、それが微動だにしない、
息をされているなら、あんなに軽い柔毛のことだ、
動かぬはずはないのだが。陛下！父上！
永の眠りにつかれたか。このような眠りが、
古来いくたび、イギリス王の頭上から黄金の冠を
奪い去ったことか。

556

麝香を一オンスくれ、薬屋、わしの胸の思いを清めるのだ。

557

おまえにも心の病は手に負えぬと言うのか？
記憶の底に根を張った悲しみを抜きとり、
脳裏に刻みこまれた悩みをぬぐい去り、
忘却の甘い解毒剤をもって、重い胸から
心を圧する危険な思いを洗い流す、それが
おまえにもできぬと言うのか？

558

あなたに必要なのは、いのちをよみがえらせる眠りです。

559

恐ろしい行為を、はじめて心に思い浮かべてから、
それを実際にやってのけるときまで、そのあいだは
まるであやしい幻だ、忌まわしい悪夢だ。
精神の支配者たる理性と、その臣下たる感情が
激論を戦わせはじめる、そうなるこの
人間という一個の世界が、小さな王国のように、
内乱状態におちいってしまう。

560

なぜお一人で

暗いもの思いに閉じこもっておしまいなの？
そういうもの思いは、思う相手とともにこの世から
消えてしまったはず、とり返しのつかないことは
頭からとりのぞかなければ。すんだことはすんだことです。

561

おれのそばにいるのはふとった男だけにしてほしい、
髪をきちんと髪でつけ、夜はよく眠るような男だけに。

562

このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ。
どちらがりっぱな生き方か、このまま心のうちに
暴虐な運命の矢弾をじっと耐えしのぶことか、
それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、
闘ってそれに終止符をうつことか。死ぬ、眠る、
それだけだ。眠ることによって終止符はうてる、
心の悩みにも、肉体につきまとう
数々の苦しみにも。それこそ願ってもない
終わりではないか。死ぬ、眠る、
眠る、おそらくは夢を見る。そこだ、つまりくのは。
この世のわずらいからかろうじてのがれ、
永の眠りにつき、そこでどんな夢を見る？
それがあるからためらうのだ。それを思うから
苦しい人生をいつまでも長びかすのだ。
でなければだれかがまんするか、世間の鞭うつ非難、
権力者の無法な行為、おごるものの侮蔑、
さげすまれた恋の痛み、裁判のひきのばし、
役人どもの横柄さ、りっぱな人物が
くだらぬやつ相手にじっとしのぶ屈辱、
このような重荷をだれかがまんするか、この世から
短剣のただ一突きでのがれることができるのに。
つらい人生をうめきながら汗水流して歩むのも、
ただ死後にくるものを恐れるためだ。
死後の世界は未知の国だ、旅立ったものは一人として
もどったためしがない。それで決心がにぶるのだ、
見も知らぬあの世の苦勞に飛びこむよりは、
慣れたこの世のわずらいをがまんしようと思うのだ。
このようにもの思う心がわれわれを臆病にする。
このように決意をもって生まれた血の色が
分別の病み蒼ざめた塗料にぬりつぶされる。
そして、生死にかかわるほどの大事業も
そのためにいつしか進むべき道を失い、
行動をおこすにいたらず終わる――

563

いっその世界が崩れ、天も地も滅び去るがいい、
三度の食事も不安のうちにしかとれず、夜ごとの眠りも
いまのように恐ろしい悪夢にさいなまれるぐらいなら。
おれたちが安らかな心を得るために安らかな眠りへと
送りこんでやった死人とともにいるほうがまだまだ、
この心を拷問台にのせて、日夜狂気の不安に
おののくよりは。ダンカンはいま墓のなかだ、

人生という痙攣する熱病も癒えて安眠している。
反逆が暴威をふるったのも過去のことだ、いまはもう
剣も、毒も、内憂も、外患も、なに一つとして
彼にふれることはできぬ。

564

ああ、天よ、氣ちがいにはしてくれるな、氣ちがいには！
正氣を失わせてくれるな、氣ちがいにはなりたくない！

565

残念ながらたしかに私はほうぼうほつつき歩いては
公衆の面前でまだら服の道化を演じてきました、
この心までまだらにし、貴重なものを安売りし、
新しい愛を追っては古い愛を裏切ってきました。
たしかに私は、真実を見るときよそよそしい
そっけない目をくれるだけでした、だが実は、
つまらぬ連中によそ見したことが私の愛を若返らせ、
愛の対象としてあなたが最高の人と示してくれました。
すべてが終わったいまこの終わりのない愛を受けてください
かつて愛を捧げた人の価値を推しはかろうとして
新しい相手を砥石に愛を研ぐことは二度としません、
愛に関するかぎり私にはあなたのほか神はいません。
天国に次ぐ最愛の人よ、どうかこの私を
清らかなやさしい、やさしい胸に受け入れてください。

566

ああ、あれほど氣高いお心が、このように無惨に！
貴人の、武人の、文人の、そのまなざし、言葉、剣さばき、
うるわしいこの国の希望とも花とも仰がれ、
流行の鑑、礼節の手本とたたえられ、あらゆる人の
賛美的であったのに、みんな、みんな、おしまい！
私はこの上なくふしあわせなかわいそうな女、
あのかたの誓いの言葉の甘い蜜を吸ったこの耳で、
いま、あの並ぶものなき氣高さをもったお心の、
ひび割れた鐘のような狂ったひびきを聞かねばならぬとは。
あのたぐいまれな青春の花のお姿が
狂乱の嵐に吹き散ってしまった。ああ、なんて悲しい。
昔を見たこの目で、いまのありさまを見なければならぬとは。

567

おやすみなさい。
天使の歌を聞きながら安らかな眠りにつかれますように。

568

靈魂をお苦しめするな、安らかに逝かせよう。
つらいこの世の拷問台にこれ以上おとどめしても、
王はお喜びにはなるまい。

569

さあ、
死をたくらむ思いにつきそう悪魔たち、この私を
女でなくしておくれ、頭のとっぺんから爪先まで

残忍な気持でみたしておくれ！血をこごらせ、
やさしい思いやりへの通り道をふさいでおくれ、
あわれみ深い人情が訪れて、私の決意をゆさぶり、
その決意が恐ろしい結果を生み出す邪魔を
しないように。この女の乳房に入りこみ、
甘い乳を苦い胆汁に変えておくれ、人殺しの
手先たち、いまもどこかで姿も見せず人のいのちを
奪っていることだろう。きておくれ、暗闇の夜、
どす黒い地獄の煙に身を包んで、早く、ここへ。
私の鋭い短剣がおれの作る傷口を見ないですむように、
そして天が闇の帳から顔を出し、「待て」と
叫んだりしないように。

570

起きろ、どす黒い復讐、うつろな洞窟から起き出してこい！
あけ渡せ、おお、愛よ、その王冠と王座を暴虐な憎しみに
譲り渡せ！その毒で、胸よ、腫れあがるがいい、
毒蛇の牙に噛まれたように！

571

あのポンティック海の
冷たいすさまじい潮流がけっして退くことなく、
ひたすらプロポンティック海からヘレスポント海峡へ
しゃにむになだれこむように、おれの復讐の血は
はげしい勢いで突き進むのみだ、うしろをふり返ったり、
おだやかな愛におさまり返ったりはせぬぞ、
あくことを知らぬ底なしの復讐がいっさいを
飲みほす日まではな。

572

怒りこそ私の食事です、わが身を食べつくし、
食べすぎて餓死するでしょう。さ、行きましょう。
女々しく泣くのはおよし、嘆くなら私のように、
ジュノーのように、怒ってお泣き。さ、行きましょう。

573

私は赤ん坊を育てたことがあります、
自分の乳房を吸う赤ん坊がどんなにかわいいか
知っています。でも私はほほえみかける赤ん坊の
やわらかい歯茎から私の乳首をもぎ離し、その脳味噌を
たたき出してみせましょう、さっきのあなたのように
いったんやると誓ったならば。

574

おお、聞いてくれ、自然の女神、聞いてくれ！
もしもこの女に子供を生ませるつもりであれば、
それは思いとどまってくれ！
その胎内を不毛にしてくれ！
生殖の機能を干あがらせてくれ！
そしてその忌まわしいからだに、母親の
名誉となる子を授けないでくれ、ぜひにと言うなら
憎しみの子を授けてくれ、長じて心ねじれ、

母親の手におえぬ苦しみ種の種となるように！
その子ゆえに若い母親の額に皺が刻まれ、
その頬に流れる涙の溝が穿たれるように！
この女の母親としての苦しみ、喜びのいっさいを、
嘲笑と侮蔑にさらしてくれ、忘恩の子をもつことが
蝮の毒牙に噛まれるより激しい吉痛であることを
身をもって思い知るように！さあ、どけ、どくんだ！

575

天に貯えられたありとあらゆる復讐よ、あいつの
恩知らずの頭上にふりかけ！大気にみなぎる毒よ、
あいつの胎児をかたわにしろ！
空を走る稲妻よ、盲にする電光をあいつの
嘲笑う目にたたきこめ！強烈な太陽によって
吸いあげられた沼の毒気よ、あいつの美しい顔を
ただれさせ、高慢の鼻をへしおるのだ！

576

敬虔も、罪への恐れも、
神々への信仰も、平和も、正義も、真実も、
親への尊敬も、夜の休息も、隣人への愛も、
教訓も、礼儀も、職業も、商売も、
身分も、作法も、習慣も、法律も、
みんな破滅をもたらす逆のものになってしまえ！
ただ破滅だけは続くがいい！人間につきものの疫病よ、
おまえの強力な伝染性の熱をアテネの中空に貯え、
いつでも降りかからせる用意をしてくれ！座骨神経痛よ、
元老どもにとりついて足腰立たぬようにし、その礼儀同様
かたわにしてやってくれ！淫欲と放縦よ、
若いやつらの心にも骨の髄にもしのびこみ、
やつらが美德の流れに逆らい、乱行の渦に飲まれて
溺死するようにしてやってくれ！疥癬と腫瘍よ、
全アテネ人の胸に種をまきつけ、癩病の実を
ゆたかにみのらせてやってくれ！ものを言えば
口から口へ病が伝染し、人と人とのつきあいは
友情と同じく、毒のうつしあいになってしまえ！
憎い町アテネよ、おれはこの裸身一つしかもって行かぬ、

577

大ジュピターが
悪徳のはびこる町に毒の雨を降らせるときの
疫病のように猛威をふるうのだ。一人も逃がすなよ。
白髭の元老だってあわれみをかけるにはおよばぬ、
そいつは高利貸した。まがいものの貴婦人も
たたき斬ってくれ、貞淑なのはそいつの服装だけで、
中味は淫売だ。恥じらいを見せる処女だからといって
剣先を鈍らせることはない、胸もとからちらちらと
男の目を誘惑するそいつの乳首は、あきらかに
恐るべき謀反人だ、なさをかけてやるべきものの
リストにはのっておらぬ。赤ん坊とて容赦するな、
そのえくぼの笑顔に慈悲心をもよおすのはばかだけだ、
そいつを、大きくなればおまえの喉笛をかつ切るという

謎めいた神託のあった私生児と思って、残忍無慈悲に
こまぎれにするがいい。抗議の声にはののしり返せ。
おまえの耳と目を鎧で固く武装し、いくら耳もとで
母親や乙女や赤子が泣きわめこうが、いくら目の前で
聖なる衣をまとった神官どもが血を流そうが、
びくともするな。さあ、この金を兵士たちに分けてやれ。
破壊のかぎりをつくすのだぞ、存分に恨みを晴らしたら
おまえ自身も破滅しろ！もうなにも言わず、立ち去れ。

578

さあ、
瞼を閉じあわせる夜よ、
早くきてあわれみ深い昼の目を包んでくれ。
おまえの血なまぐさい見えぬ手で、おれを蒼ざめさせる
あいつのいのちの証文を、ずたずたに引き裂き
無効にしてくれ。薄暗くなってきた。烏が
森のねぐらに帰っていく。
昼の正直ものたちは首うなだれてまどろみ出す、
夜の暗闇の手先どもは餌を求めてうごめき出す。

579

シーザーを勇気をもって殺そう、憎悪をもってではなく。
神々に捧げる供えもののつもりで彼に剣をふるおう、
猟犬にくれてやる死肉のつもりで切りきざむのではなく。

580

やってしまえばすべてやってしまったことになるなら、
早くやってしまうにかぎる。暗殺という網で
いっさいをすくいとれるなら、息の根をとめれば
それでうまく片がつくものなら、この一撃が
すべてであり、すべてを終わらせるものであり、
この世で、時の浅瀬のこちら側で、万事解決するなら、
そうならあの世のことなどだれがかまうものか。
だがこういうことはつねにこの世で裁きがある、
血なまぐさい悪事をやってみせれば必ずそれは
やってみせたものにはね返ってくる。公平無私の
正義の神は、毒酒を用意したものの唇に
その杯を押しつけるのだ。

581

このような不幸の起こる一時間前に死んでおれば、
私は幸福な生涯を送ったと言えただろうに。これからは
この人の世にたいせつに思えるものはなに一つない、
いっさいは玩具同然、名誉も美德も死んでしまった。
いのちの酒は飲みほされ、この丸天井の酒蔵に
残されたのは酒の澱だけ、語るにたるものはない。

582

いま、世界のなかばでは、
自然も死んだようにやすみ、帳のおろされた
その眠りを悪夢があざむいている。魔女たちは
蒼白いヘカティに捧げものをし、やせこけた

人殺しは、見張り役の狼に起こされ、そのうなり声に
けしかけられて、抜き足さし足、ルクリースを犯しにいく
タークインの足どりて、目指す相手めがけて
亡霊のように忍びよっている。

583

コウモリが僧院に飛びかい、
暗黒の魔女ヘカティの呼び出しに応じて、甲虫が
その硬い羽根をふるわせ、夜の眠りに誘ううなり声を
ものうげにひびかせるころまでに、必ず起こるだろう、
恐るべき重大事が。

584

ぬくぬくとした眠りを払いのける、そのような
まがいものの死ではなく、死そのものを見すえるのだ！
起きろ、起きて最後の審判を見ろ！

585

大ネプチューンの支配する大洋の水すべてを傾ければ、
この手から血を洗い落とせるか？いや、この手がむしろ
見わたすかぎり波また波の大海原を朱に染め、
緑を真紅に一変させるだろう。

586

血が流されたのはいまだけではない、昔、
文明の世のなかを治める法律が制定される以前にも、
そしてもちろんそれ以後にも、聞くも恐ろしい
人殺しはくり返されてきた。だがいままでは
脳天をたたき割られれば人は死んだ、それで
おしまいだった。いまはふたたび立ちあがる、
頭に二十もの致命傷を受けながら、生きているものを
椅子から押しのける。

587

あれは血を呼んでいるのだ、血が血を呼ぶのだ。
そのためには石も動き、木も口を開くという、
因果を知る前兆が、カササギやベニバシガラスや
ミヤマガラスの鳴き声を借りて、隠れた人殺しを
あばいたこともあるという。

588

まだ血の臭いがする。アラビアじゅうの香料をふりかけてもこの小さな手のいやな臭いは消
えはしまい。ああ、ああ、ああ！

589

血の流れにここまで踏みこめば、渡りきることだ、
行くも帰るも困難なら、もどることは思いきるのだ。

590

血まみれの指に高価な指輪がはめられており、
その宝石が穴全体をあかるくしています、
まるで霊廟のなかにともされた蠟燭のように

死人の土気色の頬を照らし出しているのです、
それにこの穴の無気味な内部もすっかり。
きっとピラマスがシスビーの血を浴びて
横たわった姿を照らした月もこのように
蒼白かったでしょう。

591

乞食が死んでも彗星は現われません、
王侯の死を告げるためにこそ天は炎を放つのです。

592

ゆうべはひどい荒れようでしたな、われわれの
宿舎の煙突は吹き倒される始末。聞くところによると、
悲嘆の声が天にひびき、あやしげな死の叫びが
恐ろしい声音で、不幸な時代の到来を告げる
悲惨な破滅、無惨な混乱を予言していたとか。
それにあの不吉な鳥フクロウも夜通しうるさく
鳴きつづけたようだ。大地まで瘡にかかり、
ふるえたと言うものもある。

593

ロス

どうだ、あの空。人間の行為に心を痛めてか面を曇らせ、
この血なまぐさい舞台を暗くしている。時計では昼だ、
それなのに闇夜が空を旅する明かりの首を締めている。
夜が勢いをえたのか、昼が恥じらっているのか、
いのちをもたらす光が口づけすべき大地の顔を
暗闇が埋葬してしまった。

老人

まことに自然に反します、
ゆうべの事件と同様に。この前の火曜日でしたか、
一羽の鷹が空高く悠然と弧を描いていると、
ネズミしか食わぬフクロウが襲いかかって殺しましたが。

ロス

そう言えばダンカンの馬が、不思議な話だが
嘘ではない、姿もよく脚も早い名馬中の名馬どもだが、
突然荒れ狂い、馬屋を破り、外に飛び出した。
手のつけられぬ暴れようは、まるで人間相手に
戦をはじめたようであった。

594

かつてローマが天下に覇をとなえた最盛期、
ジュリアス・シーザーが暗殺される前夜、
墓は口を開いて、経帷子の死人の群が
わけのわからぬ叫び声を発して街をうろつき、

595

近ごろ続いてあらわれた日食月食は不吉な前兆であったのだ。自然界を知る学者はこれこれ
しかじかと理屈をつけるが、人間界はたしかにその結果たたきを受けておる。愛情はさめ、
友情はこわれ、兄弟は背を向けあう。町には反乱、村には暴動、宮廷には謀反が起こる。親
子の絆も断ち切られる。わが家の悪党もこの前兆のあらわれだ、父親にそむく息子の一例
だ。王も自然の情にそむかれる、子にそむく父親の一例だ。良きうるわしき時代は過去のも

のとなった。陰謀、不実、反逆、その他破滅をもたらす混乱のみがわれわれの心を乱し、墓場まで追い立てる。

596

魔女Ⅰ

三度鳴いたぞ、ブチ猫が。

魔女Ⅱ

三度と一度は、ハリネズミ。

魔女Ⅲ

「いまだ、いまだ」と化けもの鳥。

魔女Ⅰ

釜のまわりをまわろうよ、

腐った臓物ほうりこめ、

まずは冷たい石の下、

三十一夜を眠りつつ、

毒の汗かくヒキガエル、

ぐらぐら煮えろ、釜のなか。

三人

苦労も苦悩も火にくべろ、

燃えろよ燃えろ、煮えたぎれ。

魔女Ⅱ

お次は蛇のブツ切りだ、

ぐらぐら煮えろ、釜のなか、

カエルの指先、イモリの目、

コウモリの羽根、犬のべろ、

蝮の舌先、蛇の牙、

フクロウの羽根、トカゲの手、

苦労と苦悩のまじないに、

地獄の雑炊煮えたぎれ。

三人

苦労も苦悩も火にくべろ、

燃えろよ燃えろ、煮えたぎれ。

魔女Ⅲ

狼の歯に龍の皮、

魔女のミイラに貪欲な

鮫の胃袋煮えたぎれ、

闇夜に抜いた毒ニンジン、

ユダヤ人から腐れ肝、

山羊の胆汁、月食の

夜に手折った櫟の木、

トルコ人から驚っ鼻、

ダッタン人から厚唇、

売女がどぶに生み落とし、

すぐ首絞めた赤児の指、

トロリトロリと煮えたぎれ、

おまけに虎の腸を

入れて薬味をきかせよう。

三人

苦労も苦悩も火にくべろ、

燃えろよ燃えろ、煮えたぎれ。

魔女Ⅱ

狒狒の血注ぎさましたら、

これでまじないおしまいだ。
この親指がピクつくぞ、
こっちにくるぞ、悪ものが。
開け、扉よ、
だいじな客だ！
マクベス
おお、暗闇に乗じて秘密を働く深夜のばばァども、
なにをしておる？
三人
この仕事には名前はないよ。

597

毒を必要とするものも毒を愛しはせぬ、私もまた
おまえを愛しはせぬ。たしかに私は彼の死を望んだ、
だが殺したものは憎む、愛するのは殺されたもののほうだ。
良心の苛責を、おまえのほねおりの報いとするがいい、
おまえに与えるべきやさしいことば、王の恩賞はない。
これからはカインとともに夜の暗闇をさまよい、
二度とその顔を白日のもとにさらさぬがいい。

598

王
これが王者の受ける呪いなのだ、ほんの一時の気まぐれを
令状同然に思いこみ、人のいのちをあえて断つ、
そういう奴隷どもにかしずかれていることが！
権威の座にあるものがまばたきの一つでもすれば、
それを法令と解釈し、熟慮のあまりというより
不機嫌のために眉をひそめでもすれば、それを
王者の恐ろしい意図と推し測る奴隷どもに！
ヒューバート
私のしたことを保証するご自筆に押印された令状がここに。

王
ああ、天地間の最後の総決算がなされるとき、
そこに記された自筆、そこに押された印が
証拠となって、おれは地獄に堕ちねばならぬのか！
人間は、悪事をおこなうための道具を目にすると、
つい悪事をおこないたくなるものだ！あのときそばに
おまえさえいなかったら、造化の神の手によって
恥ずべき行為をなすべくしるしづけられ、特徴づけられた
おまえさえいなかったら、この人殺しの罪はおれの頭に
思い浮かばなかったはずだ。

599

さあ、みんなこの大地にすわってくれ、そして
王たちの死の悲しい物語をしようではないか、
退位させられた王、戦争で虐殺された王、
自分が退位させたものの亡霊にとりつかれた王、
妻に毒殺された王、眠っていて暗殺された王の物語を。
みんな殺されたのだ、なにしろ、死すべき人間にすぎぬ
王のこめかみを取りまいているうつろな王冠のなかでは、
死神という道化師めが支配権を握っており、
王の威光をばかにし、王の栄華を嘲笑っておるのだ。

そしてつかの間の時を与えて、一幕芝居を演じさせる、
そこで国王として君臨し、畏敬され、目でもって人を殺し、
まるでいのちを守る肉体という城壁が、永遠に攻め落とせぬ
金城鉄壁であるかのように思いこみ、むなしいぬぼれに
ふくれあがっていると、さんざんいい気にさせておいた
死神めは、時はよしとばかり、小さな針の一刺しで
その城壁に穴を開け、王よ、さらば！というわけだ。

600

王

ああ、これでやっとなが魂もくつろげる、もう
肉体の窓口からむりに出ようとはしないだろう。
この胸のなかは炎暑の夏だ、臓腑はすべて
干からびて死んでしまった。この身はまるで
羊皮紙の上にペンで走り描きされた肖像画だ、
この火のような熱にあって縮みあがるのみだ。

王子

いかがですか、ご気分は？

王

いかがわしい毒にやられ、
殺されて、捨てられて、ほうり出されているのに、
おまえたちはだれ一人、冬を呼び寄せて、その氷の指先を
おれの胃袋にさし入れるよう命じてはくれぬ、
わが王国の川を集めて、その流れをおれの焼けただれた胸に
むけさせてもくれぬ、北風を招いて、その寒い息を
おれの乾ききった唇に触れ、その冷たさでおれを慰めるよう
頼んでもくれぬ。たいしたことをせがんでいるのではない、
冷たい慰めでいいからほしいと言っているのだ。ところが、
おまえたちはけちで、恩知らずで、それさえしてくれぬ。

601

ああ、死よ、清らかな王子の美しさでおのれを飾るのか！
大地にはこの醜い行為をかくす穴はなかったのか。

602

ああ、おごれる死よ、あの世でどんな饗宴を開くのだ、
王侯貴族のいのちをこれほど多く、ただの一撃で
奪い去ったとは？

603

これからは墓場や蛆虫や墓碑銘のこのみ話すとしよう、
大地の胸の上に、塵を紙と見立てて、目からあふれる
涙の雨をもって悲しみを書き記すとしよう。
執行人を選んで遺言のことを相談するとしよう。
いや、それもむだだ、おれがこの世に残す遺産は
廃位させられた王の遺骸のほかにもないのだから。

604

人の臨終はそれまでの全生涯よりも注目を浴びるものだ、
沈まんとする日の光、終わらんとする楽の音も同じだ、
甘味は最後の味わいこそもっとも甘く最後まで続くものだ、
最後の姿こそ長い過去のなによりも記憶に長く残るのだ。

605

しかしその死を見とどけたものに会いましたが、
そのものの話によりますと、彼は率直に
おのれの反逆の罪を認め、ひざまずいて
国王陛下の許しを請い、心の底からの
後悔の情を表明したとか。その生涯を通じて、
生涯を閉じるときほど彼にふさわしい姿はなく、
その死に際して、かねてから死を覚悟したものの
平静さをもって、いちばんたいせつないのちを
むぞうさに投げすてたとのこと。

606

彼こそ一味のなかでもっとも高潔なローマ人だった。
彼だけは別にして、共謀者どもはすべて
大シーザーへの憎しみからこの拳に出た。
彼だけは、いささかも私心をまじえず、
ひたすら万人のためを思って一味に加わった。
その生涯は高雅、その人柄は円満な調和に満ち、
そのために大自然も立って、全世界におかい、
叫びうるはずだ、「これこそは人間であつた！」と。

607

ブルータス
さあ、諸君、
ローマ人たち、身をかがめ、シーザーの血に
両手をこの腕までひたし、剣を真紅に染めよう。
それから広場の中央まで堂々とくり出して行き、
血塗られた剣を頭上にふりかざし、声をそろえて
叫ぼうではないか、「平和だ、解放だ、自由だ」と。
キャシアス
さあ、身をかがめ、手をひたそう。千載ののちまでも
われわれのこの壮烈な場面はくり返し演じられるだろう、
いまだ生まれぬ国々において、未知の国語によって。
ブルータス
そしてシーザーはくり返し舞台に血を流すだろう、
いまこのポンペー像の足もとに身を横たえ、
塵と化した男は。
キャシアス
そしてそのたびごとにくり返し
われわれ同志のものはその名を称えられるだろう、
彼らこそ祖国に自由をもたらした名誉の士だと。

608

ああ、偉大なるシーザー、なんとなさけない姿に！
あなたの征服、栄光、勝利、獲物のすべてがこの
小さな亡骸となりはてたか？

609

諸君に涙があるなら、いまこそ流す用意をするがいい。
諸君はこのマントに見覚えがあるだろう、私もまた
忘れはしない、シーザーがはじめてこれを着たときを。

あれはある夏の夕暮れ、陣営においてであった、
ネルヴィー族をうち破った日のことであった。
見ろ、ここをキャシアスの剣が突き抜けた。
これはキャスカの恨みの手が引き裂いた跡だ。
これがあれほど愛されたブルータスの刺した個所だ、
そして彼の呪わしい剣がここから引き抜かれたとき、
シーザーの血はそのあとを追ってほとぼしり出たのだ、
まるで戸口から走り出して、無惨な訪問者がはたして
ブルータスであったのかどうかたしかめるかのように。
ブルータスは、周知のように、シーザーの寵児であった。
神々も照覧あれ、シーザーはいかに彼を愛したことか！
これこそはもっとも無惨非道の一撃であったのだ。
さすが高潔なシーザーも、彼が刺さんとするのを見て、
謀反人の腕よりもはるかに強いその忘恩には、
すっかりうちのめされ、偉大な胸もつぶれはてたのだ。
そしてマントに顔を包むようにして、まさにあの
ポンペー像の足もとに、その像が噴き出す血潮に
身をひたすように、大シーザーは崩れ落ちたのだ。
ああ、なんという崩壊であろうか、同胞諸君！

610

大望も織りかたが悪ければかくも縮んでしまうのか！

611

クレオパトラ

ローブを着せてちょうだい、それから王冠を。
私には永遠なるものへのあこがれがある、もう二度と
エジプトの葡萄酒がこの唇をしめらすことはあるまい。
さ、早く、早く、アイアラス。ほら、アントニーが私を
呼んでいる、私のりっぱな行為を賞めてやろうと
身を起こして。シーザーの幸運を嘲笑っているのね、
神々が人間に幸運をお与えになるのは、それを口実に
あとで復讐するためなのだから。いま行くわ、私の夫、
私の勇気があなたの妻の名を辱めぬように！
いまの私は火と風、この五体を作る残りの土と水は
卑しいこの世にくれてやる。着つけはもうすんだのね？
では、私の唇から最後のぬくもりを。さようなら、
やさしいチャーミアン、アイアラス、永のお別れだよ。
この唇には毒蛇がいたのか？ もう立てぬのか？
おまえといのちがそのようにそっと別れられるものなら、
死の一撃は恋人がつねるようなもの、痛みを与えて
嬉しがらせるだけ。そのままじっとしているのか？
そのように消えて、おまえは教えているのだ、この世は
暇乞いなどする値うちもないところだと。

チャーミアン

お願い、厚い雲、溶けて雨になって、神々も泣いていると言えるように。

クレオパトラ

私はなんて恥ずかしい女、
アイアラスが一足先に髪を縮らせたアントニーに会えば、
あの人は私のことを尋ね、私には天国である口づけを
この女に与えるだろう。さあ、死神のお使い、
おまえの鋭い牙で、このもつれたいのちの結び目を

一思いに噛み切っておくれ。かわいいおまえ、さあ、怒りにまかせて早く。ああ、おまえに口がきけたら、あのシーザーをうかつな阿呆と呼んでくれたらうに。

チャーミアン

ああ、女王様、東方の星！

クレオパトラ

シーツ、静かに！

これが見えないの、赤子が私の胸で乳を吸い、乳母を寝かしつけているのが？

チャーミアン

ああ、裂けるがいい、この胸も！

クレオパトラ

麻薬のように甘く、空気のようにそっと、やさしく――

おお、アントニー！――そう、おまえもここに。

なんの喜びがあろう、この――

チャーミアン

この卑しい世界に生きながらえても、ですね？

では、お別れを申します。死よ、傲るがいい、

たぐいなき女性がおまえのものになったのだから。

やわらかな瞼よ、その窓をお閉じ。黄金の太陽も

二度とこれほど気高い目に仰ぎ見られることはない！

王冠が曲がっている、おなおししよう、最後のつとめに。

衛兵！

女王はどこに？

チャーミアン

大声を立てないで、お目を覚まさぬよう。

衛兵！

シーザーからの――

チャーミアン

遅すぎたお使いがきたのね。

さあ、いそいで！ああ、もう感じてきたようだ。

衛兵！

なんということだ！チャーミアン、これでいいのか？

チャーミアン

これでいいのだわ、連綿たる王家の姫君に

これほどふさわしいことはまたとないのだから。

612

それなのにこの顔は眠っているとしか見えぬ、まるでその美貌の罫でもう一人のアントニーを捕らえようとしているかのように。

613

あわれなものだな、ヨリック！よく知っていた男だ、ホレーシオ。気のきいた酒落や冗談をのべつ吐きちらしたやつだった。何度となくおぶってもらったものだが、こうなってみると思っただけでもぞっとする。胸がむかついてくる。このあたりに唇がついていたのだな、おれがよく接吻した。おまえの皮肉はどこへいった？ おまえの道化踊りは、歌は？ みんなをどっと笑わせた頓智のひらめきはどこへ消えた？ この齒をむき出したおのれの顔を笑いのめす軽口は出ないのか？笑おうにもあごがないのか？ではご婦人がたの部屋に行ってしまうのだな、いくら厚化粧してもいずれはこういうご面相になりますよと。きっと笑ってくれるぞ。

614

しばらく、去られる前にほんのひとこと。
私は国家に多少の功績があり、それは政府もご存じのはず。
そのことはもう言うまい。ただ一つ、お願いしたい、
あなたがこの不幸な出来事を報告されるとき、
ありのままの私をお伝えいただきたい、いささかもかばったり、
あるいは悪意をまじえたりせずに願いたい。つまり、
愚かにではあるがあまりにも深く愛した男であった、
容易に嫉妬にかられはせぬのに、たぶらかされて
極度に乱心した男であった、卑しいインド人のように
なにものにも替えがたい真珠を、われとわが手で
投げ棄てた男であった、泣くということを
かつて知らなかったその目から、あのアラビアの
ゴムの樹が樹液をしたたり落とすように、とめどなく
涙を流した——そういう男であったと書いていただきたい。
それからもう一つ。昔、アレppoの町で、
ターバンを巻いたこしゃくなトルコ人めが、
ヴェニス人をなぐり、お国を侮辱しているのを見て、
私はその犬畜生めののどを引つつかみ、
このように——刺してやったと。

615

この仮の世のいのちなら針ほどにも惜しくはない、
靈魂ならむこうと同様こちらも不滅、
とすればむこうにも手出しはできまい。

616

死にのぞんだものが一瞬心楽しくなることが
よくあるという。看護するものはそれを
死の前の稲妻と呼ぶ。おお、どうしてこれを
稲妻と呼べよう。おお、ジュリエット、わが妻。
死はおまへの呼吸の甘い蜜を吸いとりはしたが、
おまへの美しさにたいしてまだ力をふるってはいない。
おまへはまだ征服されてはいない。美の旗印は
おまへの唇に、頬に、赤々とはためいている、
死の蒼白い旗はそこまで進んではいない。
ティボルト、そこか、血にそむ経帷子に包まれて。
おお、これ以上の供養はあるまい、おまへの青春を
まっぶたつに切り裂いたこの手で、
おまへの仇の青春を引き裂いてやるぞ。
許してくれ、従兄、ああ、ジュリエット。
なにゆえおまへはまだ美しい？ うつろなはずの
死神までがおまへに恋心を燃やしているのか？
あのやせこけたいとわしい化け物めが、この暗闇に
おまへを愛人として囲っておこうとするのか？
そのためにも、いつまでもおまへのそばに。
この暗い夜の宮殿から二度とふたたび
離れはせぬ。ここに、ここにいるぞ、
おまへの侍女の蛆虫と。おお、ここを
おれの永遠の安住の地と定め、
この世にうみはてた肉体から、不幸な星の
頸木をはずそう。目よ、最後の見おさめだ。

腕よ、最後の抱擁だ。唇よ、おお、
いのちの息の扉よ、正当なる口づけで封印するのだ。
すべてを買いしめる死との永久契約の証書にな。
さあ、にがい先導員、来るがいい、まずい案内人。
いのち知らずの水先案内よ、波に疲れたこの舟を
いまこそ岩に乗りあげてこなごなにうちくだけ。
おまえのために、愛する妻。おお、嘘ではなかったぞ、薬屋、
おまえの薬はよくきいた。こう口づけをしておれは死ぬ。

617

ああ、生への愛着はなにより強い！ たとえ
一刻一刻が死の苦しみでも、ただちに死ぬよりは
生を選びます――

618

おお、見るがいい、あそこへきた人を！まるで
魂の墓場だ、苦しみあえぐ醜いいのちの獄舎に
心ならずも永遠の魂を宿している人だ――

619

アブホーソン

おい、バーナーダインを連れ出してくれ。

ポンピー

バーナーダインの旦那！起きて首を斬られるお時間ですよ、バーナーダインの旦那！

アブホーソン

どうした、おい、バーナーダイン！

バーナーダイン

うるせえな！なに騒いでやがるんだ？なにものだ、てめえら？

ポンピー

あんたのお友だちですよ、旦那、正副死刑執行人で。ご面倒でも、旦那、起きて死刑になっ
ておくなさい。

バーナーダイン

消えちまいな、糞ったれ！ おれは眠いんだ。

アブホーソン

いいからたたき起こせ、ぐずぐずするんじゃない。

ポンピー

ねえ、バーナーダインの旦那、死刑になるまで目を覚ましていてくださいよ、あとでぐっす
り眠れますよ。

アブホーソン

奥へ行って引きずり出せ。

ポンピー

いや、いま出てきますよ、ほら。藁の音がしていますから。

アブホーソン

斧は首斬り台の上においてあるな？

ポンピー

ちゃんと用意しときました。

バーナーダイン

よお、アブホーソン、どうかしたのか？

アブホーソン

したとも、おまえもお祈りをするがいいぜ。見ろ、執行令状だ。

バーナーダイン

糞ったれ、おれは一晚じゅう飲んでたんだ、そんな気分じゃねえやい。

ポンピー

そのほうがいいと思いますがねえ、旦那、一晩じゅう飲んで朝早く死刑になりゃあ、その日は目を覚まさないで済みますからね。

アブホーソン

見ろ、神父様がおいでだ、冗談じゃないことがわかったろう。

公爵

おまえだな、早急にあの世へ旅立つと聞いて、慈愛を旨とするこの身、おまえに教えさとし、慰めを与え、ともに祈ろうと訪ねてまいった。

バーナーダイン

神父さん、おれならけっこうだぜ。一晩じゅう飲み続けたんで用意をするのに時間がかからあ、脳天をたたき割るとおどされたってこの言葉に嘘はねえ。今日死ぬのはごめんだね、いや、ほんと。

公爵

だが今日死なねばならぬのだ。だからすぐに旅立ちの用意をしなさるがいい。

バーナーダイン

だれがなんてたって今日死ぬのはまっぴらだ。

公爵

ま、私の言うことを聞きなされ。

バーナーダイン

一言だって聞くもんか。言いたいことがあるんならおれの独房へきな、今日は一步も外に出ねえからな。

620

レアティーズ

なんということだ、この脳髄も熱で干あがってしまえ、この目も塩からい涙で焼きただれてしまえ。

気が狂ったか！ その恨み、天地がひっくりかえろうと必ずはらすぞ。ああ、五月の薔薇、かわいい乙女、やさしい妹、美しいオフィーリア！

こんなことがあっていいものか、若い娘の理性が老人のいのちのようにはかないとは。人の心は人を愛するときもっとも純なものとなる。愛するものの亡きあとは、おのれの心のいちばん大切なものを捧げたくなるのだろう。

オフィーリア

顔もあらわにお棺にのせて

ヘイ・ノン・ノニー・ノニー・ヘイ・ノニー、

お墓に涙の雨が降る――

さようなら、いとしいかた！

レアティーズ

たとえお前が正気で仇を討てと言ってもこれほど心を動かされはしなかったろう。

オフィーリア

これがマンネンロウ、思い出の花。ね、お願い、私を忘れないで。それから三色堇、もの思いの花。

レアティーズ

狂気のなかにも教訓があるのか。ものを思っ忘れてるなというのだな。

オフィーリア

あなたには、ふた心のウイキョウと、不義のオダマキ。あなたには悲しみ悔いるヘンルーダ。私にも少しとおかなければ。これは安息日の恵み草とも言うのよ。だからあなたとは別の意味ね。それから不実な雛菊も。ほんとは忠実な堇をあげたいのだけど、みんなしお

れてしまった、お父様が亡くなった日に。しあわせなご最期だったそうだけど——（歌う）
かわいいかわいい駒鳥よ
私の心の喜びよ——
レアティーズ
もの思いも悩みも苦しみも、地獄のつらさまでもが
妹の心のなかでは愛すべき喜びに変わってしまうのか。
オフィーリア
あの人帰ってくるかしら？
あの人帰ってくるかしら？
いえ いえ 死ぬまで待ったとて
死んでしまった人だもの
あの人はいもう帰らない。
お髭はまっ白雪のよう
頭は銀髪麻のよう
そのお姿もいまはなく
泣く泣く祈るほかはない
あの世でどうかしあわせに。
みなさまのためにも祈ります、どうかおしあわせに。さようなら。
レアティーズ
ああ、なんという姿だ。

621

小川のほとりに柳の木が斜に立ち、
白い葉裏を流れに映しているところに、
オフィーリアがきました、金鳳花、刺草、
雛菊、それに口さがない羊飼は卑しい名で呼び、
清純な乙女たちは死人の指と名づけている
紫蘭の花などを編み合わせた花冠を手にして。
あの子がしだれ柳の枝にその花冠をかけようと
よじ登ったとたんに、つれない枝は一瞬にして折れ、
あの子は花を抱いたまま泣きさざめく流れに
まっさかさま。もすそは大きく広がって
しばらくは人魚のように川面に浮かびながら
古い歌をきれぎれに口ずさんでいました、
まるでわが身に迫る死を知らぬげに、あるいは
水のなかに生まれ、水のなかで育つもののよう。
だがそれもわずかなあいだ、身につけた服は
水をふくんで重くなり、あわれにもその
美しい歌声をもぎとって、川底の泥のなかへ
引きずりこんでいきました。

622

亡骸を埋めろ。
美しい汚れを知らぬ妹のからだから、
堇の花よ、咲き出でよ。やい、くそ坊主、
きさまが地獄で吠え面かいているとき、妹は、
天上で天使になっていよう。

623

夏が続くかぎり、そして
おれがここに住んでいるかぎり、フィディーリよ、
おまえの墓をもっとも美しい花で飾ってやるぞ、

おまえの顔に似た花でな。色淡い桜草も、
おまえの静脈のように青い筋のある釣り鐘草も、そう、
それに野バラも絶やさなからな。バラには悪いが、
その香りもおまえの息のかぐわしさにはかなわない。
そういう花を、駒鳥がそのやさしいくちばしで——
親の恩を忘れて墓石も建てぬ子供たちを恥じ入らせるという
そのくちばしで——おまえのところにはこぶだろう、
それに、毛皮のような苔もだ。花のない冬になれば、
冷たい地面におまえの亡骸は——

624

死が娘に、野に咲きかおる花のなかで
ひときわ美しい花に、ときならぬ霜をおいたか。

625

少しでもその胸にハムレットを思う心があるなら、
しばらくは安らかな眠りにつくしあわせをはなれ、
つらいこの世にあっておれの物語を伝えてくれ。

626

二度とここにくるな、アテネの連中にこう言え、
タイモンは大海の波打ち寄せる浜辺に
永劫の館を建て、日に一度、騒々しい高波の
泡立つ飛沫を浴びておると。

627

死よ、ああ、やさしい、愛らしい、死よ！
かぐわしい悪臭よ！すこやかな腐敗よ！
永遠に続く夜の寝床から起き出してきておくれ、
繁栄が憎み、恐れるおまえよ、そうしたら
私はおまえの忌まわしい骨に口づけしよう、
そしておまえの顔のうつろな穴に私の目を入れよう、
そしておまえの居候である蛆虫を私の指にからませよう、
そして汚らしい塵芥で息の通う私の口をふさごう、
そしておまえと同じようにおぞましい化け物になろう。
さあ、齒をむいておくれ、私はそれをほほえみと思い、
妻としておまえに口づけしよう。不幸の恋人よ、さあ、
私のところへきておくれ！

628

泣け、泣け、泣かぬか！ ああ、きさまらは石か？
わしにきさまらの舌や目があれば、それでもって
大空をうち砕いてくれるのに。この娘は永久に
逝ってしまった！わしにもわかるぞ、死んだか
生きておるかは。この娘は死んだ、土くれのように。
鏡を貸せ、息でその表が曇るか汚れるかすれば、
まだ生きておるのだが。
この羽根が動く、生きておるぞ！ああ、もしも
生きてさえいてくれれば、わしのなめた悲しみは
すべてつぐなわれる。

629

ああ、たかが一ペニーの首絞め縄のなんたるご利益！何千という大金でもあつという間に決算してくれる。これほど間違いのない勘定方なんていないぜ、過去、現在、未来を合わせて支払うんだからな。おまえの首が、ペンで帳簿で算盤だ、そろそろ領収書といくか。

630

小石をちりばめた浜辺に波がひたひた寄せるように
われわれの時間も刻一刻終わりに向かっていそいでいる、
それぞれの時の波が前を行く波にとってかわり、
次から次へとみな先を争うように進んでいる。
赤児は光の大洋の中に生まれ出ると、這うようにして
成長し、大人になるが、そこで頂点に達すると
意地の悪い影が栄えある光に戦いを挑み、
「時」がかつて与えたものをいまはこわしにかかる。
「時」は青春の華やかな飾りを刺しつらぬき、
美の額に幾重もの皺を彫りめぐらし、
自然のまれに見る完璧な姿をおしばんでいく、
「時」のふるう大鎌をまぬがれるものはなに一つない。
だが私の詩は「時」の残酷な手にさからい、
希望に満ちた日まで生きてあなたを称えるだろう。

631

あなたが私に見るのは、一年のうちのあの季節、
寒風にふるえる枝には黄ばんだ木の葉がわずかに
残るか、残らぬか、つい先日まで小鳥たちの
聖歌隊席であったのにいまは廃墟となる晩秋です。
あなたが私に見るのは、一日のうちのあのひととき、
日は沈んで西の空に淡く残る光もたちまち
深い夜の闇、すべてを眠りの中に閉じこめる
死の分身によって、消し去られる黄昏時です。
あなたが私に見るのは、炎のいのちのあの輝き、
最期の息を引きとる死の床にあるように、
おのれの青春の灰に埋もれ、おのれを養ってくれた
燃料とともに消えて行く最後の光です。
それを見るからあなたの愛はさらに強くなり、
まもなく別れねばならぬものを深く愛するのです。

632

それより、この機会の前髪をとらえ、話しておきたい、
私ももう年をとった、とりいそぎ命じても、
それがはたされぬうちに、しのびやかな時の歩みが
こっそりしのび寄るかもしれぬ。

633

法院長

おまえはまだ若者の名簿に名前をつらねているつもりなのか、顔には老いの皺文字で老人と刻まれているのに？その目はたえずうるみ、手はかさかさに乾き、頬は土気色、髭は真白、脚はがくがく、腹はぶくぶく、声は割れ、息は切れ、顎は肉がたっぷり、頭は知恵がさっぱり、からだじゅうガタがきて老醜をさらけ出しているのに、まだ若いと言い張るのか？ばかばかしいにもほどがあるぞ、サー・ジョン！

フォールスタッフ

いえね、閣下、私が生まれたのは午後の三時でして、この白髪頭も大鼓腹もそのときからのものなんです。声をつぶしたのは、狩りに出ては獵犬をけしかけ、家にあつては賛美歌を歌

いすぎたためです。ま、これ以上私の若さを証明するのはよしとしましょう。事実、私が年をとってるのは判断力と理解力だけです。それでも、一千マルク賭けて私と高飛びダンスを競いたいってやつがいたら、いつでも相手になりますぜ、賭け金だけは前借りしなくちゃならないが。

634

悪口だよ、悪口。口の悪いやつがこう書いている、老人とは、その髭白く、その顔しわだらけにして、目より松脂色の液体流し、知脳はおびただしく退化し、あわせて膝関節に衰弱を見するものなり。これはたしかに動かしようのない事実だ。だがこう書いてしまっはあまりに失礼ではないかな、おまえだって蟹みたいにうしろむきに歩いてみろ、おれと同じ年ごろになれるはずだからな。

635

あの老人たちは
年のせいで恩を忘れているのだ。彼らの血は
こごり、冷たくなり、ほとんど流れなくなっている、
冷ややかなのはもって生まれたあたたかな味が冷えたせいだ。
人間だれでも、土に帰る日が近づき、死出の旅路の
用意をするようになると、身も心も鈍くなるのだ。

636

じゃあおれは
道化役といこう。どうせ年をとるなら陽気な笑いで
この顔に皺をつけたい、いのちをすりへらす溜息で
心臓を冷やすより、楽しい酒で肝臓をほてらせたい。
熱い血の通った人間様が、石膏細工の老人のように
じっとすわりこみ、起きていながらうつらうつらし、
腹を立てては黄疸をつのらせ黄色くなっていく、
そんな必要があるのかね？いいか、アントーニオ——
おれはきみが好きだ、好きだからこそ言うのだが——
世のなかにはおかしな連中がいてだな、まるで
溜り水のように、にごった薄皮を顔一面に張りつめ、
頑に押し黙ったままている、というのも
世間から、知恵がある、まじめだ、思慮深い、
という評判を得ただけのことなのだ。そこで、
「われこそは世界一の賢者なるぞ、わが神託を
犬どもは黙って聞くべし」といった顔つきをする。

637

おまえなど知らぬ。お祈りに日々をすごすがいい、ご老人、
りっぱな白髪をしながら道化、阿呆のまねは見苦しいぞ！
私は長いあいだおまえのような男の夢を見ていた、
同じようにぶくぶくふとった罰当たりの老人であった、
いま、覚めてみると、あのような夢は思い出すのもいやだ。

638

王
ああ、このからだが、おまえの父親といっしょに
仲よくはじめての戦に出陣して腕を競いあった、
あのころのように強健であれば！ 彼は、
並みはずれて兵法にすぐれ、名だたる勇士たちから
師と仰がれていたものだ。長いあいだよく働いてくれたが、

二人とも忍び寄る年齢には勝てず、だんだんしなびてからだが動かなくなってしまった。が、こうして彼の話をしていると、若返る思いだ。若いころ、おまえの父親は洒落のうまい人だった。たしかにいまでも冗談を飛ばす若い貴族たちはいるが、その冗談がはね返って自分が物笑いの種になってもだれも不思議には思わない、彼らには軽薄をおおうだけの品性が欠けているからだ。おまえの父親はりっぱな宮廷人だった。誇り高く、舌鋒鋭くはあったが、人を軽蔑し、傷つけることはかつてなかった、あるとすれば同輩にそそのかされてだ、なにしろ彼の廉恥心は、時計のように正確に悪口を言い返すべき時を告げ、彼の舌は忠実にその指示に従ったのだ。彼はまた、目下のものを目上のもののようにあつかった、身分の低いものに高かるべき頭を低くさげ、わが身をへりくだして卑しいものをほめたたえる彼の謙遜ぶりを、彼らは誇りとしたものだ。あのような人物こそいまの若者たちはお手本としなければならぬ、そうすれば彼らも、時代は進んだが、自分たちは退歩していることに気づくだろう。

バートラム

父の名声は

その墓よりも陛下のお心のうちに生きております、それをのちの世に伝えるものは、墓碑銘ではなく陛下のただいまのおことばです。

王

もう一度会いたいものだ！彼は口癖のように——いまでもあの声が聞こえるようだ、もっともなことばを言い捨てるのではなく、こちらの耳に接ぎ木して、花を咲かせ、実を結ばせたのだ——彼はよく言っていた、「もうあの世へ行かせてください」慰みごとに飽きて憂鬱な気分になると、「もうあの世へ行かせてください」と言う。「私は、油が切れて燃えなくなってから、新しいもの以外はなんでも軽蔑する若い連中に、古い蠟燭の芯あつかいされたくはありません。やつらは新型の服を生み出す知恵しかもちあわせず、しかも流行より早く気の変わる連中です」彼はそう願った、私も、遅れはしたが、そう願う気持では遅れをとらぬ。もう蜜も蠟もはこべない身となったのだから、一日も早く巣からしりぞき、ほかの働き蜂に席を譲りたいのだ。

639

ごらんください、神々よ、このあわれな老人を、年の数ほど悲しみをかさね、押しつぶされております。この娘どもの心を父にそむかせるのがたとえ神々のご意志であろうと、それをおとなしく忍ばせるほど私を愚弄しないでください。私に気高い怒りの炎を燃えあがらせ、女の武器である涙の雫でこの男の頬を汚させないでください。いいか、人でなし、きさまら二人に必ず復讐するぞ、世界じゅうが——きっとやるとも——なにをやるかまだわからぬが——

必ず、世界じゅうが恐怖におののくようなことを
やって見せるからな。わしが泣くと思っておるな。
ええい、泣くものか。
泣かねばならぬ理由はいくらでもある、だが、
たとえこの心臓が無数の星と砕け散ろうとも、
わしは泣かぬぞ。おお、阿呆、わしは気が狂いそうだ！

640

いや、このわしだって、
仮面をつけて美人の耳にこっそりと、嬉しい話を
聞かせた日もありました。むかしむかしの昔話ですわ。

641

かつては私も、
このやせ腕一本、この名刀一振りをもって、
立ちはだかるあなたの何十倍もの手強い障害も
一気に蹴破ったものです——だがそれもむなしい高言だ！
だれが運命にうち勝てよう？——この期におよんでは。

642

ネスターのことをお伝えいたきたい、このわしは
ヘクターの祖父殿が乳を吸っておられたころ、
すでに一人まえの男であった。いまは老いの身ながら、
こう申しあげる、もしもわがギリシア軍のなかに、
愛人のために敢然と立つ勇気の火花をもつものが
一人としていないならば、このわしが銀の髭を
金の顔当てにかくし、やせ腕を籠手当てに包んで、
ヘクターのお相手をいたすと。そしてわが愛人は
ヘクターの祖母殿よりはるかに美しく、いかなる女より
貞潔であることを、彼のあふれる若さにたいし、
わしのとぼしい血を賭けて証明してみせたいと。

643

昔はわしも、鋭い大太刀をふるい、やつらを
跳びあがらせたものだ。だがもう年をとった、
うち続く苦勞で腕も鈍った。

644

シャロー

では間もなく法学院に入るわけだな。おれもかつてはクレメント法学院にいたが、いまでも
あそこでは放蕩無頼のシャローのことが語りぐさになっているはずだ。

サイレンス

たしか当時は「精力絶倫のシャロー」と呼ばれていたろう。

シャロー

まったく、いろんな仇名をちょうだいしたよ、実際いろんなことをなんでもやったからな、
それもとことんまで。いつもおれといっしょだったのは、スタフォードシアの小男ジョン・
ドイト、色の黒いジョージ・バーンス、フランシス・ピックボーン、それにコッツウールド
生まれのウィル・スキールといった連中だった。四つの法学院の存するかぎり二度と、あ
のような乱暴者の四人組にはお目にかかれまい。言わせてもらえば、おれたちはどこにいい
女がいるかということは知りつくしていたし、いつでも自由に最高にいい女を手に入れたも
のだ。ジャック・フオールスタッフも、いまやサー・ジョンだが、あのころはほんの小僧っ
子で、ノーフォーク公トマス・モーブレーの小姓役だった。

サイレンス

サー・ジョンって、間もなく兵隊集めにここへくるあのサー・ジョンのことか？

シャロー

そう、あの男のことだ。そう言えばあの男が宮廷の門前でスコーガンの頭をたたき割るのを見たことがあった、まだこれほどの背丈もない小僧っ子だったくせに。ところがちょうどその日、実はおれもグレー法学院の裏で水菓子屋のサムスン・ストックフィッシュと大立ちまわりをしていたってわけだ。ああ、神よ、まったく放蕩無頼の日々をすごしたものだなあ！あのころの仲間たちももうだいぶ死んでしまった！

サイレンス

われわれもいずれあとを追うことになるのだよ、きみ。

シャロー

そう、たしかにそのとおりだ、間違いなくそのとおりだ。「詩篇」の作者も歌っているように、死をまねがれるものは一人もいない、人間だれでもいずれは死ぬほかないのだ。スタンフォードの市では牛のつがいの値段はどのくらいについていた？

サイレンス

実は、つい行きそびれてしまった。

シャロー

人間だれでも死ぬほかない。きみの町のダブル老人はまだ元気に生きているか？

サイレンス

いや、もう死んだ。

シャロー

ああ、神よ、死んだか！弓の名人だったが、死んだか！弓の腕はたしかなものだった、いまの王のお父君ジョン・ナ・ゴーストもたいそうかわいがっておられて、あの男ならと大金を賭けられたものだが、死んだか！二百四十ヤード離れた的の中心を射当てることなど朝飯前、飛ばすだけなら二百八十か九十ヤードは軽く飛ばし、見ているだけで胸のすく思いをしたものだが。雌羊二十頭の相場はいまいくらだろう？

サイレンス

羊次第だが、上物だと十ポンドってところかな。

シャロー

あのダブル老人も死んだか！

645

この男はですな、閣下、りっぱな年寄りでありますので話が核心にふれないのです、「年寄りのひやかし」というやつで。聞いていてもひやひやします...ご苦労だった、ヴァージズ。なにごとにも神のおぼしめしだ——一頭の馬に二人乗るとき、一人がうしろになるのは当然のこと。まことに正直者でしてな、閣下、この男ほどのものは正直言って二人とこの世に生をうけておりません——だが神のおぼしめしで——人間というものはそれぞれちがうようにできているな、ヴァージズ。

646

シャロー

そう言えば、サー・ジョン、覚えておいでですか、ほら、セント・ジョージの野原にある風車小屋で、とうとう夜明かししてしまったときのことを？

フォールスタッフ

いやあ、シャローさん、あの話は言いっこなしにしましょうや。

シャロー

ハッ、ハッ、ハッ！あれは愉快な一夜でした。ところでジェーン・ナイトワークはまだ生きているのでしょうか？

フォールスタッフ

生きてますよ。

シャロー

あの女、私のことだけはがまんできないなどとぬかして。

フォールスタッフ

そう、そうでしたな、シャローさんはまっぴら、と言うのが口癖だね。

シャロー

私もあの女をカンカンに怒らせたものですよ。あのころはいい女でしたなあ。いまでもあい変わらずですか？

フォールスタッフ

ばばあになりましたよ、ばばあに。

シャロー

なるほど、ばばあでしょう、ばばあになるほかないのだから、ばばあになってるにちがいありません。だいたい私がクレメント法学院に入る前に、亭主のナイトワークとのあいだにロビン・ナイトワークという倅まで生んでましたからな。

サイレンス

五十五年前のことですね？

シャロー

いや、サイレンス、この騎士と二人でどんな日々をすごしたか、きみにも見せたかったよ。

そうでしょう、サー・ジョン？

フォールスタッフ

よく二人で深夜十二時の鐘を聞いたものだった。

シャロー

ああ、そうでした、そうでした、そうでした、ほんとうによく聞いたものでした、サー・ジョン。「一杯いこう！」っていうのが合いことばでしたな。さあ、食事にしましょう、食事に。ああ、なつかしいですなあ、あのころの日々が！さあ、どうかこちらへ。

647

ああ、あらかじめ運命の書を読みとる力が人間に
そなわっておれば！そして、山々を平地と化し、
そのあまりの堅さに飽きはてた大陸を溶かして
大海原に変えるという、時の流れの有為転変を予見し、
あるいはまた、海神ネプチューンの腰帯というには広すぎる
砂浜をあとに残して、潮がはるか沖合いまで引く日を
予知することができるならば！さらには、偶然がいか
に人間をもてあそび、世の移り変わりがいかに人生の杯を
さまざまな酒で満たすか予測することができるならば！
ああ、そのようなものが見通せるなら、いかに幸福な若者も、
自分の人生航路における過去の危険、未来の不幸を思って、
運命の書を閉じ、がっくり膝をつき、死を選ぶかもしれぬ。

648

いまは過去も未来も塵となって天空に舞い失せ、
忘却の彼方に影もとどめず消えはてた。

649

ピストル

実は、志操堅固にして勇猛果敢な軍人の
バードルフのことでござるが、あの男はいま、残酷な
移り気なかの運命の、つまりは回転してやまぬ
小石の上に足をおく、盲た女神運命の
まわす車に無情にも――

フルーエリン

失礼ながら、旗手ピシュトル、運命の女神がつねに目を布でおおわれて盲いた姿に描かれるのは、運命が盲目であることを示しゆためだ。またつねに車をまわしているように描かれるのは、そこにこそ大事な教訓があるちゅうもんだが、運命がうつろいやしゆく、変わりや

しゅく、有為轉變し、千変万化しゆるものであることを示しゆためだ。さらにまたその足まで、いいかな、ぐるぐるぐるぐるまわる丸い石におかれているちゅうわけだ。まったく詩人の描写たるやしゅばらしいものがある、運命の女神は一つのしゅばらしい教訓なのだ。

650

ああ、無惨なり、運命神、汝こそは淫婦。
天につどいし神々よ、この女神の力を奪いたまえ。
女神のあやつる運命の車をこなごなにうちくだき、
天上にそびゆる峯より地獄の底に投げすてたまえ。

651

時を告げる時計の音を一つ一つ数えていき、
美しい昼が醜い夜に呑みこまれるのを見るとき、
スマレの花が春薫るさを過ぎていき、
黒い巻き毛がすっかり銀髪になるのを見るとき、
かつて家畜の群れを炎熱から守る天蓋であった
高く聳える樹々の葉がいっせいに散っていき、
夏の緑がまとめられて大麦の束の山となり
白い剛毛の髭を垂れて柩車で運ばれるのを見るとき
そのとき私はあなたの美しさを思い浮かべる、
あなたもまた「時」の荒廃は避けられないのです、
かわいいものも美しいものも滅んでいき、新しいのちが
成長する早さと同じ早さで死に向かうのだから。
「時」の大鎌があなたをこの世から刈りとるとき、
立ち向かってくれるのはあなたの子供だけなのです。

652

「時」の残酷な手が、いまは忘れ去られた時代の
絢爛豪華な品々を汚すのを見るとき、
かつては高々と聳えていた塔が崩れ落ち、
不朽の真鍮が死の怒りに屈するのを見るとき、
飢えた大洋が大陸の王国を浸食し、
あるいは固い大地が大海原を攻略し、
一方が失って他方が増やし、一方が増やして
他方が失う、そのくり返しを見るとき、
この世にあるものはすべて有為轉變し、
栄華の極みにあるものも破滅するのを見るとき、
廃墟が私に一つの考えを与えてくれるのだ、
いずれ「時」がきて愛する人を連れ去るだろうと。
この考えは死のようなものだ、手にあるものを
失うことを恐れながら、泣くほかないのだから。

653

この世に生まれ育つすべてのものが、その姿を
完璧な美しさに保つのはほんの一瞬にすぎず、
この巨大な舞台で演じられるのは、声なき星々の
喝采や非難に左右される芝居にすぎぬと思うとき、
また、人間も植物と同じく天の影響によって
繁殖をうながされもすればおさえられもし、
若さの活力を誇っても絶頂に達すれば衰えはじめ
その華やかな姿も忘れ去られるのを見るとき、
そのようにはかない浮世の運命を思うと

青春まっさかりにあるあなたの姿が瞼に浮かび、
荒廃させる「時」が「衰退」と共謀して
あなたの青春の昼を醜い夜に変えるさまが見える。
あなたへの愛ゆえに私は力の限り「時」と戦い、
「時」が奪い去るあなたのいのちを詩に接木するのです。

654

人のなすことにはすべて潮時というものがある、
うまくあげ潮に乗れば幸運の港に達しようが、
それに乗りそこなえば人生航路の行き着く先も
不幸の浅瀬というわけだ、動きがとれぬことになる。
そういう満ち潮にいまのわれわれは浮かんでいる、
この有利な潮をとらえなければ、いのちがけの船荷を
失わねばならぬだろう。

655

人の一生はいわばそれぞれの歴史物語であって、
そこには過ぎ去った時々の特徴が描き出されております。
それを読みとりさえすれば、いまだ日の目を見てはおらず
種の形でやっといのちをもちはじめたばかりの
将来の事態を、そう的是をはずさずに予言することは
だれにでもできることです。それは、「時」があたため、
やがて孵化らせて雛にするものなのですから。

656

阿呆です、阿呆！阿呆が森にいたのです、
まだら服を着た阿呆が。みじめな世のなかだ！
正真正銘まちがいなく、私は阿呆に出会いました、
やつは寝そべって日向ぼっこしながら、こっぴどく
運命の女神をののしっていました、あの女神には
かわいがられているはずのまだら服の阿呆がです。
「おはよう、阿呆」と呼びかけると、「よしてくれ、
運命の女神に見捨てられてるうちは阿呆と呼ぶな」
ときました。やがてポケットから日時計をとり出すと、
光の失せた目でそれを眺めながら、吐いたことばは
まさに賢者の言でした、「いまは十時である」
とやつははじめました、「こうしてわれわれは
世のなかの移り変わりを知ることができるのだ。
一時間前は九時であった、一時間後は十一時だろう、
かくのごとく時々刻々われわれは熟していく、
しかしてまた時々刻々われわれは腐っていく、
そこにこそ問題がある」まだら服の阿呆が
そのように時について教訓をたれるのを聞いて、
私の肺臓は雄鶏のように関の声をあげはじめました、
阿呆がかくも瞑想的であることがおかしかったのです、
私の高笑いとはめどがなくなり、やつの日時計で
一時間は笑い続けたでしょう。ああ、気高い阿呆！
尊敬すべき阿呆！まだら服こそ最高の衣装です。

657

ああ、私も阿呆になりたい！まだら服を身につけたい！
私はまだら服とともに

風のように自由な特権をちょうだいし、好きな相手に
吹きつけてやりたいのです、阿呆と同じように。
そうすると私の阿呆ぶりにもっとも腹を立てるものが
もっとも笑って見せねばなりません。
ではまだら服を着せていただきましょう、そして
心のままにものを言う特権をお許してください。
そうすればこの疫病にかかった世界から病毒を
一掃してやります、私の薬を飲んでくれればですが。

658

まったくひどい話だ。だが別にどうってこともありませんまい？陛下はじめ、われら一同、潔
白な身の上、さしさわりはありません。脛に傷もつ馬こそ跳ねよ、傷のない身に気づかい無
用。

659

「時」は大きな頭陀袋を背にしてい
て忘却に食わせる施しものを入れていくのだ。
つまり忘恩の大化け物としか形容のしようがない。
その残飯の施しものというのは過去の功績だ、
たてたとたんに片っ端からむさぼり食われ、
あっという間に忘れ去られる。たえず磨きつづければ
名誉は輝きを保つが、一度手を休めれば
骨董屋にぶらさがる錆びた鎧同様、だれからも
見すてられてしまう。ぐずぐずしてはいけない、
名誉の道は非常にせまく、二人並んで通るほどの
余裕はないのだから。先にその道をおさえることだ。
「競争」には千人の息子がある、その一人一人が
先を争っている。いささかでも道をゆずったり、
あるいはまっすぐの道から脇へそれたりすれば、
彼らはたちまち上げ潮にのって殺到し、あなたを
どん尻にするだろう。
あるいは先頭切って走っていたのに倒れた軍馬のように、
あとからきた連中の敷石がわりに踏みつぶされるだろう。
そうすると彼らの現在は、あなたの過去に比して
いかに劣っていようと、あなたの先を越すことになる。
「時」ははやっている宿屋の亭王に似ている。
去っていく客にはおざなりの握手をかわすのみだが、
新来の客となると両手をひろげて飛んでいき、
抱きかかえんばかりだ。いらっしゃいは笑みをたたえ、
さようならは溜息とともに消えていく。とすれば、
過去の美徳にたいする報酬を求めてはなるまい。
なぜならば、
美貌も、知恵も、家柄も、体力も、功績も、
恋愛も、友情も、すべてはあの
意地の悪い中傷好きな「時」の臣下なのだから。
人間という人間は一つの性質が親類関係にある、
つまり新しいものと見れば声をそろえてほめそやす、
たとえそれが古いものの染めなおしであつてもだ。
埃にまみれている本物の金よりも、
埃同然の金ピカ物をたいせつにするのだ。
人の目は現在目の前にあるもののみちやほやする。

660

すべてを貪りつくす「時」よ、獅子の爪を鈍らせ、
大地におのれの産んだいとし子を食らわせるがいい、
獰猛な虎の顎から鋭い牙を抜きとり、
長命の不死鳥を生きながら焼くがいい。
足の早い「時」よ、過ぎ行きながら季節を
楽しくも悲しくもするがいい、広大な世界と
そのうつろいやすい美に存分に手を加えるがいい、
ただ一つ、もっとも忌まわしい罪を犯してはならない、
わが愛する人の美しい額におまえの時間を刻み、
おまえの年古りしペンで線を引いてはならない、
彼だけは、おまえが過ぎ行くときも手をふれず、
のちの世の美の鑑として汚してはならない。
だが老いた「時」よ、おまえがどんな害を及ぼそうと、
わが愛する人はわが詩の中で永遠の若さを保つだろう。

661

暗い過去の淵の底から浮かんでくるものはないか？

662

ロザリンド

時はそれぞれの人によってそれぞれの速さで歩むものです。一つ教えてあげましょうか、時がだれにはのんびり歩きをし、だれにはよちよち歩きをし、だれには全力疾走し、だれには完全停止するか。

オーランドー

ではまず、よちよち歩きをするのは？

ロザリンド

時がよちよち歩きをするのは、婚約してから式を挙げるまでの娘の場合だ、それがたとえ七日間しかなくても、時が懸命に汗水流してよちよち歩くものだから、七年間もあるように思われるのです。

オーランドー

のんびり歩きというのは？

ロザリンド

ラテン語を知らない神父と痛風をわずらっていない金持ちが相手のときです、一方は勉強のしようがないからよく眠れるし、他方は苦痛を感じないから楽しく暮らせる、つまり、一方はむだばねをおらせる学問の重荷を背負わないですむわけだし、他方は耐えがたい貧乏の重荷に耐えなくてすむわけだ、こういう連中を相手にすると時はのんびり歩きをするのです。

オーランドー

全力疾走するのは？

ロザリンド

絞首台に引っ立てられる泥棒です、いくら足をゆっくりはこぼうとしても、あっという間に着いてしまう。

オーランドー

では完全停止というのは？

ロザリンド

休暇中の弁護士です、裁判と裁判のあいだは眠ってすごすので、時が歩み続けていることさえ感じないわけです。

663

「時の栄光は、争いあう王たちを鎮めること、
虚偽の仮面を剥ぎとること、真実を光にさらすこと、
年月を経たものに時の封印を刻すること、

朝を目覚めさせ、夜の見張りを勤めること、
災厄をもたらす者に災いをあたえ、正しい道に戻らせること、
時間をかけて、きらびやかな建築を廃墟とし、
黄金の高楼を埃にまみれさせること。

「荘厳な記念碑を虫の巣にしてしまうこと、
事物の荒廃によって、忘却を養い育てること、
古い書物に染みをつけてその内容を変えること、
年老いた大鴉の翼から羽根を抜きとること、
檜の老木の樹液を涸らせ、若芽をはぐくむこと、
硬い鋼でつくられた古代の遺物を損うこと、
そして、運命の車を目まぐるしくまわすこと。

「老いた女に娘の娘たちを授けること、
子供を男に育て、男をふたたび子供にすること、
殺戮に生きる虎を殺戮すること、
荒々しい一角獣と獅子を馴らすこと、
知ったかぶりが思いすごして誤るさまを嘲笑うこと、
豊饒な収穫をあたえて農夫を勇気づけること、
小さな雨の雫で巨大な石をすりへらすこと。

664

真鍮も石も大地もはてしない大洋も、
ついには破滅を呼ぶ死に支配されるのだから、
どうして一輪の花ほどの力しかもたない美が
死の怒り相手に訴訟を起こして争えよう？
びくとも揺るがぬ岩山も鋼鉄の城門も、
「時」が滅ぼせないほど強くはないのだから、
どうして夏の甘い息吹きが、破壊をもたらす
歳月の包囲攻撃にもちこたえられよう？
ああ、思うだけでも恐ろしいが、どこにかくせば
「時」の最高の宝石を「時」の箱に収めずにすまされよう？
どんな強い手が「時」の早い足を引き止め、
だれが美を滅ぼす「時」を押さえられよう？
ただ一つ、私の愛する人が黒インクの文字の中で
永久に輝くという奇跡のみ、それをなしえよう。

665

王侯たちの大理石の墓や金色の記念碑も
この力強い詩より長く生きのびはしません、
だらしない「時」に汚された埃まみれの石碑より
この詩の中でこそあなたはさらに輝くのです。
荒廃をもたらす戦争が彫像をなぎ倒し、
争乱が石造りの建物を根こそぎにしても、
あなたの思い出をとどめるこの生きた記録は
軍神マルスの剣や戦火もほろぼしはしません。
死にも、忘却へと押しやるあらゆる敵にもさからい、
あなたは歩み続けるでしょう、あなたの栄誉は
のちの世のあらゆる人々の目にもつねに映り、
この世の終末にいたるまで生きているでしょう。
だから最後の審判の日がきてよみがえるまで
あなたはこの詩に生き、恋人たちの目に住むのです。

666

石の櫓をもってしても、金城鉄壁をもってしても、
狭苦しい土牢をもってしても、鉄の鎖をもってしても、
この毅然たる精神をおさえることだけはできぬ。
人のいのちは、この世の障害に倦みはてたとき、
いつでもおのれを解放する力だけは残している。
どんな奴隷でもその手に
自分を縛る縄を断ち切る力を持っているのだ。

667

とすれば、もうおしまいだ。
おれはこの世の権勢の絶頂にまでのぼりつめてしまった、
あとはひたすら、その栄光の子午線から地平めがけて
一直線に転落するのみだ。おれは夕空の流れ星のように
燃え落ちてたちまち消え去るしかない。

668

おりよう、おりよう、太陽神の子フェイトンのように
暴れ馬を御しかねて、天から地上へまっさかさまにな。

669

さらばと言えば、わが偉大なる地位とも永久におさらばだ。
人間の運命とはこうしたものか、今日、ういういしい
希望の新芽を吹き出し、明日、一勢に花開いて
燦然たる名誉の飾りを身にあまるほどつけたかと思うと、
三日目にはもう霜が、万物を枯死させる霜がきて、
疑うことも知らぬまま自分ではますます栄えるものと
安心しきっている最中に、その根を噛みちぎられ、
どうと倒れるのだ、このおれのように。おれはまるで
浮き袋につかまるいたずら小憎のように、長い夏のあいだ
栄光の海を泳ぎまわっていた、そのうちに無謀にも
背の立たぬところにまできてしまった、そこでついに
ふくれあがった高慢の浮き袋が破れ、いまのおれは
ただ一人、人生の遊泳に疲れはてたこの老いの身を
荒波にゆだね、やがてその底に永遠に沈む運命にある。
この世のむなしい栄耀栄華よ、おれはおまえを憎む、
おれの心はいま別の世界にむかって開かれたのだ。ああ、
王侯の寵愛にすがって生きる人間のなんとみじめなことか！
われわれがあこがれ求めるほほえみ、王侯たちが見せる
あの甘い笑顔と、彼らがくだす破滅とのあいだには、
戦争や女が与える以上の苦痛と恐怖がある、そのあいだに
落ちこむものは、地獄に落ちるルシファーのように
二度と復活する希望はないのだ。

670

魂が肉体と別れるより、王者が権力と別れるほうが
その苦しさは上と申します。

671

この心の目に、あなたの栄光が流星のように
天空から卑しい地上へと落ちていくのが見える。

672

ふん、名ばかりの王妃、私の運命のむなしい写し絵！
なぜ醜い毒蜘蛛に甘いことばをふりかけるのだ、
その恐ろしい巢にわが身ががんじがらめにされながら？

673

そのときおまえのことを、私の運命のむなしい飾り、
あわれな影法師、絵に描かれた王妃と呼んだはずだ、
かつての私の引き写しとも、恐ろしい悲劇の筋書きを
口あたりよく解説したことばとも呼んだはずだ、
高い座につくのもあとで転がり落ちるためという女、
かわいい二人の子を授かってもぬか喜びに終わる母親、
かつて夢見たおまえ自身の夢、はかない吐息、水泡、
見せかけの権威をこれ見よがしにひけらかしても
危険な矢玉の標的となるだけの旗印、出場を埋める
ただそれだけの道化芝居の王妃、それがおまえだった。

674

ああ、太陽よ、おまえが昇るのを二度とこの目で
見ることはあるまい。運命とアントニーはいまここで
別れるのだ、別れの握手をするのだ。こうなろうとは！
かつてはおれに犬のようにつきまとい、おれの手から
望みを与えられていた連中が、いまは甘い追従の滴を
花と咲くシーザーに降り注いでいる。やつらの頭上に
高々と君臨したこの松も、生皮をはがれてしまった。

675

アントニー

イアロス、まだおれはおれに見えるか？

イアロス

はい。

アントニー

雲を見ていると、ときには龍に見えることがある、
その同じ蒸気のかたまりが、ときには熊や獅子に見え、
あるいは天にそびえ立つ砦、地に落ちかかる巖、
かさなる峰の山、樹樹におおわれた青い岬と、
次々に形を変えて下界を見おろし、空なる姿で
われわれの目をあざむく。おまえも見たことがあろう、
たそがれ時の空を練り歩く山車の行列を。

イアロス

はい。

アントニー

いま馬と見えたものが、あっと思う間もなく
ちぎれ雲にその姿をかき消され、形を失ってしまう、
水が水に溶けるように。

イアロス

ほんとうにそうですね。

アントニー

イアロス、いまのおまえの将軍は、まさに
そういうものなのだ。いま、このおれはアントニーだ、
だがこの姿をいつまでも保つことはできまい。おれは
エジプトの女王のために戦をした、それを女王は――
あれの心はおれのものだと思っていた、おれの心は

あれのものだったから。おれの心がおれのものだったとき、
巨万の心をつかんでいたが、いまは失った——それを
女王は、シーザーとぐるになり、いかさまカードで
おれの榮譽をかすめとり、敵の戦利品にした。
いや、泣くな、イアロス、まだおれには残っている、
おのれにかたをつけるおのれが。
鎧を脱がせてくれ、イアロス、長い一日の仕事ももう終わった、あとは眠るのみだ。
さあ、脱がせてくれ、早く。
テラモンの七重の盾も、破れそうなおれの心臓を
抑えることはできまい。ええい、この脇腹も
裂けてしまえ！心臓ももう一度力をとりもどし、
もろい胸をぶち破るがいい！早くしろ、イアロス。
これでもうおれは武人ではない。傷ついた鎧よ、
さらばだ、よく働いてくれた。しばらくさがってくれ。
すぐに追いつくぞ、クレオパトラ、その上で泣いて
許しを乞おう。それしかあるまい、いまとなっては、
生きのびることは苦しみでしかない。松明は消えた、
横になり、さまようのはやめよう、いまとなっては、
努力することはこわすことであり、力をつくすことは
力を妨げることだ。最後の印を押せば、万事終わりだ。
イアロス！——いま行くぞ、女王——イアロス！——
待っていてくれ、魂が花の上に憩う天国で、おれたちは
手に手をとって陽気にふるまい、亡霊たちを驚かせよう、
ダイドーとイーニーアスもお供の亡霊たちをおれたちに
奪われることになるだろう。

676

私にとって、美しい友よ、あなたは老いることはありません、
はじめてあなたの目を目にしたときの美しさはいまも
変わりがありません、季節は移り変わり、
いまなお新緑であるあなたをはじめて見て以来、
三たび寒い冬が森の木々の枝という枝から
三たび華やかな夏の装いをふるい落とし、
三たび美しい春が三たび黄色い秋に変わり、
三たび四月の香りが三たび六月に燃えつきました、
だが、ああ、美とは時計の針のようなもの、
こっそり目盛りを進むけれどその歩みは見えません、
あなたの美しい容貌も私には止まっていると見えて
実は動いており、私の目が欺かれているのかもしれない。
それを恐れてはまだ生まれざる時代に告げましょう、
おまえが生まれる前に美の夏は死んだのだと。

677

私の愛する人が、いまのこの私のように
「時」の邪惡な手でボロボロにすり切れるとき、
みなぎる血潮が次第に涸れて彼の額に
深々と皺が刻まれるとき、若々しい朝が
老いた夜へのあわただしい旅を終えるとき、
そしていま彼が王として支配するすべての美が
消えて行き、消えて行きながら青春の宝を
こっそり盗みとって行くとき、いずれはくる
そのようなときに備えて私は守りを固めよう、

「時」が破滅を呼ぶ老齡の刃をふるって
私の愛する人のいのちを無惨に断ち切ろうと、
その美を記憶から断ち切ることはないように。
彼の美はこの黒インクの文字の中に見られるだろう、
生き続けるこの詩の中で彼は永遠に緑だろう。

678

コーディーリア

ああ、お父様！ご回復をうながす靈薬が
私の唇に宿り、この口づけて、お父様のお心に
二人の姉が加えた無惨な傷口が、もとどおり
なおりますように。

ケント

なんと親思いのやさしい姫君だ！

コーディーリア

たとえ実の父親でなくても、この真白な髪を見れば
あわれみの情をそそられるはずなのに。このお顔を
荒れ狂う烈風に吹きさらしにしていいいものか？
大地をゆるがし耳を突ん裂く雷に立ちむかわせて？
大空を矢よりも早く飛び交う稲妻がすさまじく
ひらめくなかを？眠りもやらず、いのちがけの
歩哨のように、胃と言ってもこの白い髪だけで？
私に噛みついたことのある敵の飼い犬でも、あのような
恐ろしい夜には炉辺に入れてやるのに。それなのに
お父様は、お気の毒にも、豚や浮浪者といっしょに、
掘っ建て小屋でかび臭い藁にくるまっておいでに？ああ、
なんてひどい！正氣とともにおいのちまで
失われなかったのが不思議だわ。あ、お目覚めのよう。
言葉をおかけして。

医師

お妃様からどうぞ、そのほうが。

コーディーリア

いかがです、陛下、ご気分は？

リア

ひどいではないか、わしを墓から連れ出すとは。
おまえは天国の靈魂だな、だがわしは地獄の
炎の車に縛りつけられておる、涙を流せば
溶けた鉛のように肌を焼くのだ。

コーディーリア

私がおわかりですか？

リア

おまえは靈魂だ、わかっておる。いつ死んだ？

コーディーリア

まだ、まだ、これではとても！

医師

はっきりお目覚めではないのです、しばらくそのままに。

リア

わしはどこにいた？どこにおる？日の光か？
たぶらかすのだな。人がこんなめに会うのを見れば
気の毒でとても生きてはおれまい。どう言えばいいか。
わしにはわからぬ、これはわしの手か？ どれ。
うむ、針の痛さは感じる。ああ、はっきり知りたい、

わしはどうなっておるのか！

コーディーリア

私をごらんください。

そのお手で私に祝福を与えてください。いけません、膝をおつきになっては。

リア

どうかなぶらないでくれ、

わしは愚かな、愚かな、老人にすぎぬ、

すでに八十の坂を越えた、掛け値なしにだ。

それに、実を言えば、

どうやら心も狂っておるらしい。と言うのは、

おまえも、この男も、知っておるように思うが

たしかではない。だいたいここがどこなのか、

それさえわからぬ。いくら思い出そうとしても

この服にも覚えがない。ゆうべ泊まった場所も

わからないのだ。笑ってくれるな、わしには、

どう考えてみても、このご婦人がわしの娘

コーディーリアとしか思えぬ。

コーディーリア

そう、そうです、私は。

リア

頬をぬらしているのは涙か？そう、涙だ。頼む、

泣かんでくれ。毒を飲めと言うなら飲もう。わしを

恨んでおるはずだ。おまえの姉たちは、忘れはせぬ、

わしをひどいめに合わせおった、そうしていい理由は

おまえにはあるがやつらにはない。

コーディーリア

ありません、私にも。

リア

わしはフランスにおるのか？

ケント

ご自分の王国です。

リア

たぶらかす気か？

医師

ご安心を、お妃様、狂乱の嵐もごらんのように

静まりました。だがまだ、失われた時をむりに

埋めつくそうとされるのは危険です。どうか

奥に入るようおすすめてください、もう少し

落ちつかれるまで、そっとしておかれることです。

コーディーリア

奥へお入りになりませんか？

リア

がまんしてくれよ、

すべてを忘れ、許してくれ。わしは愚かな老人なのだ。

679

ここが私の旅路の果てだ、ここが私の目的地、

はるかな船旅の終わりを示す港の標識だ。

680

バードルフ

あの人といっしょにいたいなあ、あの子のいるところが天国だろうと地獄だろうとかまわんから。

クィックリー

地獄じゃないよ、あの子は、きっと天国で針の山にすわっておいでだよ、死んだ子が天国の針の山に行けるものなら。なにしろりっぱな死にかたをなさったからね、生まれたばかりの赤ん坊のようにあどけない顔をしてさ。あの子はちょうど十二時と一時のあいだ、満ち潮から引き潮に変わるときにあの世に行ってしまった。あたしね、あの子がシーツをいじりまわして、その花模様を摘もうとして、摘んだ花を眺めるようにご自分の指先を見てニコニコしているのを見たとき、これはもういけないと思ったわ。だってあの子の鼻はペン先のようにとんがって、緑の野原がどうのこうのと謔言のように言うだけなんだもの。「どうなさいました、サー・ジョン！」ってあたしが言ってね、「さあさあ、元気を出してくださいよ」って声をかけたら、あの子は、「神様、神様、神様」って三度か四度うめくように言ったわ。そこで、元気づけようと思って、神様のことを考えるのはおよしなさい、まだそんなこと考えるのは早いわよ、って言ってあげたら、あの子、足の上にもっと布団をかけてくれる言うの。それであたし、ベッドのなかに手を入れて、あの子の足にさわってみたら、まるで石みたいに冷たくなっていた、それから膝にさわってみたら、膝も石みたいに冷たくなっていた、それからもっと上のほうまでずっとさわってみたら、どこもかしこも石みたいに冷たくなっていたわ。

681

わしのかわいいやつが、
阿呆め、絞め殺されたぞ！もう、もう、だめだ！
犬も、馬も、ネズミも、いのちをもっておるのに、
おまえは息を止めたのか？もうもどってこないのか、
二度と、二度と、二度と、二度と、二度と！
頼む、このボタンをはずしてくれ。ありがとう。
これが見えるか？ 見ろ、この顔を、この唇を、
見ろ、これを見ろ！

682

丘の、小川の、湖の、森の妖精たち、
砂浜に足跡もとどめずわだつみの引く波を追い
寄せる波を跳び逃げてたわむれるおまえたち、
月の夜の草原に雌羊たちも食べようとはせぬ
ひときわ濃い緑の輪を作るかわいい小妖精たち、
真夜中のキノコ作りにいそしみ、おごそかな
夕べの鐘を聞くと大喜びで飛び出してくる
おまえたち——おまえたちに自分を動かすだけの
力はなくとも、おれはおまえたちの力を借りて、
真昼の太陽を暗くし、荒れ狂う風を呼び覚まし、
緑なす大海原と紺碧の大空のあいだに激しい戦を
起こさせたこともあった。すさまじい雷鳴に
炎を与え、雷神ジュピターの神木である柏の木を
みずからの電光で引き裂かせたこともあった。
海に突き出た絶壁を揺るがせ、松や杉の大木を
根こそぎにしたこともあった。墓に命じて死者たちを
揺り起こし、吐き出させたこともあった。すべては
おれの術のなすわざであった。だがこの魔法の力を
おれは今日かぎり捨てようと思う。いまから
天上の音楽を奏させ、その不思議な力によって
正気にもどったものたちにおれのもくろみを
はたし終えたならば、おれはただちにこの杖を折り、

地の底深く埋め、この書物を測量の鉛も届かぬ
海の底深く沈めてしまうつもりだ。

683

あわれな魂よ、肉欲の反乱軍に制圧された
罪深い土くれの、その中心にあるものよ、
どうしておまえは外壁をぜいたくに飾りながら
内側ではやせおとろえ、飢えに苦しむのだ？
どうしておまえは短期間借りただけの
この朽ちていく屋敷に巨額の金をかけるのだ？
その過剰な投資の対象を相続する蛆虫に
食わせるためか？それがおまえの肉体の定めか？
そうなら、魂よ、その下僕の失うもので生き、
やつに飢えさせおまえは財宝を積むがいい、
価値のない時間を売って永遠のいのちを買うがいい、
外は貧しくして内をゆたかに養うがいい。
こうして人間を食う死をおまえが食うのだ、
そして死が死んでしまえばもう死ぬことはないのだ。

684

もう余興は終わった。いま演じた役者たちは、
さきほども言ったように、みんな妖精であって、
大気のなかに、淡い大気のなかに、溶けていった。
だが、大地に礎をもたぬいまの幻の世界と同様に、
雲に接する摩天楼も、豪奢を誇る宮殿も、
荘厳きわまりない大寺院も、巨大な地球そのものも、
そう、この地上に在るいっさいのものは、結局は
溶け去って、いま消え失せた幻影と同様に、あとには
一片の浮き雲も残しはしない。われわれ人間は
夢と同じもので織りなされている、はかない一生の
仕上げをするのは眠りなのだ。

685

この世のはじめは大昔、
ヘイ、ハウ、風吹き、雨が降る、
それでも芝居はおしまいだ、
おいらは毎日笑わせる。

686

恐るるな 夏の暑さも
吹きすさぶ 冬の嵐も
汝いま この世のつとめを
なし終えて 家路につきぬ
尊きも 卑しきもみな
みまかれば 塵と化すのみ。
恐るるな 王の怒りも
汝には すでに届かず
憂うるな 衣も糧も
汝には 貧富の別なし
王者 医者 学者をとわず
行く道は 塵と化すのみ。
恐るるな 天を裂く火も。

地を揺るがす 雷の音も。
恐るるな 人の謗りも。
汝いま 嘆くことなし。
うら若き 恋人たちも
ともにみな 塵と化すのみ。
妖術師よ 術をかけるな！
魔女たちよ 魔法をかけるな！
亡霊よ さまよい出るな！
凶事よ 現われ出るな！
弟よ 静かに眠れ
その墓に 永遠の幸あれ！

687

夜が明ける、松明を消すがいい。
狼どもも埒に帰り、見ろ、静かな朝が、
日の神フィーバスを迎えんものと、
眠たげな東の空を染めている。
ご苦労であった、これで引きとってくれ。

ADDENDUM

フェントンの若旦那のほうはどうかね？あの人には陽気な性質で、ダンスもうまい、男っぽりがよくって、詩も作る。おしゃべりは楽しくって、春四月のさわやかな気分を発散している。あの人射止めるんじゃないかな、あの人射止めるんじゃないかな、あの人射止めるんじゃないかな、お嬢さんの心を射止めるんじゃないかな。

引用文献

シェイクスピア全集 1～7	白水社	小田島
シェイクスピアのソネット	文藝春秋	小田島
世界古典文学全集 4 5 シェイクスピアV	筑摩書房	西脇
世界古典文学全集 4 6 シェイクスピアVI	筑摩書房	本堂、高松
二人の貴公子	白水社	河合

Index

1	Pericles	3.1	小田島
2	The Winter's Tale	2.3	小田島
3	Sonnets	3	小田島
4	Pericles	3.1	小田島
5	Titus Andronicus	2.3	小田島
6	Sonnets	143	小田島
7	King John	2.2	小田島
8	Sonnets	18	小田島
9	The Winter's Tale	1.2	小田島
10	The Winter's Tale	1.2	小田島
11	The Winter's Tale	1.2	小田島
12	Julius Caesar	2.1	小田島
13	Coriolanus	1.3	小田島
14	Coriolanus	5.3	小田島
15	The Merry Wives of Windsor	4.1	小田島
16	The Winter's Tale	2.1	小田島
17	The Winter's Tale	2.1	小田島
18	Cymbeline	4.2	小田島
19	Cymbeline	5.6	小田島
20	King John	4.1	小田島
21	Richard III	4.3	小田島
22	Richard III	4.2	小田島
23	King John	3.4	小田島
24	King Lear	3.2	小田島
25	Macbeth	4.2	小田島
26	King John	2.1	小田島
27	Coriolanus	5.3	小田島
28	Romeo and Juliet	1.3	小田島
29	Love's Labor's Lost	5.2	小田島
30	Twelfth Night	1.5	小田島
31	Twelfth Night	1.4	小田島
32	The Merchant of Venice	3.4	小田島
33	As You Like It	3.5	小田島
34	Cymbeline	3.4	小田島
35	The Passionate Pilgrim		西脇
36	Twelfth Night	2.3	小田島
37	Romeo and Juliet	1.2	小田島
38	Antony and Cleopatra	1.5	小田島
39	Sonnets	2	小田島
40	Hamlet	1.3	小田島
41	All's Well That Ends Well	1.1	小田島
42	A Midsummer Night's Dream	2.1	小田島
43	The Tempest	3.2	小田島
44	The Tempest	5.1	小田島
45	Romeo and Juliet	1.4	小田島
46	A Midsummer Night's Dream	2.1	小田島
47	A Midsummer Night's Dream	3.1	小田島
48	A Midsummer Night's Dream	2.1	小田島
49	Sonnets	5	小田島
50	A Midsummer Night's Dream	2.1	小田島
51	Othello	3.4	小田島
52	The Tempest	2.2	小田島
53	The Tempest	2.2	小田島
54	A Midsummer Night's Dream	2.2	小田島
55	A Midsummer Night's Dream	3.2	小田島
56	Hamlet	1.1	小田島
57	A Midsummer Night's Dream	5.2	小田島
58	Two Gentlemen of Verona	5.4	小田島
59	As You Like It	2.1	小田島
60	Cymbeline	3.3	小田島
61	As You Like It	2.5	小田島
62	King Lear	2.2	小田島
63	As You Like It	2.7	小田島
64	King Lear	5.3	小田島
65	The Winter's Tale	4.4	小田島
66	The Winter's Tale	4.4	小田島
67	Love's Labor's Lost	5.2	小田島
68	Venus and Adonis		本堂
69	A Midsummer Night's Dream	3.1	小田島
70	Venus and Adonis		本堂
71	Venus and Adonis		本堂

72	A Midsummer Night's Dream	3.2	小田島
73	Cymbeline	2.3	小田島
74	King Lear	4.5	小田島
75	Macbeth	1.6	小田島
76	Henry VI, Part 1	2.4	小田島
77	The Taming of the Shrew	4.1	小田島
78	Othello	3.3	小田島
79	Much Ado About Nothing	3.1	小田島
80	Henry V	3.7	小田島
81	Venus and Adonis		本堂
82	Hamlet	4.7	小田島
83	The Taming of the Shrew	3.2	小田島
84	A Midsummer Night's Dream	4.1	小田島
85	The Taming of the Shrew	Induction	小田島
86	Macbeth	3.1	小田島
87	Two Gentlemen of Verona	2.3	小田島
88	Venus and Adonis		本堂
89	The Merchant of Venice	3.2	小田島
90	Love's Labor's Lost	4.3	小田島
91	Venus and Adonis		本堂
92	Timon of Athens	1.1	小田島
93	A Midsummer Night's Dream	5.1	小田島
94	As You Like It	3.3	小田島
95	Sonnets	106	小田島
96	Henry IV, Part 1	3.1	小田島
97	As You Like It	5.2	小田島
98	A Midsummer Night's Dream	1.1	小田島
99	A Midsummer Night's Dream	5.1	小田島
100	Two Gentlemen of Verona	1.3	小田島
101	As You Like It	2.4	小田島
102	The Merchant of Venice	2.9	小田島
103	Two Gentlemen of Verona	2.4	小田島
104	Romeo and Juliet	2.4	小田島
105	Romeo and Juliet	1.1	小田島
106	Love's Labor's Lost	3.1	小田島
107	As You Like It	2.4	小田島
108	Love's Labor's Lost	5.2	小田島
109	As You Like It	3.2	小田島
110	Much Ado About Nothing	3.2	小田島
111	Two Gentlemen of Verona	2.1	小田島
112	Hamlet	2.1	小田島
113	As You Like It	4.1	小田島
114	Two Gentlemen of Verona	3.2	小田島
115	Twelfth Night	1.5	小田島
116	Troilus and Cressida	1.1	小田島
117	The Winter's Tale	4.4	小田島
118	Henry IV, Part 1	3.1	小田島
119	Henry IV, Part 1	3.1	小田島
120	Troilus and Cressida	3.1	小田島
121	Antony and Cleopatra	2.5	小田島
122	Twelfth Night	1.1	小田島
123	Twelfth Night	2.4	小田島
124	The Merchant of Venice	5.1	小田島
125	A Midsummer Night's Dream	2.1	小田島
126	Sonnets	102	小田島
127	The Winter's Tale	4.4	小田島
128	A Lover's Complaint		西脇
129	Hamlet	3.1	小田島
130	Much Ado About Nothing	2.3	小田島
131	Twelfth Night	2.3	小田島
132	Twelfth Night	1.5	小田島
133	Two Gentlemen of Verona	4.2	小田島
134	Sonnets	53	小田島
135	Sonnets	76	小田島
136	The Winter's Tale	4.4	小田島
137	Romeo and Juliet	1.5	小田島
138	The Merchant of Venice	3.2	小田島
139	Troilus and Cressida	1.1	小田島
140	Romeo and Juliet	2.5	小田島
141	A Midsummer Night's Dream	1.1	小田島
142	Pericles	5.1	小田島
143	As You Like It	3.2	小田島
144	The Rape of Lucrece		高松
145	Venus and Adonis		本堂
146	The Rape of Lucrece		高松
147	Cymbeline	2.2	小田島
148	The Rape of Lucrece		高松
149	Coriolanus	5.3	小田島
150	A Midsummer Night's Dream	1.1	小田島

151	A Midsummer Night's Dream	4.1	小田島
152	As You Like It	5.4	小田島
153	Sonnets	130	小田島
154	As You Like It	2.5	小田島
155	The Tempest	2.2	小田島
156	Twelfth Night	3.1	小田島
157	Much Ado About Nothing	3.1	小田島
158	Henry V	1.1	小田島
159	Venus and Adonis		本堂
160	Venus and Adonis		本堂
161	The Rape of Lucrece		高松
161	Venus and Adonis		本堂
162	As You Like It	5.3	小田島
163	Love's Labor's Lost	4.3	小田島
164	The Winter's Tale	4.4	小田島
165	Antony and Cleopatra	3.2	小田島
166	The Rape of Lucrece		高松
167	Romeo and Juliet	2.1	小田島
168	Romeo and Juliet	2.1	小田島
169	Antony and Cleopatra	2.2	小田島
170	Twelfth Night	1.1	小田島
171	Love's Labor's Lost	4.3	小田島
172	As You Like It	3.5	小田島
173	All's Well That Ends Well	1.3	小田島
174	Romeo and Juliet	2.1	小田島
175	Romeo and Juliet	2.1	小田島
176	Romeo and Juliet	2.1	小田島
177	Romeo and Juliet	2.1	小田島
178	Troilus and Cressida	4.2	小田島
179	The Merchant of Venice	5.1	小田島
180	Twelfth Night	2.4	小田島
181	Pericles	5.1	小田島
182	The Tempest	1.2	小田島
183	The Tempest	1.2	小田島
184	The Tempest	3.1	小田島
185	As You Like It	3.5	小田島
186	The Tempest	5.1	小田島
187	Venus and Adonis		本堂
188	Sonnets	1	小田島
189	Venus and Adonis		本堂
190	Coriolanus	5.3	小田島
191	As You Like It	3.4	小田島
192	Venus and Adonis		本堂
193	Antony and Cleopatra	2.5	小田島
194	Troilus and Cressida	3.1	小田島
195	All's Well That Ends Well	4.2	小田島
196	Henry IV, Part 1	2.4	小田島
197	Sonnets	116	小田島
198	As You Like It	3.5	小田島
199	Two Gentlemen of Verona	2.1	小田島
200	Love's Labor's Lost	5.2	小田島
201	The Merchant of Venice	2.1	小田島
202	Othello	1.3	小田島
203	Henry V	5.2	小田島
204	The Merchant of Venice	3.2	小田島
205	Romeo and Juliet	3.2	小田島
206	The Rape of Lucrece		高松
207	Cymbeline	2.4	小田島
208	Troilus and Cressida	3.2	小田島
209	Romeo and Juliet	2.2	小田島
210	The Merchant of Venice	3.2	小田島
211	Troilus and Cressida	3.2	小田島
212	Sonnets	107	小田島
213	Romeo and Juliet	5.1	小田島
214	Hamlet	2.1	小田島
215	Othello	2.1	小田島
216	Pericles	5.1	小田島
217	As You Like It	4.1	小田島
218	Troilus and Cressida	4.5	小田島
219	Romeo and Juliet	3.5	小田島
220	Sonnets	87	小田島
221	Antony and Cleopatra	1.3	小田島
222	Sonnets	98	小田島
223	Sonnets	99	小田島
224	All's Well That Ends Well	1.1	小田島
225	Sonnets	58	小田島
226	Sonnets	97	小田島
227	Antony and Cleopatra	1.5	小田島
228	Sonnets	57	小田島

229	Sonnets	71	小田島
230	Much Ado About Nothing	4.1	小田島
231	All's Well That Ends Well	5.3	小田島
232	As You Like It	4.1	小田島
233	Troilus and Cressida	2.2	小田島
234	Henry IV, Part 1	2.4	小田島
235	Julius Caesar	2.1	小田島
236	Troilus and Cressida	3.2	小田島
237	Hamlet	1.3	小田島
238	Troilus and Cressida	2.2	小田島
239	The Taming of the Shrew	5.2	小田島
240	The Comedy of Errors	2.2	小田島
241	Othello	3.3	小田島
242	Venus and Adonis		本堂
243	Othello	3.4	小田島
244	Othello	3.3	小田島
245	The Winter's Tale	1.2	小田島
246	The Winter's Tale	1.2	小田島
247	Venus and Adonis		本堂
248	Othello	3.3	小田島
249	Hamlet	3.1	小田島
250	The Winter's Tale	1.2	小田島
251	All's Well That Ends Well	1.3	小田島
252	Othello	4.3	小田島
253	Much Ado About Nothing	2.3	小田島
254	Henry IV, Part 2	2.1	小田島
255	A Lover's Complaint		西脇
256	Othello	3.3	小田島
257	Cymbeline	3.4	小田島
258	Othello	4.2	小田島
259	Measure for Measure	4.1	小田島
260	Troilus and Cressida	4.6	小田島
261	Troilus and Cressida	2.2	小田島
262	Troilus and Cressida	4.1	小田島
263	Troilus and Cressida	2.2	小田島
264	The Rape of Lucrece		高松
265	Troilus and Cressida	5.2	小田島
266	Sonnets	147	小田島
267	Julius Caesar	2.4	小田島
268	Sonnets to Sundry Notes of Music		西脇
269	Sonnets	138	小田島
270	Othello	5.2	小田島
271	Hamlet	1.2	小田島
272	Hamlet	3.4	小田島
273	Troilus and Cressida	3.2	小田島
274	Venus and Adonis		本堂
275	All's Well That Ends Well	1.3	小田島
276	Sonnets	129	小田島
277	The Rape of Lucrece		高松
278	A Lover's Complaint		西脇
279	Othello	4.3	小田島
280	Antony and Cleopatra	5.2	小田島
281	Twelfth Night	2.4	小田島
282	Much Ado About Nothing	5.2	小田島
283	As You Like It	4.1	小田島
284	Antony and Cleopatra	4.16	小田島
285	Antony and Cleopatra	5.2	小田島
286	The Phoenix and the Turtle		西脇
287	Henry V	1	小田島
288	Troilus and Cressida	Prologue	小田島
289	Coriolanus	4.5	小田島
290	Henry IV, Part 2	3.2	小田島
291	Henry V	2	小田島
292	Henry V	3	小田島
293	Henry V	3.3	小田島
294	Henry IV, Part 1	4.1	小田島
295	Henry IV, Part 1	4.1	小田島
296	Henry IV, Part 1	4.2	小田島
297	Henry V	4	小田島
298	Henry V	3.1	小田島
299	Henry V	4.7	小田島
300	Henry IV, Part 1	1.3	小田島
301	Julius Caesar	1.2	小田島
302	Henry IV, Part 1	5.1	小田島
303	Julius Caesar	5.1	小田島
304	Hamlet	4.4	小田島
305	Troilus and Cressida	1.3	小田島
306	Hamlet	3.4	小田島
307	Coriolanus	2.2	小田島

308	Coriolanus	1.3	小田島
309	King John	2.1	小田島
310	Henry IV, Part 2	2.4	小田島
311	Coriolanus	1.3	小田島
312	Henry IV, Part 1	2.5	小田島
313	Coriolanus	5.3	小田島
314	Henry V	4.3	小田島
315	Antony and Cleopatra	4.9	小田島
316	Troilus and Cressida	1.2	小田島
317	The Rape of Lucrece		高松
318	Troilus and Cressida	4.7	小田島
319	Love's Labor's Lost	5.2	小田島
320	Love's Labor's Lost	5.2	小田島
321	Henry V	4.7	小田島
322	Hamlet	5.1	小田島
323	Henry V	3.6	小田島
324	Coriolanus	2.1	小田島
325	Henry V	5	小田島
326	Coriolanus	4.7	小田島
327	Julius Caesar	1.1	小田島
328	Coriolanus	2.1	小田島
329	Macbeth	5.11	小田島
330	Richard II	4.1	小田島
331	Antony and Cleopatra	1.4	小田島
332	Coriolanus	5.6	小田島
333	Othello	3.3	小田島
334	Richard II	2.1	小田島
335	King John	5.7	小田島
336	Henry V	3.5	小田島
337	King John	2.1	小田島
338	King John	5.1	小田島
339	King John	5.2	小田島
340	King John	3.1	小田島
341	King Lear	2.2	小田島
342	King John	4.3	小田島
343	Julius Caesar	3.1	小田島
344	Henry V	5.2	小田島
345	Coriolanus	5.3	小田島
346	Henry V	4.1	小田島
347	Richard II	3.2	小田島
348	Richard II	4.1	小田島
349	Henry V	4.1	小田島
350	Henry VI, Part 3	2.5	小田島
351	As You Like It	3.2	小田島
352	Henry V	4.1	小田島
353	Richard II	3.3	小田島
354	Richard II	4.1	小田島
355	The Rape of Lucrece		高松
356	The Passionate Pilgrim		西脇
357	Richard II	5.5	小田島
358	Henry IV, Part 2	4.3	小田島
359	Troilus and Cressida	1.3	小田島
360	Henry V	1.2	小田島
361	Henry V	1.2	小田島
362	Richard II	5.5	小田島
363	The Merchant of Venice	5.1	小田島
364	Henry VIII	3.1	小田島
365	Richard II	3.4	小田島
366	Troilus and Cressida	3.3	小田島
367	Henry IV, Part 1	3.2	小田島
368	Henry IV, Part 2	5.2	小田島
369	Henry VI, Part 2	4.2	小田島
370	The Tempest	2.1	小田島
371	Coriolanus	1.1	小田島
372	Pericles	2.1	小田島
373	Julius Caesar	1.2	小田島
374	Julius Caesar	1.2	小田島
375	Julius Caesar	3.1	小田島
376	Antony and Cleopatra	1.4	小田島
377	Henry IV, Part 2	1.3	小田島
378	Henry VI, Part 3	3.1	小田島
379	The Merchant of Venice	2.9	小田島
380	Coriolanus	3.2	小田島
381	Henry IV, Part 2	Induction	小田島
382	Cymbeline	3.4	小田島
383	The Winter's Tale	2.1	小田島
384	Sonnets	66	小田島
385	The Merchant of Venice	2.9	小田島
386	The Rape of Lucrece		高松

387	Troilus and Cressida	2.2	小田島
388	Measure for Measure	2.2	小田島
389	Timon of Athens	4.3	小田島
390	Timon of Athens	4.3	小田島
391	King Lear	4.5	小田島
392	King Lear	4.1	小田島
393	King Lear	3.4	小田島
394	King Lear	3.4	小田島
395	Hamlet	2.2	小田島
396	King Lear	3.2	小田島
397	Henry IV, Part 1	1.2	小田島
398	Timon of Athens	4.3	小田島
399	Richard II	3.2	小田島
400	King Lear	2.3	小田島
401	King Lear	2.4	小田島
402	Timon of Athens	4.2	小田島
403	Pericles	5.1	小田島
404	Othello	4.2	小田島
405	King Lear	3.6	小田島
406	Macbeth	1.7	小田島
407	Hamlet	5.1	小田島
408	King John	2.2	小田島
409	King John	3.4	小田島
410	The Rape of Lucrece		高松
411	Hamlet	2.2	小田島
412	Hamlet	2.2	小田島
413	The Rape of Lucrece		高松
414	King John	4.2	小田島
415	Henry IV, Part 2	1.1	小田島
416	Henry IV, Part 2	1.1	小田島
417	Macbeth	5.3	小田島
418	As You Like It	5.2	小田島
419	King Lear	4.3	小田島
420	The Merchant of Venice	4.1	小田島
420	The Winter's Tale	4.4	小田島
421	Hamlet	4.5	小田島
422	The Tempest	5.1	小田島
423	King Lear	4.5	小田島
424	As You Like It	4.3	小田島
425	Henry VIII	2.4	小田島
427	Measure for Measure	2.2	小田島
428	Hamlet	3.3	小田島
429	Measure for Measure	2.1	小田島
430	King Lear	4.5	小田島
431	Measure for Measure	2.2	小田島
432	The Tempest	5.1	小田島
433	Cymbeline	5.6	小田島
434	The Tempest	5.1	小田島
435	As You Like It	2.7	小田島
436	King Lear	1.4	小田島
438	King Lear	3.2	小田島
439	Timon of Athens	4.3	小田島
440	Sonnets to Sundry Notes of Music		安本
441	Timon of Athens	2.2	小田島
442	Timon of Athens	4.3	小田島
443	As You Like It	2.3	小田島
444	A Midsummer Night's Dream	5.1	小田島
445	Timon of Athens	4.2	小田島
446	Coriolanus	4.4	小田島
447	Henry IV, Part 1	2.5	小田島
448	Sonnets	33	小田島
449	Sonnets	144	小田島
450	Macbeth	1.4	小田島
451	Timon of Athens	3.1	小田島
452	Julius Caesar	4.2	小田島
453	Much Ado About Nothing	2.1	小田島
454	A Midsummer Night's Dream	3.2	小田島
455	As You Like It	1.3	小田島
456	The Two Noble Kinsmen		河合
457	Henry V	4.6	小田島
458	Hamlet	3.2	小田島
459	Hamlet	3.2	小田島
460	Timon of Athens	4.3	小田島
461	Sonnets	112	小田島
462	Timon of Athens	4.3	小田島
463	Cymbeline	3.3	小田島
464	King Lear	3.4	小田島
465	Hamlet	4.2	小田島
466	Love's Labor's Lost	5.2	小田島

467	Henry IV, Part 1	1.3	小田島
468	Twelfth Night	3.2	小田島
469	The Merchant of Venice	1.3	小田島
470	Henry IV, Part 1	1.3	小田島
471	Romeo and Juliet	3.1	小田島
472	King Lear	2.2	小田島
473	The Tempest	2.1	小田島
474	King Lear	2.2	小田島
475	King Lear	2.2	小田島
476	Troilus and Cressida	5.1	小田島
477	King Lear	2.2	小田島
478	Othello	1.1	小田島
479	Julius Caesar	2.1	小田島
480	Henry VIII	3.2	小田島
481	Macbeth	4.3	小田島
482	Henry VIII	4.2	小田島
483	Julius Caesar	1.2	小田島
484	The Merchant of Venice	3.1	小田島
485	The Tempest	1.2	小田島
486	Hamlet	3.1	小田島
487	King Lear	3.6	小田島
488	The Rape of Lucrece		高松
489	King Lear	1.2	小田島
490	Richard III	1.1	小田島
491	Richard III	1.2	小田島
492	Romeo and Juliet	5.1	小田島
493	Hamlet	4.7	小田島
494	Romeo and Juliet	2.3	小田島
495	Measure for Measure	1.1	小田島
496	Sonnets	94	小田島
497	Julius Caesar	2.1	小田島
498	Troilus and Cressida	3.3	小田島
499	Troilus and Cressida	3.3	小田島
500	Macbeth	1.3	小田島
501	Troilus and Cressida	3.3	小田島
502	Othello	2.3	小田島
503	Othello	3.3	小田島
504	The Merchant of Venice	5.1	小田島
505	All's Well That Ends Well	4.3	小田島
506	Macbeth	1.5	小田島
507	Henry IV, Part 2	4.3	小田島
508	King John	4.2	小田島
509	Hamlet	3.3	小田島
510	Measure for Measure	2.2	小田島
511	Othello	1.3	小田島
512	King Lear	1.2	小田島
513	The Rape of Lucrece		高松
514	Hamlet	3.2	小田島
515	Troilus and Cressida	4.5	小田島
516	Hamlet	4.7	小田島
517	Antony and Cleopatra	3.13	小田島
518	King Lear	5.3	小田島
519	King Lear	4.1	小田島
520	King Lear	4.3	小田島
521	All's Well That Ends Well	1.1	小田島
522	Julius Caesar	1.2	小田島
523	Romeo and Juliet	3.3	小田島
524	Richard II	1.3	小田島
525	Much Ado About Nothing	5.1	小田島
526	Measure for Measure	3.1	小田島
527	Measure for Measure	3.1	小田島
528	Measure for Measure	3.1	小田島
529	Julius Caesar	2.2	小田島
530	Hamlet	5.2	小田島
531	King Lear	5.2	小田島
532	Hamlet	5.2	小田島
533	Measure for Measure	4.2	小田島
534	Macbeth	5.3	小田島
535	Macbeth	5.5	小田島
536	King John	3.4	小田島
537	Hamlet	2.2	小田島
538	Sonnets	29	小田島
539	Sonnets	30	小田島
540	As You Like It	4.1	小田島
541	Hamlet	5.2	小田島
542	Hamlet	1.2	小田島
543	Sonnets	90	小田島
544	Julius Caesar	4.3	小田島
545	Romeo and Juliet	1.4	小田島

546	Richard III	1.4	小田島
547	Othello	3.3	小田島
548	King Lear	4.4	小田島
549	Macbeth	2.2	小田島
550	Macbeth	5.1	小田島
551	Hamlet	2.2	小田島
552	Henry IV, Part 2	3.1	小田島
553	Timon of Athens	4.2	小田島
554	King Lear	2.4	小田島
555	Henry IV, Part 2	4.4	小田島
556	King Lear	4.5	小田島
557	Macbeth	5.3	小田島
558	Macbeth	3.4	小田島
559	Julius Caesar	2.1	小田島
560	Macbeth	3.2	小田島
561	Julius Caesar	1.2	小田島
562	Hamlet	3.1	小田島
563	Macbeth	3.2	小田島
564	King Lear	1.5	小田島
565	Sonnets	110	小田島
566	Hamlet	3.1	小田島
567	Hamlet	5.2	小田島
568	King Lear	5.3	小田島
569	Macbeth	1.5	小田島
570	Othello	3.3	小田島
571	Othello	3.3	小田島
572	Coriolanus	4.2	小田島
573	Macbeth	1.7	小田島
574	King Lear	1.4	小田島
575	King Lear	2.4	小田島
576	Timon of Athens	4.1	小田島
577	Timon of Athens	4.3	小田島
578	Macbeth	3.2	小田島
579	Julius Caesar	2.1	小田島
580	Macbeth	1.7	小田島
581	Macbeth	2.3	小田島
582	Macbeth	2.1	小田島
583	Macbeth	3.2	小田島
584	Macbeth	2.3	小田島
585	Macbeth	2.2	小田島
586	Macbeth	3.4	小田島
587	Macbeth	3.4	小田島
588	Macbeth	5.1	小田島
589	Macbeth	3.4	小田島
590	Titus Andronicus	2.3	小田島
591	Julius Caesar	2.2	小田島
592	Macbeth	2.3	小田島
593	Macbeth	2.4	小田島
594	Hamlet	1.1	小田島
595	King Lear	1.2	小田島
596	Macbeth	4.1	小田島
597	Richard II	5.6	小田島
598	King John	4.2	小田島
599	Richard II	3.2	小田島
600	King John	5.7	小田島
601	King John	4.3	小田島
602	Hamlet	5.2	小田島
603	Richard II	3.2	小田島
604	Richard II	2.1	小田島
605	Macbeth	1.4	小田島
606	Julius Caesar	5.5	小田島
607	Julius Caesar	3.1	小田島
608	Julius Caesar	3.1	小田島
609	Julius Caesar	3.2	小田島
610	Henry IV, Part 1	5.4	小田島
611	Antony and Cleopatra	5.2	小田島
612	Antony and Cleopatra	5.2	小田島
613	Hamlet	5.1	小田島
614	Othello	5.2	小田島
615	Hamlet	1.4	小田島
616	Romeo and Juliet	5.3	小田島
617	King Lear	5.3	小田島
618	King John	3.4	小田島
619	Measure for Measure	4.3	小田島
620	Hamlet	4.5	小田島
621	Hamlet	4.7	小田島
622	Hamlet	5.1	小田島
623	Cymbeline	4.2	小田島
624	Romeo and Juliet	4.5	小田島

625	Hamlet	5.2	小田島
626	Timon of Athens	5.2	小田島
627	King John	3.4	小田島
628	King Lear	5.3	小田島
629	Cymbeline	5.5	小田島
630	Sonnets	60	小田島
631	Sonnets	73	小田島
632	All's Well That Ends Well	5.3	小田島
633	Henry IV, Part 2	1.2	小田島
634	Hamlet	2.2	小田島
635	Timon of Athens	2.2	小田島
636	The Merchant of Venice	1.1	小田島
637	Henry IV, Part 2	5.5	小田島
638	All's Well That Ends Well	1.2	小田島
639	King Lear	2.4	小田島
640	Romeo and Juliet	1.5	小田島
641	Othello	5.2	小田島
642	Troilus and Cressida	1.3	小田島
643	King Lear	5.3	小田島
644	Henry IV, Part 2	3.2	小田島
645	Much Ado About Nothing	3.5	小田島
646	Henry IV, Part 2	3.2	小田島
647	Henry IV, Part 2	3.1	小田島
648	Troilus and Cressida	4.7	小田島
649	Henry V	3.6	小田島
650	Hamlet	2.2	小田島
651	Sonnets	12	小田島
652	Sonnets	64	小田島
653	Sonnets	15	小田島
654	Julius Caesar	4.3	小田島
655	Henry IV, Part 2	3.1	小田島
656	As You Like It	2.7	小田島
657	As You Like It	2.7	小田島
658	Hamlet	3.2	小田島
659	Troilus and Cressida	3.3	小田島
660	Sonnets	19	小田島
661	The Tempest	1.2	小田島
662	As You Like It	3.2	小田島
663	The Rape of Lucrece		高松
664	Sonnets	65	小田島
665	Sonnets	55	小田島
666	Julius Caesar	1.3	小田島
667	Henry VIII	3.2	小田島
668	Richard II	3.3	小田島
669	Henry VIII	3.2	小田島
670	Antony and Cleopatra	4.14	小田島
671	Richard II	2.4	小田島
672	Richard III	1.3	小田島
673	Richard III	4.4	小田島
674	Antony and Cleopatra	4.13	小田島
675	Antony and Cleopatra	4.15	小田島
676	Sonnets	104	小田島
677	Sonnets	63	小田島
678	King Lear	4.6	小田島
679	Othello	5.2	小田島
680	Henry V	2.3	小田島
681	King Lear	5.3	小田島
682	The Tempest	5.1	小田島
683	Sonnets	146	小田島
684	The Tempest	4.1	小田島
685	Twelfth Night	5.1	小田島
686	Cymbeline	4.2	小田島
687	Much Ado About Nothing	5.3	小田島
ADDENDUM The Merry Wives of Windsor			3.2 小田島

幕/場の番号は、The Oxford Shakespeare: The Complete Works (Second Edition)による。
No.440 は Richard Barnfield 作。